

城ヶ谷遺跡第4次発掘調査報告書

－神戸西バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2023

神戸市

城ヶ谷遺跡第4次発掘調査報告書

－神戸西バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2023

神戸市

序

本書は神戸市西区櫛谷町菅野に所在する城ヶ谷遺跡における第4次調査の発掘調査報告書です。

城ヶ谷遺跡では震災直後の平成7年～9年（1995～1997年）にかけて、西神南ニュータウン建設に伴い発掘調査が行われました。明石川の支流櫛谷川流域の平野部から丘陵部にかけて豊かな自然環境、風景が広がる地域の一角、標高100mほどの丘陵上に立地する高地性集落と呼ばれる遺跡です。これまでにおよそ60棟の建物の跡が発見され、弥生時代に営まれた大規模な集落であることが明らかになりました。

今回の発掘調査は、神戸西バイパス（第二神明道路）建設に伴い実施しました。先の調査地から続く丘陵部での調査で、弥生時代の建物や集落域を区画する大規模な溝のほか、奈良時代に築かれた須恵器窯の検出など重要な発見がありました。

調査を終えた今後は建設工事が進み、完成時には周辺道路の渋滞緩和や東西の円滑な移動、災害時のう回路などの生活に供する重要な役割を果たすこととなります。

豊かな自然環境の中に創設された新たな住宅街と利便性が図られる新たな道路の建設。2つの事業を契機として実施した発掘調査の成果を地域の古の姿を表す歴史遺産としてご活用いただければ幸いです。

2023年3月

神戸市

例 言

1. 本書は神戸市西区櫛谷町菅野に所在する城ヶ谷遺跡における第4次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。発掘調査は神戸西バイパス建設（第二神明道路）に伴うもので、神戸市が西日本高速道路株式会社関西支社第二神明道路事務所から委託を受けて実施した。
2. 現地での調査は令和3年2月10日～令和4年3月30日の間で実施した。調査面積は約13,000㎡である。文化スポーツ局文化財課山口英正・阿部敬生・藤井太郎・萱原朋奈（現神戸市立博物館）が担当した。
3. 令和4年度は神戸市西区の神戸市埋蔵文化財センターにおいて図面・写真ならびに出土遺物の整理を行い、発掘調査報告書作成を行った。本書の作成・記述は藤井が行った。
4. 掲載写真のうち現地調査での遺構、遺物出土状況などの撮影は調査担当者が行った。出土遺物の写真撮影は杉本和樹氏（西大寺フォト）に委託し埋蔵文化財センターにおいて行った。
5. 調査地の空撮図化については株式会社GEOソリューションズに委託し実施した。出土遺物の実測図化は株式会社文化財サービスに委託した。
6. 今回の調査で検出した窯跡出土の須恵器の胎土分析を鹿児島国際大学中園聡氏・平川ひろみ氏・太郎良真妃氏・遠矢大士氏にご協力いただき実施した。当地方の須恵器生産を考える上で重要なデータをご提供いただき、分析結果と所見について玉稿を賜りました。
7. 城ヶ谷遺跡に関する眺望分析を公益財団法人古代学協会森岡秀人氏、京都芸術大学宇佐美智之氏に依頼して実施した。本書の作成にあたり分析結果からの考証をもとに、当地域に形成された集落遺跡の特質や造営集団、集落動態に関する玉稿を賜りました。
両分析の結果ならびに考察を本文中に掲載させていただくことができました。記して感謝申し上げます。
8. 本書に記載した地図は国土地理院標準地図・陰影図をもとに作図したもの、神戸市発行の2,500分の1地形図「如意寺」を使用した。
9. 本書に使用した方位・座標は世界測地系第V系座標で、標高は東京湾平均海水面(T.P.)で表示した。
10. 発掘調査の実施ならびに整理作業及び本書の刊行に際し、事業主である西日本高速道路株式会社関西支社第二神明道路事務所に多大なるご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。現地での発掘調査および遺物の整理・報告書作成にあたっては前出の方々以外にも下記の諸氏にご指導、ご助言をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。（敬称略）
黒田恭正・篠宮正・園原悠斗・深江英憲・山本雅和
11. 本事業に関する発掘調査及び遺物整理、報告書作成は下記の調査組織によって実施した。

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古資料担当）

黒崎 直 大阪府立弥生文化博物館名誉館長
菱田 哲郎 京都府立大学教授

文化スポーツ局

令和2年度 発掘調査

局長 岡田 健二
副局長 宮道 成彦
文化財課長 安田 滋
埋蔵文化財センター担当課長 前田 佳久
埋蔵文化財係長 東 喜代秀
担当係長 齋木 巖
" 松林 宏典
" 中村 大介
事務担当学芸員 額瀬 文佳
遺物整理・保存科学担当学芸員 山田 侑生
調査担当学芸員 山口 英正

令和3年度 発掘調査

局長 加藤 久雄
副局長 宮道 成彦
文化財課長 安田 滋
埋蔵文化財センター担当課長 前田 佳久
埋蔵文化財係長 東 喜代秀
担当係長 橋詰 清孝
" 松林 宏典
" 中村 大介
事務担当学芸員 荒田 敬介
遺物整理・保存科学担当学芸員 山田 侑生
遺物整理担当学芸員 佐伯 二郎
調査担当学芸員 山口 英正
" 阿部 敬生
" 藤井 太郎
" 萱原 朋奈

令和4年度 遺物整理・報告書作成

局長 加藤 久雄
副局長 宮道 成彦
文化財課長 前田 佳久
埋蔵文化財センター担当課長 松林 宏典
埋蔵文化財係長 橋詰 清孝
担当係長 山口 英正
" 中村 大介
事務担当学芸員 小野寺 洋介
遺物整理・保存科学担当学芸員 山田 侑生
遺物整理担当学芸員 加納 大誉
報告書作成担当学芸員 藤井 太郎

目次

序文
例言
目次

第1章 調査の概要	1
1. はじめに	1
2. 調査の概要	2
3. 城ヶ谷遺跡の周辺遺跡	5
第2章 発掘調査の成果	9
1. 調査の概要	9
2. 1区（調査地東半）の調査	10
(1) 1区の検出遺構	10
(2) 1区の出土土器	24
3. 2～4区（調査地西半）の調査	28
(1) 2区の検出遺構と出土遺物	28
(2) 3・4区の検出遺構	35
(3) 2～4区の出土土器	58
4. 出土石製品	65
5. 5区窯跡の調査	69
第3章 分析・付論	75
1. 神戸市城ヶ谷遺跡窯跡出土須恵器の胎土分析	75
(中園聡・平川ひろみ・太郎良真妃・遠矢大士)	
2. 眺望分析、遺構・遺物の特質からみた『青谷・城ヶ谷集団』	85
(森岡秀人・宇佐美智之)	
第4章 まとめ	97
1. 第4次調査の成果	97
2. 第4次調査の覚書	100
3. まとめ—城ヶ谷遺跡の現状を振り返る—	108
4. 最後に	112

写真図版

報告書抄録

図版目次

第 1 図	城ヶ谷遺跡位置図	… 1	第43図	SB406・SB407 平面図	… 51
第 2 図	調査地位置図 (事業地と調査地)	… 3	第44図	SB407 断面図	… 52
第 3 図	調査地位置図 (神戸西バイパス図)	… 3	第45図	SB408・SB308 平面図	… 53
第 4 図	明石川流域の遺跡分布図	… 6	第46図	SB408 断面図	… 54
第 5 図	調査区区分割図	… 9	第47図	2 区土層断面図 (SD201・SB202・SD202)	… 56
第 6 図	1 区平面図及び縦断面図	… 10	第48図	SD202 遺物出土状況図	… 56
第 7 図	1 区丘陵頂部検出遺構平面図	… 11	第49図	SX401 土層断面図	… 57
第 8 図	SB101 中央土坑及び柱穴土層断面図	… 12	第50図	SD201 出土土器実測図	… 59
第 9 図	SB102 平・断面図	… 13	第51図	SD202・SD501 出土土器実測図	… 59
第10図	SB102・SK101 断面図	… 14	第52図	SB306 及び 3 区谷部出土土器実測図	… 60
第11図	SB103・SB104 平・断面図	… 15	第53図	SB306 上部平坦面出土土器実測図	… 61
第12図	1 区斜面部検出遺構平面図	… 16	第54図	SX302 土坑出土土器実測図	… 61
第13図	SB106・SX104 平・断面図及び SB106 遺物出土状況図	… 18	第55図	SB301・302・303・304・SX301 出土土器実測図	… 62
第14図	SB107・SB109・SB110 平・断面図	… 19	第56図	SB402・403・405・406・407・408 (308) 出土土器実測図	… 63
第15図	SB108・SB111・SK104 平・断面図	… 20	第57図	4 区北西尾根部及び SB403 下方流土出土土器実測図	… 64
第16図	SX102・SB105 平・断面図【写真3 SX102 検出ピット】	… 22	第58図	サヌカイト製石器 (石鏃・搔器) 実測図	… 65
第17図	SX103 平・断面図【写真4 土層断面及び遺物出土状況】	… 23	第59図	出土土製品 (石斧・砥石・磨石ほか) 実測図	… 66
第18図	SB101・SB102 出土土器実測図	… 25	第60図	大型サヌカイト素材剥片実測図	… 67
第19図	SB103・SB104 及び周辺出土土器実測図	… 26	第61図	出土土製品 (台石) 実測図	… 68
第20図	SB105・SB106・SB107・SB108・SB111 出土土器実測図	… 27	第62図	5 区窯跡及び窯状遺構平面図	… 69
第21図	SX103 及び周辺出土土器実測図	… 27	第63図	窯跡平・断面図	… 71
第22図	2～4 区平面図	… 29	第64図	出土須恵器実測図	… 73
第23図	3-4 区境 土層断面図【谷部斜面】	… 31	第65図	窯体片に融着した須恵器片実測図	… 74
第24図	3-4 区境 土層断面図【北西支尾根部及び南谷部】	… 32	第66図	K-Ca、Rb-Sr 分布図	… 82
第25図	2 区平面図	… 33	第67図	元素ごとの比較	… 83
第26図	SB201 出土土器実測図	… 34	第68図	主成分分析	… 84
第27図	SB201・SB202 断面図【写真5 SB202-SK01 土層断面】	… 34	第69図	クラスター分析	… 84
第28図	SX302 土坑断面図及び遺物出土状況図	… 35	第70図	城ヶ谷遺跡 (最高所) からの最大 20km の眺望域	… 87
第29図	SB301・SX302 平・断面図	… 36	第71図	城ヶ谷遺跡における距離帯・方向別の眺望傾向	… 87
第30図	SX301 平・断面図	… 38	第72図	青谷遺跡 (最高所) からの最大 20km の眺望域	… 88
第31図	SB302・SB303・SX303 平・断面図	… 39	第73図	青谷遺跡における距離帯・方向別の眺望傾向	… 88
第32図	SB401 平・断面図	… 40	第74図	明石川流域における主要高地性集落の位置	… 89
第33図	SB402 平・断面図	… 41	第75図	明石川流域における高地性集落の眺望域比較	… 90
第34図	SB403 平面図	… 42	第76図	第 1～4 次調査地全体図	… 95
第35図	SB403 断面図	… 43	第77図	第 2 次調査出土土器実測図	… 98
第36図	SB304 平面図	… 44	第78図	調査地諸相	… 102
第37図	SB304 断面図	… 45	第79図	第 1～4 次調査 成果関連遺構検出位置図	… 104
第38図	SB305・SB306 平面図	… 46	第80図	坏①・②比較図	… 106
第39図	SB305・SB306 断面図 (1)	… 47	第81図	周辺の主な窯跡群	… 106
第40図	SB305・SB306 断面図 (2)	… 48	第82図	窯跡及び蔵骨器・火葬墓検出位置図	… 107
第41図	SB404 平・断面図	… 49	第83図	明石川流域の弥生時代集落遺跡	… 110
第42図	SB405 平・断面図	… 50			

挿図写真目次

写真 1	調査・整理作業風景	… 4	写真15	SD201 溝中土坑状堆積検出状況 (東から)	… 55
写真 2	SB101 全景 (南東から)	… 12	写真16	SX401 検出状況 (東から)	… 57
写真 3	SX102 検出ピット【第 16 図】	… 22	写真17	SD501 全景と SD202 方向を望む (南東から)	… 57
写真 4	SX103 土層断面及び遺物出土状況【第 17 図】	… 23	写真18	SB301・SB303 出土破損台石片	… 68
写真 5	SB202-SK01 土層断面【第 27 図】	… 34	写真19	破損台石の出土状況	… 68
写真 6	SX301 床面検出状況	… 37	写真20	窯跡諸相 (窯の細部状況)	… 72
写真 7	SB401 炭の分布状況 (北から)	… 41	写真21	第 1・2 次調査出土土器	… 98
写真 8	SB402 被熱痕跡検出状況 (東から)	… 41	写真22	第 2・3 次調査出土土製品・鉄製品	… 99
写真 9	SB305 土層断面 (南東から)	… 47	写真23	集落形成期の様相	… 101
写真10	SB305-SK306 台石出土状況 (南東から)	… 48	写真24	第 1～3 次調査検出の溝	… 104
写真11	SB306 大型サヌカイト素材剥片出土状況 (南西から)	… 48	写真25	第 2・3 次調査出土蔵骨器	… 106
写真12	SB407 土層断面 (南から)	… 54	写真26	第 2 次調査 ST1003 検出状況	… 106
写真13	SX304 全景 (南東から)	… 54	写真27	青谷丘陵からの景色	… 114
写真14	SD201 溝中炭層検出状況 (東から)	… 55			

表目次

表 1	周辺遺跡一覧	…	7	表 6	明石川流域における高地性集落の眺望域比較	…	90
表 2	検出遺構一覧	…	8	表 7	年報記載調査概要一覧	…	98
表 3	出土石器一覧	…	65	表 8	第1～3次調査検出竪穴建物一覧	…	99
表 4	胎土分析試料とデータ	…	80	表 9	地区別 土器の出土傾向	…	100
表 5	城ヶ谷遺跡窯跡出土須恵器データの要約	…	84	表 10	明石川流域の弥生時代中期～後期の遺跡の消長	…	111

カラー写真図版目次

図版 1	1. 調査地遠景（南東から） 2. 調査地遠景（南西から）	図版 5	1. 5区窯跡及び窯状遺構全景（南から） 2. 5区窯跡（当初窯）全景（南東から）
図版 2	1. 1区全景（東から） 2. 2区全景（南東から）	図版 6	1. 第4次調査 出土土器 2. SX302 土坑 出土土器
図版 3	1. 2・3区全景（西から） 2. 4区全景（南東から）	3.	調査地から青谷丘陵・明石海峡を望む（北西から）
図版 4	1. 2～4区 溝（壕状遺構）全景（南から） 2. 3・4区 支尾根派生部全景（北東から）		

写真図版目次

図版 1	1. 1区北半全景（南西から） 2. SB102 全景（北から） 3. 1区南半全景（北から）	図版 16	1. 焼成部口焼結層検出状況（南東から） 2. 天井崩落層検出状況（南から） 3. 燃焼部土層断面（北西から）
図版 2	1. 1区中央部全景（北西から） 2. SX103 全景（北から） 3. SB109 全景（北から）	図版 17	1. 焚口整地層遺物出土状況（北西から） 2. 当初窯全景（断ち割り状況）（南から） 3. 窯状遺構落ち込み全景（南から）
図版 3	1. SB106 全景（北東から） 2. SB106 壺出土状況（東から） 3. SB108・SB111・SK104 全景（南東から）	図版 18	1. SB101・SB102 出土土器 2. SB103・SB104 周辺出土土器
図版 4	1. SB201・SB202 全景（南東から） 2. 2区 SD202 土層断面及び遺物出土状況（東から） 3. 2区 SD202 遺物出土状況（南から）	図版 19	SB103・SB104 周辺出土土器
図版 5	1. SB301・SX302 全景（北東から） 2. SX302 土坑遺物出土状況及び床面被熱痕（北東から） 3. SX302 土坑遺物出土状況（北から）	図版 20	1. 1区竪穴建物出土土器 2. SB106 出土土器 3. 1区北東部出土土器 4. SX103 及び周辺出土土器
図版 6	1. SB301 からの眺望（南東から） 2. SB302・SB303・SX303 全景（南から） 3. SB303 全景（南西から）	図版 21	1. SX103 周辺出土土器 2. SX103 床面出土土器 3. SB201 出土土器 4. SD501 出土土器
図版 7	1. SX301 全景（南から） 2. SX301 炭化材検出状況（北西から） 3. SX301-SP01 土層断面（西から）	図版 22	1. SD202 出土土器 2. SD201 出土土器 3. SX301 出土土器
図版 8	1. 3区谷部斜面上位段状遺構全景（東から） 2. SB304 全景（南東から） 3. SB305 全景（南から）	図版 23	1. SB306 出土土器 2. SB303 出土土器 3. SB305・SB306・SX301 出土土器
図版 9	1. SB306 全景（南東から） 2. SB306 遺物出土状況（南西から） 3. SB306 壺出土状況（南西から）	図版 24	1. SB301・SB302・SB303・SB304 出土土器 2. SB305 上部平坦面出土土器 3. SB402・SB403 出土土器 4. SB405・SB406・SB407 出土土器
図版 10	1. 3-4区境及び谷部土層断面（北東から） 2. 3-4区境土層断面（南東から） 3. 3-4区境 SD201 土層断面（東から）	図版 25	SX302 出土土器
図版 11	1. 4区主尾根部全景（北東から） 2. SB401 全景（北東から） 3. SB402・SB403 全景（東から）	図版 26	1. SB408 出土土器 2. SB403 下方流土出土土器 3. 3区谷部出土土器
図版 12	1. 4区谷部西斜面段状遺構全景（東から） 2. SB404・SB405 全景（南東から） 3. SB406・SB407 全景（東から）	図版 27	1. 出土石製品（石斧） 2. 出土石製品（砥石） 3. 出土石製品（敲石・磨石） 4. 出土石製品（台石）
図版 13	1. SB407 全景（焼土・炭・柱穴検出状況）（南東から） 2. SB407 4段目焼土断ち割り断面（南東から） 3. SB407 全景（完掘状況）（南東から）	図版 28	1. 大型サヌカイト素材剥片 2. 出土石製品（石鏃・搔器） 3. 窯体片（実測図化）
図版 14	1. SB408-SB308 全景（盛土面）（北東から） 2. SB408 焼土断ち割り断面（南東から） 3. SB408-SB308 地山面全景（南東から）	図版 29	窯跡出土須恵器
図版 15	1. 窯跡焼成部土層断面（南西から） 2. 焼成部断面②（南から） 3. 焼成部断面②付近遺物出土状況（南東から）	図版 30	1. 窯跡出土須恵器 2. 窯体片（木芯痕跡を残す窯体片） 3. 窯体片（ササ混じりの状況） 4. 出土窯体片

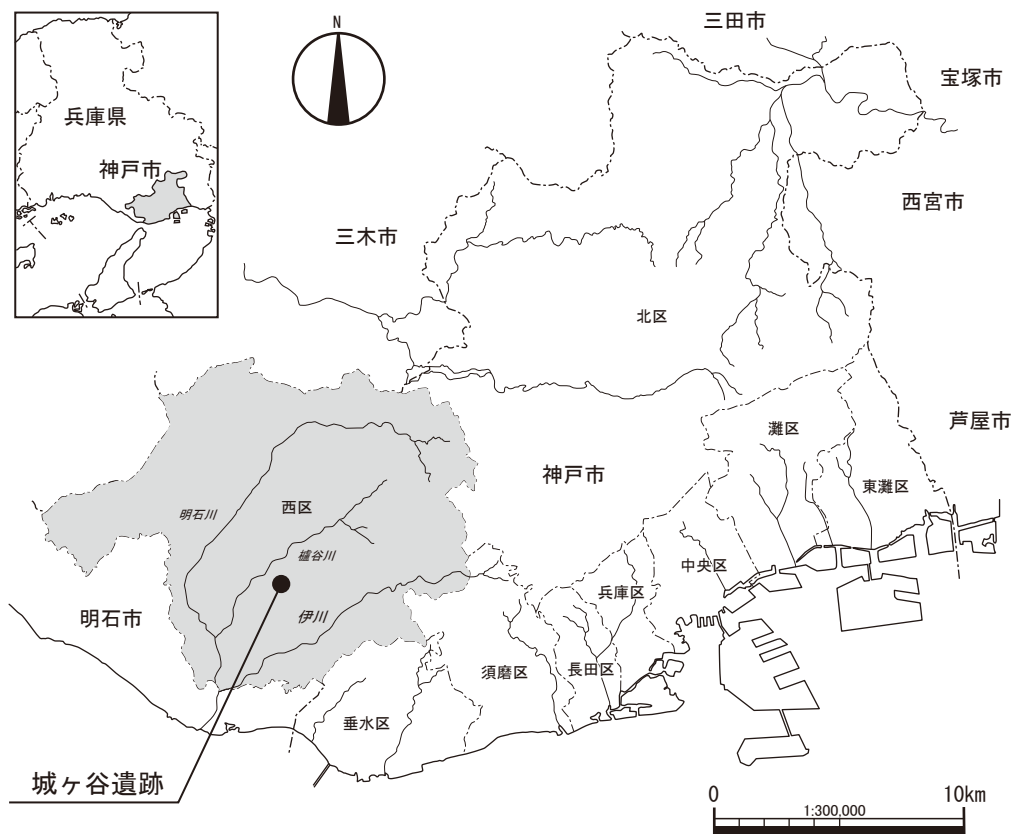


第1章 調査の概要

1. はじめに

城ヶ谷遺跡は六甲山系の西端、西神丘陵とも呼ばれる標高 100 m前後を測る丘陵地帯の一角に位置する。地質分類では大阪層群明石累層域に属する。明石川の支流樋谷川左岸の標高 70～100 mの丘陵上に立地する高地性集落で、沖積地との比高差は 65 mほどである。これまでに西神南ニュータウン建設に伴い平成 7～9 年度の 3 箇年に約 61,000 m²の範囲で調査（第 1～3 次調査）が実施され、弥生時代中期末～後期前半にかけての竪穴建物や段状遺構などの遺構の検出、遺物の出土があった。明石川流域では西神ニュータウン建設などに伴い高地性集落の調査が行われたがほとんどが中期末の段階で終息するものであり、後期に継続し 60 棟以上の建物の存在が確認された高地性集落の発見は、当地域の弥生時代の集落動態を考える上で非常に重要な調査例とされた。また弥生時代の遺構・遺物のほかにも古墳時代の遺物の出土や奈良時代前半と考えられる蔵骨器や火葬墓の検出があり、明石川流域の丘陵上の発掘調査における遺構・遺物の検出状況と共通する土地利用の様相も持ち合わせているといえよう。

城ヶ谷遺跡の南の丘陵上には確認調査以外に発掘調査の実施はないが、表採資料ながら小型仿製鏡や磨製石戈・石剣、弥生時代中期～後期の土器の出土が知られ、大規模な高地性集落と推定される青谷遺跡が立地する。城ヶ谷遺跡での検出遺構・遺物の在り方を考える上で重要な遺跡であり、青谷遺跡が立地する丘陵と今回の調査地はわずかに幅 50 mほどの谷一つを隔てた距離に位置する。城ヶ谷遺跡における発掘調査の実施は 25 年ぶりとなる。



第 1 図 城ヶ谷遺跡位置図

2. 調査の概要

今回の発掘調査は神戸西バイパス建設に伴うものである。神戸西バイパスは神戸市垂水区と明石市を結ぶ延長 12.5 km の第二神明道路のバイパスとして計画された道路である。事業計画により路線が既往調査である第 1～3 次調査地に隣接する丘陵部分を横切ることから、工事に先立ち、試掘調査の実施が必要となり、西日本高速道路株式会社関西支社第二神明道路事務所、兵庫県、神戸市で協議を行い、先のニュータウン建設に伴う調査地と関連する遺構・遺物の検出が予測されることが重視され、試掘調査・発掘調査について神戸市が実施するに至った。

平成 30 年度に試掘調査を実施し、事業地にかかる丘陵の東西両端で遺構・遺物を検出した。先の調査地から続く丘陵部南端とそこから屈曲して西に伸びる丘陵部が今回の調査対象地となった。西側の調査地の大半を占める南向き谷部斜面は、試掘調査時は民地部分が多く、十分な確認調査が行えなかったが、近接する地点での遺構・遺物の出土状況と地形観察により文化財の存在する可能性が高いと判断して今回の調査対象範囲とした。

令和 2（2020）年度末の令和 3 年 2 月より調査範囲について樹木伐採作業を開始し、同 4 月より本格的に発掘調査を開始した。現地調査は令和 4 年 3 月末をもって完了した。

今回の調査では調査対象地の中央付近では遺構・遺物の検出がなく、東半では遺構・遺物を検出した範囲に調査区名を付した。また西半については丘陵先端部と斜面下位を除くほぼ全域で遺構・遺物を検出した。掘削土の搬出状況や空撮図化など調査工程上の都合により調査区を細分した。これにより今回の調査における調査区の名称は、東半が東端の丘陵頂部から東向き斜面にかけての 1 区と丘陵南裾の 5 区、西半は西側の丘陵部南側谷斜面部の東端を 2 区、丘陵頂部と南側谷斜面部を 3・4 区とし、4 区は北側の大池方向へ伸びる支尾根部分を含む。

遺構・遺物の検出のなかった 1 区と 2 区の間は現状で細尾根となり、尾根筋両側の斜面は急崖状を呈する。土砂の流出がひどく本来の地形を留めていないが、大きな平坦面が形成されていた可能性は低いものと判断される。また 2 区の北側の尾根上には広い平坦面が形成されるが、元々鞍部であって後世の溝を検出するなど地形改変を伴うものと想定する。

調査は樹木の伐採後、調査地東側から着手し、順次西側へと進めていった。人力または重機により表土・流土の掘削、人力による遺構・遺物の検出作業を行った。基本的に地山面で遺構検出を行ったが、高地性集落の特徴的な遺構である段状遺構は盛土の残存する可能性を考え、慎重に調査を進めた。盛土はほとんどが流出しているものと考えられ、土層の区別は困難であったが、焼土や被熱痕の検出により一部で盛土による建物床面を確認した。

記録作業については空撮図化により調査地全体を 1/100 スケール、検出遺構が集中する範囲については 1/50 スケールで図化を行った。また 3-4 区境の長大な土層断面について 1/20 図化を行い、5 区窠跡については 3D 撮影を合わせて実施した。図化に際して世界測地系座標値と東京湾平均海水面（T.P.）を取り付け、この基準を用いて主要遺構について 1/20、1/10、1/5 で遺構の平面図や遺物の出土状況図を作成し、空撮図化図を補完した。各遺構の埋没状況などの土層断面図を作成し、合わせて調査区内の土層堆積状況について断面図を作成した。

また今回の調査では小型ドローン（DJI 社製 Mini2）を使用した。遺構検出に際しては上空から広い範囲を俯瞰的な視点で確認しながら遺構検出に努めた。また記録写真の撮影ではとくに斜面地のために足場による撮影台の設置や撮影台自体の高さの確保が困難な場面が多く、記録作業として地上写真撮影を補完する手段とした。遺構の検出、記録作業など発掘調査全体の作業の効率化を図る点において非常に有効であった。

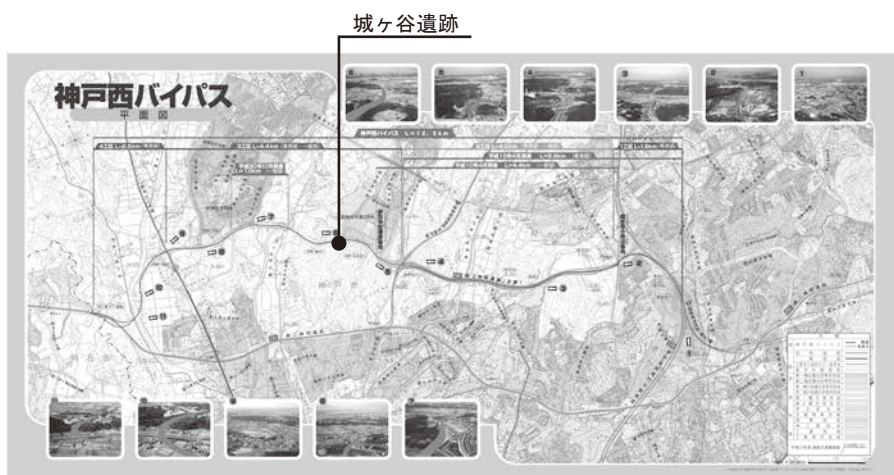
今回の調査では弥生時代の高地性集落に伴う遺構・遺物の検出と神戸市域では初めてとなる奈良時代の須恵器窯の検出があった。

令和4（2022）年度はこれら調査成果について報告書作成業務を実施した。出土遺物の整理作業を埋蔵文化財センターにおいて実施した。委託業務では出土遺物図面化作業及び写真撮影、空撮による図化図面の細部校正及び報告書掲載用の元図作成を行った。

なお調査期間中には、令和3年12月4日に地元説明会を実施し、約40名の参加者を得た。遺跡の存在に興味をお示しいただくとともに、城ヶ谷遺跡が立地する丘陵の変化や活用の歴史などを伺うことができ、有意義なものであった。



第2図 調査地位置図（事業地と第4次調査地及び既往調査地）



第3図 調査地位置図（神戸西バイパス図）

（HP掲載 神戸西バイパス平面図に城ヶ谷遺跡位置を加筆）

また3区を調査中の9月13日に神戸市文化財保護審議会委員黒崎直氏、菱田哲郎氏が来跡、高地性集落の調査についてご指導いただいた。5区窯跡の調査については令和4年2月24日に菱田哲郎氏に再度来跡いただき、複数の床面痕跡の存在や窯体構造の変化の可能性、記録方法などについて現地指導いただいた。

高地性集落の調査に関連して7月1日に『弥生時代高地性集落の列島の再検証研究チーム』（事務局：（公財）古代学協会）の森岡秀人氏・桑原久男氏・若林邦彦氏・荒木幸治氏・園原悠斗氏・麻森敦子氏、同26日に大阪府立弥生文化博物館禰亘田佳男氏の来跡があり、貴重なご意見等を頂戴した。



発掘調査作業



窯跡の掘削状況



竪穴建物検出状況



空撮図化作業（ドローン撮影）



窯跡断面土層転写作業



遺物整理作業

写真1 調査・整理作業風景

3. 城ヶ谷遺跡の周辺遺跡

城ヶ谷遺跡が立地する明石川流域の弥生時代の遺跡について概観する。

六甲山系の西端には標高 100 m ほどの丘陵地形が広がり、明石川とその支流に挟まれた丘陵部には大小様々な谷地形が複雑に入り組む。明石川流域は本流の明石川と支流の櫛谷川、伊川が流下し平野部を形成する。

明石川流域では下流域の吉田遺跡や片山遺跡で前期初頭の土器の出土が知られ、流域で最も早い段階で集落形成が行われたと考えられるが内容などは明らかになっていない。

中流域の玉津田中遺跡では前期から遺構・遺物が検出され、中期には居住域、墓域、生産域の形成が明確化し、流域の拠点集落として位置付けられる。中期には砂岩製石包丁の生産や後期の竪穴建物からは青銅器製作に伴う鋳型や埴埦の出土が確認されている。

明石川と伊川の合流点付近に立地する新方遺跡では広範囲にわたり弥生時代の遺構・遺物の出土が確認されているが、推定される遺跡の範囲に比して調査件数、調査面積はわずかである。玉津田中遺跡と同様、弥生時代を通じての拠点集落に位置付けられる。前期前半の縄文人の形質を残す人骨の埋葬例は近畿地方最古の例として注目される。中期には遺跡が拡大し、碧玉製玉作りの痕跡や、貼石を持つ円形周溝墓の検出などがある。紀伊型甕や緑泥片岩製の石包丁などの搬入品、播磨地域の土器の出土など広域交流の様子が明らかになっている。

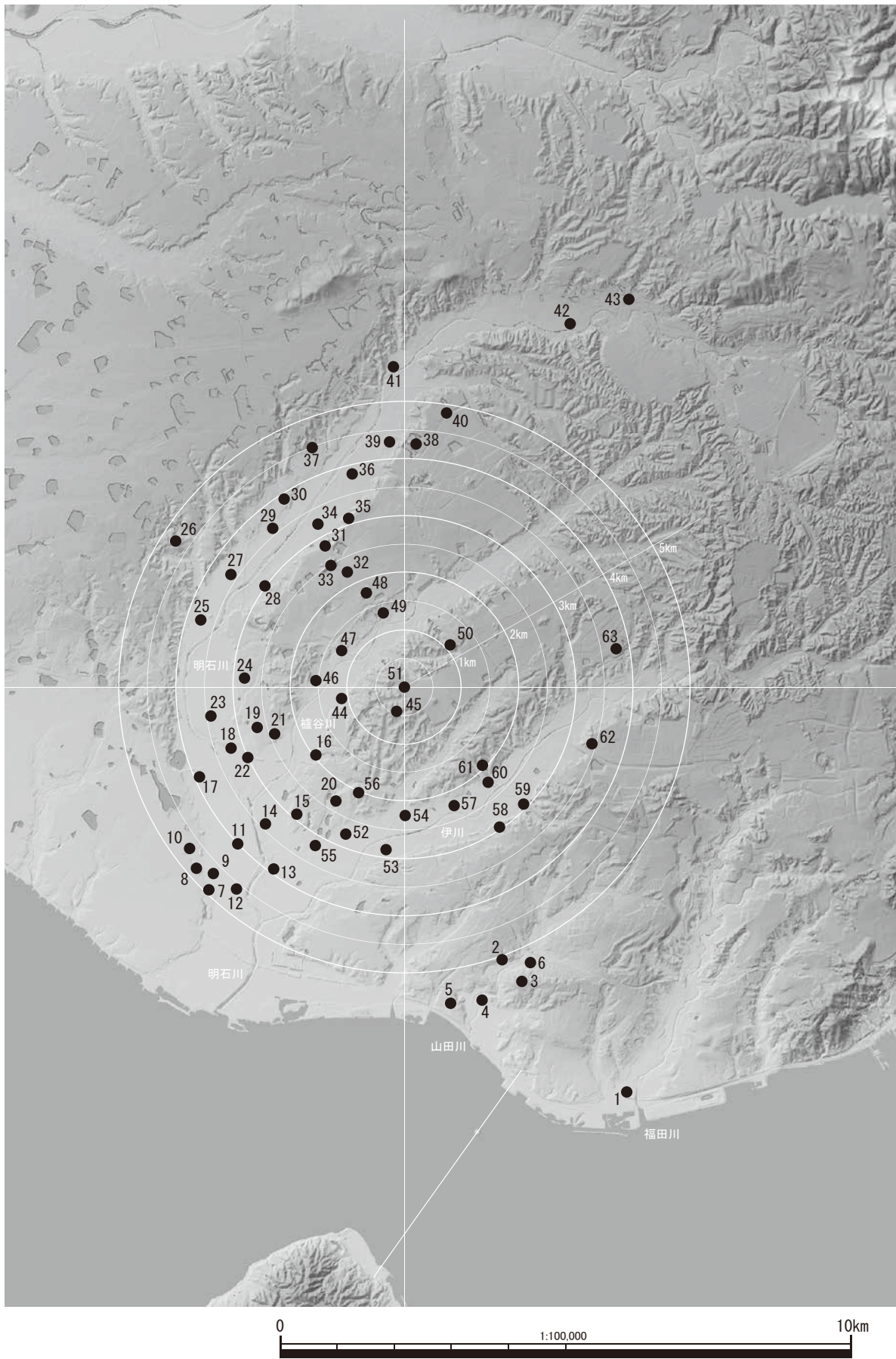
中期後半は各河川の中流域に集落形成が及び、丘陵上では高地性集落の造営が活発になる。明石川と櫛谷川に挟まれた西神ニュータウンの丘陵上では開発に伴って多くの遺跡の調査が行われ、西神第 65 地点遺跡、同第 50 地点遺跡などで竪穴建物や段状遺構が検出されている。西神第 49 地点遺跡など墓域の確認された遺跡も多い。伊川左岸に立地する頭高山遺跡では中期後半の竪穴建物や段状遺構約 40 基が検出され、石鏃や石斧など多くの石器とともに大型サヌカイト素材剥片が出土しており、伊川流域における石器生産、流通拠点として位置付けられる。頭高山遺跡では磨製石剣が 3 点出土しており、ほかに西神第 65 地点遺跡出土の砂岩製銅鐸鋳型の出土や養田中の池遺跡、西神第 38 地点遺跡では銅剣型石剣が出土、青谷遺跡での鉄剣型石剣、石戈の出土（表採資料）も特筆される。

後期前半には流域では遺跡数が減少するようであるが、城ヶ谷遺跡や伊川流域の表山遺跡は後期前半の高地性集落である。ともに壕の存在が確認され、明石川流域のみならず播磨地方、西摂地方でも稀有な存在といえる。

後期後半になると遺跡数は増加し、各河川中流域から下流域の平野部や段丘上に多くの遺跡が形成される。中期まで流域の拠点集落であった玉津田中遺跡・新方遺跡は規模を縮小し、さらに下流域に位置する吉田南遺跡が後期後半から庄内期、古墳時代初頭にかけての当地域の新たな拠点集落として発展する。

参考文献

- 神戸市 1989 『新修神戸市史歴史編 I 自然・考古』
- 神戸市教育委員会 2006 『西神ニュータウン内の遺跡』
- 神戸市教育委員会 2016 『神戸の弥生遺跡』
- 神戸市教育委員会 2003 『今池尻遺跡 新方遺跡平松地点発掘調査報告書』
- 神戸市教育委員会 2003 『新方遺跡野手・西方地区発掘調査報告書 1』
- 神戸市教育委員会 2006 『吉田南遺跡第 17・18 次調査発掘調査報告書』
- 兵庫県教育委員会 1996 『玉津田中遺跡 第 6 分冊一（総括編）一』
- 神戸市および隣接地域地質図 昭和 51 年 11 月 30 日改訂版



第4図 明石川流域の遺跡分布図

表1 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	前期	中期前葉	中期中葉	中期後葉	後期	庄内式期
1	垂水日向	垂水区日向1・2丁目ほか						—
2	東谷	垂水区南多聞台					—	
3	舞子東石ヶ谷	垂水区舞子坂2丁目			—	—	—	
4	大歳山	垂水区西舞子4丁目	—		—		—	
5	狩口台	垂水区狩口台6・7丁目		—	—	—	—	
6	清水が丘	垂水区清水が丘3丁目				—	—	
7	片山	西区枝吉	—				—	
8	鳥羽	西区枝吉					—	
9	前池	西区枝吉					—	
10	吉田	西区枝吉	—					
11	森友	西区森友					—	
12	吉田南	西区森友1～3丁目ほか					—	—
13	新方	西区玉津町新方ほか	—	—	—	—	—	—
14	今津	西区玉津町今津	—	—	—	—	—	
15	高津橋岡	西区玉津町今津					—	
16	二ツ屋東	西区玉津町二ツ屋	—				—	
17	出合	西区玉津町出合ほか	—	—	—	—	—	—
18	居住	西区玉津町居住	—		—	—	—	
19	居住・小山	西区玉津町居住・長畑町ほか			—			
20	馬掛原	西区玉津町高津橋					—	
21	日輪寺	西区玉津町小山					—	—
22	小山	西区玉津町小山	—				—	—
23	玉津田中	西区宮下1・2丁目ほか	—	—	—	—	—	—
24	芝崎	西区平野町芝崎						—
25	印路	西区平野町印路	—					
26	大谷	西区平野町印路				—		
27	西戸田	西区平野町西戸田	—					—
28	大畑	西区平野町大畑					—	—
29	常本	西区平野町常本	—	—	—	—	—	
30	黒田	西区平野町黒田				—		
31	西神 NT. No. 47	西区春日台9丁目ほか			—			
32	西神 NT. No. 48	西区春日台1丁目				—		
33	西神 NT. No. 50	西区春日台9丁目ほか				—		
34	繁田	西区平野町繁田				—	—	
35	西神 NT. No. 38	西区美賀多台5・8丁目				—		
36	堅田	西区平野町堅田				—	—	
37	鍋谷池	西区神出町南	—			—		
38	養田中の池	西区高塚台6丁目				—		—
39	養田	西区押部谷町養田					—	
40	元住吉山	西区押部谷町細田				—	—	
41	細田	西区押部谷町細田					—	
42	押部	西区押部谷町押部谷					—	
43	栄	西区押部谷町栄					—	
44	松本	西区壙谷町松本					—	
45	青谷	西区壙谷町松本	—	—		—		
46	菅野	西区壙谷町菅野				—	—	
47	西神 NT. No. 62	西区壙谷町菅野					—	
48	西神 NT. No. 65	西区櫻野台1丁目ほか				—		
49	栃木	西区壙谷町栃木				—	—	
50	如意寺裏山	西区壙谷町谷口				—		
51	城ヶ谷	西区壙谷町菅野				—	—	
52	白水	西区白水1・2丁目					—	—
53	南別府	西区南別府1～4丁目	—	—	—	—	—	
54	北別府	西区北別府4・5丁目				—		
55	今池尻	西区伊川谷町潤和ほか				—	—	—
56	潤和横尾	西区伊川谷町潤和					—	
57	池上北	西区伊川谷町上脇ほか					—	—
58	池上口ノ池	西区伊川谷町長坂				—		—
59	長坂	西区伊川谷町長坂					—	—
60	上脇	西区伊川谷町上脇	—	—	—	—	—	—
61	表山	西区伊川谷町上脇				—	—	
62	頭高山	西区学園西町4丁目ほか				—		
63	久留主谷	西区伊川谷町前開				—		

『神戸の弥生遺跡』『明石川流域の弥生遺跡』神戸市教育委員会 2016 を一部改変
* トーンは高地性集落

表 2 検出遺構一覧（建物内検出で遺構番号を付けた小規模遺構を除く）

遺構番号	遺構種別	平面形態	床面標高 (m)	規模 (m)		壁高・深さ (cm)	柱穴・ピット	付帯施設			付帯遺物 台石	付帯状況 被熱痕	時期	備考
								土坑	壁溝・溝	溝				
1区														
SB101	竪穴建物	?	97.2	—	×	—	2	●	○				V	形状不詳
SB102	竪穴建物	楕円形	96.4	6.0	×	4.6	60	5	●	○	○	○	V	SK101(炭埋土)付帯か?
SB103	竪穴建物	隅丸方形	95.3	6.4	×	2.8	70	1		○			V	SK103(炭埋土)付帯
SB104	竪穴建物	隅丸方形	93.8	4.2	×	0.6	10	15(杭?)		○			V	溝のみ
SB105	竪穴建物	隅丸方形	93.6	4.6	×	0.5	10			○			V	溝のみ
SB106	竪穴建物	隅丸方形	90.9	6.6	×	3.0	30		○	○			V	壺埋置
SB107	竪穴建物	隅丸方形	91.9	4.6	×	1.5	60	3	●	○			V	
SB108	竪穴建物	方形	89.0	4.6	×	2.4	25	2		○			V	
SB109	竪穴建物	隅丸方形	90.0	6.4	×	2.1	60			○			V	
SB110	竪穴建物	隅丸方形	90.2	3.9	×	1.6	50			○		○	V	
SB111	竪穴建物	隅丸方形	88.5	4.5	×	1.5	10			○			V	
SX101	土坑	楕円形	97.2	3.7	×	1.5	50					○	?	焼土
SX102	段状遺構	方形	95.2	6.8	×	4.0	80	1		○		○	?	ピット 炭化材
SX103	竪穴建物	隅丸方形	93.9	10.0	×	3.2	40	1		○			V	
SX104	竪穴建物	楕円形	91.1	4.4	×	1.6	15		○	○			V	
SX105	被熱痕	円形	92.5	—	×	—	—					○	?	被熱痕 2箇所
SK101	土坑	楕円形	95.9	0.9	×	0.75	30		●				V?	SB102に付帯か?
SK102	土坑	円形	95.7	1.0	×	0.8	20		●				V?	SK101炭埋土下層
SK103	土坑	隅丸方形	95.2	1.7	×	1.6	40		●				V	SB103に付帯
SK104	土坑	円形	90.2	1.8	×	1.5	30		●			○	V?	炭・焼土 床面赤変
2区														
SB201	竪穴建物	隅丸方形	86.8	10.0	×	2.5	70	8		○			IV?	
SB202	竪穴建物	隅丸方形	86.7	9.5	×	2.0	50	3	●	○		○	IV?	
3区														
SB301	竪穴建物	円形	92.8	6.0	×	5.6	60	8	○	○			V	張り出し部あり
SB302	竪穴建物	円形	92.6	(5.6)	×	(4.8)	(20)						?	
SB303	竪穴建物	隅丸方形	92.6	6.0	×	4.0	40	1	●	○		○	V	焼土・炭
SB304	竪穴建物	楕円形?	90.0	15.2	×	7.2	(100)	16		○		○	IV?	焼土・炭 床面標高中位
SB305	竪穴建物	隅丸方形	90.0	8.4	×	3.8	(240)	13		○	○		V	壁高斜面 "
SB306	竪穴建物	楕円形?	90.0	7.6	×	4.0	(200)	18		○			V	" "
SB307	竪穴建物	隅丸方形	84.0	3.0	×	1.0	10			○			?	"
SB308	竪穴建物	隅丸方形	85.1	6.0	×	2.4	—			○			IV	SB408と同一
SX301	竪穴建物	隅丸方形	91.5	5.0	×	4.0	40	3	●	○	○	○	IV	3時期 焼失住居
SX302	竪穴建物	方形	92.9	7.4	×	5.0	30		○	○		○	IV	
SX303	竪穴建物?	楕円形	92.0	5.8	×	3.8	20						?	
SX304	段状遺構	長方形	86.4	14.0	×	4.0	80	7	○				?	
SX305	土坑	方形	91.3	3.4	×	1.3	25						?	焼土
4区														
SB401	竪穴建物	楕円形	93.8	5.2	×	5.2	15	22	○				V	床面に炭 柱穴周辺含む
SB402	竪穴建物	隅丸方形	92.8	3.6	×	2.8	20			○		○	V	焼土
SB403	竪穴建物	隅丸方形	91.2	12.0	×	4.4	60	4	○	○			IV	
SB404	竪穴建物	隅丸方形	90.5	4.3	×	2.0	40			○	○	○	IV?	
SB405	竪穴建物	隅丸方形	90.4	5.0	×	2.0	50	5		○			IV	
SB406	竪穴建物	隅丸方形	87.3	4.6	×	1.6	30	4		○			IV?	
SB407	竪穴建物	円形・隅丸方形	87.5	7.0	×	4.8	60	17	●	○		○	IV	4時期か 焼土・炭
SB408	竪穴建物	隅丸方形	85.2	7.0	×	3.6	40	3	○	○		○	IV	SB308と同一
SX401	被熱痕	円形	89.9	—	×	—	—					○	V?	SD201内 ピット 焼土・炭
2~4区														
SD201	溝壕状遺構	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	V	断面V字状
SD202	溝壕状遺構	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	V	断面U字状
					表記		土坑は深さ	検出のみ	●炭含む	検出のみ	検出のみ	検出のみ	?	不詳 「被熱痕」項を表中に加えた
5区														
窯跡	1基	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
窯状遺構	1基	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

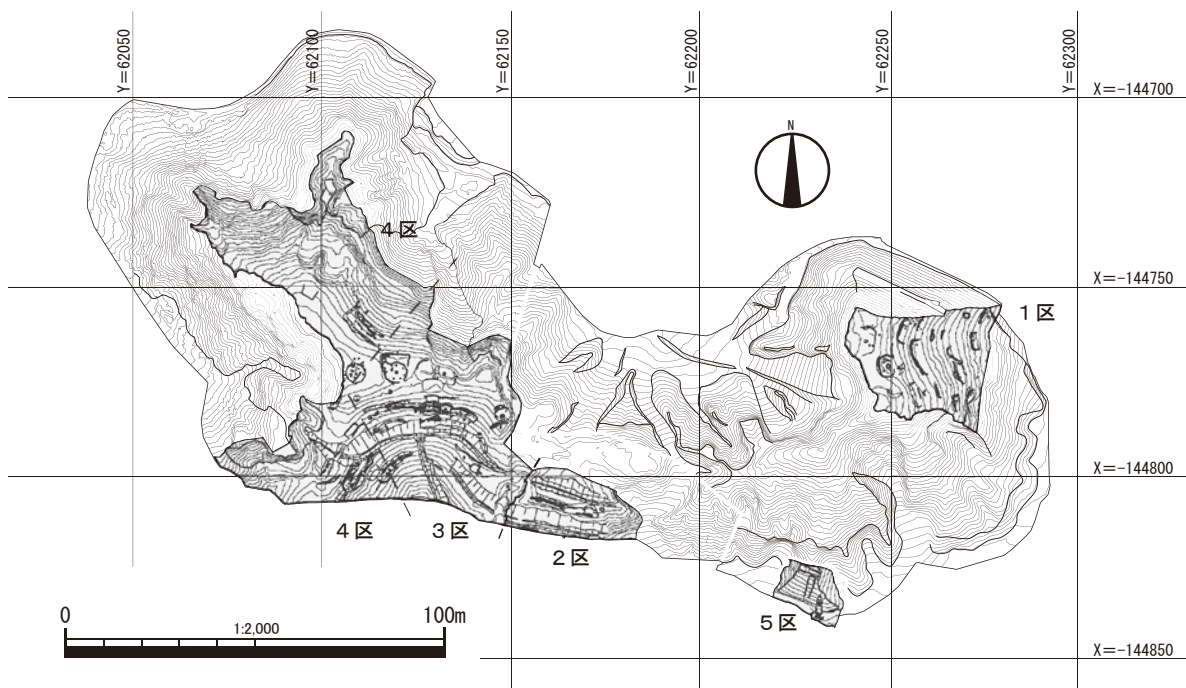
第2章 発掘調査の成果

1. 調査の概要

先の調査地（第3次調査8区）から続く丘陵部南端と屈曲して西に伸びる丘陵部の事業地の範囲約 13,000 m²を調査対象として実施した。

調査地東半では東端の丘陵頂部から斜面部にかけての1区と裾部の5区でのみ遺構・遺物を検出した。調査地西半については幅広となった丘陵部高位と南向きの谷斜面部のほぼ全域、北側の池方向に伸びる北西支尾根頂部付近で遺構・遺物を検出した。西半の調査区は掘削土の搬出や空撮図化の工程上の都合から調査区を2～4区に細分した。

以下、今回の調査での遺構・遺物の検出状況を記す。遺構名は重複を避けるため調査区毎に番号を付した。



第5図 調査区区割図

今回の調査では丘陵尾根上において竪穴建物を検出し、斜面部で段状遺構を検出した。これまでの第1～3次調査では高地性集落の特徴的な遺構である段状遺構については多くが竪穴建物として扱われており、今回の調査でも段状遺構は基本的に竪穴建物として「SB」の表記で各遺構を表している。建物は径、ないし一辺が6 m前後のものが大半であるが、これと比して規模の大きいものや焼土や炭化材が検出されるなど、調査段階で特異な状況を確認したものについては「SX」の特殊遺構扱いをした。

但し、調査終了後の検討段階で、特殊と考えていた遺構が竪穴建物と考えられる状況にある、また建物としていたものがやや特異な状況を示すなど調査時と整理作業後に遺構の取り扱いに変更が生じたものがあるが、図面や写真の記載、とくに遺物整理作業の段階で出土土器に施したマーキングの訂正作業を考えると、調査時の名称のまま列記することが煩雑化を避ける上で有効と考え、基本的には調査時に付した遺構名で表現を行う。今回の調査で検出した遺構を前頁の検出遺構一覧（表2）に記した。

2. 1区（調査地東半）の調査

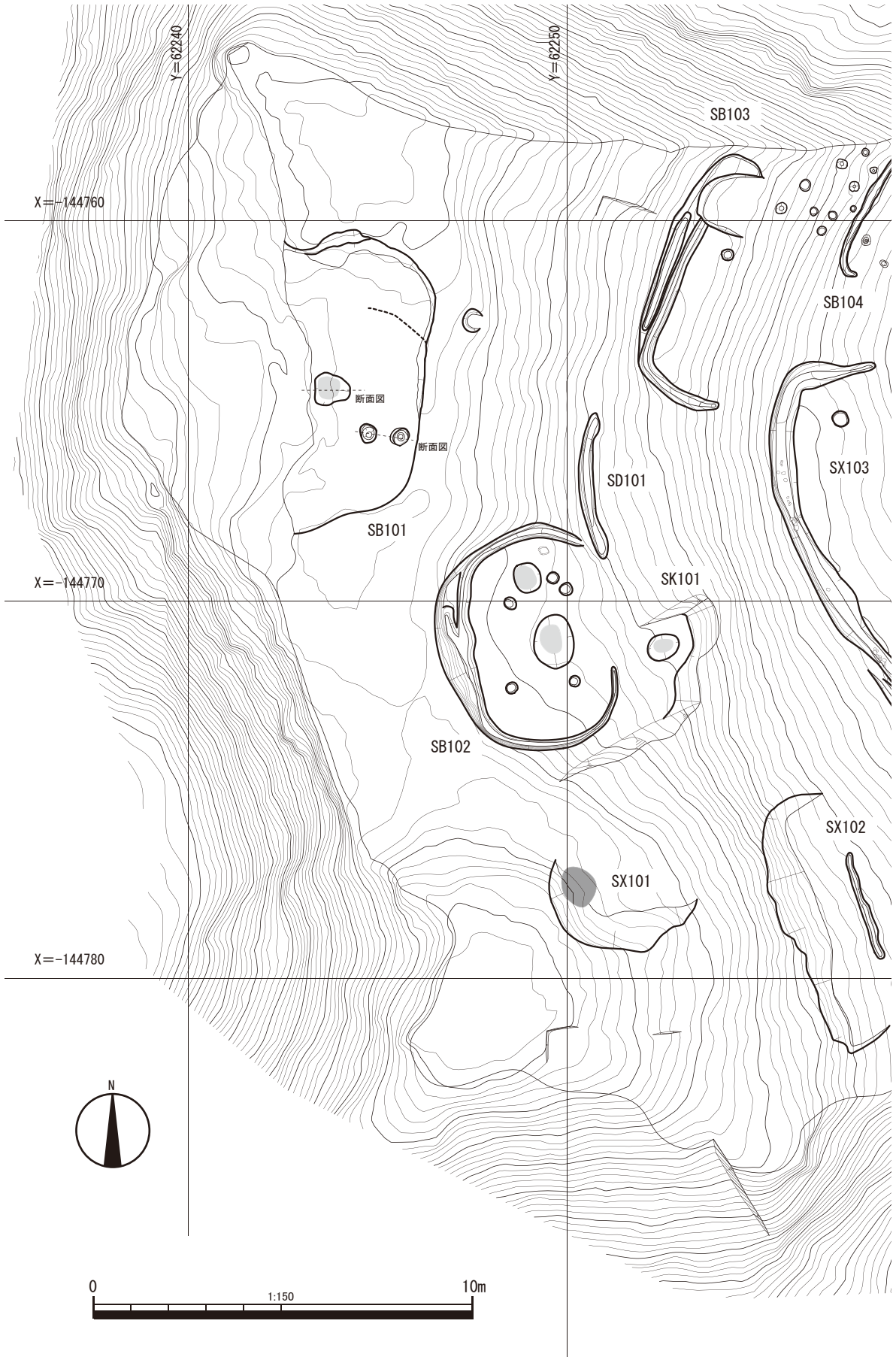
(1) 1区の検出遺構

第3次調査地から続く丘陵の端部で青谷の最奥部に面する尾根上から南東方向への斜面において遺構・遺物を検出した。尾根上最高所の標高は97.5mで、遺構を検出した範囲の斜面部下位の標高は89.0m前後を測る。

尾根上で竪穴建物2棟を検出し、斜面部で段状遺構11基、土坑3基、溝、ピットを検出した。一部の遺構は埋土に焼土や炭化物を含み、平坦面で被熱痕を検出した箇所がある。



第6図 1区平面図及び縦断面図

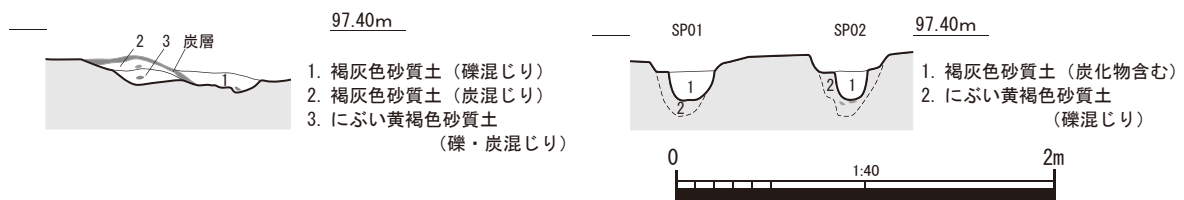


第7图 1区丘陵顶部検出遺構平面図

① 竪穴建物

SB101

丘陵尾根上北端に位置する。周辺は表土層直下で地山となる。表土層から比較的土器が出土したものの、現位置を保つとは考えにくかった。地山面で建物の壁立ちの可能性のあるわずかな段差を確認したが木の根の影響などもあり不明瞭である。炭を埋土とする径 0.9 m の土坑と径 0.2 m、深さ 0.15 m で埋土中に炭を含む柱穴 2 基を検出した。柱穴はこれ以外に検出していない。土坑を中央土坑と仮定した場合、壁立ちとしたわずかな段差や土器が出土した地点から建物を復元するとかなりの規模を有する。建物が重複した可能性も考えられるが、土の流出や削平などで明確にはできなかった。



第 8 図 SB101 中央土坑及び柱穴土層断面図

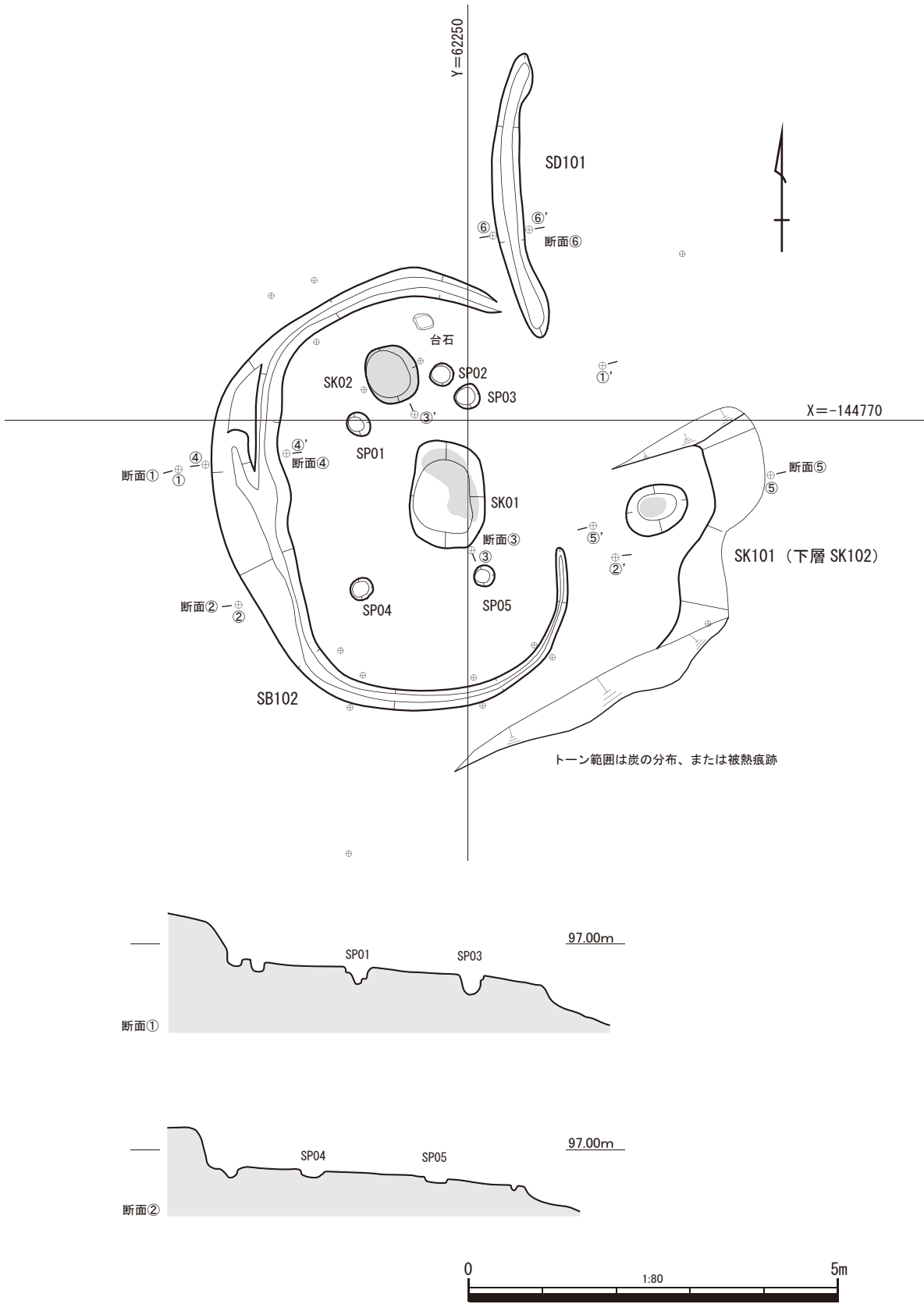
写真 2 SB101 全景 (南東から)



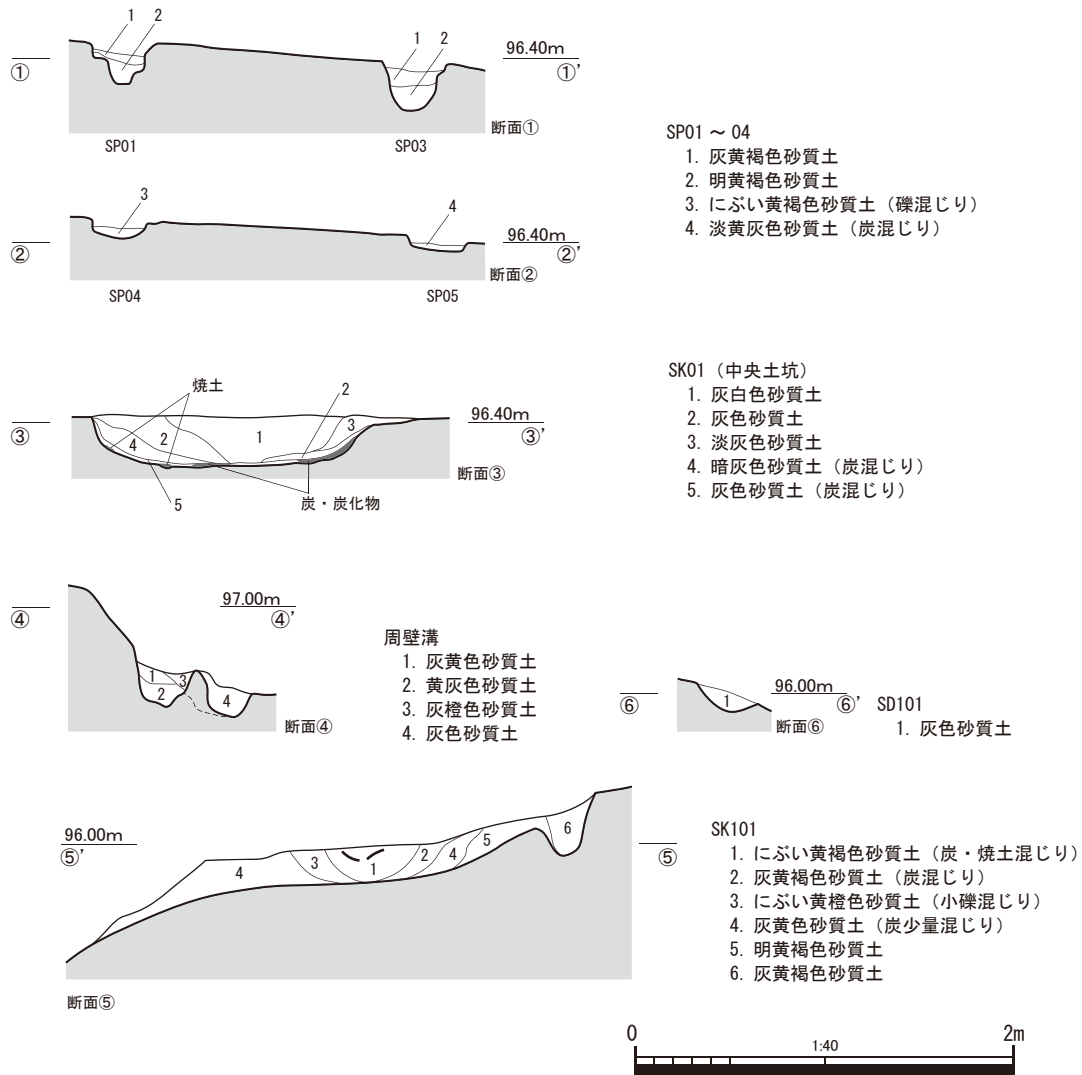
SB102

SB101 の南東の斜面上位で検出した。長径 6.0 m、短径 4.6 m ほどの平面楕円形の竪穴建物である。尾根筋からわずかに下がった位置にあり、遺存状況は良好で最大壁高 0.6 m を測る。壁際に幅 0.2 ~ 0.3 m の周壁溝が巡り、西側は一部二重となる。東側は明確でない。床面中央で土坑を 1 基検出し、その周囲で柱穴 5 基を検出した。土坑は長辺 1.4 m、短辺 1.0 m の平面隅丸長方形を呈し、埋土下層に炭が堆積する。柱穴は径 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.1 ~ 0.25 m を測る。北側の床面に 20 cm ほどの丸みを帯びた台石が据えられていた。近接する部分の床面が径 0.7 m で茶褐色に変色していた。土坑の輪郭と考え掘削したが、わずかに掘り下げると地山となった。状況から床面の被熱痕であったと考えられる。台石の出土と合わせ、付近が何らかの作業スペースの可能性を想定するものである。床面から遺物の出土はほぼなく、周壁溝や遺構埋土からわずかに破片の土器が出土したに留まる。建物検出時の直近の流土層や下位の地山面で完形に復元できる土器が出土しており、建物から流れ落ちた可能性は高い。

建物の東側で炭を埋土とする土坑 SK101 を検出しており、周囲は現状で上辺約 2.0 m、下辺約 3.0 m の方形の区画を形成する。周辺の流土堆積との差はあまり明瞭でないが、さらに下層に土坑状の炭層の堆積 (SK102) があり、継続して炭の投棄が行われた痕跡と考えられる。



第9図 SB102平・断面図



- SP01 ~ 04
1. 灰黄褐色砂質土
 2. 明黄褐色砂質土
 3. にぶい黄褐色砂質土 (礫混じり)
 4. 淡黄灰色砂質土 (炭混じり)

- SK01 (中央土坑)
1. 灰白色砂質土
 2. 灰色砂質土
 3. 淡灰色砂質土
 4. 暗灰色砂質土 (炭混じり)
 5. 灰色砂質土 (炭混じり)

- 周壁溝
1. 灰黄色砂質土
 2. 黄灰色砂質土
 3. 灰橙色砂質土
 4. 灰色砂質土

- SD101
1. 灰色砂質土

- SK101
1. にぶい黄褐色砂質土 (炭・焼土混じり)
 2. 灰黄褐色砂質土 (炭混じり)
 3. にぶい黄褐色砂質土 (小礫混じり)
 4. 灰黄色砂質土 (炭少量混じり)
 5. 明黄褐色砂質土
 6. 灰黄褐色砂質土

第 10 図 SB102・SK101 断面図

②段状遺構

遺構番号 SB103 以降は段状遺構の形態で検出した。同様の遺構は竪穴建物以外に平坦面に構築された平地式の建物、また斜面に構築された半地下式の建物のほか、通路などが想定されるが、構築時の旧地形の状況とともに不明な点が多い。遺存状況に差はあるがほとんどの遺構で斜面を掘り込んだ壁立ちと周壁溝が確認できた。掘り込みの深さを建物の壁高とする。また一部の遺構は地山面で溝を検出したのみである。遺構は斜面の等高線に沿って南北に長く、斜面下位の堆積はほとんどが流出しており、直交する東西方向の規模は東側下位が流出した残存値である。

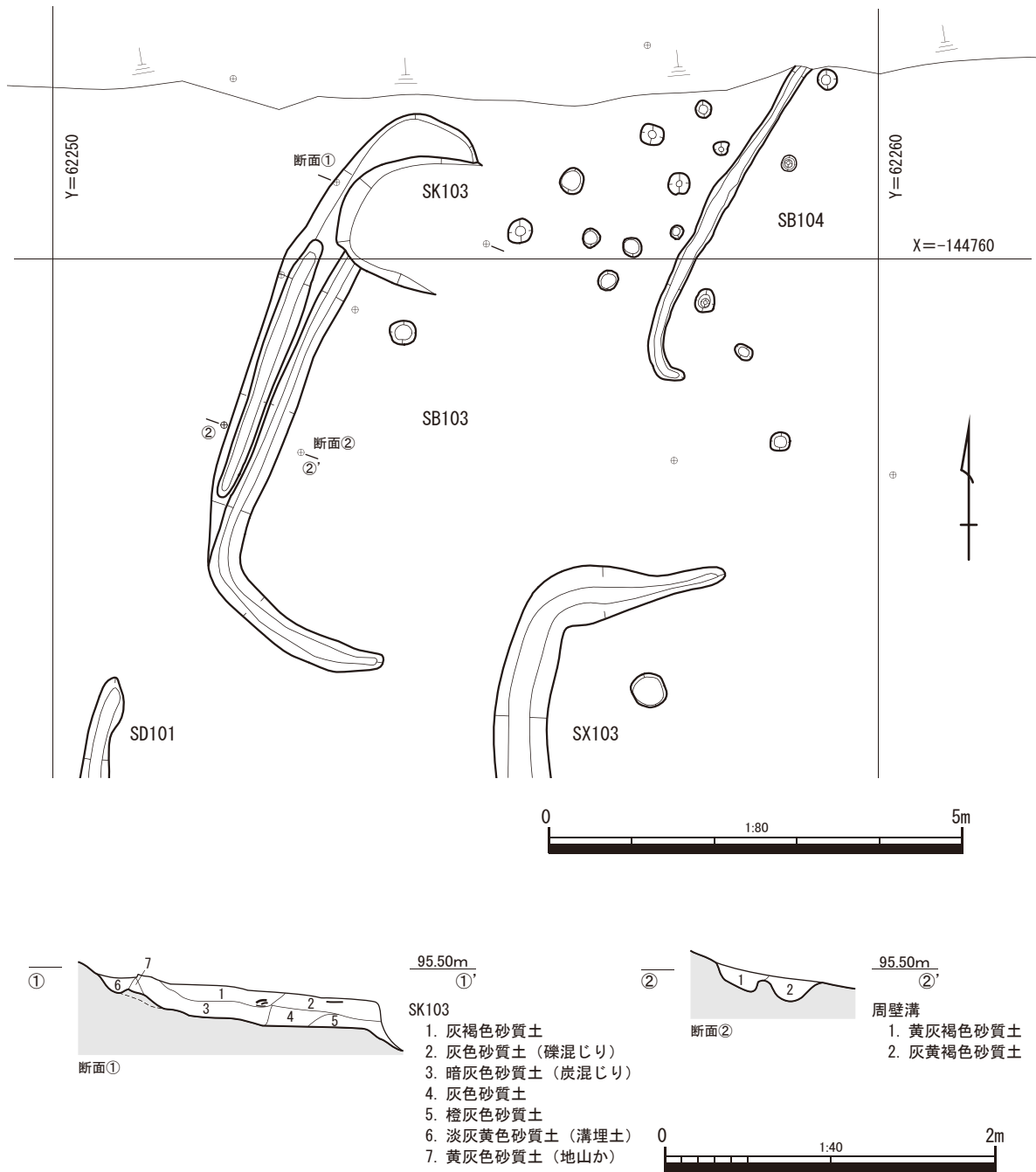
SB103

南北 6.4 m、東西 2.8 m、最大壁高 0.7 m を測る。壁際で溝 2 条を検出し、東側の溝は南側で L 字に折れ曲がる。北端では溝を切り込む形で土坑 SK103 を検出した。規模は南北 1.6 m、東西は 1.5 m が残存する。建物床面からの深さは 0.2 m ほどである。土坑の接する壁際で炭化材が出土したほか、土坑の埋土にも多くの炭の混入が認められた。床面や壁で顕著な被熱痕跡は確認していない。遺構内からの遺物の出土は土坑を中心とするが小片のことが多い。

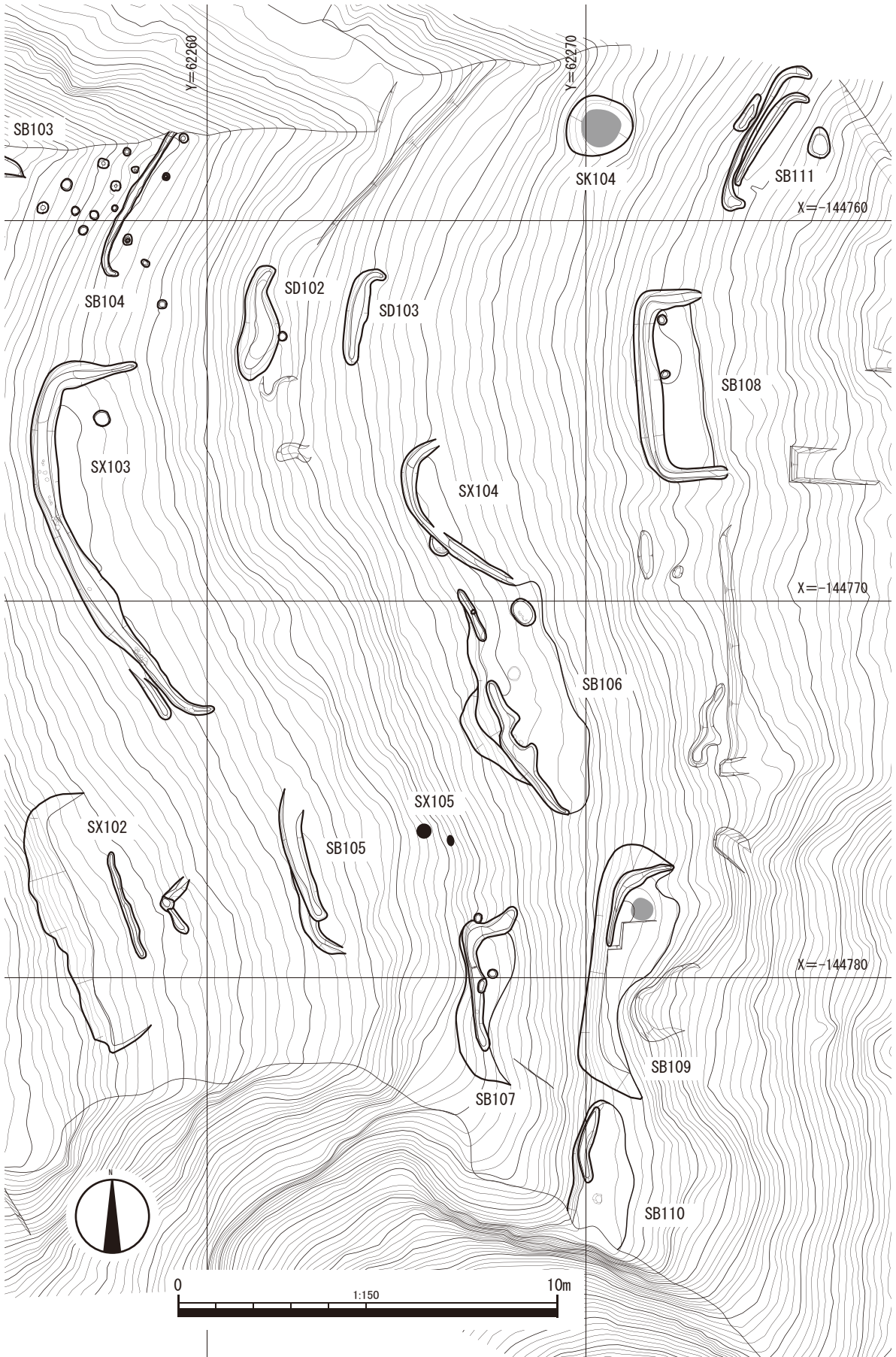
SB104

幅 0.2 m ほどの細い溝で区画された南北 4.2 m、東西はわずかに 0.8 m ほどが残存する建物と判断した。溝に沿ってピット 3 基を検出したほか、周囲に杭状のものを含めピットが密に分布する。この部分のみピットの数が多いが建物に伴うかは判然としない。

SB103 の斜面下位や SB104 の周辺の流土層からは比較的多くの遺物が出土している。壺、甕、高坏、鉢などが出土しており、位置や堆積状況などから本来は SB103 に伴う可能性が高い遺物と想定される。



第 11 図 SB103・SB104 平・断面図



第 12 图 1 区斜面部検出遺構平面図

SB105

溝を検出したのみであるが平面形より建物とする。溝は切り合いがあるが南北長 4.6 m、幅 0.3 ~ 0.5 m、深さは 0.1 m ほどで浅く、灰色系の砂質土が埋土である。一部に溝の断面形状が逆台形を呈する箇所がある。南側の斜面付近で鉢が出土した。

SB106

斜面中位中央に位置し、南北 6.6 m、東西は中央部で最大 3.0 m を測る。壁高は現状で 0.3 m ほどが残る。深さ 0.15 ~ 0.2 m の溝を建物南の壁際で検出したが不定形で、南側でわずかに折れる。床面で壺が出土した。検出時は横位であるが当初の状態を示すかは明らかでない。北側で検出した長さ 1.5 m、幅 0.2 m、深さ 0.1 m の小規模な溝 SD105 も同一遺構、壁溝の一部と考えられ、長径 0.8 m の平面楕円形の浅い土坑 SK104 も建物に伴う遺構と考えられる。壺は建物中央付近に据えられていた可能性が考えられる。さらに北側に隣接して SX104 を検出している。

SB107

南北 4.6 m、東西最大 1.5 m が残る。壁高は最大 0.6 m である。幅 0.2 ~ 0.4 m の壁溝とピット 3 基を検出した。北側の溝は一段深くなっており、この部分で甕の破片が出土した。床面東側の斜面下位で被熱痕を確認した。断ち割りにより状況を検討したが被熱部周囲に堀形はなく、上層からの掘り込みに伴うものではなかったが、床面も嵩上げされた積極的な根拠を認めることはできなかった。

SB108

掘り込みはほぼ残っておらず、コの字状に巡る溝を検出した。南北 4.6 m、東西最大 2.4 m が残る建物である。溝は幅 0.3 ~ 0.6 m を測る。深さは北側が浅く、南側は 0.3 m でやや鋭角に掘削されている。溝の南側折れ部付近で小片ながらややまとまって土器が出土した。床面でピット 2 基を検出した。径 0.2 ~ 0.3 m、深さ 0.15 ~ 0.2 m で埋土は灰黄色砂質土である。

SB109

南北 6.4 m、東西最大 2.1 m を測る。壁高は現況 0.6 m ほどを測る。床面北半で壁溝を検出したが、南側に伸びていたかは不明である。溝幅 0.3 m、深さはわずかに 0.1 m ほどが残る。床面北側で炭を埋土とする土坑を検出した。径 0.6 m、深さ 0.1 m で底に炭層が堆積する。遺物の出土はなかった。

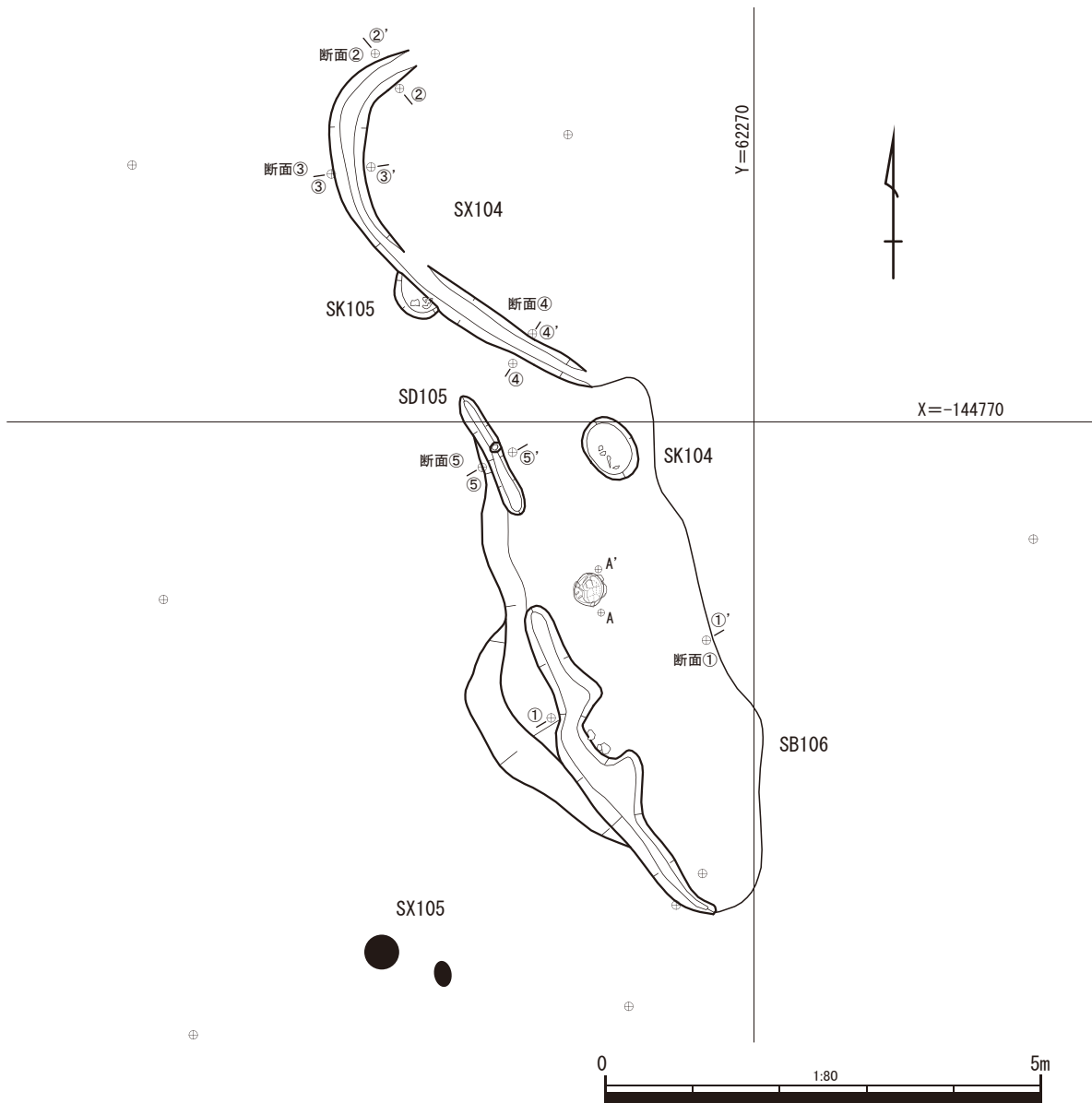
SB110

斜面下位南端で検出した。南北 3.9 m 以上、東西 1.6 m が残る。東側の斜面はもとより、南側も丘陵端部の崖面となり流出している。建物の壁立ちは垂直で 0.5 m が良好に遺存する。床面では北側で壁溝を検出したのみである。長さ 2.0 m、幅 0.4 m、深さは 0.1 m ほどしか残らない。埋土上層から鉢が出土したが、脆く図化し得なかった。

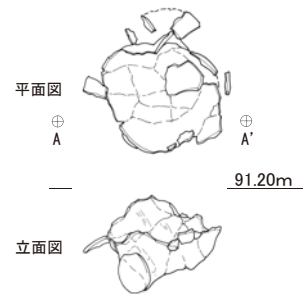
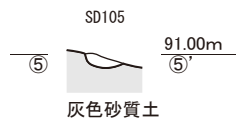
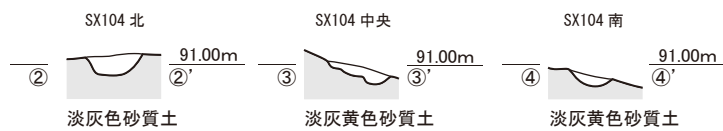
SB111

斜面下位北端で検出した建物で溝のみを検出した。壁の形状は確認できない。床面の標高は 88.5 m で、今回 1 区において検出した遺構の中で最も下位に位置する。溝は幅 0.15 ~ 0.3 m で、深さはいずれも 0.1 m ほどで、下位 2 条の溝の北側の折れ部の深さは 0.2 m である。検出長の最も長い中央の溝で長さ 4.0 m である。壁溝には切り合いがなく、建物の拡張あるいは縮小状況は明らかでない。

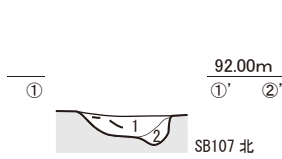
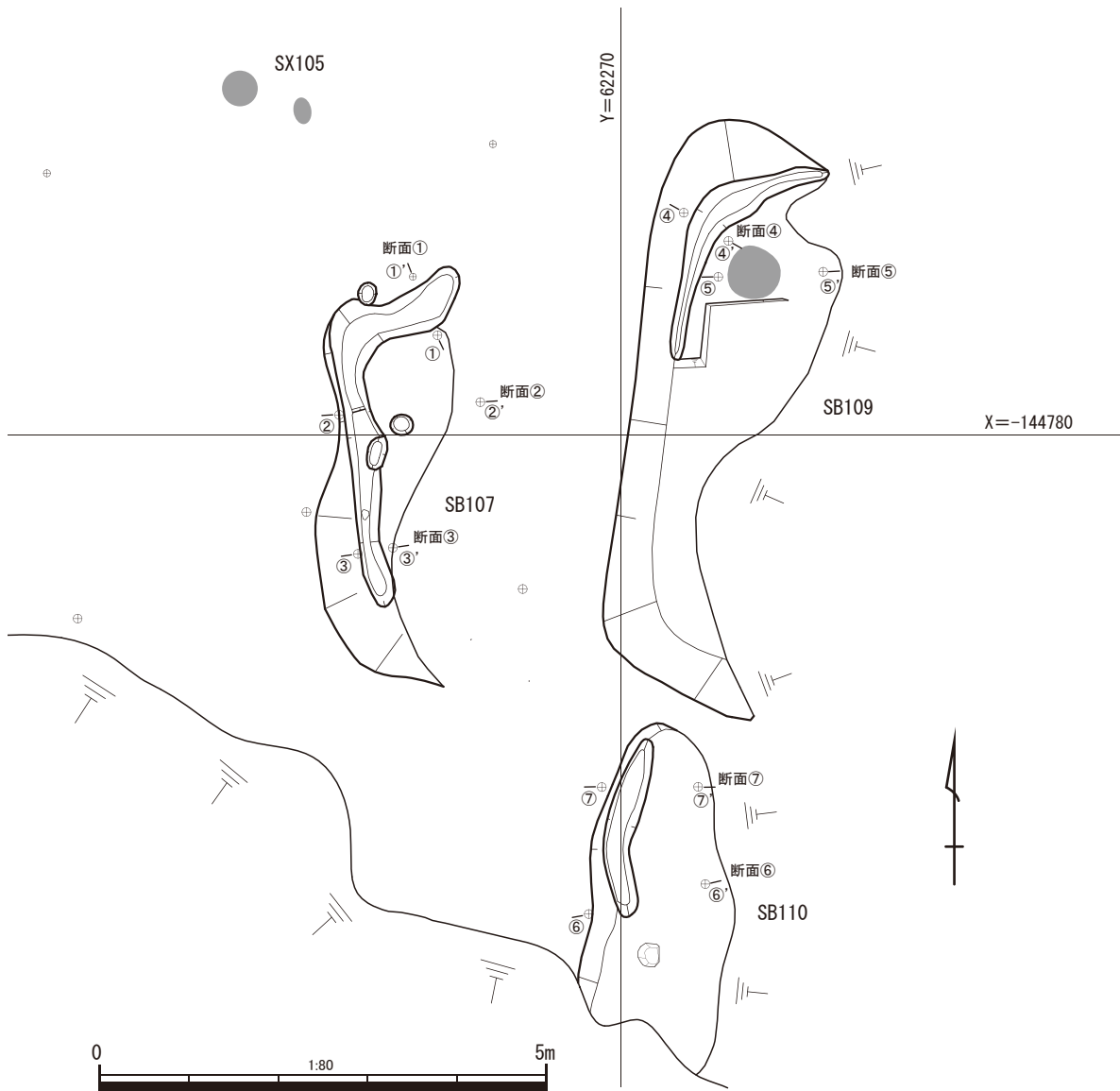
斜面下位で検出した北から SB111、SB108、SB109、SB110 は整然と並ぶ状況が窺える。



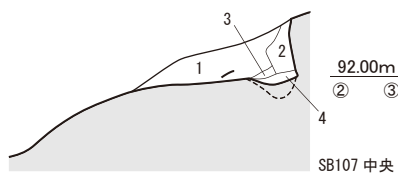
1. 淡灰黄色砂質土
2. 灰色砂質土 (小礫混じり)



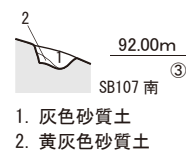
第 13 図 SB106・SX104 平・断面図及び SB106 遺物出土状況図



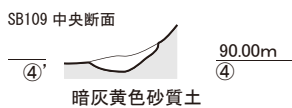
1. 黄灰色砂質土
2. 灰色粘性砂質土 (堅緻)



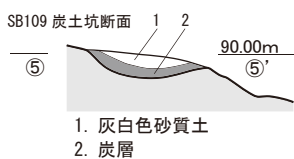
1. 黄褐色砂質土 (礫混じり)
2. 黄色シルト
3. 明黄色シルト (地山ブロック)
4. 淡灰色粘性砂質土 (炭少量混じり)



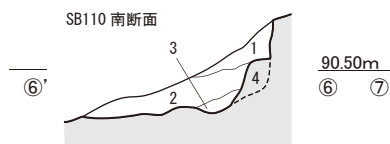
1. 灰色砂質土
2. 黄灰色砂質土



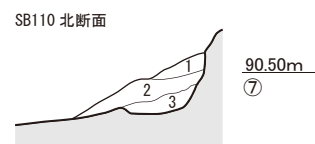
4. 暗灰黄色砂質土



1. 灰白色砂質土
2. 炭層



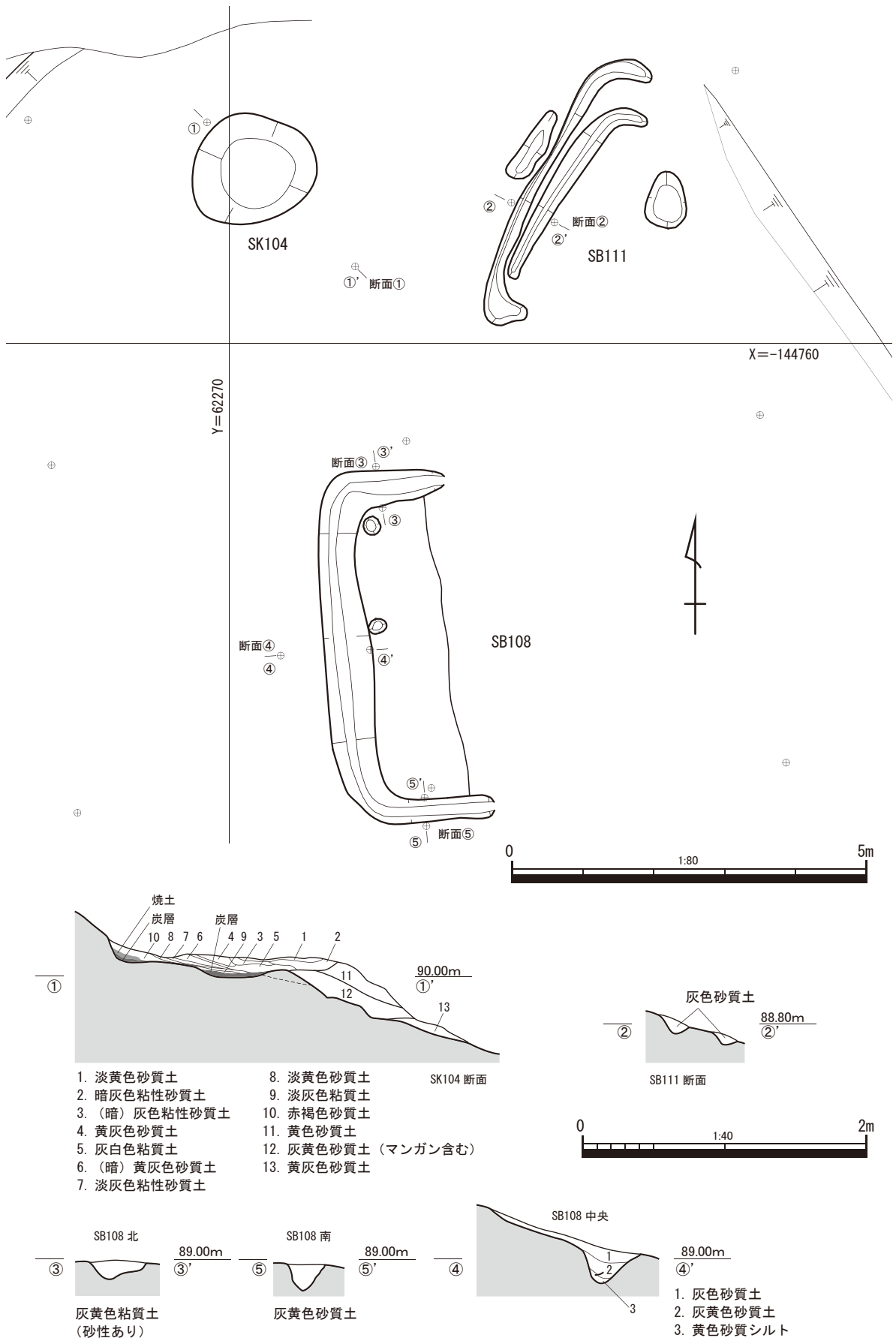
1. 淡灰色砂質土
2. 淡灰黄色砂質土 (小礫混じり)
3. 灰色砂礫 (径~3cmまで)
4. 黄色砂質土 (地山か)



1. 淡灰白色砂質土
2. 淡灰黄色砂質土 (小礫混じり)
3. 淡灰色砂質土



第 14 図 SB107・SB109・SB110 平・断面図



第 15 図 SB108・SB111・SK104 平・断面図

③その他の遺構

上述の竪穴建物や建物と考えられる段状遺構とはやや様相を異にする遺構に SX（特殊遺構）の番号を付している。

SX101

丘陵尾根頂部の南端で検出した長径 3.7 m ほどに復元される掘り込みである。焼土塊の出土と壁際や床面の一部で被熱痕を確認した。本来は土坑であったと考えられる。焼土塊とともに土器片が出土した。弥生土器と考えられるが詳細は不明である。

SX102

SX101 の斜面下位で検出した段状遺構である。南北 7.2 m、東西 4.0 m、壁高は最大 1.2 m を測る。平坦面上で長さ 3.0 m、幅 0.2 m、深さ 0.1 m の溝を検出した。段の掘り込み、壁からやや離れた位置にある。溝の東側で径 0.4 m、深さ 0.3 m のピット 1 基とこのピットから南北両側にハの字状にそれぞれ長さ 0.8 m ほど伸びる溝を検出した。

ピットの内側や溝の一部が赤変しており被熱状況が認められる。ピットや溝は褐色砂で埋没しており、溝の埋土には焼土が混じるが、赤変が顕著なピットの埋土に焼土は含まれない。またピットの壁面の変色は顕著であるが上部がわずかに硬化する程度で全体に焼け締まった状況はない。ピットや溝内から炭化材が出土し、一部は杭状に打ち込まれた状況を確認した。火を用いた痕跡と考えられるが遺物の出土もなく、遺構の性格については明らかでない。

SX103

斜面中位中央で検出した南北 10.0 m、東西 3.6 m を測る段状遺構である。ほかの段状遺構と比べ規模が大きい点を特徴として SX を冠した。南北両端で折れ部を検出し、わずかに平面コの字状になった溝は幅 0.3 ～ 0.6 m で、床面からの深さは 0.2 m ほどを測る。緩やかに弧を描き建物の平面形は隅丸方形か、または長方形の可能性がある。溝中の中央やや北寄りと南側の溝が 2 条になる箇所では小片ながらまとまって土器が出土した。床面では溝以外に北端でピット 1 基を検出した。ピットは径 0.4 m、深さ 0.2 m で埋土は灰色砂質土である。

SX104

斜面下位中央で検出した段状遺構で、SX103 同様に緩く弧を描く溝で囲まれた範囲は長さ 4.4 m、幅 1.6 m ほどが残存する。掘り込みはほとんど残っていない。溝は幅 0.3 ～ 0.4 m で深さはわずかに 0.1 m ほどである。溝の中ほどで径 0.7 m、深さ 0.1 m の土坑 SK105 を検出しており、溝が土坑を切り込む状況であった。仮に SB106 と同一遺構と考えた場合には長さ 10.6 m となり、斜面上位に位置する SX103 と同規模の段状遺構であった可能性も考えられる。調査区中央部に類似する段状遺構の形成が想定される。

SX105

SB105 と SB107 の間で検出した被熱痕である。径 0.3 ～ 0.4 m ほどの円形または楕円形の被熱痕 2 基が斜面上下に並ぶ。下位で炭を含む落ち込みを検出したが輪郭は不明瞭である。被熱痕の周囲に明確な掘形はなく、地山面で火を焚いた痕跡と考えられる。

斜面中位北側で検出した溝 SD102 は長さ 3.0 m、最大幅 1.0 m、SD103 は長さ 2.5 m、幅 0.6 m で溝とするにはやや幅が広い。段状遺構の埋土や流土堆積の一部など溝以外の可能性も考えられるが、掘り込みなどは不明瞭であった。周辺では比較的土器の出土は多かった。溝の下位は南側の SX104 にかけて緩やかな傾斜地形を呈する。通路などの可能性も想定されようか。

ピットが散見されたが建物や柱、杭列などを成すものは確認していない。

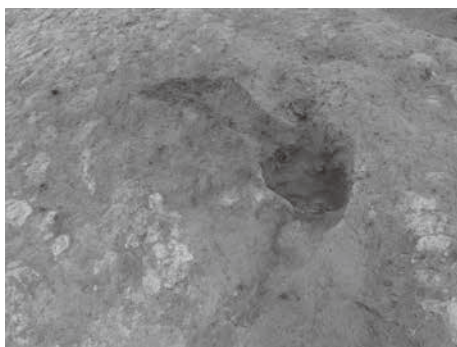
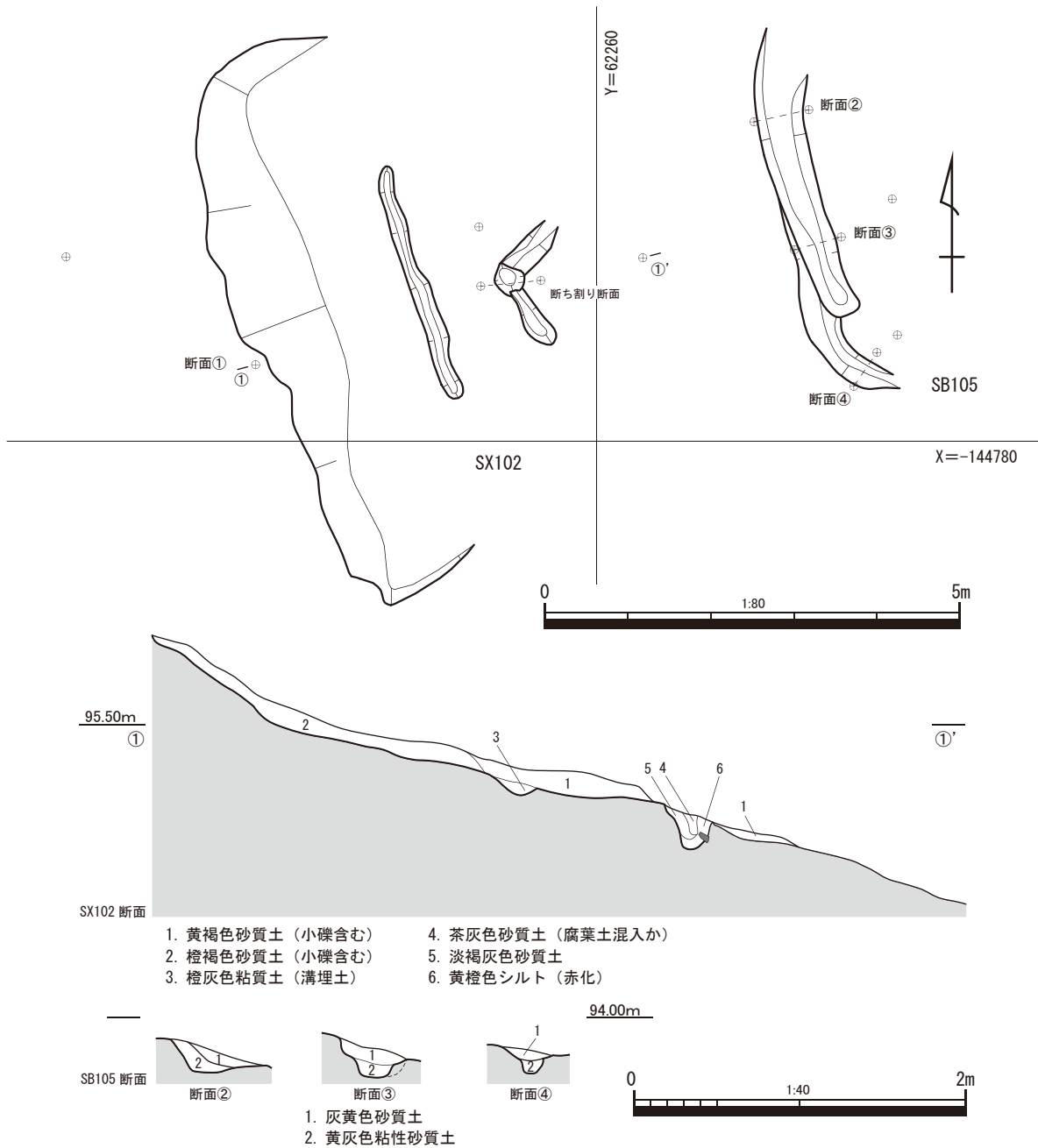
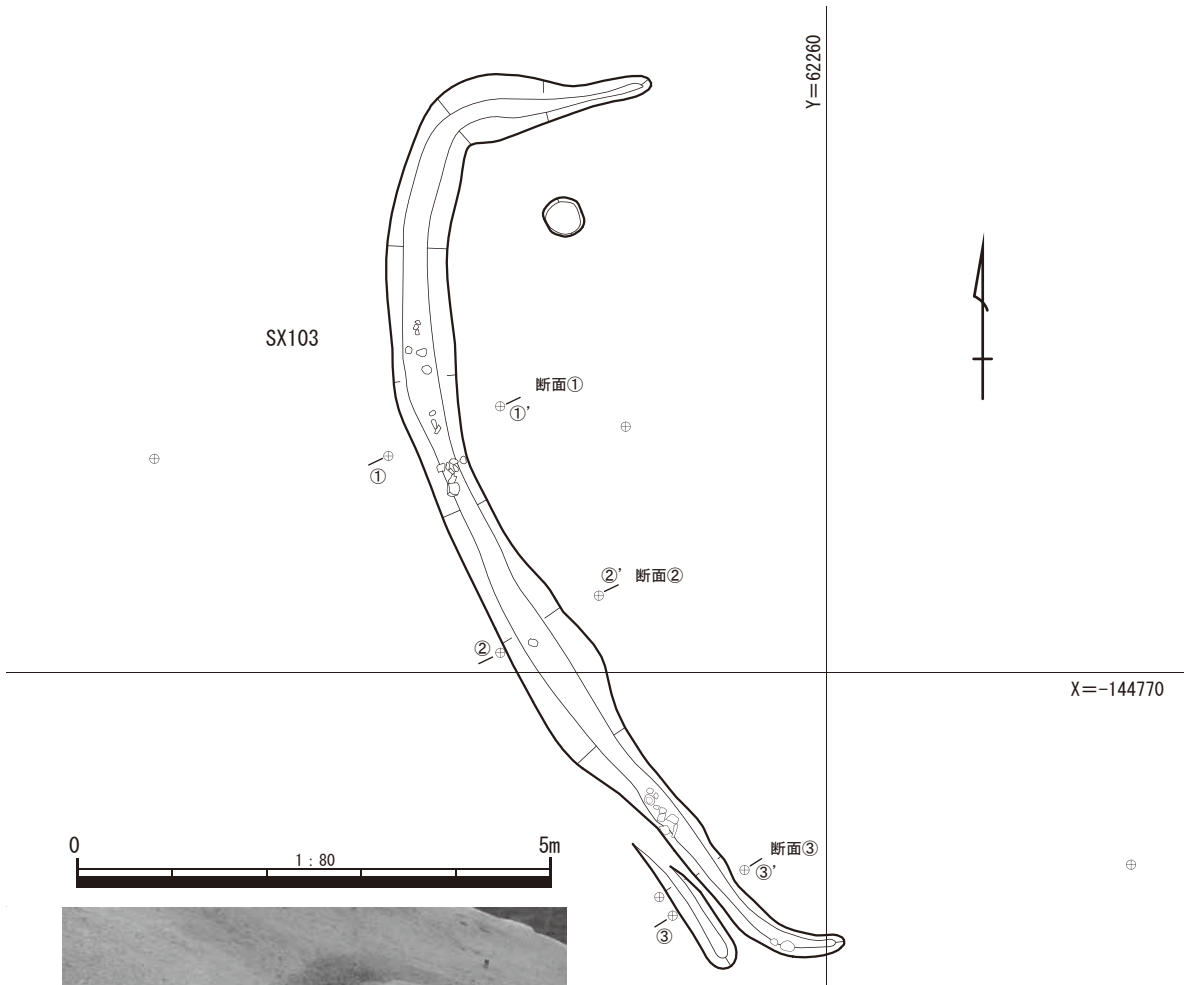


写真3 SX102 検出ピット【左：ピット検出状況（北東から） 右：ピット断ち割り状況（北から）】

第16図 SX102・SB105 平・断面図【写真3 SX102 検出ピット】

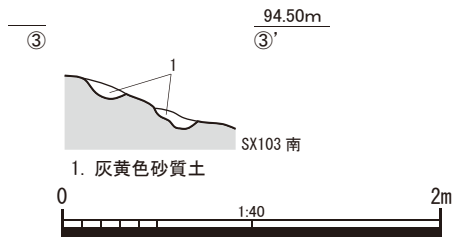
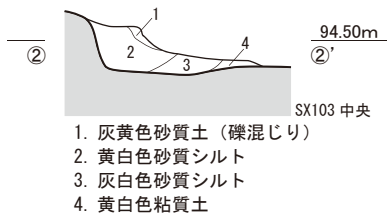
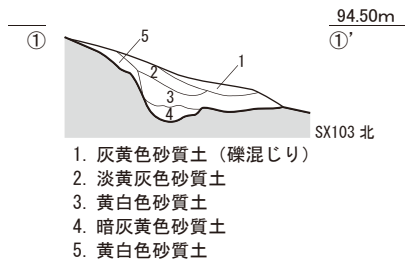


断面①土層堆積状況（南から）



溝内遺物出土状況（北から）

写真4 SX103 土層断面及び遺物出土状況



第17図 SX103 平・断面図【写真4 土層断面及び遺物出土状況】

(2) 1区の出土土器

第18図はSB102及びSB101出土遺物である。SB101北側の地山面直上の表土層に大型の鉢と思われる土器などが含まれていたが復元に至らなかった。8のみSB101床面から出土した甕の底部で右上がりのタタキ痕が見られる。SB102は床面や埋土からの遺物の出土は少なく、復元図化できたのはほとんどが建物検出時の流土層や周辺遺構面上で出土した土器であるが、基本的にSB102に伴う可能性が高いものと考えている。4は周壁溝から出土した広口壺で直立する頸部に突帯が巡る。外反する口縁端面は肥厚し2条の凹線文が施される。頸部はミガキ調整である。5は埋土中から出土した壺の肩部片で2段の櫛描波状文の間を櫛描直線文で飾る。これ以外は周辺出土の土器である。

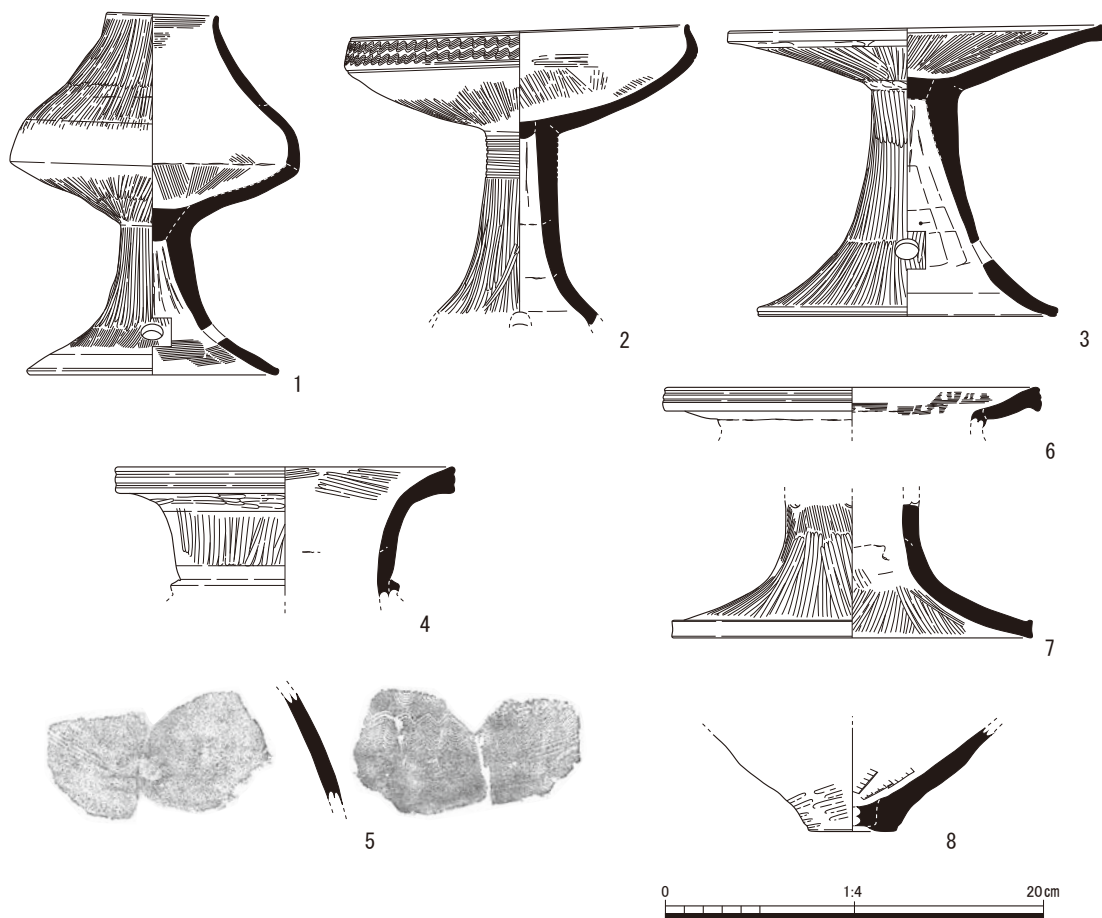
1は脚付の無頸壺と称するものか。胴の張る扁平な算盤玉様の体部下外面はミガキが施され、内面はハケ調整である。直口形状の口縁端部をわずかに摘まみ上げる。ラップ状に開く脚部にもミガキが施され、円孔は4孔であったと思われる。2は高坏で内湾する浅い椀状の坏部の屈曲部には部分的に2条となる沈線が巡り、その上に2条の波状文を巡らせる。口縁端部は摘まみ上げたようにわずかに外反し1条の沈線が巡る。脚柱状部は細長く坏部との境に8条の櫛描き沈線が巡る。接合は円盤充填による。脚部を失うが丸みを帯びるようである。円孔は4個である。3は皿状の坏部を持つ高坏である。口縁端部は強いナデが施され、端面は強いヨコナデにより1条の凹線状になる。皿状部分は内外面とも細かいミガキが施される。脚部の外面も細かいミガキ、円孔は4孔である。6は器台か壺の口縁で端部を下方に拡張させ、2条の凹線を施す。7は器台脚部で外面ハケ調整、内面はミガキのちナデ調整である。直線的に上方に伸びる脚柱部で円孔2孔が残存する。

第19図はSB103床面出土の土器とSB103・SB104周辺出土の土器である。破片ながら比較的土器の出土が多い地点であった。9～17は床面出土の土器で、9は広口壺の口縁部である。上下に拡張する端部に文様は認められない。10・11は直口気味の壺の口縁で頸部は短く、緩やかに外反して端部を上下に拡張し面をつくる。2条ないし3条の凹線文を施す。12は笠形の蓋である。13～16は底部で13は小型の製品、14は甕で右上がりのタタキ調整である。15・16は壺と考えられる。17は脚付きの可能性のある鉢で、直線的に伸びる体部で口縁端部は強いナデにより凹線状になる。内外面ともミガキが施される。色調は茶褐色を呈する。

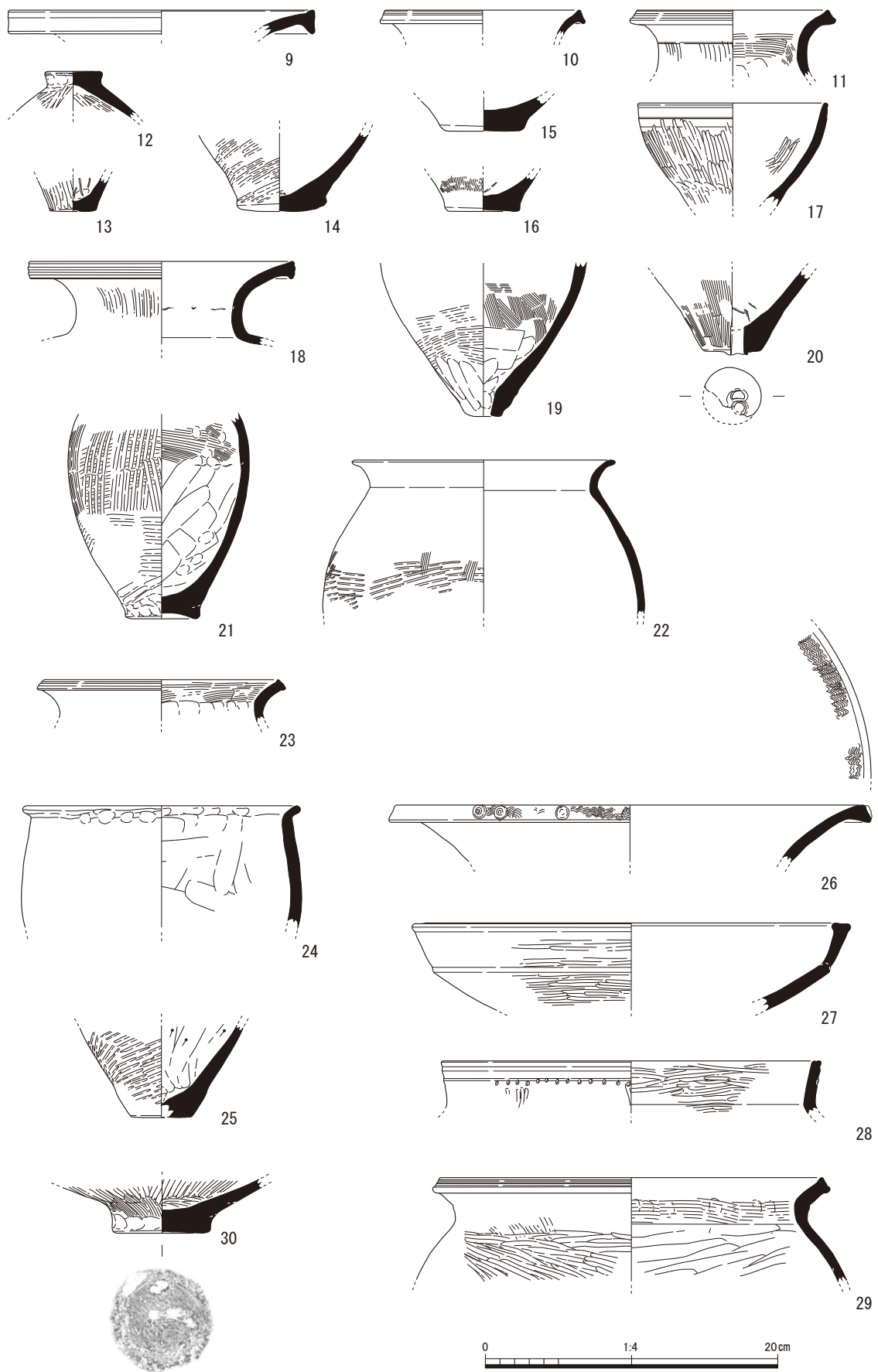
18以降は周辺出土の土器である。18は広口壺で口縁端部を拡張し3条の擬凹線を施す。19は有孔鉢で外面はタタキで下方にナデが加えられる。内面はハケ調整である。底部穿孔は径0.8cmである。20も有孔鉢で孔は2個である。細身の体部の甕21の外面は粗いタタキ調整で底部付近は右上がり、胴部中ほどは一部が横位となり、上半は再び右上がりとなる。内面下方はナデ、上方はハケ調整で、境目に接合痕が残る。甕22の口縁は短く外反する。甕23は口縁部に3条の擬凹線が巡る。24は擬朝鮮系無紋土器と考えられ、色調は暗灰色を呈する。口縁部はわずかに折り曲げられユビオサエと爪形が顕著に残る。25は甕の底部で外面はタタキ、内面はケズリ調整である。26は器台口縁で端部は下方に拡張し面をつくり波状文と2個1対の円形浮文を貼り付ける。端部上面に波状文を巡らす。27は有稜高坏で口縁部は屈曲して立ち上がり、口縁端面は幅を持つ。28は大型の直口鉢と考えられる。色調は赤褐色を呈する。端部は2条の凹線と円形の刺突文で飾る。内面はミガキ調整である。29は30と同一個体と考えられる大型の鉢である。「く」の字状に外反し肥厚する口縁端面には2条の凹線が施される。30の底面に靱痕と思われる圧痕がある。

第20図はその他建物出土の土器である。31はSB105出土の鉢で脚付きと考えられる。ほぼ水平に折れる口縁部に2条の擬凹線が施される。32～34はSB106出土の土器で広口壺32は床面から横位で出土した。口縁端部に下部を肥厚させた際のユビオサエの痕跡が残る。頸部に貼り付け突帯と6条ほどの櫛描き沈線文、波状文を巡らす。外面ミガキ調整、内面はハケ後、ナデ調整である。33は甕の底部で穿孔がある。34は32の中に落ち込み出土した別個体の壺の底部である。35はSB107出土の壺あるいは鉢の底部、36～38はSB108出土の土器である。SB108の壁溝からは破片ながら土器の出土は多かったが図化可能なものは少なかった。38は蓋で、ほかは壺の底部と考えられる。39・40はSB111出土の土器で、ともに灰白色を呈し胎土は精良である。器壁も薄く丁寧に仕上げられた土器である。41はSB106の下位で出土した高坏で坏部と口縁部の高さはほぼ同じである。口縁部の外反度が増している。42はSX104に切られる土坑SK105から出土の甕で頸部下の刺突文は下部が筋状に長く縦線になる箇所がある。

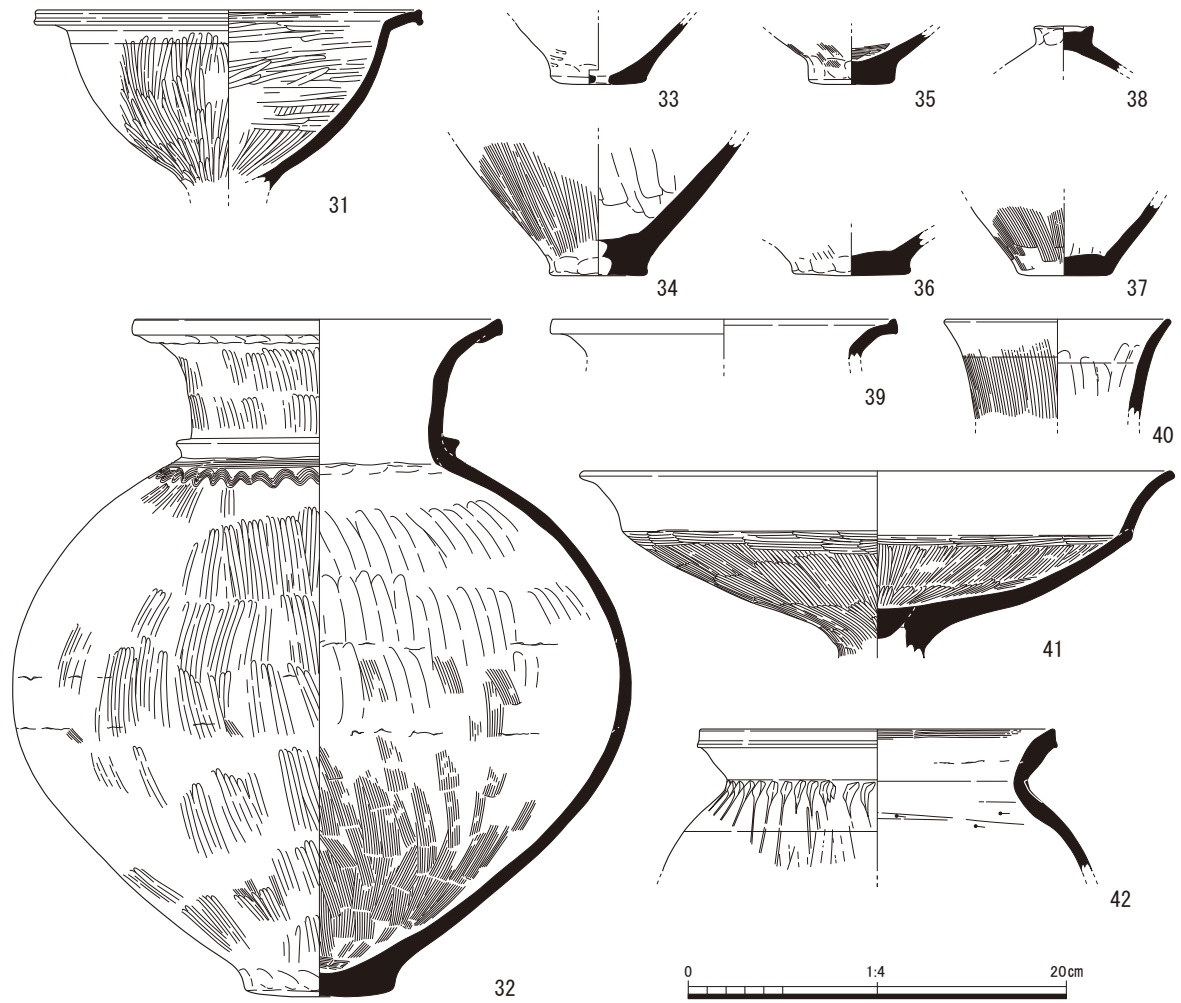
第21図はSX103及び周辺出土土器である。43・44は試掘調査時に出土した器台である。43は口縁端部を下方に拡張し端面に波状文、径1.3cmの竹管文を均等に配する。全体にミガキを丁寧に施す。脚部円孔は4孔である。44の柱状部には円孔が密に穿たれる。45は擬凹線を施した壺の口縁部、46は逆円錐形の小型の鉢、47は小型の坏でミニチュアと称してよいであろう。48～53は壺または甕の底部でSB108同様、底部片の出土が目立つ。体部の出土はほぼ認められない。54の高坏の接合部は粘土板を充填する。55はやや大型の脚端部である。2条の沈線を施す。56は口縁端部が肥厚した甕で稜は緩い。外面にタタキ痕が残る。



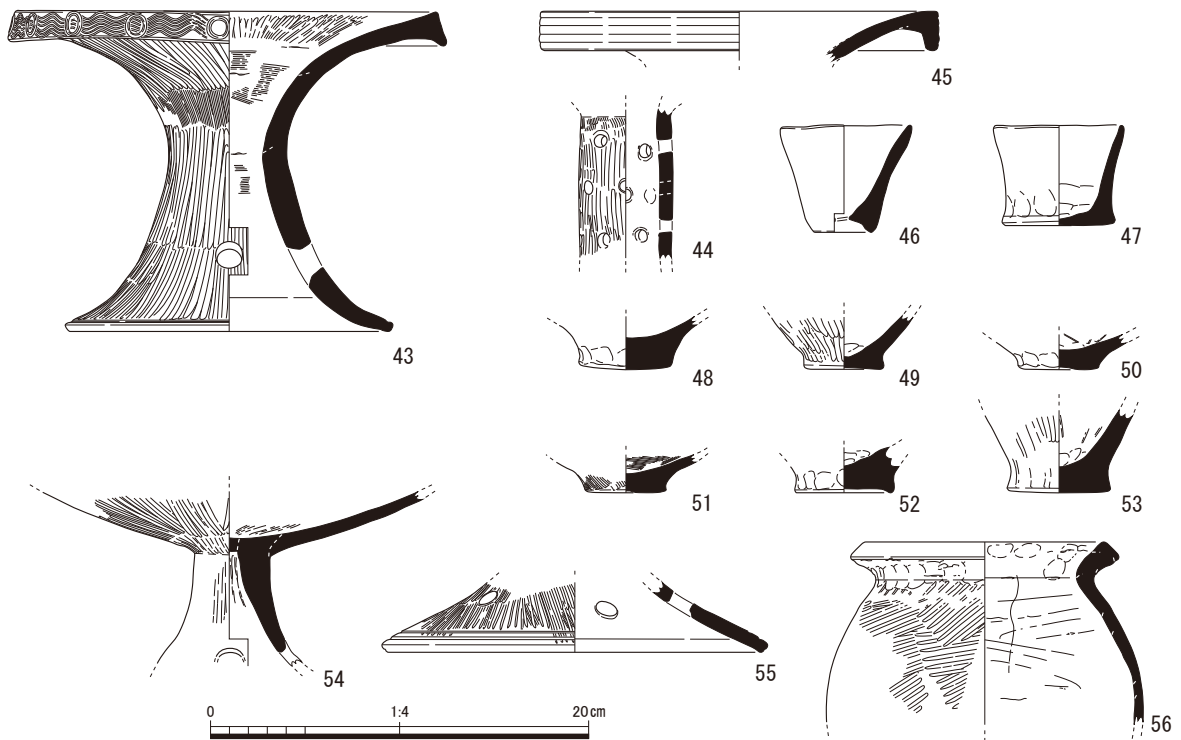
第18図 SB101・SB102 出土土器実測図



第 19 図 SB103・SB104 及び周辺出土土器実測図



第 20 図 SB105・SB106・SB107・SB108・SB111 出土土器実測図



第 21 図 SX103 及び周辺出土土器実測図

3. 2～4区（調査地西半）の調査

調査地西半に位置する丘陵尾根上と南向き谷部斜面及び北西方向の大池側に伸びる支尾根上で遺構・遺物を検出した。この地区は1区の西端から馬の背状に伸びていた尾根筋が再び幅広となる部分である。調査の工程上、調査区を3分割した。南向きの谷部斜面に形成された小浸食谷の東側を2区、西側の谷部斜面東半と上位の丘陵斜面、頂部尾根上を3区とし、4区は3区から続く谷部斜面の西半とその上位の主尾根上及び北西支尾根を含む範囲である。2区と3区の間の小浸食谷の形成時期については不明である。

丘陵尾根上で竪穴建物を検出し、斜面部で段状遺構となった竪穴建物を検出した。南向きの谷部斜面には等高線に沿って大規模な溝（壕状遺構）が2条掘削されている。斜面上位の溝SD201は西端4区において尾根を切断した。

2区北側の尾根上は元々鞍部であったと思われるが地形改変が加わり、現状で平坦化が顕著であった。平坦面では1条の腐葉土を埋土とする溝を検出しており、試掘調査時など尾根筋を踏査した際に杣道状になっていた。4区ではこの通路状の平坦部の下層で18世紀代の丹波焼甕が埋められた状況を確認した。その頃に里山利用があったと考えられる。後述する大規模な溝（壕状遺構）SD201に沿うことから溝の痕跡が窪み地形として後世まで残っていた可能性が考えられる。

遺構名は調査の過程で重複を避けるため調査区毎に番号を付して記録作業を行った。

（1）2区の検出遺構と出土遺物

2区の斜面中位で東西に並ぶ2基の段状遺構を検出した。段状遺構を挟んで斜面上位でSD201、斜面下位でSD202の大規模な溝2条を検出した。溝は西側の3・4区へ続く。規模・形態など壕状遺構と称して良いものであるが、調査時の呼称で記す。

2区中央に設けた土層断面の観察から斜面中位の段状遺構と下方の溝SD202については同時期に存在した可能性もあるが、土の流出により詳細は不明である。また同時であれば段状遺構の前面スペースは非常に狭くなる。出土遺物からは溝が後出する可能性が高い。上位のSD201は下位の遺構が埋没し、遺物を含む流土（包含層）が堆積した後、新たに掘削された溝と判断される。この状況は西側に続き、3・4区の境に設けた土層断面の観察からSD201に関しては斜面下位で検出した遺構や、谷が埋没した後に掘削された同様の堆積状況を確認した。

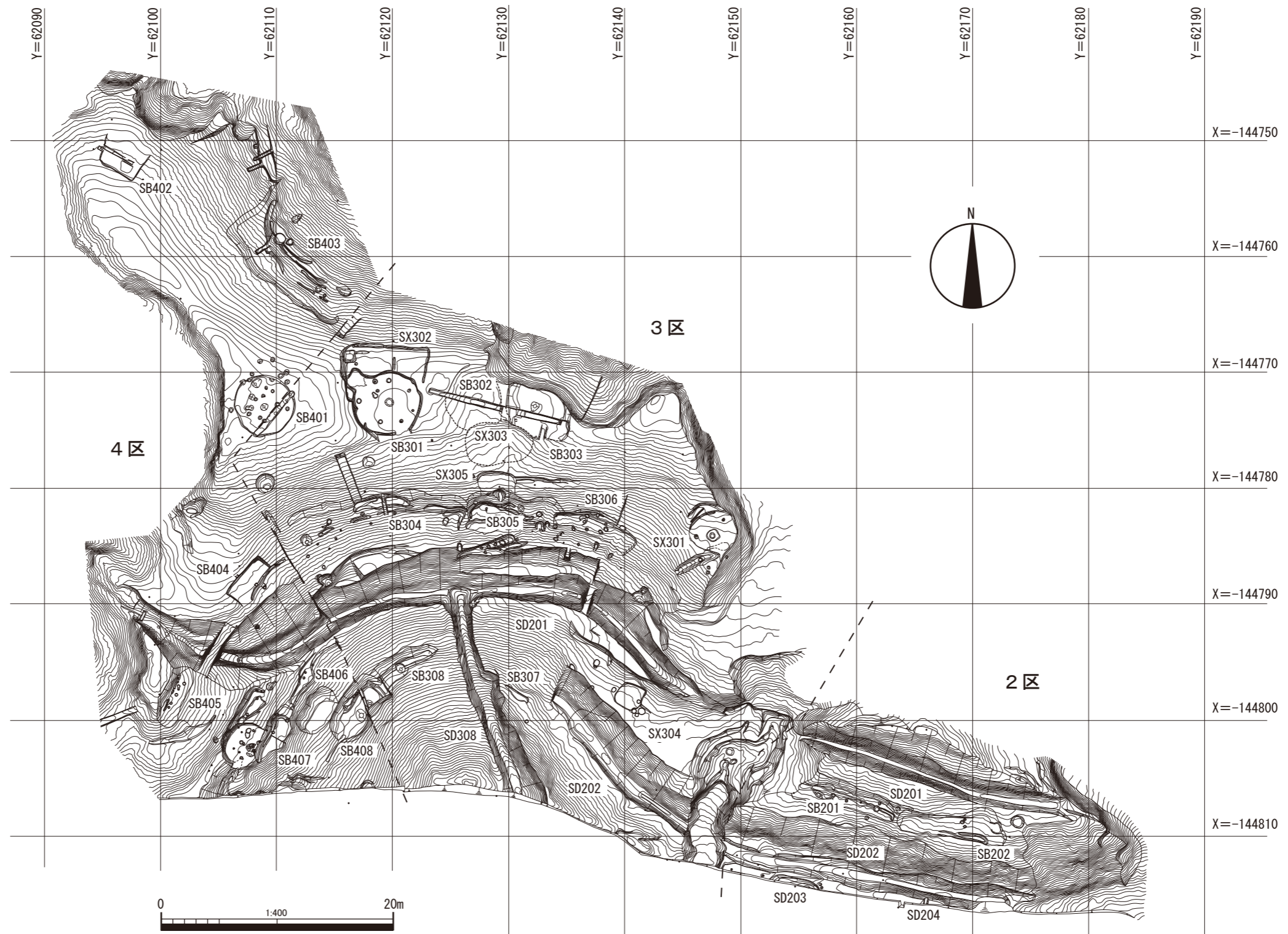
溝（壕状遺構）については調査区を跨いで検出したためまとめて後述する。

①段状遺構

流土堆積を掘削する過程では明確でなかったが、2基の段状遺構が並列することが判明した。わずかに接する部分での遺構埋土の切り合い関係と、地山面での肩部の検出状況から、東側のSB202が西側SB201を切り込むものと判断した。

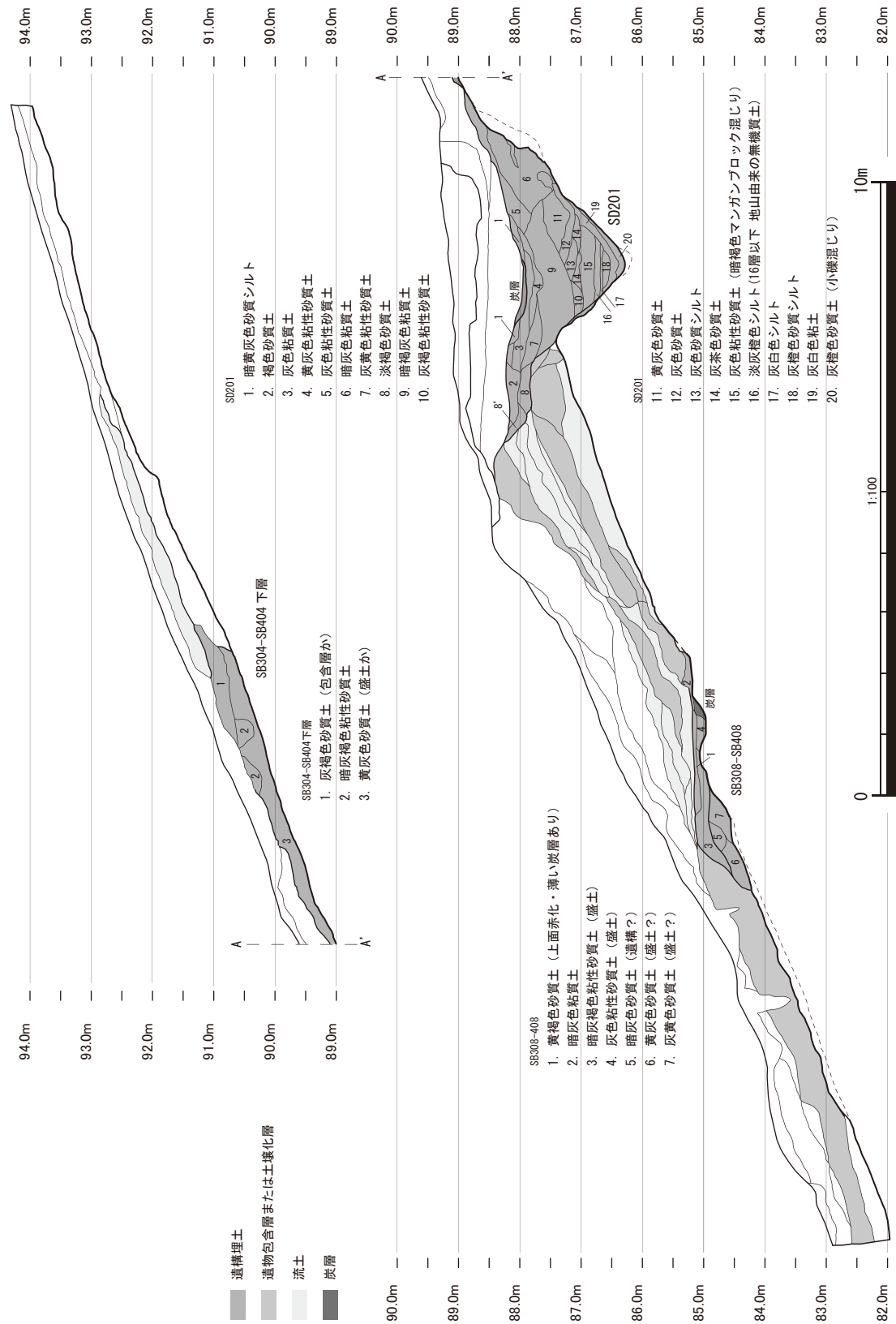
SB201

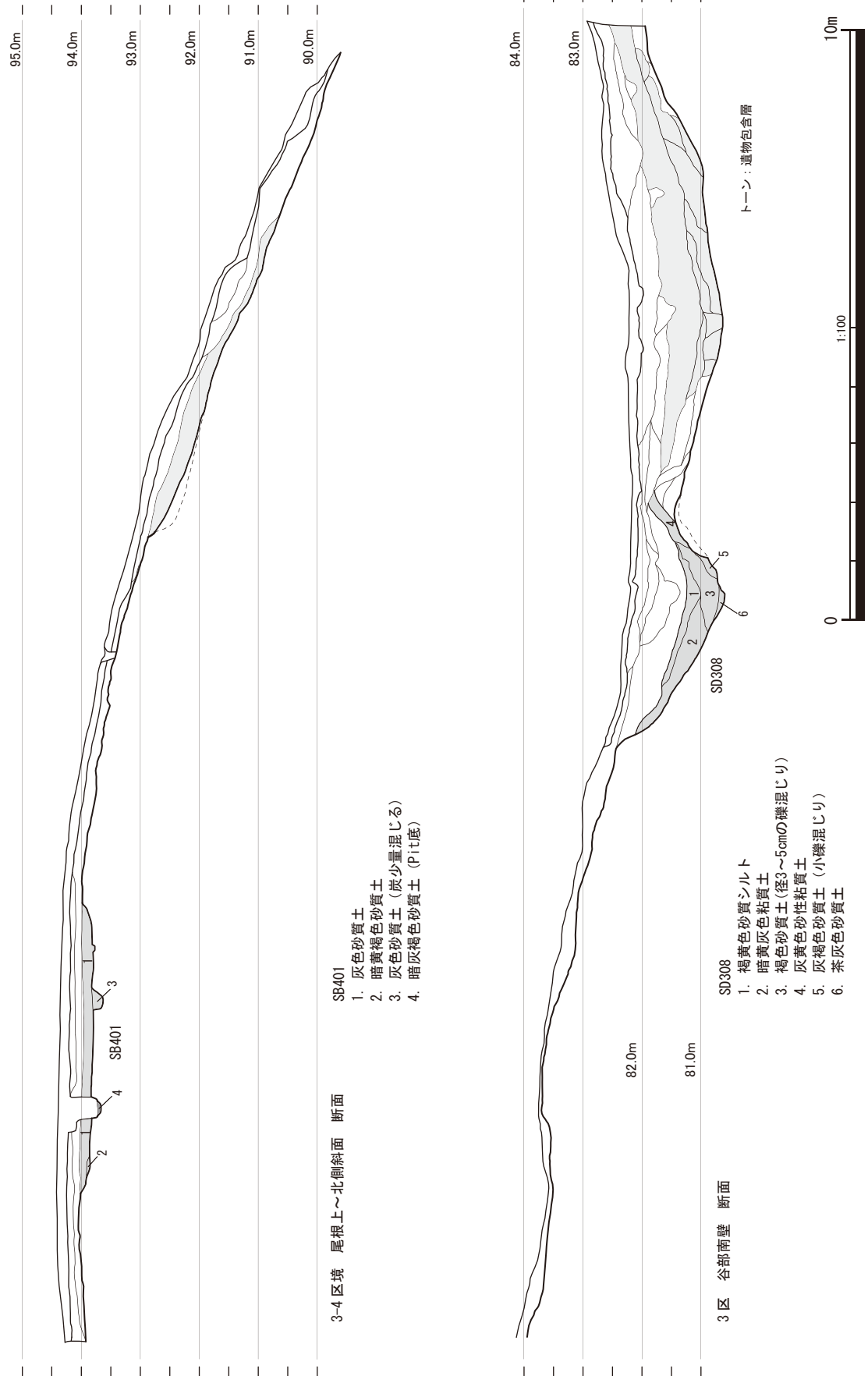
東西10.0m、南北2.5m、西側は小浸谷に伴う崩落により失われているものと思われる。壁高は最大0.7mを測る。床面で幅0.3mの溝と、この溝に切られる落ち込みSK201を西端で検出した。溝は東端がわずかに折れる。SK201は東西1.7m、南北1.2mの平面隅丸長方形を呈し、深さは0.2mであった。下層に堆積する黄白色砂質土は堅緻で、上面で微細な遺物の混入は認められたが、埋土であるか疑問が残る。ピットは大小8基を検出し、1基は溝で区画された段の外側で検出した。径0.15mの杭状の小規模なもの、径0.4m、深さ0.2mの柱穴状のものがある。落ち込みや溝から小片の土器が出土したが、少量である。



第22图 2~4区平面图

第23図 3-4区境 土層断面図【谷部斜面】





第24図 3-4区境 土層断面図【北西支尾根部及び南谷部】

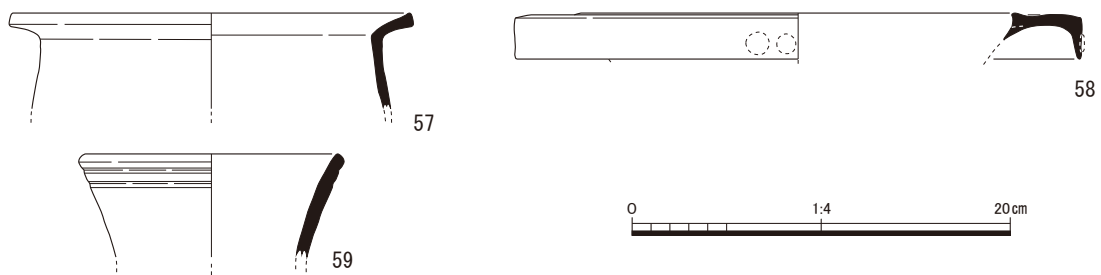


第25図 2区平面図

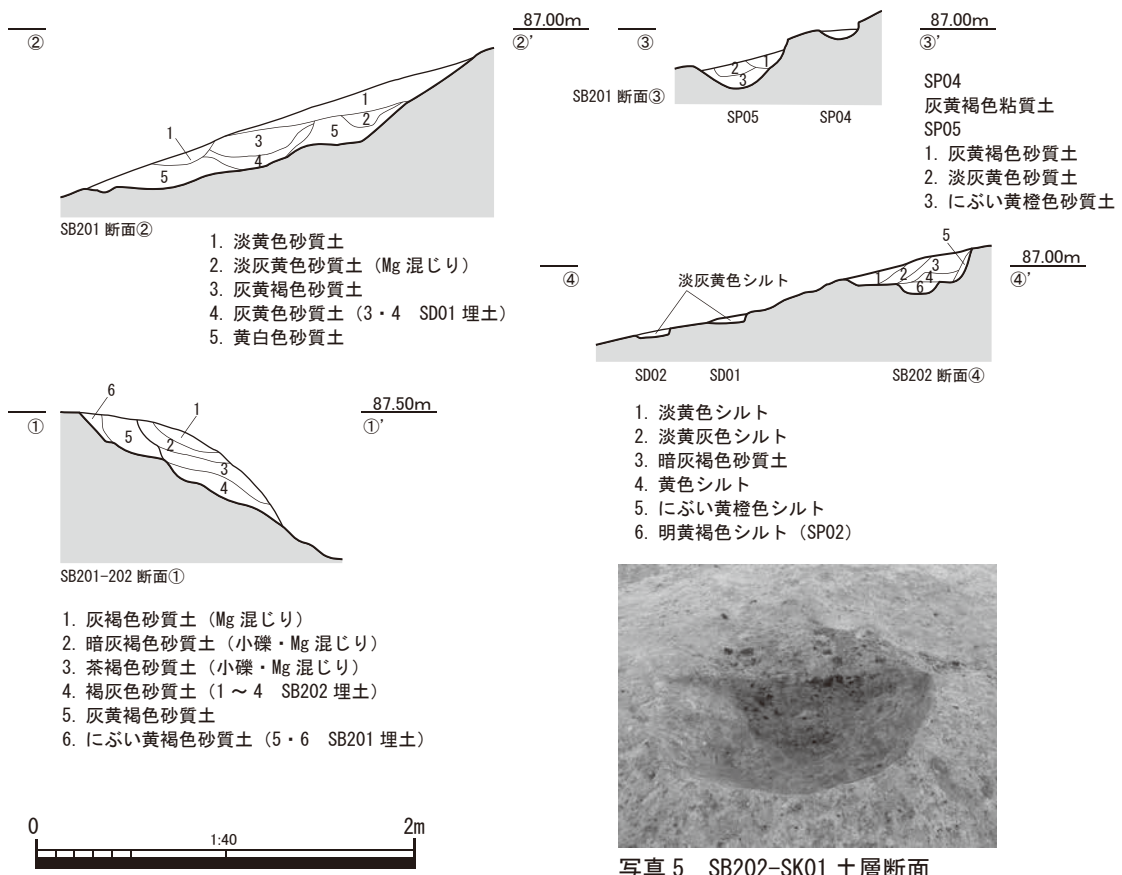
SB202

SB202 は東西 9.5 m、南北 2.0 m、壁高は最大で 0.5 m である。北東部の肩部がやや膨らむ。床面で溝 2 条とピット 3 基、径 0.5 m、深さ 0.2 m の炭を埋土とする土坑 SK01 を検出した。床面ではわずかであるが炭や焼土の分布が認められる。溝は東側で重複するが埋土が同質のため切り合い関係は明確でない。建物の壁からは離れており間仕切りなど区画溝の可能性もある。建物の東辺と想定するわずかな壁立ちの東側で径 1.3 m、最大深 0.3 m の土坑を検出したが、遺物の出土はなく関連する遺構が明らかでない。

出土遺物は少ないが、SB201 埋土出土の土器を第 26 図に図示した。57 は甕で口縁端部を外側にわずかに拡張させるが装飾などは認められない。58 は水平口縁の高坏で端部を垂下させ、円形浮文が貼られたようである。口縁突帯は低く内傾する。59 は長頸壺の口縁部と考えられる。2 条の凹線を施すようであるが、摩耗がひどく、調整痕なども不明である。



第 26 図 SB201 出土土器実測図



第 27 図 SB201・SB202 断面図 【写真 5 SB202-SK01 土層断面】

(2) 3・4区の検出遺構

丘陵尾根上で竪穴建物を検出し、南側谷部斜面で段状遺構を検出した。谷部では2区から続く溝を検出した。4区の大池側に支尾根が伸びており、尾根上で竪穴建物と北側斜面で段状遺構1基を検出した。

①竪穴建物

3区の丘陵主尾根上と4区の北西方向に伸びる支尾根上で計5基の竪穴建物を検出した。調査区毎に遺構名を付した。

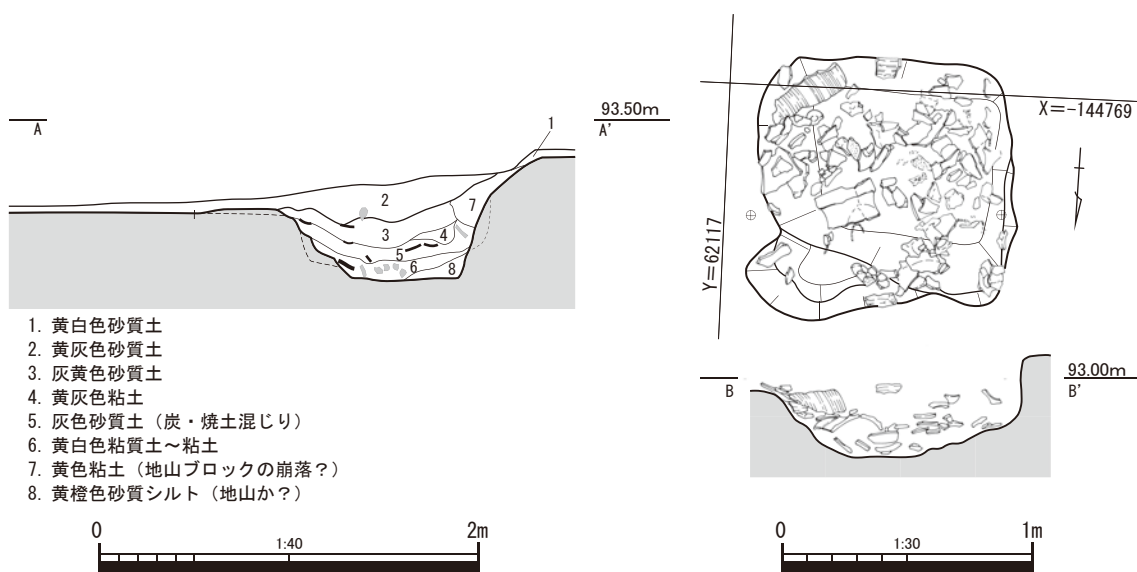
SB301

径6.0mの平面円形の部分の北西部に一边1.6mほどの方形の張り出し部が附属する。建物西側の壁が良好に遺存しており、壁高0.5mを測る。中央で径0.7m、深さ0.2mの中央土坑を検出した。周囲でピットを7基検出し、そのうち深さはないが、埋土が暗灰褐色粘質土で礫を含むものなど5基(SP01・03・04・06・07)が支柱穴と考えている。床面では北側の壁際から張り出し部、南側の一部で壁溝を検出しているが、全周はしないようである。出土遺物は埋土中と壁溝、ピットから出土したが小片のものがほとんどである。

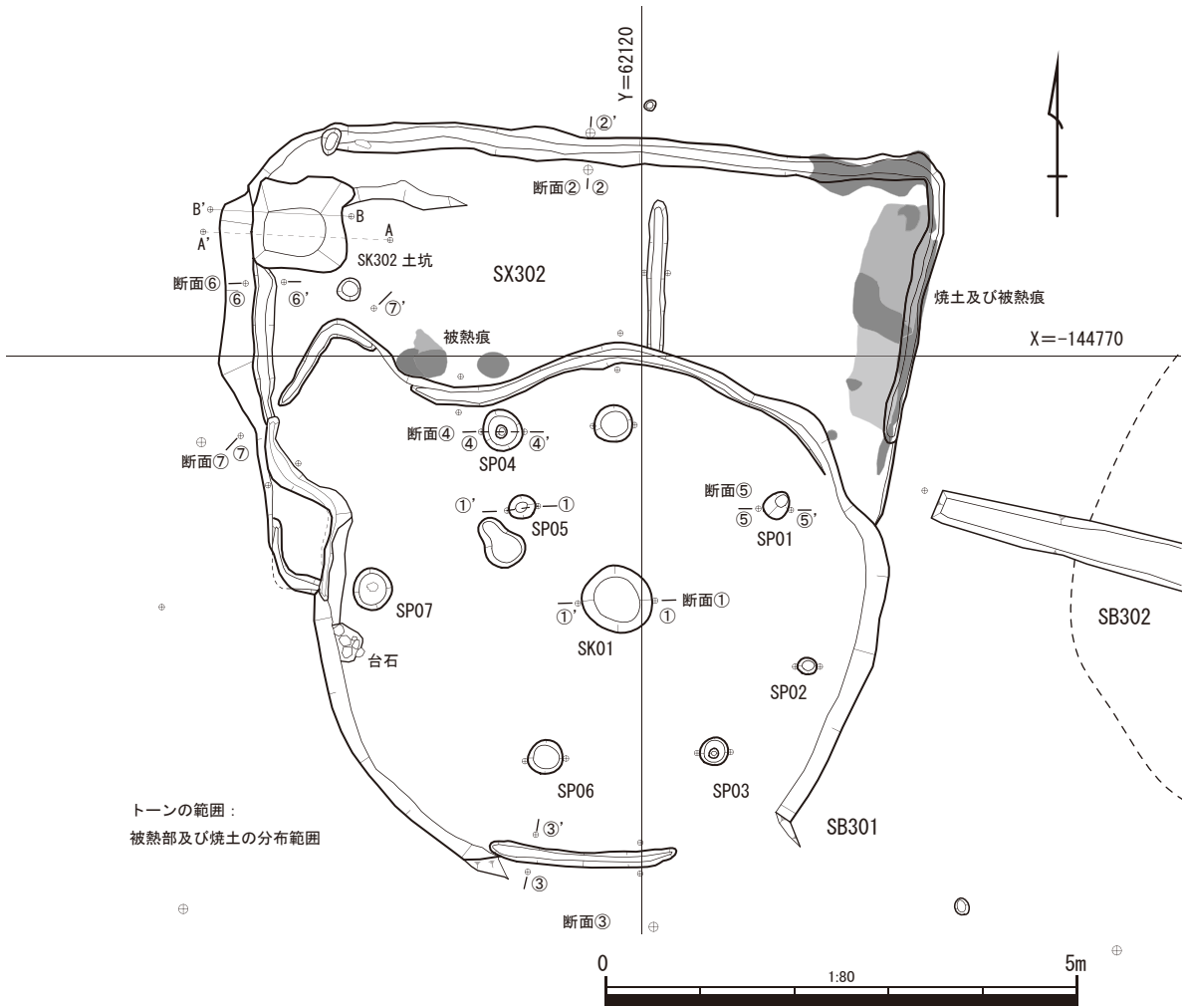
また西側の壁際で拳大の凝灰質砂岩の集積を検出した。形状が類似することから検討した結果、元は1つの台石であったと思われる。割れた拳大サイズの同様の凝灰質砂岩はSB303検出の中央土坑からも出土している。破損品を再利用したものと考えられる。

SX302

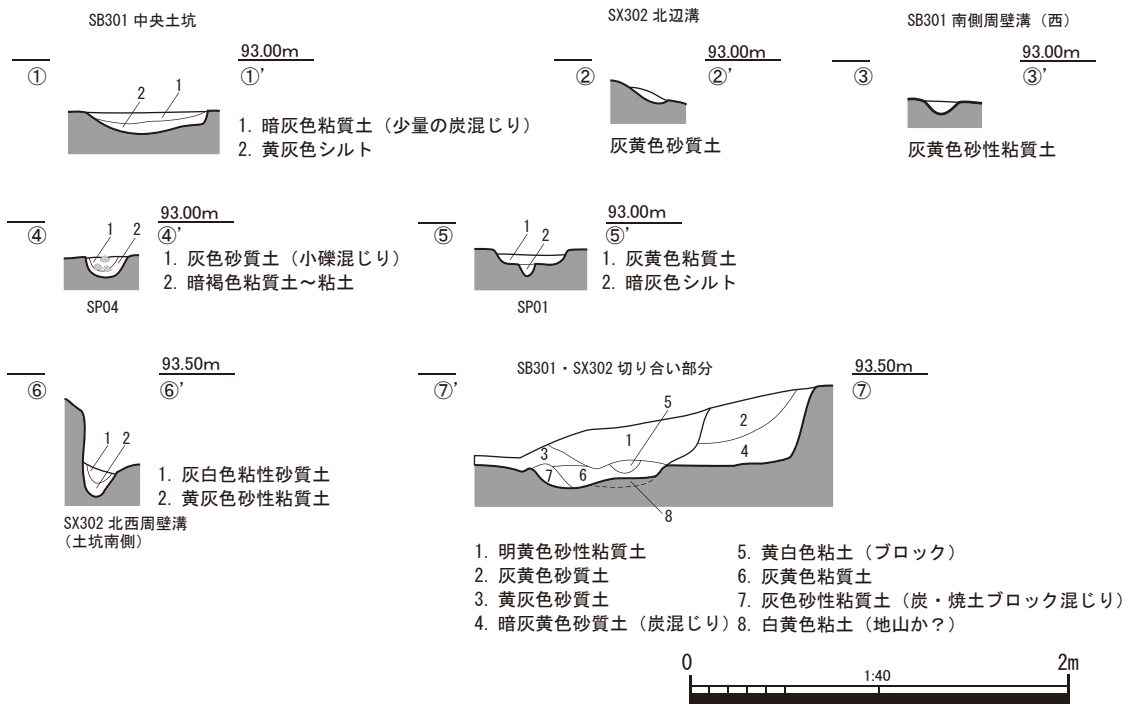
SB301の北側で東西7.4m、南北5.0mの平面長方形の区画を検出した。SX302と称する。周囲に溝が巡り、東辺から北辺にかけての溝の埋土と床面上に焼土が多く堆積する。北西隅に一边1.0m、深さ0.4mの平面方形の土坑を設けており、投棄された土器がまとまって出土した。一部の土器には二次的な被熱による変形が認められる。SB301の張り出し部に接する箇所床面で径0.3mの被熱痕を2箇所検出した。北西の土坑と床面の南東部で土器が出土したほか、北側斜面に堆積する厚さ0.4～0.5mの流土層からも遺物が出土している。SX302から流れ落ちた可能性が考えられる。



第28図 SX302土坑断面図及び遺物出土状況図



トーンの範囲：
被熱部及び焼土の分布範囲



第 29 図 SB301・SX302 平・断面図

SB301の張り出し部分とSX302が重なる箇所の土層断面ではSB301がSX302を切り込む様子が窺える。当初は円形建物SB301に付帯する作業スペース＝SX302の可能性を想定していたが、SB301からの土器の出土は少なく比較は難しいが、SX302の土坑より出土した土器は明らかに古相を示すものであり、SX302→SB301の順に構築された別遺構と考えられる。

SX301

SX301は3区の北東端、丘陵斜面上部で検出した遺構である。検出面の標高は89.0 mである。流土を除去した段階で南北5.0 m、東西4.0 mの平面楕円形の平坦面を検出した。北側の壁高は0.4 mであった。床面には非常に硬く締まった白色粘質土が堆積しており、中央で台石状の平らな石1点が出土し、周囲が赤変、焼土・炭の分布が認められた。柱穴などは検出できず屋外作業スペースなどを想定した。次に床面と考えていた白色粘質土の断ち割りを行ったところ、下層に炭化材が広く分布することが判明した。白色粘質土は非常に硬く締まった土で、これを除去し、径4.0 m弱の平面円形の堅穴建物を検出した。炭化材が出土し、焼失建物の様相を確認した。中央土坑とピット3基、南側のSP03は溝と切り合う。またこの建物の北側の地山面で壁溝2条を検出した。

SX301は3段階の建物の変遷が考えられ、まず北側カット面から地山面まで掘り込んだ当初の堅穴建物の時期であり、2条の壁溝の検出から改修が考えられる。この建物が埋没した後にやや南に位置をずらして建物を構築し、最終的に焼失する。焼失により破棄された後、埋め戻しを行っているが、埋土の白色粘質土は非常に硬く、地山土をブロック状に含みながら、床を固めた状況が想定される。上面は流土を除去した際に水平面を形成した。根拠に乏しいが焼土や炭の分布は下層の焼失建物の影響も考えられるが、床面の硬化状況とやや小振りな台石状の石の出土から作業スペースなどを想定した。ただ焼土や炭層、周辺土壌について水洗・選別作業を行ったが、微細な土器片やサヌカイト片が少量出土したに留まる。

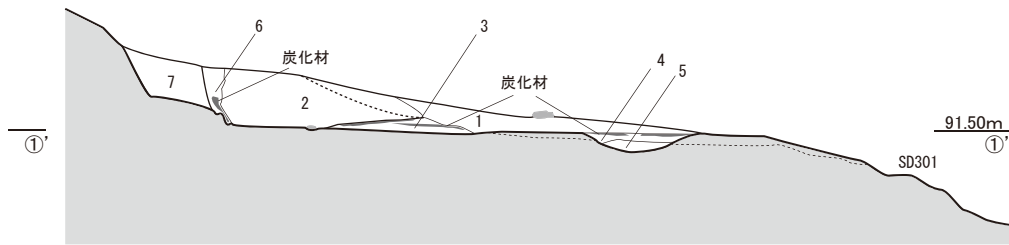
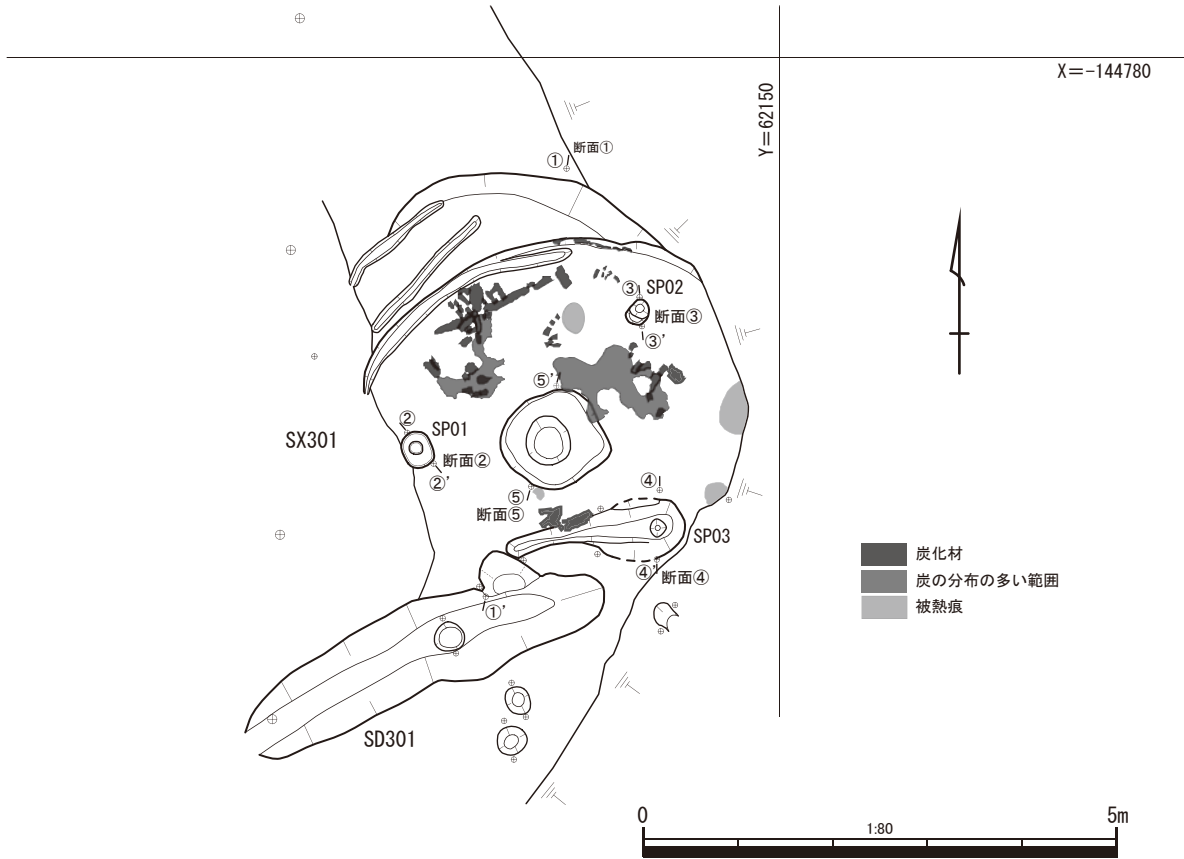


写真6 SX301床面検出状況【左：上層台石・土器の出土状況 右：焼失建物中央土坑検出状況】

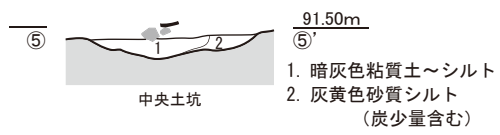
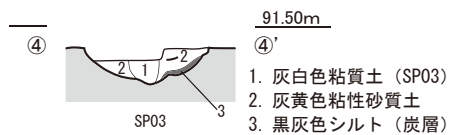
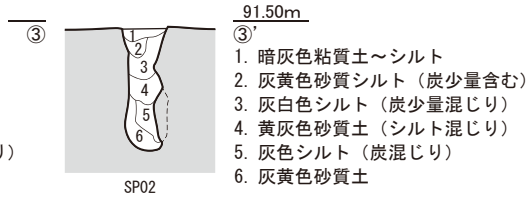
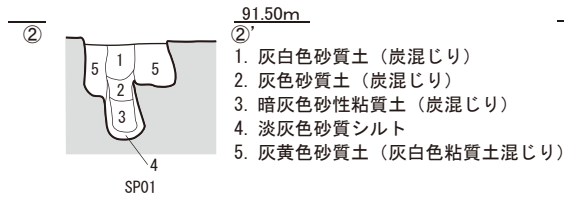
SB302・SB303

SB301の東に連なる部分で3基の平面形が円形、または楕円形の窪みを検出した。付近で遺構面を形成する黄色粘質土はこの部分では堆積が薄く、下層の灰白色シルトが露頭する。

東側のSB303では灰白色シルト面で、埋土に炭を含む長径0.7 m、平面形がやや歪な楕円形を呈する中央土坑を検出して床面が判明した。中央土坑の南西で径0.15 m、深さ0.35 m、埋土に炭を多く含む杭状のピット1基を検出した。周辺から土器片が出土し、南側の床面上に円礫2個が置かれていた。北側を大きく失うが、SB303の検出長は東西6.0 m、南北4.0 mで、壁が直線的な部分もあり、一辺6.0 mほどで、平面隅丸方形を呈する建物の可能性もある。



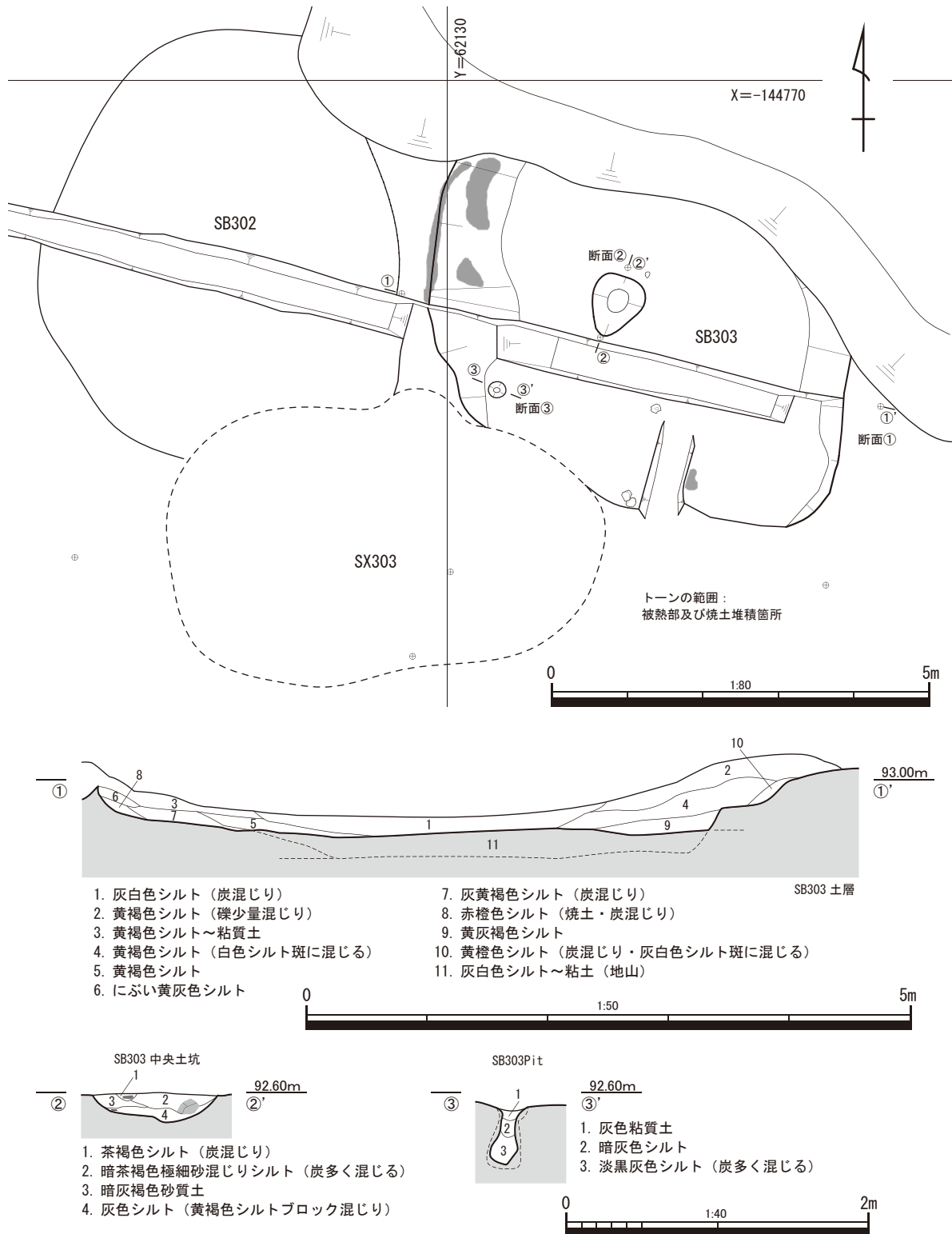
- | | |
|------------------|-----------------------|
| 1. 灰白色砂質土（堅緻） | 5. 灰色砂質シルト～粘土 |
| 2. 黄白色粘質土～粘土（堅緻） | 6. 橙褐色砂質シルト（赤化・炭化材含む） |
| 3. 暗灰色砂質土（炭化材含む） | 7. 灰白色シルト（堅緻） |
| 4. 灰色砂質土（炭化材含む） | |



第 30 図 SX301 平・断面図

SB303 の北西壁際には焼土や炭が帯状に堆積しており、床面での被熱状況が顕著であった。

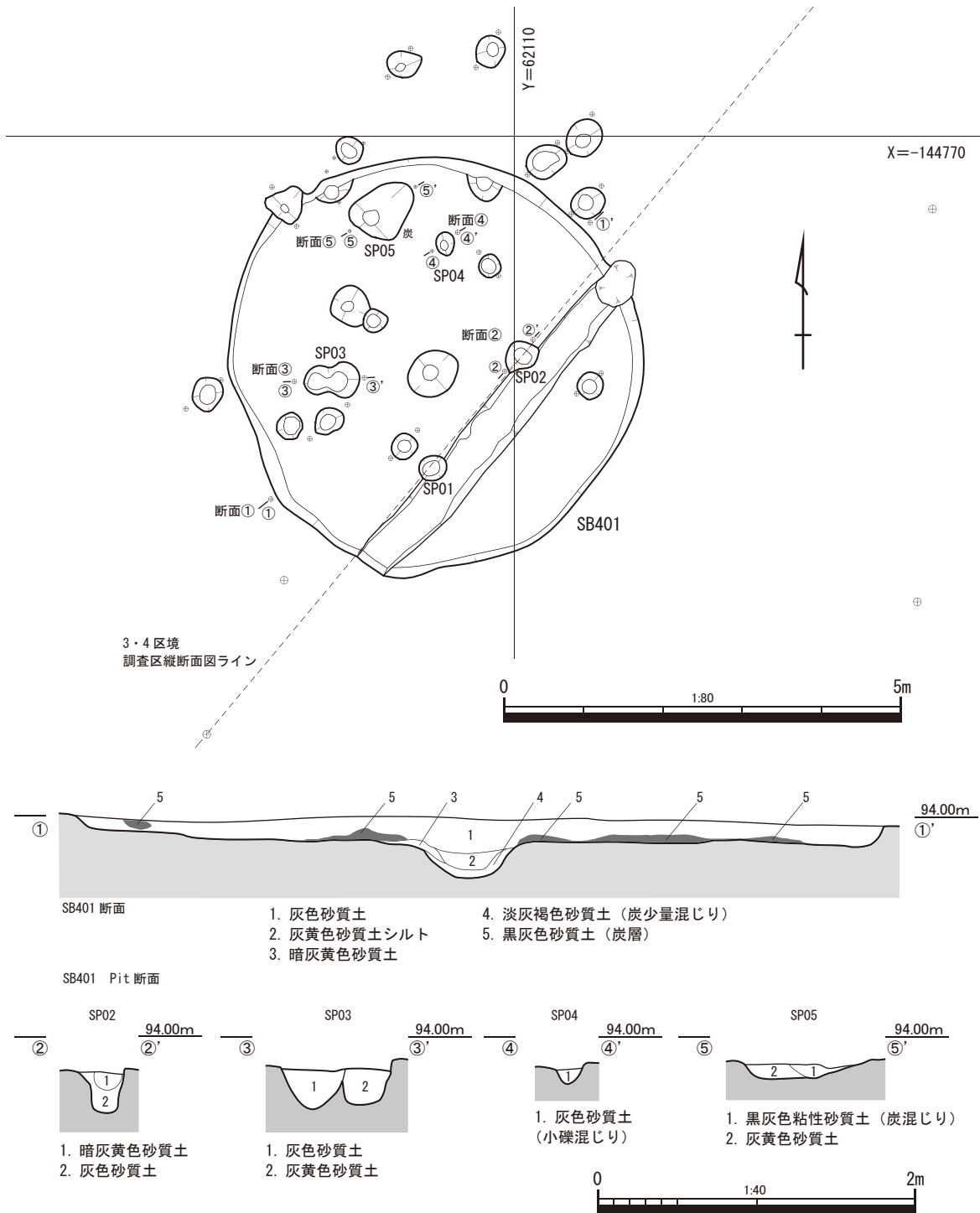
SB302 も検出段階で腐葉土のみが堆積する浅い窪みで、それらを取り除くと平面円形にシルトや粘土が露頭する状況であった。SB303 の床面と同じレベルで精査を行ったが遺構の検出はなく、断ち割りにより下層確認を行ったが床面の存在は確認できなかった。下方の SX303 とした落ち込みも同様の遺構であった可能性があるが、詳細は不明である。



第 31 図 SB302・SB303・SX303 平・断面図

SB401

SB301 西側で検出した建物で付近の最高所の尾根上に立地する。床面標高は 93.0 m である。径 5.2 m の平面円形を呈し、深さ 0.15 m ほどが遺存する。床面で中央土坑を検出し、周囲でピットを多数検出した。中央土坑は長径 0.6 m の平面楕円形で深さ 0.25 m である。埋土に炭は含まないが土坑周辺の床面に炭の広がりが見られる。検出したピットはほとんどが浅いが、中央土坑の南西から北東に位置する 3 本 (SP01 ~ 03) は径 0.25 ~ 0.3 m、深さ 0.25 m で支柱穴と考えられる。周壁溝は検出していない。

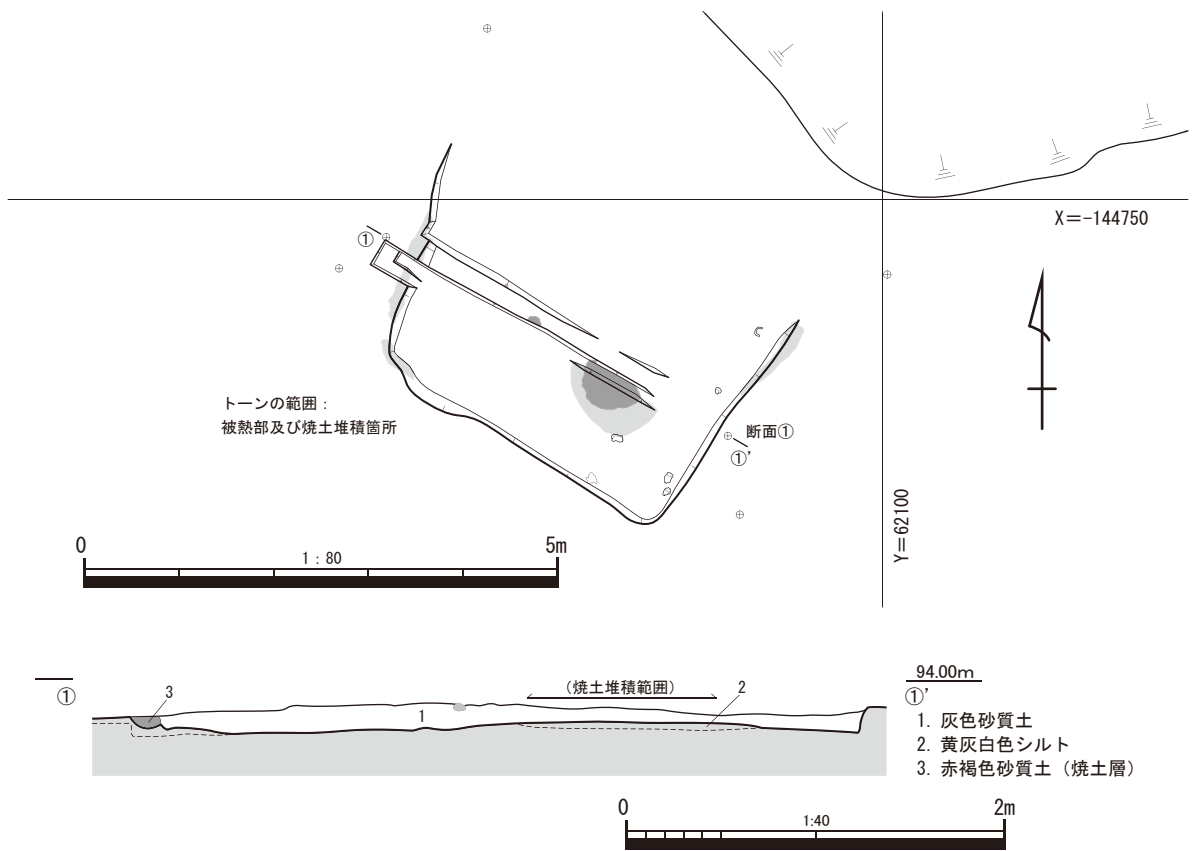


第 32 図 SB401 平・断面図

SB402

支尾根北西端で検出した東西 3.6 m、南北 2.8 m 以上と考えられる小型の竪穴建物である。建物北側の灰白色シルトの地山が露頭する範囲では竹の根の影響も大きく、輪郭が不明瞭である。建物南側は黄色粘質土の地山面で壁は高さ 0.2 m で直立する。建物の西辺に焼土が帯状に堆積するほか、床面南東部でも焼土の広がりを確認した。南東部の焼土の下で径 0.6 m の被熱痕を検出した。西辺の焼土については断面観察より溝状に堆積する可能性がある。床面で土器の検出はあったものの、遺構周辺の土壌の影響からか非常に脆弱であった。

土器や焼土を検出した床面と西辺の焼土を含む溝状堆積ではレベルは溝状部分の方が高く、2 時期の床面の存在した可能性も考えられる。地山面では柱穴など確認していない。



第 33 図 SB402 平・断面図

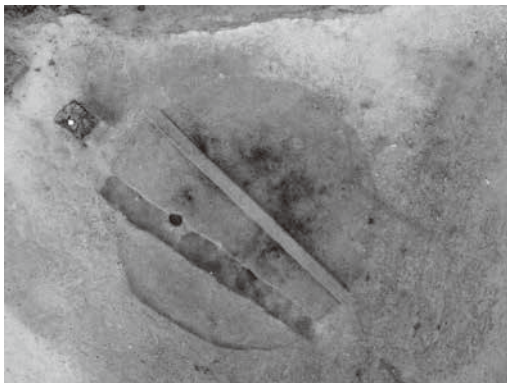


写真 7 SB401 炭の分布状況 (北から)



写真 8 SB402 被熱痕跡検出状況 (東から)

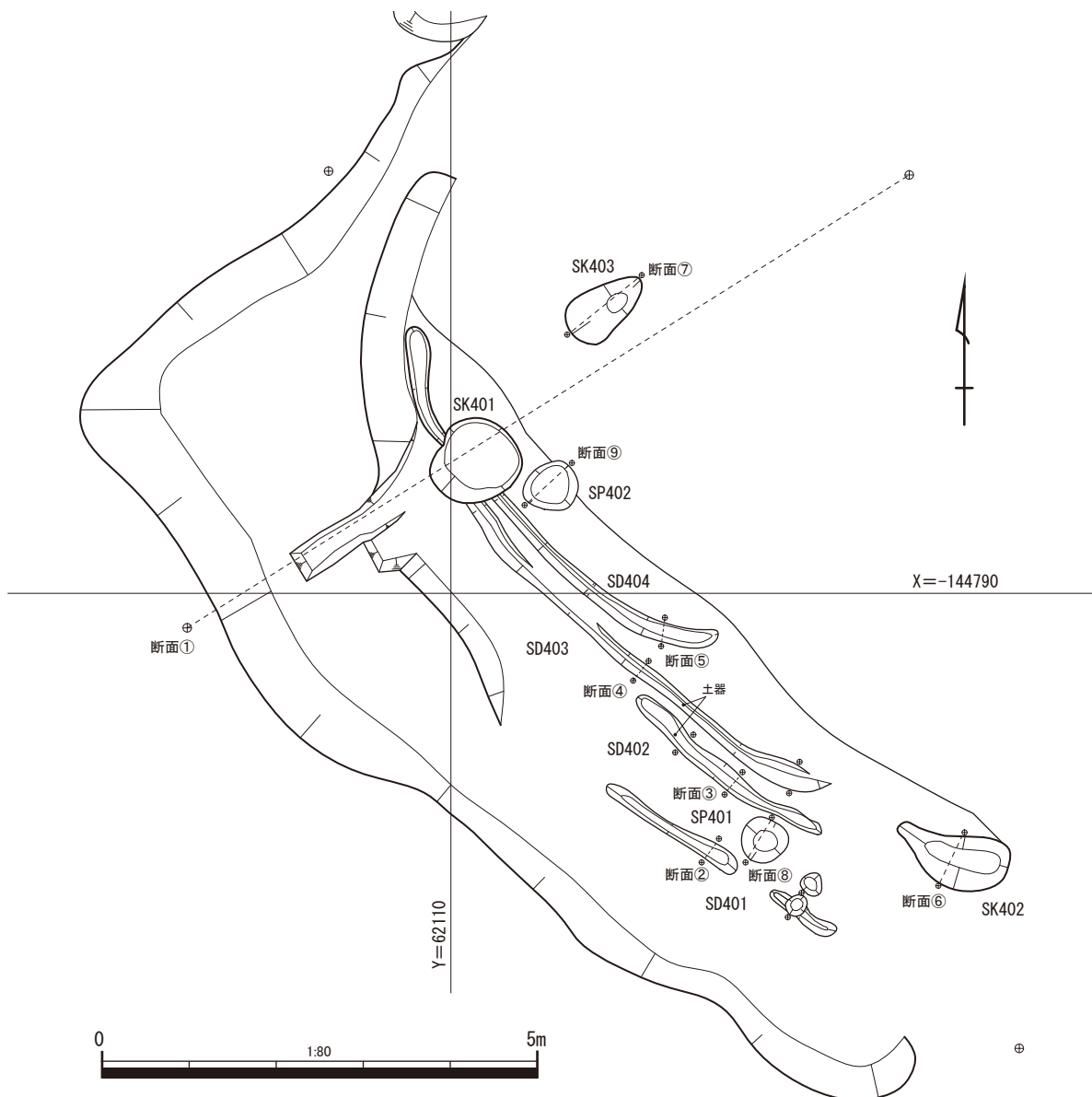
②段状遺構

3・4区の主尾根南側斜面部と北西支尾根北側斜面部で計10基の段状遺構を検出した。

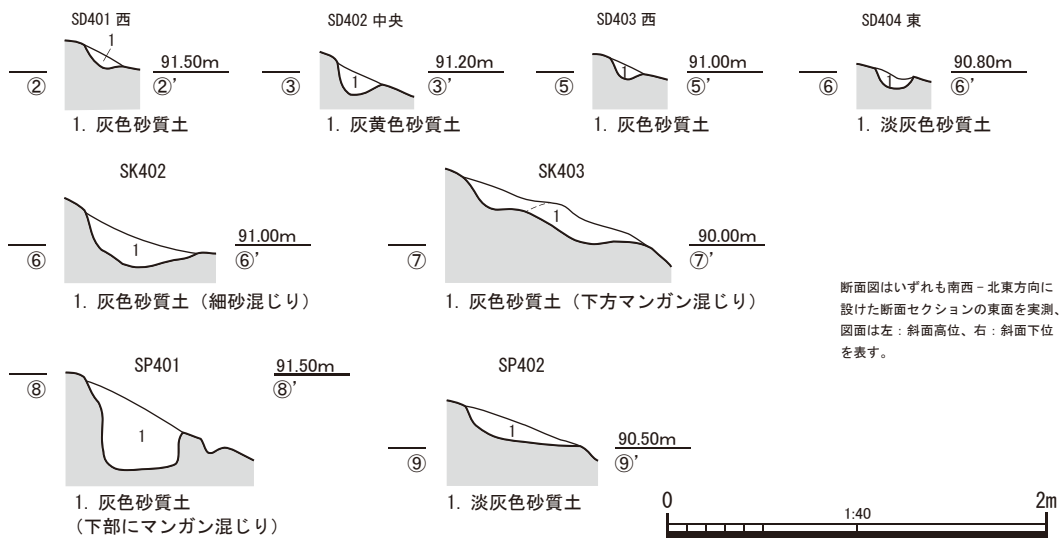
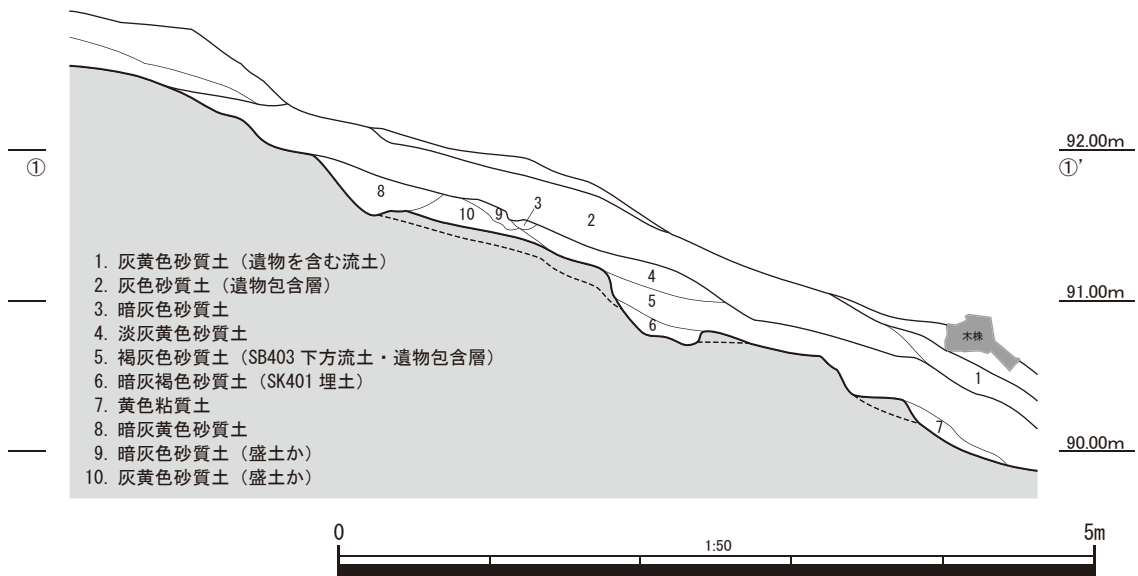
SB403

4区の北西支尾根頂部からやや斜面を下がった位置で検出した。今回の調査では唯一、大池側の斜面部で検出した遺構である。小さな谷状地形に占地する。東西12.0m、南北4.4mで、斜面下方で検出の土坑付近までを含むと南北6.4mほどの規模も考えられる。

等高線に沿って幅0.2～0.3mの溝4条と、ほかに土坑3基、大小ピット4基を検出した。SK401の南側上位の堆積は盛土と考えられ、南西に段が形成される。西寄りのSK401を中心に溝やピット、北側に堆積する流土から土器やサヌカイト片が出土した。4条の溝や土坑を検出した下段の平坦面が床面とした場合、北側で検出した土坑がこの面に伴う遺構と仮定すれば、深さは1.0mを超えるものであるが、流土とした堆積が盛土であった場合には掘削時の遺物の出土状況などからその可能性も想定される。



第34図 SB403 平面図



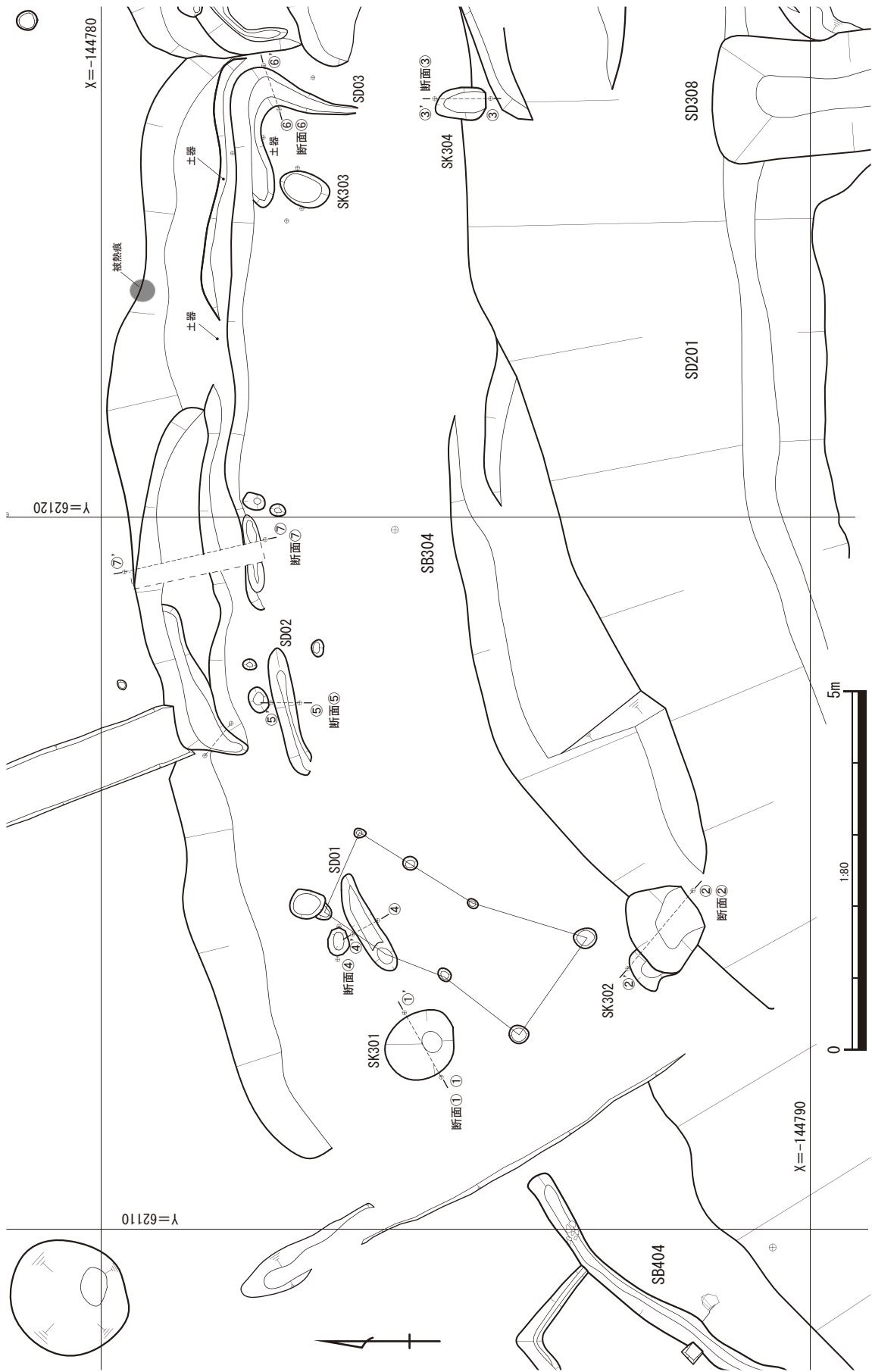
第 35 図 SB403 断面図

SB304

東西 15.2 m、南北 7.2 m ほどの規模を有する。南側斜面下位は白色シルトの地山が露頭し、SD201 の溝（壕状遺構）の検出に伴い状況は不明瞭であった。シルトと上層の黄灰色砂質土との境は周囲に比べ降雨後など湧水が多かった

SK301 ~ 304 の 4 基の土坑の検出は建物、または段状遺構の四隅を示すものと考えられる。西側の SK301・SK302 は径 1.0 m ほどの平面円形、または楕円形の土坑で、SK302 は深さ 1.0 m を測る。遺物の出土はないが薄いマンガンの沈着層が複数あり、上部からの湧水と関連するかもしれない。

東辺の SK303 付近から西側に幅 0.3 m の溝が、途中途切れながら平坦部の端まで続いており、区画や段の境を表すものと考えられる。遺構北辺の中央で東西 5.0 m、南北 1.5 m の小さな段状部を検出したが、現状で平坦な部分は狭い。西壁際に溝が掘られ、土器片の出土や炭・焼土の堆積が認められた。



第 36 图 SB304 平面图

また平坦部の西側3分の1の範囲では、径0.2～0.3m、深さはほとんど残らないが、柱穴の並びを検出しており、1×3間の簡易な掘立柱建物の存在が想定できる。東端のSK303付近には炭が広がり、北側の肩部や斜面上で被熱痕を確認している。

段状遺構の肩部の形状などを加味すると、先に記した中央の段状部、西側の掘立柱建物、東端のSK303周辺がそれぞれ個別の建物であった可能性が考えられる。斜面下位の盛土が失われた状況から詳細は不明であるが、当初は1基の段状遺構と考えていたが、それぞれが個別の建物であったか、想定した段状遺構内に小区画が存在することが想定される。

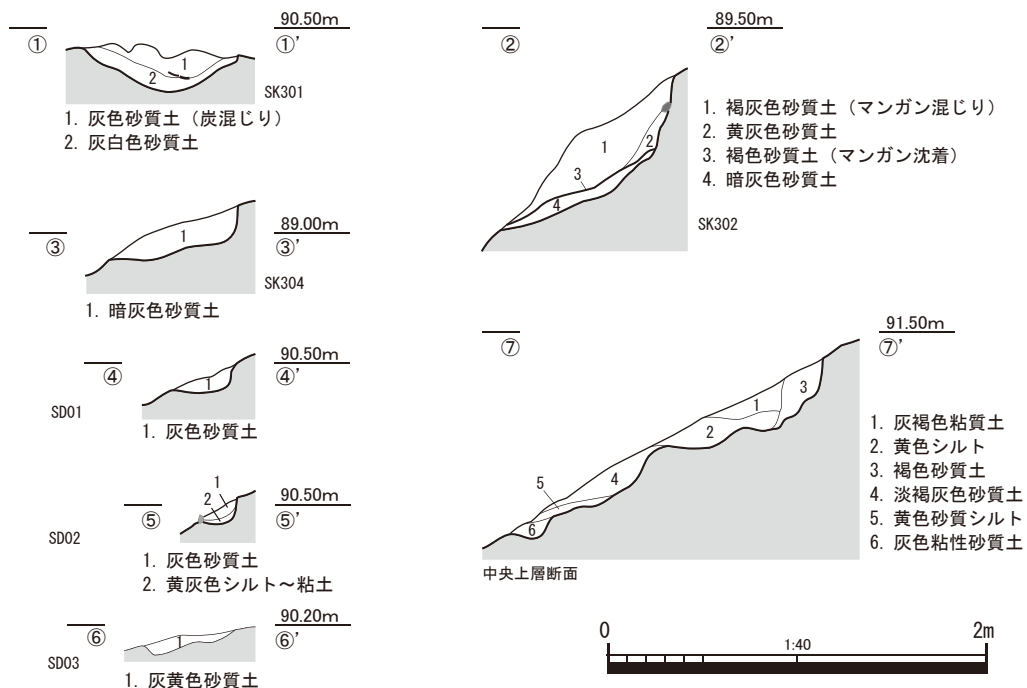
SB305

東西8.4m、南北3.8m規模の段状遺構である。北側の壁高は0.8mである。現状、地山面の形状は大きく上下二段となるが、土層断面の観察から南半の流土とした堆積は盛土の可能性が考えられる。ただし、検出時には流土との区別が困難であった。西半で壁溝を検出したが中ほどで分岐し東半には伸びない。重複する段や区画の存在が想定される。土坑SK305やSP02の埋土には炭や焼土が混じり、ほかに一辺30cmの石を据えた土坑SK306などを検出した。

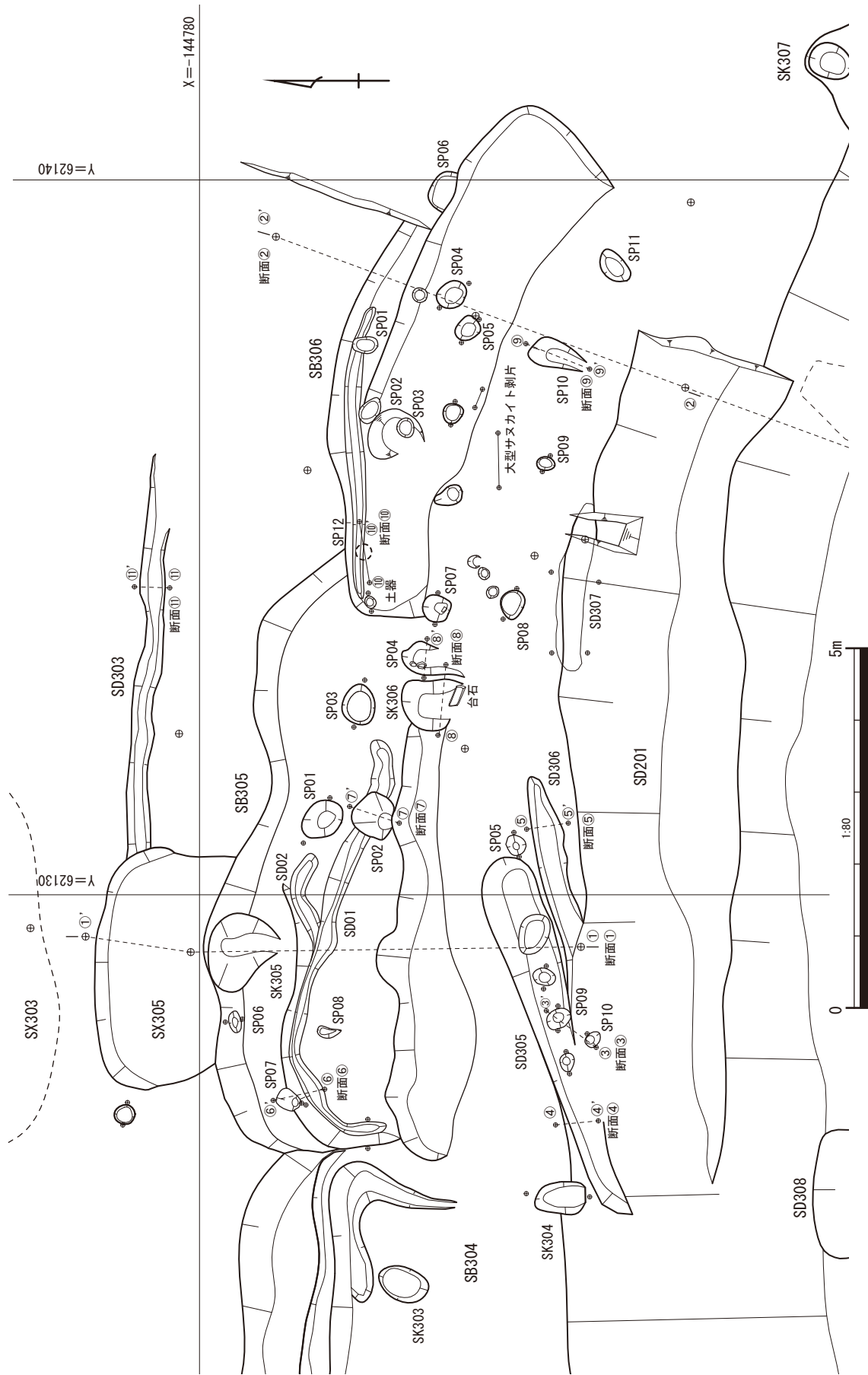
SB306

SB306は東西7.6m、南北4.0mほどに復元できる段状遺構である。北側の輪郭は不明瞭で、検出面から上段床面と考えられる平坦面まで0.6mの高低差がある。SB305と同様、土層断面の観察から南側に盛土があった可能性が高い。地山と盛土堆積との境付近で破碎された状況で壺が出土した。伏せて置かれた状況も想定される。盛土層中、また地山面において大型サヌカイト素材剥片が出土した。周囲で掘形などは確認しておらず、出土状況から盛土層への混入や下段地山面に投棄されたものと考えられる。

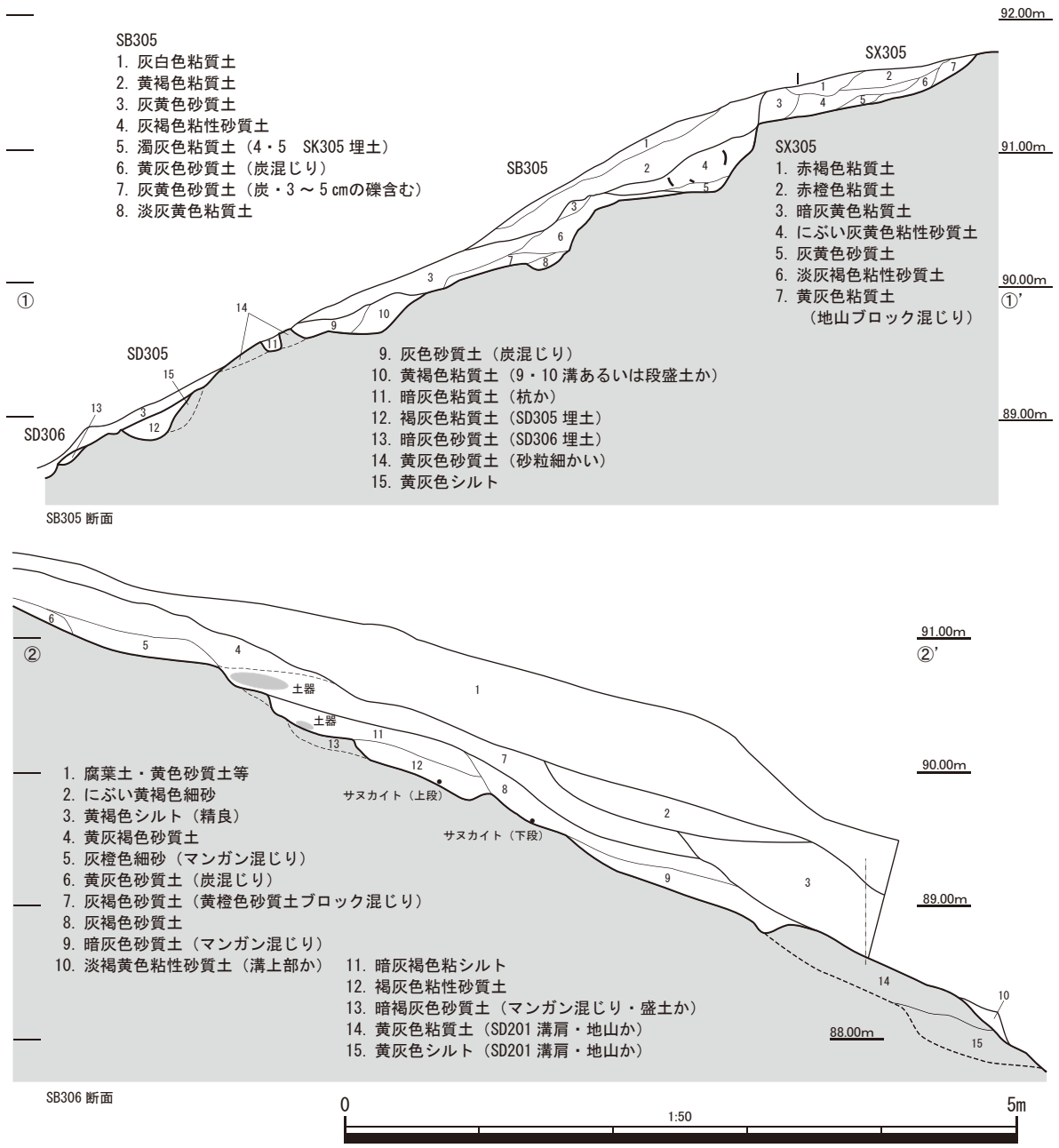
上段北壁際で幅0.3mの周壁溝を検出したが西半に留まる。下方でピットを10基ほど検出し、最下段で検出した4基は等間隔に並ぶ。



第 37 図 SB304 断面図



第 38 図 SB305・SB306 平面図

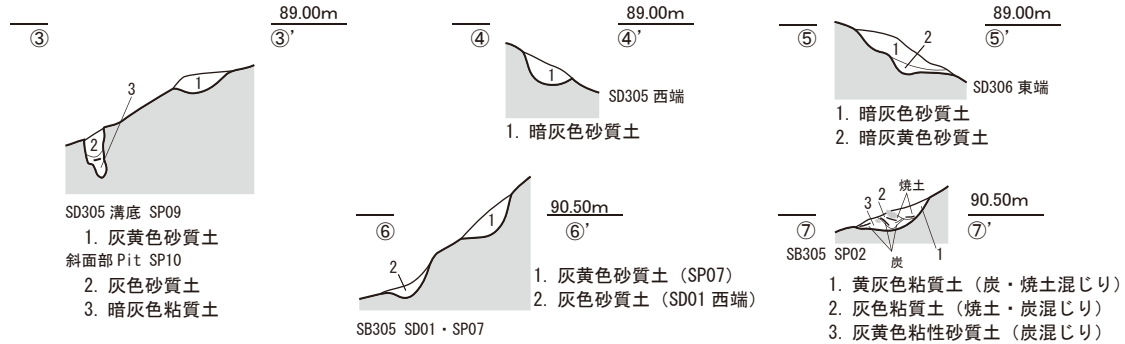


第 39 図 SB305・SB306 断面図 (1)

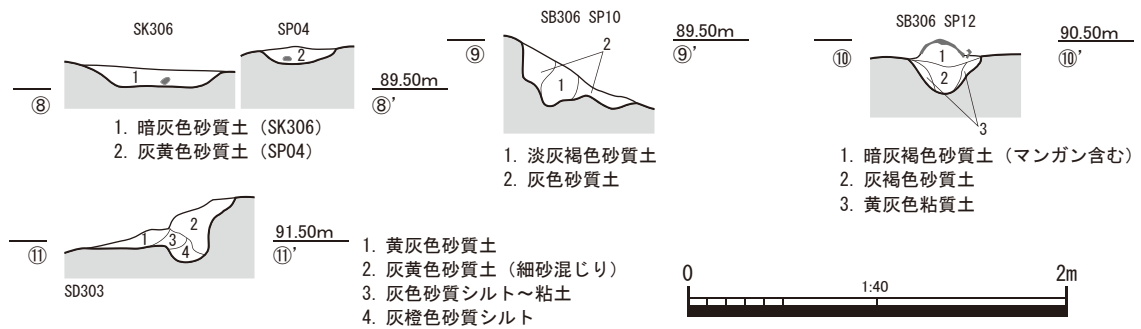
写真 9 SB305 土層断面 (南東から)



SB305 遺構断面図



SB306 遺構断面図・SD303 断面図



第 40 図 SB305・SB306 断面図 (2)



SB307・SB308

SB307 は谷部斜面中央の中位で検出した。わずかな段と浅い溝で区画された東西 3.0 m、南北 1.0 m が残存する。詳細は不明であるが、形状から建物とした。

SB308 は調査区設定の 3・4 区の境、谷部斜面中位で検出した段状遺構である。西側 4 区で続きを検出した。西側については SB408 と称する。後述する。

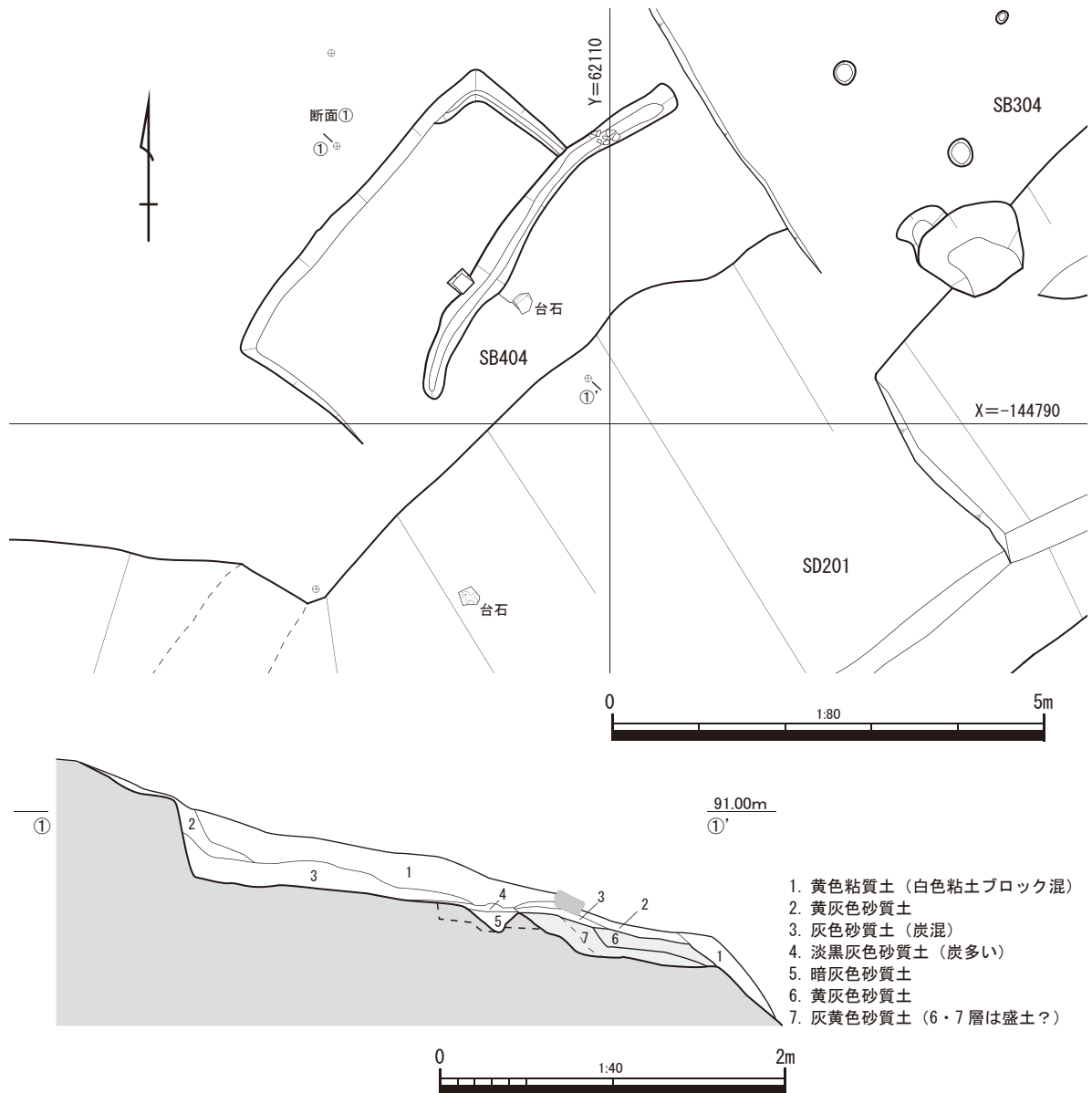
SB304～306 は南向き谷部の斜面上位に並列して築かれた段状遺構であり、調査時より各遺構の形状の把握とともに、重複関係などを検討してきたが、斜面下位の盛土、流土の判別は難しく、地山面での検出状況、遺構の肩部の重複形状や、出土遺物から SB304→SB305→SB306 の順に構築されたと考えられるものの、明確ではない。SB304 は規模より、調査時には通常の建物とは異なる性格の遺構を想定していたが、3 区画に細分可能かと想定するに至る。

次に4区南向きの谷部斜面西寄りで検出した段状遺構は南北方向に長い建物であり、建物の規模を表す東西方向の数値については東側の斜面下位が流出した残存長である。

SB404

東から続く主尾根と北西支尾根が派生する部分の主尾根上位で検出した。規模は南北4.3 m、東西2.0 mである。西辺、南辺の壁は直立し高さ0.4 mを測る。北壁際で溝を検出し土器が出土した。建物の東側の床面で一段掘り窪めた様子を確認した。切り合う別遺構の存在が考えられるが、この段に伴う溝は東側のSB304で検出した溝と検出レベル、規模が同じであり、同様の段状遺構が形成されていたか、段状遺構の盛土境界を表す可能性がある。残念ながら掘削時においては明確にできなかった。

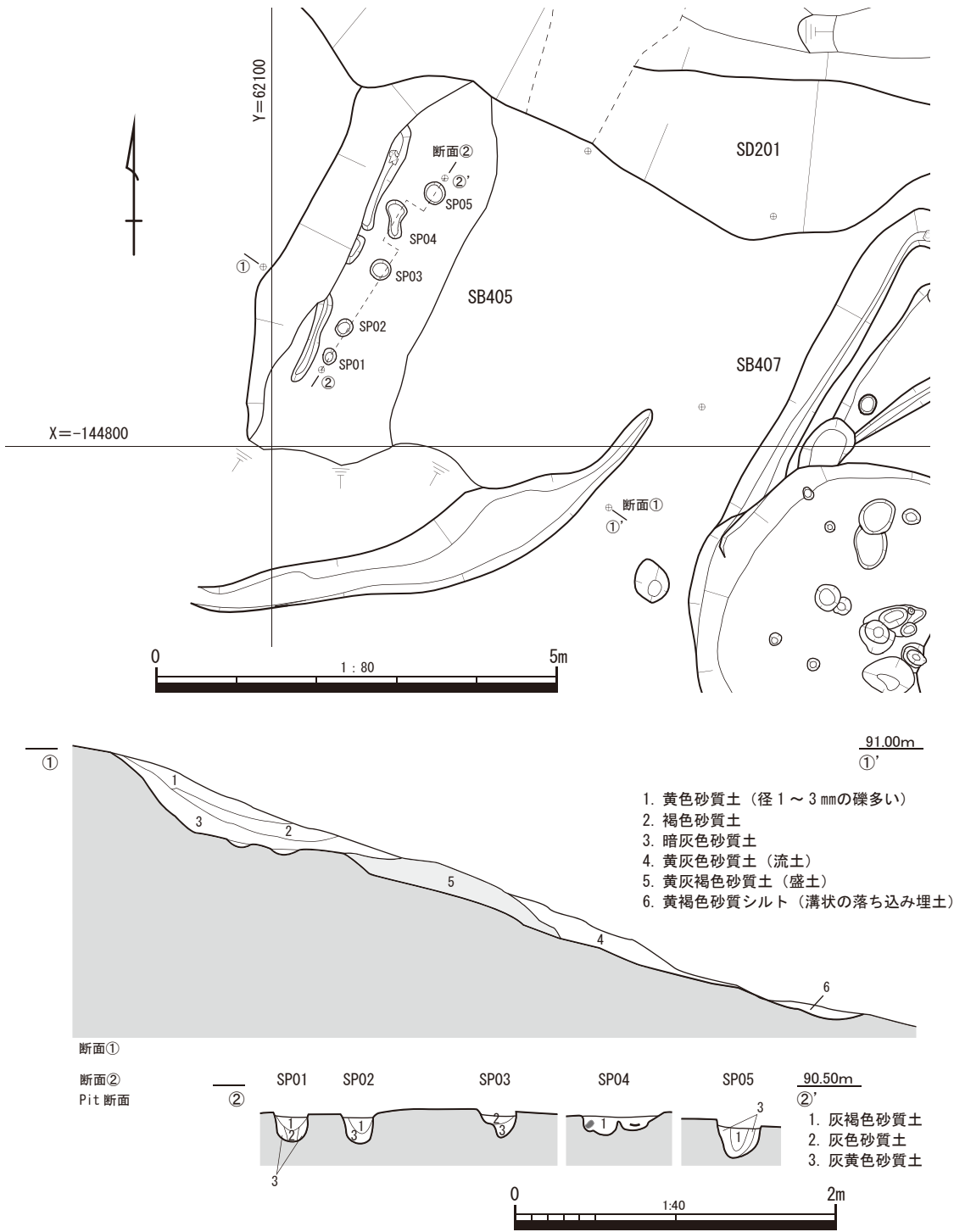
盛土上面で台石が出土し、周辺には炭の堆積が認められた。またSD201にかけての斜面に堆積する流土中から流れ落ちた可能性のある一辺20 cmほどの台石状の石が出土している。



第41図 SB404 平・断面図

SB405

西側に続く主尾根上で検出した。南北5.0 m、東西2.0 mを測る。壁高は0.5 mで、壁際で溝を検出した。幅0.2 mで深さはほとんど残っていない。溝の北端で土器が出土した。床面には径0.15～0.2 m、深さ0.2 mを測るピット5基が並ぶ。平坦面の裾部の東側から南側で、傾斜しながら通路状に伸びる溝状の窪みを検出した。土器やサヌカイト片が出土した。建物に伴うか明らかでないが、盛土が流出した状況から建物規模を想定する材料にはなろう。



第 42 図 SB405 平・断面図

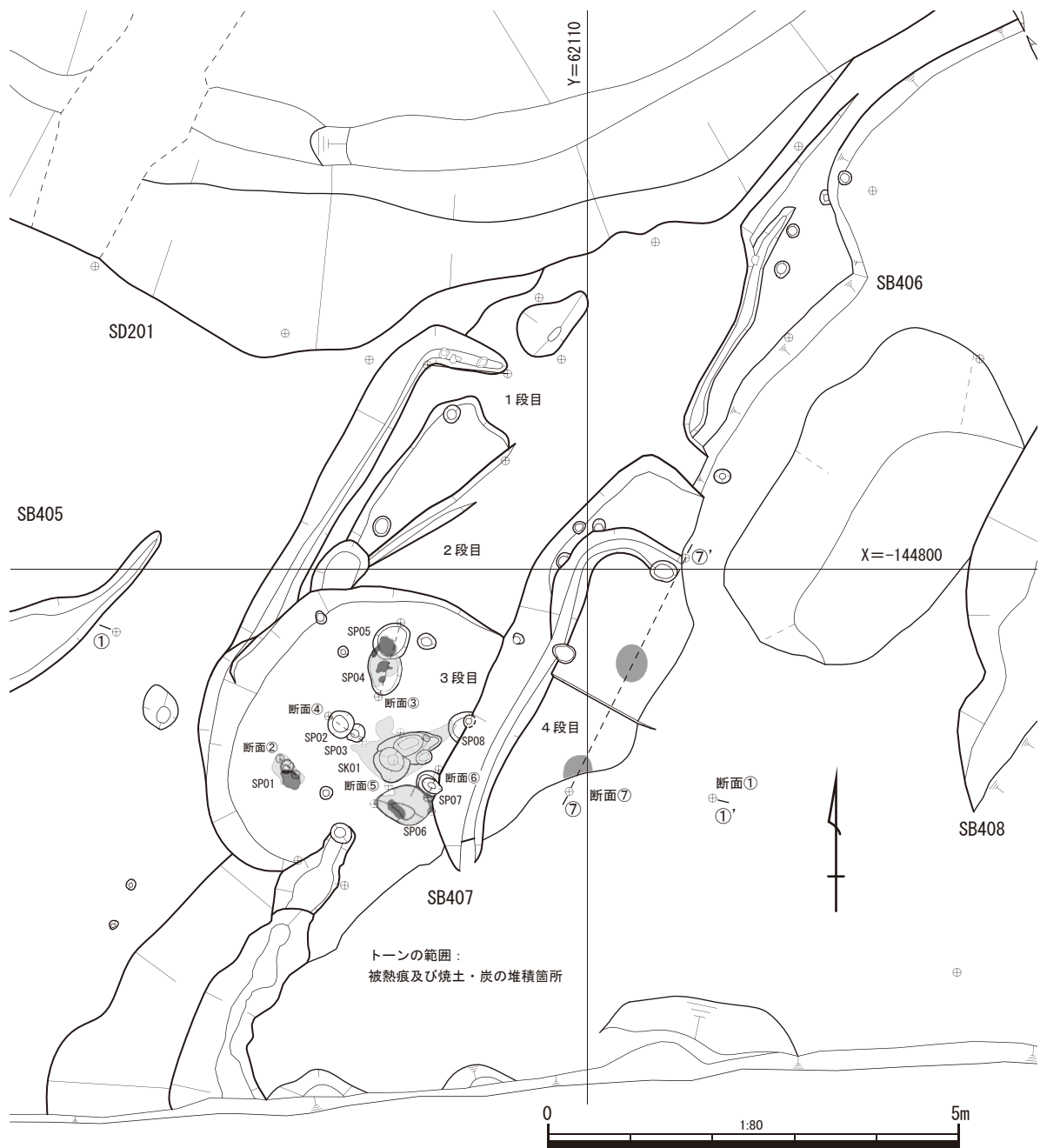
SB406

谷部斜面中位で検出した。南北 4.6 m、東西 1.6 m が残存する。西側の壁下で幅 0.2 m の溝を検出したが東側には伸びない。東半では径 0.1 m の杭状のピット 4 基を検出した。

SB407

谷部斜面中位の西端で検出した。全体の規模は南北 7.0 m、東西 4.8 m である。平坦面は大きくは 3 段を数え、4 時期の建物が重複する状況と考えられる。

上段 1 段目は平面方形の建物で南北 4.0 m 以上、壁高 0.6 m の建物である。壁下に幅 0.2 m の溝があり、北側に屈曲部がある。北辺になる短辺内で土器が出土した。ピット 2 基を検出した部分がわずかに下がる。

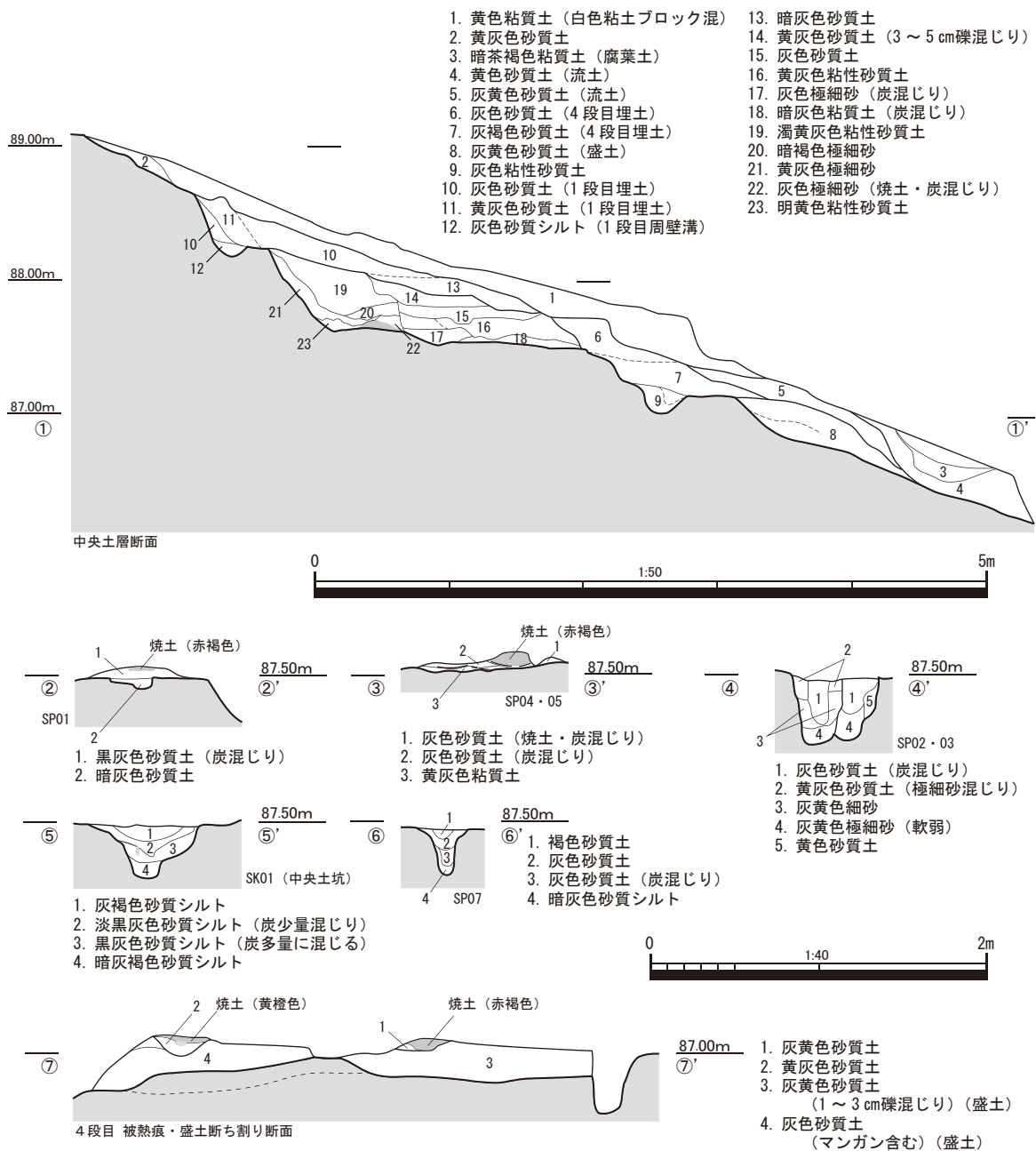


第 43 図 SB406・SB407 平面図

2段目は1段目の建物の溝方向からわずかに東に振る方向の溝に伴う浅い段である。現存長2.4 mの方形の区画で、溝の西端は土坑に切られる。検出時には3段目とする平面円形掘形の建物の肩部で南端と思われる角部を確認しており、そこから推定される規模は4.2 m以上の建物であったと考えられる。東端については不明である。

3段目は径4.0 mほどの平面円形を呈する建物である。壁高は0.5 mあり、検出段階から埋土に炭や焼土を多く含む状況を確認し、検出した床面でも炭や焼土の広がりが見られた。

中央土坑と考えられる長径0.8 mの土坑と類する大きさの土坑、大小8基の柱穴を検出した。土坑としたものの多くは浅く、床面の被熱痕の可能性が高い。中央土坑、柱穴の埋土にも炭が多く含まれる。中央土坑から壺の破片などの出土があったが脆く復元は叶わなかった。



第44図 SB407断面図

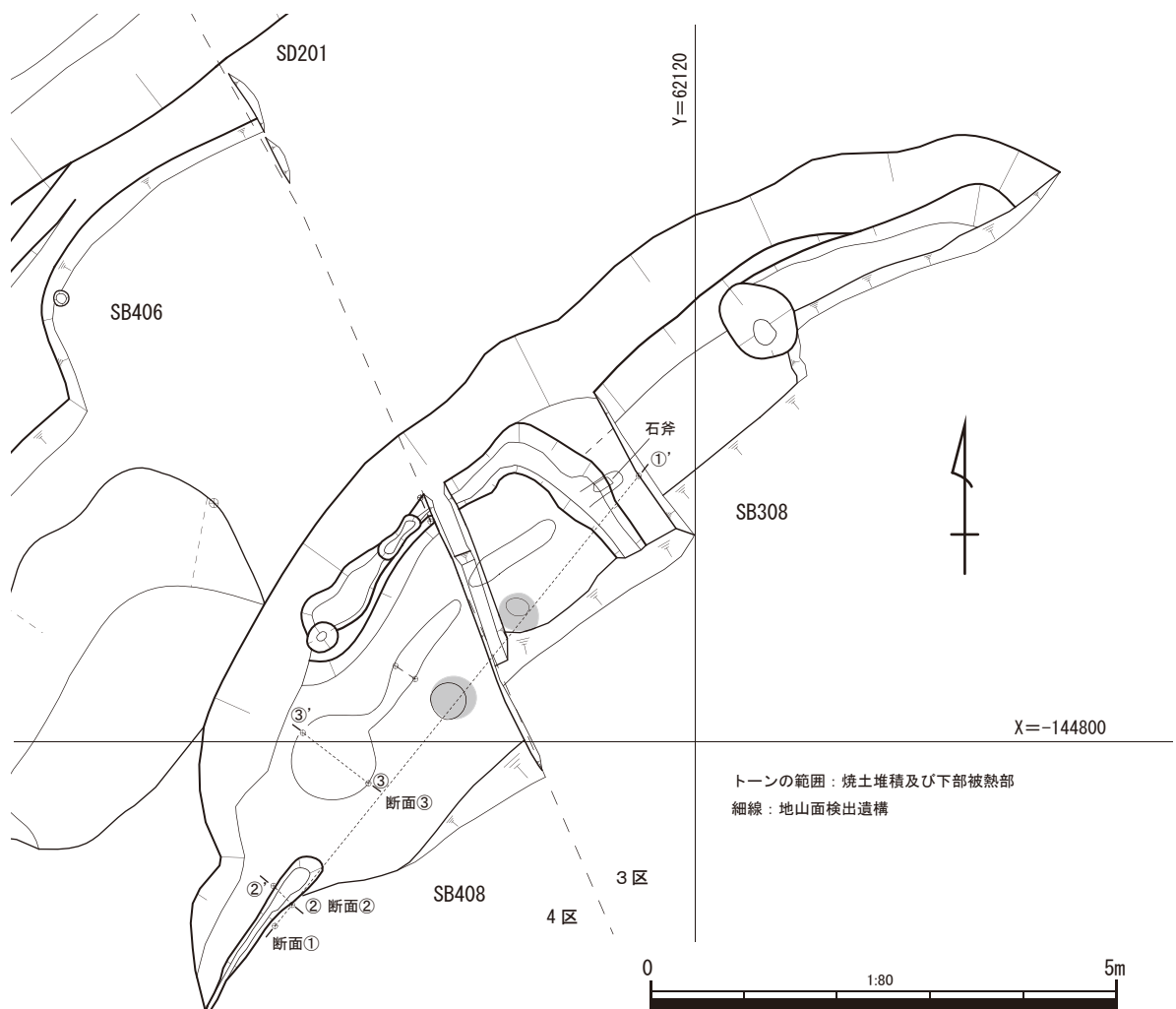
4段目は南北5.6m、東西の残存長2.0mの平面方形の段状遺構である。幅0.2m、深さ0.15mの溝が壁際に掘られる。溝は区画の北端には達せず途中で折れる。流失を免れた床面中央で焼土堆積と、その下で径0.3mの被熱痕を2基並列して検出した。上層の流土との区別が難しいが、土層断面の観察からSB407とした段状遺構で最後に形成された段状部と考えられる。被熱痕は盛土層上面で検出した。

3段目の出土遺物には床面、埋土の状況と同じく被熱状況が認められるが1段目、2段目の出土遺物には被熱状況はほとんどなく、被熱状況が認められるものは3段目からの混入と思われる。4段目からの出土遺物は少なかった。図化し得たのは土器の底部や脚部のみで、壺の胴部などの出土があったが、全般に脆く、復元とともに図化不能であった。

SB408・SB308

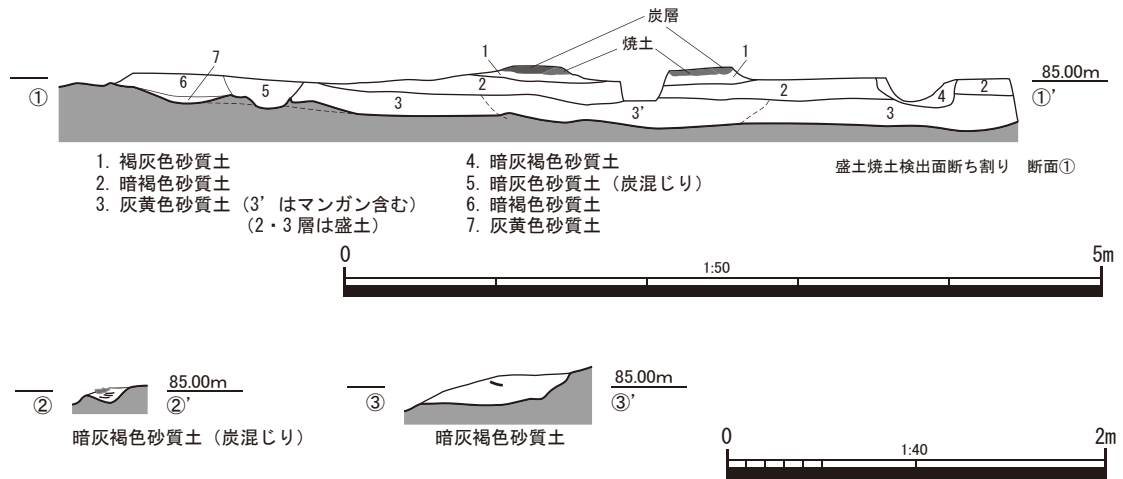
3区で検出していたSB308の続きを検出した。コの字状に検出した溝の範囲から南側をSB408と称する。南北7.0m、東西3.6mを測り、この東側に東西6.0m、南北2.4mの段状遺構SB308が存在したと考えられる。

SB408では盛土層上面の床面で径0.4～0.6mの被熱痕を2基確認した。段状遺構の盛土状況を把握する上で重要であった。



第45図 SB408・SB308平面図

盛土を除去した地山面ではSB408の南端でさらに南に伸びる炭混じりの埋土の溝を検出している。同様の溝と径1.0mの土坑を床面で検出したが、SB308とした東の建物の東端でも同規模の土坑を検出していた。対になる可能性があり、地山面では当初は一つの遺構であった可能性がある。その場合は南北11.0mほどの規模の段状遺構が想定される。



第46図 SB408断面図



写真12 SB407土層断面(南から)



写真13 SX304全景(南東から)

③その他の遺構

SX304(第22図・写真13)はSD202が谷中で収束する部分の北側に形成された平坦面である。東西14.0m、南北4.0mほどの規模の平坦面で、中央で一辺3.0mの平面隅丸方形の浅い土坑状の落ち込みとその周囲でピットを7基検出した。遺構面は地山の白色粘土が露頭する。ピットや北側肩部で検出した土坑SK308から土器が出土したが小片、少量であった。

SX305(第38図)はSB305北側に位置する土坑状の落ち込みで、東西3.4m、南北1.3m、深さ0.3mである。埋土に焼土を含むが土器などは出土していない。

3区で検出した溝でSD301やSD305～307は竪穴建物や段状遺構から谷側へ下るように掘り窪められており、通路の痕跡の可能性もある。またSD303は斜面上位の段状遺構に伴う溝のほか、尾根上の通路状の平坦面に伴う遺構の可能性などを想定する。

④溝（壕状遺構）

2～4区の南向きの谷部斜面で等高線に沿って掘削された2条の溝を検出した。斜面上位のSD201は2区の東端から西側の3・4区へ伸び、4区西端で南西方向へ続く丘陵主尾根頂部を切断する。検出長は約90mである。

斜面下位のSD202は2区の東端から西側に伸び、3区の谷部斜面中ほどで収束した。検出長は約45mである。SD201・202の規模については2区中央部に設けた土層断面では、SD201は上端幅4.0m、深さ2.5m、SD202は上端幅3.0m、深さ2.0mを測る。西側に伸びるSD201の3・4区境の土層断面では上端幅5.4m、深さ2.6mの規模を有する。

SD201の断面形状は緩やかなV字形で、最下層に無機質の白色粘土が厚さ0.3mで堆積する。その上に土壌化した暗灰褐色粘質土～シルトが厚さ0.6mほど堆積する。白色粘土の堆積から極微細な土器片が出土し、砂礫層を挟み水平堆積する箇所がある。溝底を浚えていた可能性があり、遺物の出土が少ないことも傍証となり得るかもしれない。埋土中層の堆積である暗灰褐色粘質土からは土器やサヌカイト片が出土したが全体に量は少ない。これより上層は地山由来の黄色粘質土～砂質シルトが厚く堆積する。非常に精良な土の堆積であり、一時期に埋め戻された状況とは考えにくい。溝の規模を考えると埋没するまでに時間を要し、もう少し異なる埋土が堆積するものと考えられる。埋没過程については不明な点が多い。

SD202の断面形状は緩やかなU字形を呈する。2区の中央と西端の溝底2箇所です器がまとまって出土した。中央の溝底では壺や甕、鉢がまとまって出土しており、西端の溝底からは河内系の大型壺と思われる破片がひとかたまりで出土したほか、高坏の脚部などが出土した。壺は器壁が薄く、また摩耗がひどかったため復元には至らなかった。

SD308は谷の中央で検出した等高線に直交する方向の溝である。SD201から分岐し谷底方向へ今回の調査区外に伸びる。調査区内での最大幅は3.0m、最大深は南端で1.5mを測る。検出長は19.0mである。谷の埋土を掘削中には溝の存在は明らかにできなかった。

SD308とSD201が交わる箇所ではSD308の最終埋土がSD201の東方向へ折れ曲がる形で続いており、SD201の西側が先に埋没し、最終的に東側からL字状に谷に流れ込む形状で機能していた状況が確認できた。

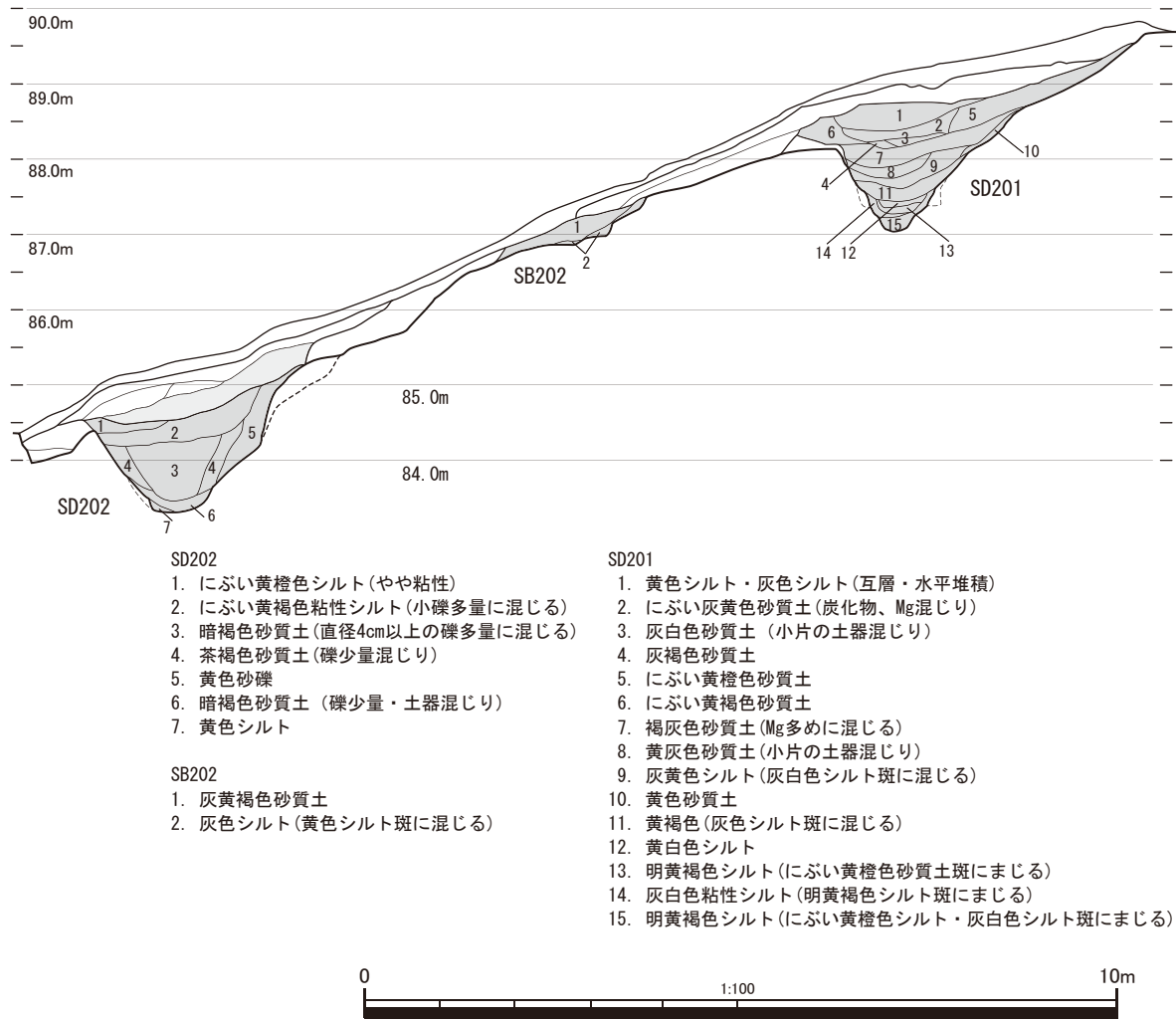
3-4区境においてSD201を掘削中に自然埋没した埋土の面上で炭層が広がりをもって水平に堆積する箇所を検出した。溝底で何らかの行為があった痕跡と考えている。先の調査では同様の溝の埋土から、古墳時代の須恵器の出土や、周囲で奈良時代の蔵骨器や火葬墓、焼土を埋土とする土坑の検出などがあり、これらに関連する遺構の可能性も想定される。



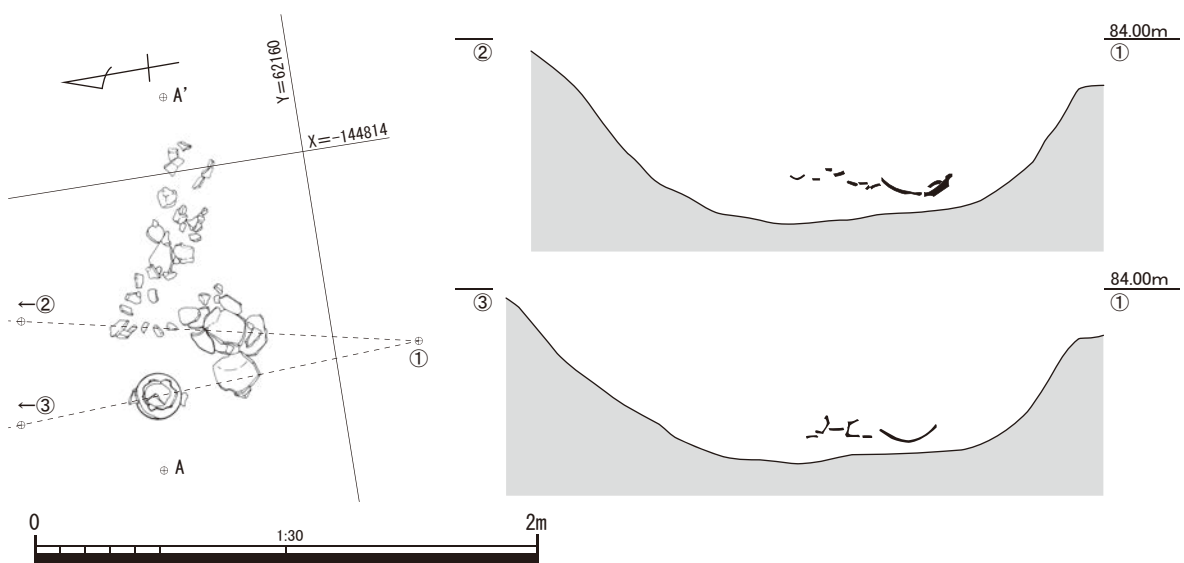
写真14 SD201 溝中炭層検出状況（東から）



写真15 SD201 溝中土坑状堆積検出状況（東から）



第 47 図 2 区土層断面図 (SD201・SB202・SD202)



第 48 図 SD202 遺物出土状況図

さらに2区でのSD201の掘削中にも、溝中で平面方形の白色シルトと黄色砂質シルトが互層堆積する土坑状の落ち込みを確認した。周囲と堆積状況が異なり、須恵器が1点出土した。

斜面下位の2区SD202の掘削中にも埋土中層付近の、一時期の溝底と考えられる層面で円形の浅い土坑状の炭の堆積を検出した。これらは溝が開口している段階で土坑の掘削や溝底で火を焚くなどした痕跡と考えられ、後世の遺物の混入の契機になる可能性が考えられる。

ほかに4区西端のSD201の南肩部で検出したSX401は、SD201が尾根を切断する部分で検出した被熱痕である。検出部分での溝の規模は幅2.6m、最大深1.6mである。南の肩部と底で被熱状況と焼土の堆積を検出した。肩部の焼土は浅い落ち込みに堆積するか、あるいは面的な被熱痕で、溝底の焼土はピットの埋土の可能性もある。遺構の時期、また性格は明らかでないが、溝の最も浅い箇所を検出したものである。

SD501

今回の調査では5区とした調査地東側の丘陵部裾で奈良時代の須恵器窯を1基検出したが、窯の上部で溝を1条検出した。窯への雨水の浸透を防ぐものと考えていたが、溝底で炭と焼土の検出はあったものの、窯に伴う遺物の出土はなく、弥生土器のみが出土した。

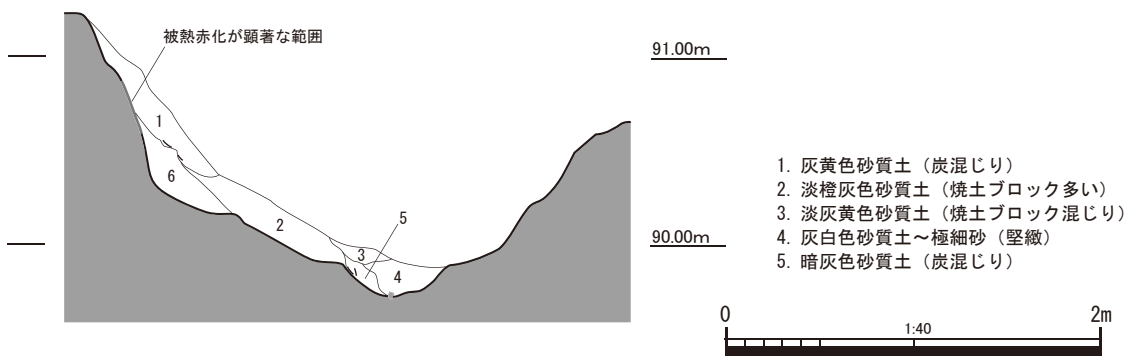
SD501の検出高は標高82mで、検出位置やSD202東端の溝底付近の標高が約83mであることから、同じ溝の可能性が想定される。溝は幅2.0m、深さ0.2～0.5mで砂礫を多く含む灰黄色砂質土で埋没していた。付近の同レベルの丘陵部では同様の痕跡は確認していない。窯の操業時に旧地形を留めていたかなども明らかでない。



写真16 SX401 検出状況 (東から)



写真17 SD501 全景とSD202方向を望む (南東から)



第49図 SX401 土層断面図

(3) 2～4区の出土土器

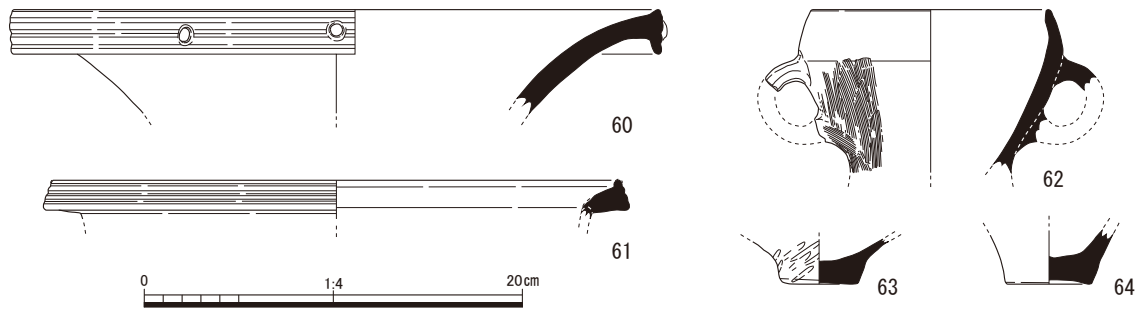
第50図はSD201出土の土器である。60は大型器台の口縁部と考えられる。上下に突出させた口縁端面に4条の凹線文を施す。残りは悪いが、やや間隔を空けて円形浮文を貼り付ける。61は器台、あるいは壺の口縁で端部は肥厚し下方に張り出す。3条の凹線文を施す。62は把手付きの鉢で、底部また脚部は不明である。色調は茶褐色を呈し、河内系土器と考えられる。把手周囲には取り付け時のハケやナデ調整が顕著に残る。焼成は良好で丁寧な作りの土器である。63・64は甕の底部で63にタタキ痕が認められる。

第51図はSD202出土の土器である。65は直立した頸部から口縁端をわずかに折り曲げる広口壺、あるいは直口壺の口縁部で、同一個体と考えられる胴部66は中位が最大径となる球形である。器壁は薄く、底部にはハケ調整が残るが全体に摩耗がひどい。67は長頸壺で上方に緩やかに開き、外反した口縁端部は肥厚する。黒斑部分で1条の沈線状の擬凹線と2個1対の円形浮文の痕跡が確認できる。周辺で胴部と考えられる破片が出土したが接合せず、詳細は不明である。また色調、胎土から68が底部と考えられる。69は甕の上半部で口縁部は「く」の字状に緩く開く。70は甕の底部、71の甕、あるいは鉢は厚みのある口縁端部に3条の凹線文を巡らす。72は壺の口縁と考えられる。端部は下方に拡張するが文様などない。73は高坏脚部で緩やかにラップ状に開く。3個の円孔を穿つ。74は大型の壺の底部である。外面は丁寧なミガキ、内面はナデ成形である。5区須恵器窯上部検出の溝SD501から出土した。

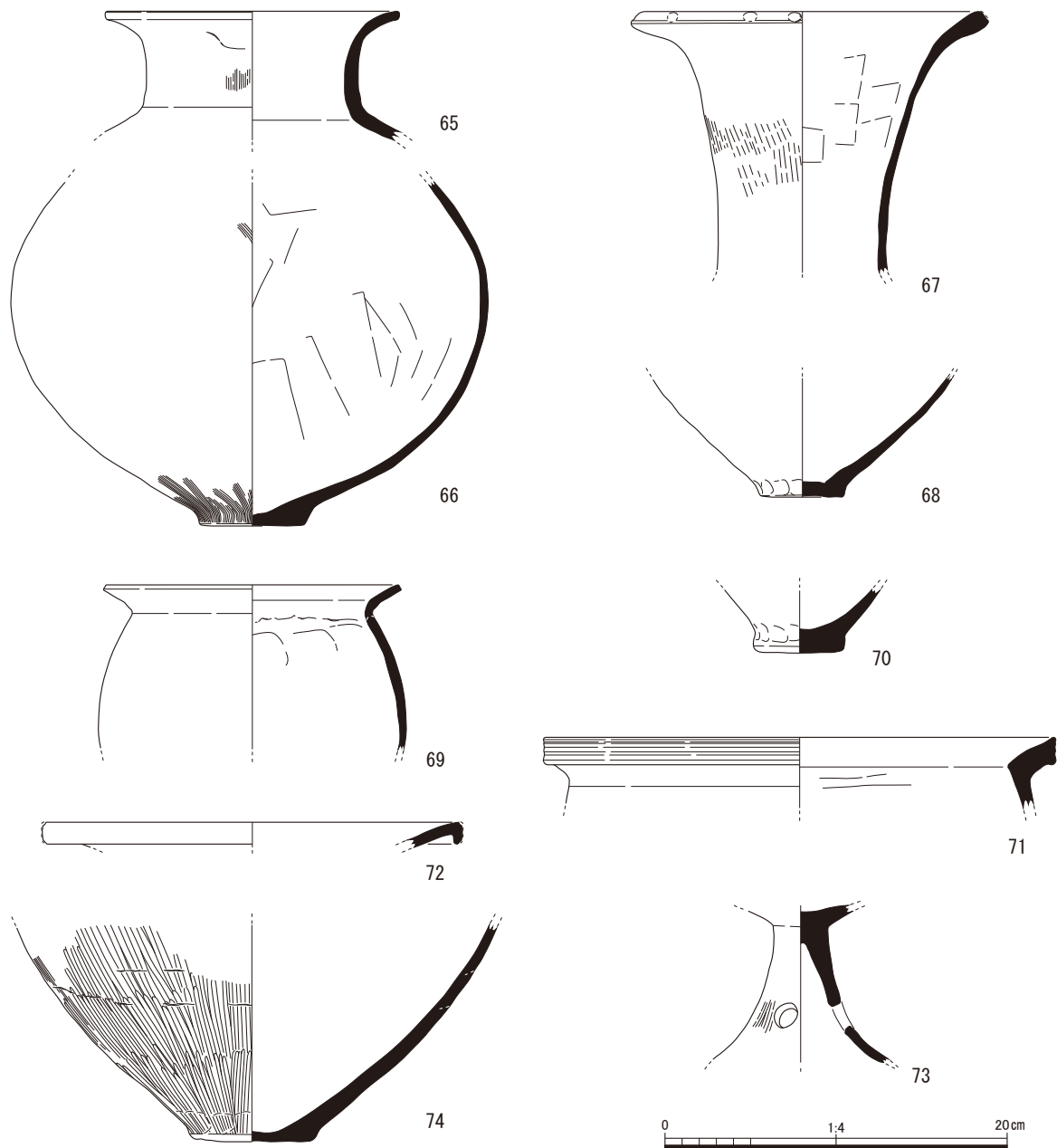
第52図はSB306出土土器と79のみ、南側の谷部から出土した土器である。75の広口壺は口縁部に2条の擬凹線文を施す。口縁部は内外面ともハケ調整、体部内面は板ナデであろう。76の広口壺はSB306上部床面で破碎されたような状況で出土した。口縁部は緩やかに外反し端部はやや肥厚する。外面はハケ調整が施され、胴部はその後ミガキが施されるようであるが、残りはあまり芳しくない。細身の胴部の甕77は下位から右上がり、横位に近い右上がり、右下がりのタタキ調整が施される。底部は厚く指頭圧痕が顕著に残る。78は有孔鉢で外面は右上がりのタタキ調整、内面はハケ調整である。底部穿孔は径1cmである。ほぼ口縁端まで残るものと思われるが、口縁とすれば端部の作りは粗い。79は器高7cmの把手付き鉢である。現状、把手は片側のみで、反対側にも剥離痕のような痕跡があるものの明瞭でない。体部は斜め上方に直線的に伸びる。ナデ、ユビオサエの痕跡が残るが全体に器壁表面の剥離がひどい。ただ一部に強く赤色を帯びる箇所があり、器壁の残欠や焼成時の色調を残す可能性とともに、何かを塗布した痕跡も想定されたため、蛍光X線分析と顕微鏡による観察を行った。結果としては積極的に顔料などの塗布を示す状況は認められなかった。

80～90はSB305・306出土の土器で破片で出土した。高坏80のみSB305出土で、口縁部はやや屈曲して立ち上がる。81も高坏で口縁部は外反傾向が強くなる。内面は丁寧なミガキ調整である。82は高坏の脚で外面はハケのちミガキ調整、坏部との境に3条の櫛描直線文を施す。接合は円盤充填による。甕83の口縁端部下辺には3つの刻み目が確認できる。84は壺の口縁端部で上下に拡張し、5条の凹線文と上面に櫛描きの刺突文を巡らす。85は壺の肩部片で櫛描直線文・波状文を交互に施す。86は甕の底部、87～90は壺の底部である。

第53図はSB305・SB306上部の平坦面出土の土器で、土器の周囲は土壌化していたが明確な遺構にならず、地山面に投棄された可能性などが考えられる。甕の出土が目立つ。91は外反する口縁部は屈曲部から肥厚する。92の胴部にはタタキがランダムに施される。94の底面には種子痕と木葉痕が確認できた。

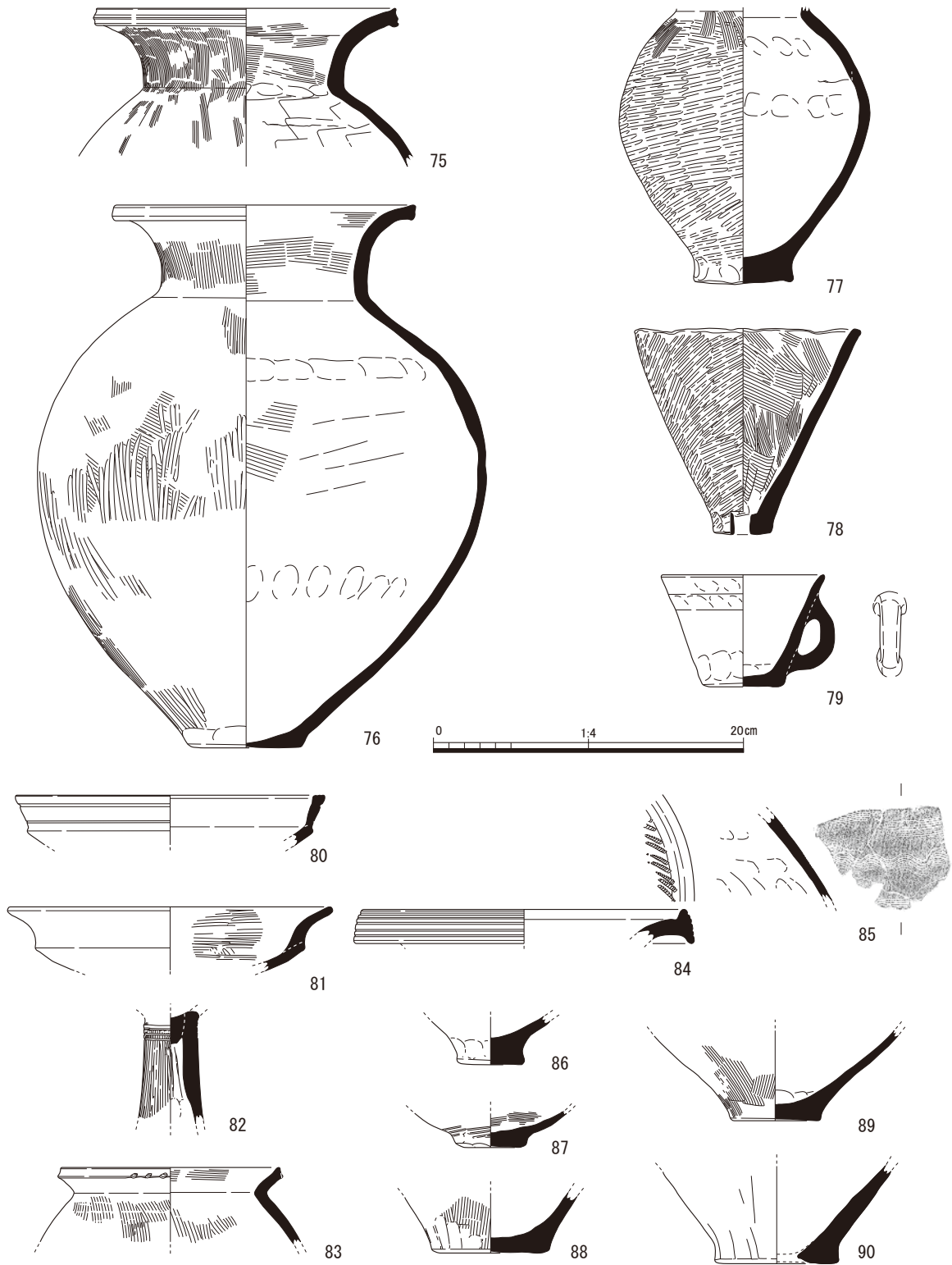


第 50 图 SD201 出土土器实测图

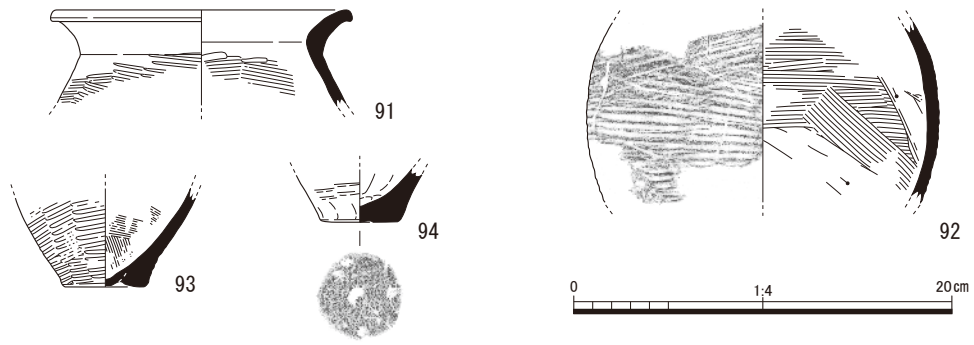


第 51 图 SD202 · SD501 出土土器实测图

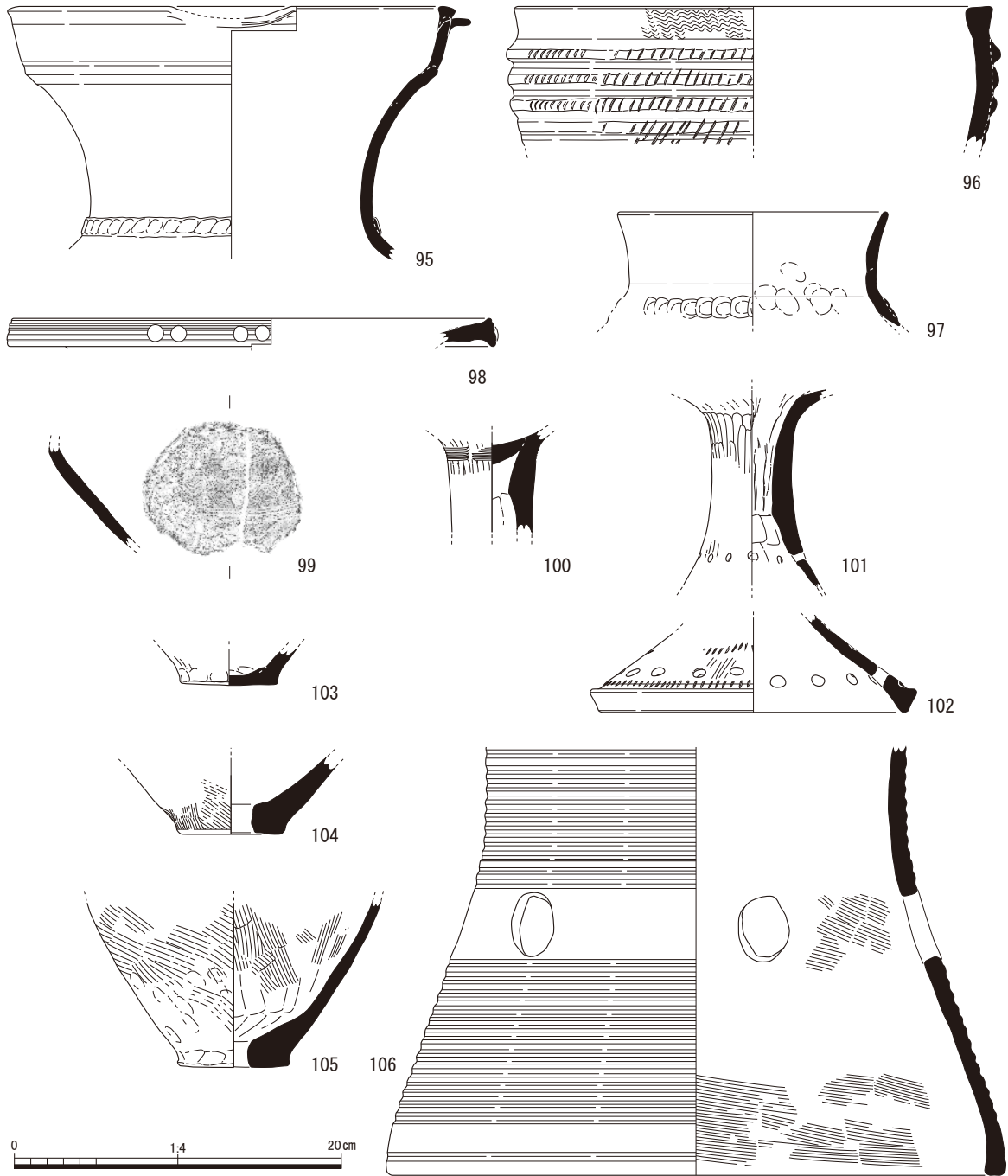
第54図はSX302出土の土器である。95は大型の有段口縁壺である。頸部に指頭圧痕突帯文を巡らす。口縁端面はやや肥厚し片口を持つ。色調は淡い褐色を呈する。96は大型の直口鉢と思われ、わずかに内湾する。口縁端部に波状文を施し、その下に3条ないし4条の突帯文を巡らせ刻目を加える。



第52図 SB306及び3区谷部出土土器実測図



第 53 图 SB306 上部平坦面出土土器实测图

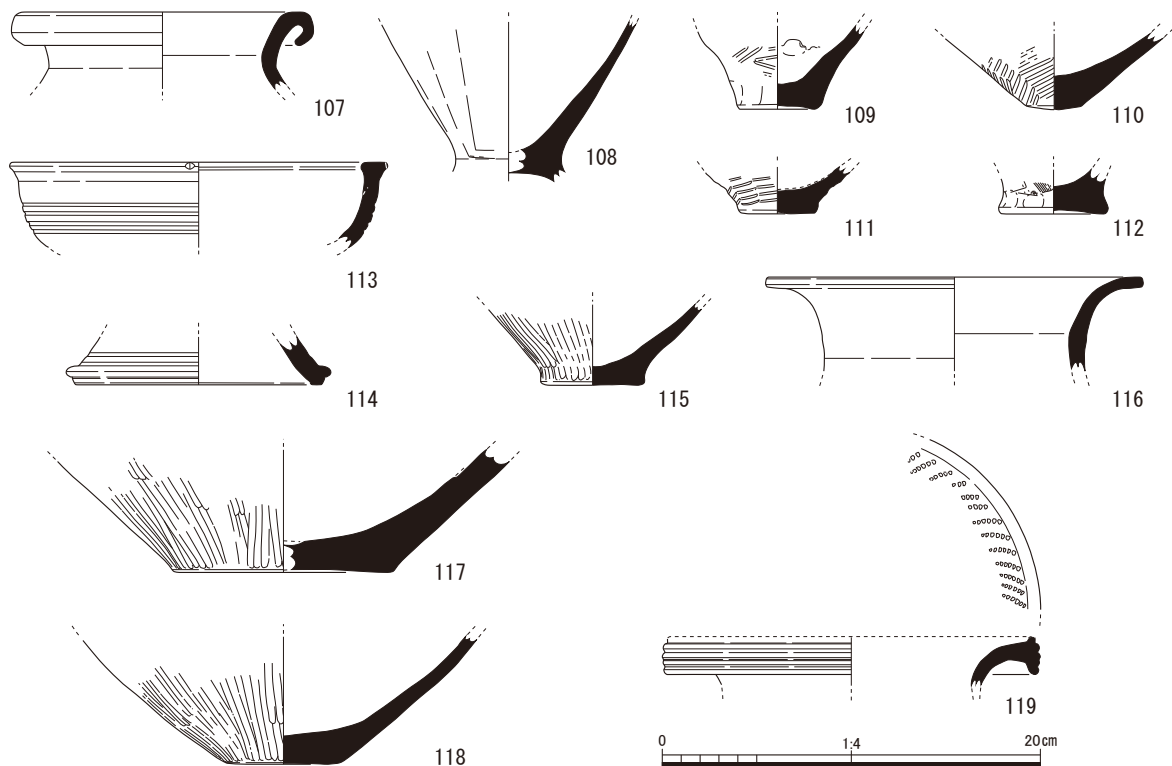


第 54 图 SX302 土坑出土土器实测图

97は短頸壺で口縁端部はわずかに外反し丸く収める。頸部に指頭圧痕突帯文があるが、低く指押さえしたのみの退化形態である。98は壺の口縁で上下に拡張させ、端面に凹線文と2対1個の円形浮文を貼り付ける。99は壺の肩部片で2条の波状文がわずかに確認できる。100は高坏脚柱部と坏部の接合部分で円盤充填による。5条の櫛描直線文を施す。101と102は同一個体の高坏で被熱状況が窺える。101の脚柱部は外面ミガキ調整、内面にシボリ痕が残る。脚部102の端部近くに刻目と円形の透かし孔を穿ち、脚柱部にも一回り小さい円孔を持つ。103は壺の底部で底は薄く、胎土は精良である。104・105は白色を呈し、これらも胎土は精良で細かいハケ調整である。底部穿孔がある。106は復元底径36cmの大型器台である。下端部に1条、その上に14条+11条まで残存する凹線文を巡らす。凹線文の間で3~4cmの円孔を3箇所確認しており、推定6箇所穿つであろう。内面はハケ調整である。

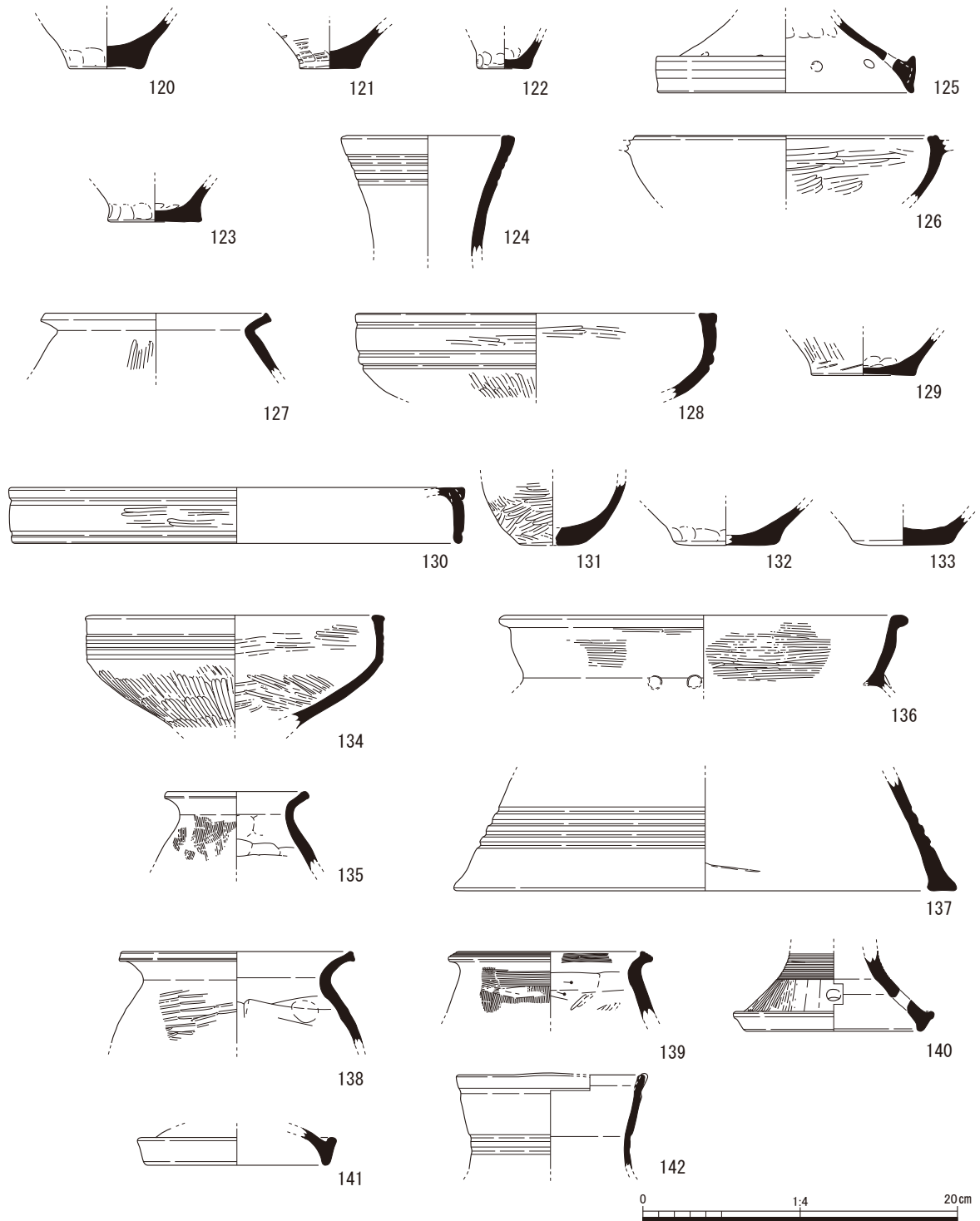
第55図はその他の建物出土土器である。107はSB301から出土した壺の口縁部で端部は丸く折り曲げ稜をもつ。色調は暗褐色を呈する。SB301東側の面上で出土した108は脚部の付く鉢かと思われる。外面ハケ調整であるが摩耗がひどい。109~111はSB303の床面と中央土坑出土の土器で甕の底部のみ出土した。タタキ痕が明瞭である。

112~116はSB304出土土器である。112は甕の底部、113は椀形高坏である。4条の凹線文と口縁端部で刻み目を1個確認した。114の脚は端部上部に櫛描直線文を2条巡らす。115・116は壺で116は端部を水平に折り曲げる。117~119はSX301出土土器で、117は上層床面、118は下層地山面床面で出土した壺の底部で、厚く大型のものと思われる。ミガキが施される。119は広口壺で口縁端面に4条の凹線文、上面に櫛描刺突文を巡らす。



第55図 SB301・302・303・304・SX301出土土器実測図

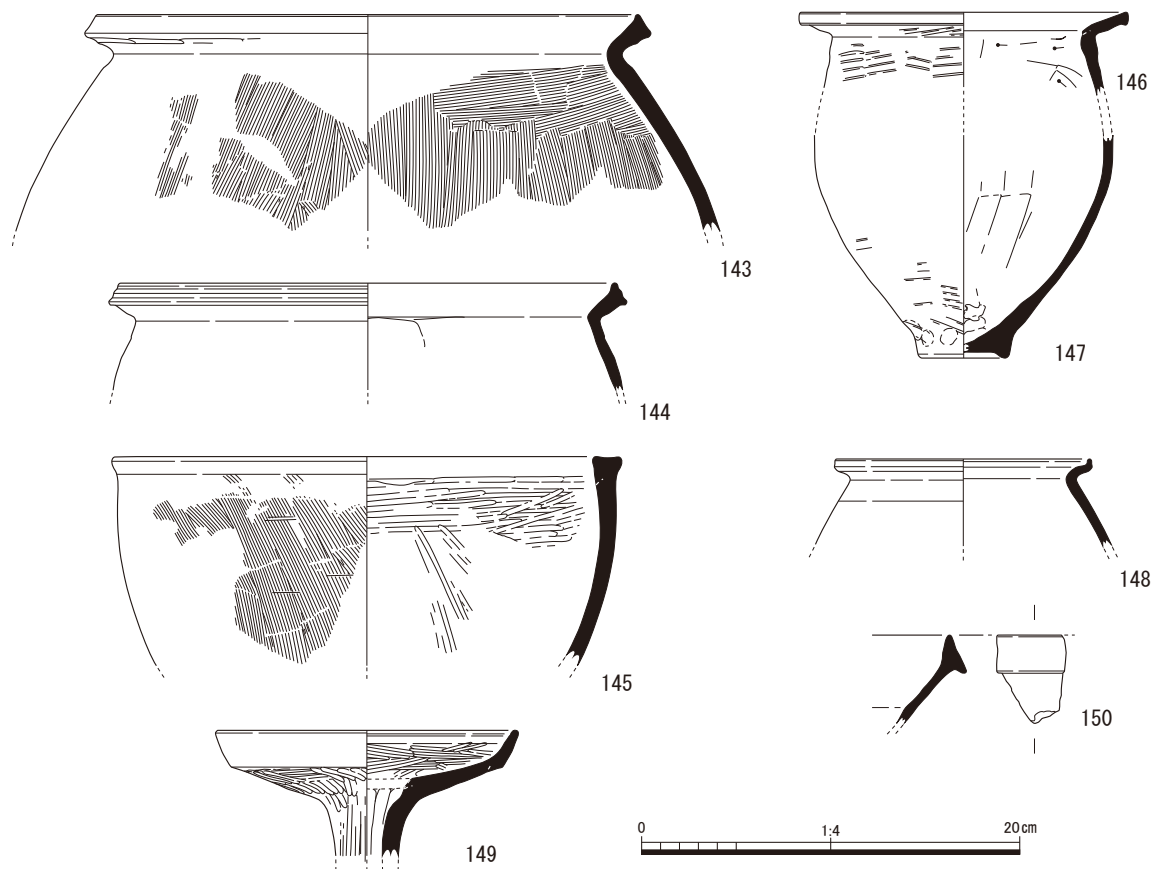
第56図は北西支尾根部、西側斜面の竪穴建物出土の土器である。120・121はSB402出土の甕の底部である。タタキが見える。122～125はSB403出土の土器である。125の脚部は端部が上方に立ち上がる。3条の凹線と推定10個の円孔を穿つ。124は長径壺で4条の凹線文を巡らす。126はSB405のピット出土の土器で椀形の高坏と思われる。内面ミガキ調整である。



第56図 SB402・403・405・406・407・408 (308) 出土土器実測図

SB406 出土の甕 127 は「く」の字状に外反する口縁端部をわずかに摘み上げる。128 ～ 134 は SB407 出土土器である。128 は椀形高坏で丁寧なミガキと 3 条の凹線を施す。4 段目出土の椀形高坏 134 はミガキ調整と 4 条の凹線を巡らす。130 は水平口縁の高坏の端部である。129・131 ～ 133 は底部で、131 は黒褐色を呈し、穿孔がある。ミガキ調整で丁寧な作りである。135 ～ 142 は SB408 出土の土器である。136 は複合土器で口縁端部は丸く収める。垂下帯に円形浮文が 2 個確認できる。135 は小型の壺で外面は細かいハケ端部である。色調は淡褐色を呈し精良な土器である。137 は大型器台の脚部と考えられる。4 条の凹線を施す。138・139 は甕で 138 は後出の溝中から出土した。タタキが見られる。139 は口縁端部を斜め上方に拡張し擬凹線 3 条を施す。外面ハケ調整である。140 は脚部で 9 条の楕円直線文を施す。141 の脚部は丸みを帯び、端部は上方に拡張する。142 は水差しの可能性があり、口縁部にわずかに片口状の膨らみをもつ。端部近くに 1 条、やや下に 2 条の凹線文を巡らす。

第 57 図は SB403 下方流土出土の土器である。143・144 は大型の鉢で口縁部は「く」の字状に外反する。144 の肥厚した端部には 2 条の凹線が施される。145 は直口形態の鉢で口縁端部は水平方向に肥厚する。内面にはミガキが施される。甕 146・147 は同一の甕と考えられる。細身の胴部に口縁部は肥厚し、強く外反する。頸部と底部にタタキ痕が残る。148 の甕の口縁は端部を摘み上げる。149 は皿状の坏部をもつ高坏である。色調は灰白色を呈し内外面ともにミガキが丁寧に施される。150 は器台と考えられる破片である。焼きがやや甘いのか色調は白色を呈する。器壁は非常に薄い。



第 57 図 4 区北西尾根部及び SB403 下方流土出土土器実測図

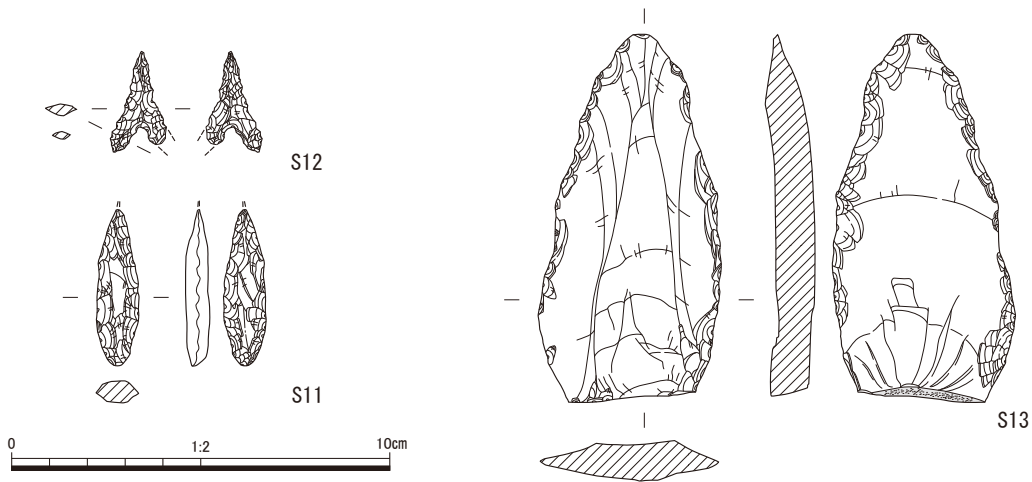
4. 出土石製品

サヌカイト製石鏃2点・搔器1点、石斧4点、砥石3点、磨石2点、用途不明の石器1点と大型素材サヌカイト剥片10点について図化を行った。

S12は小型の凹基式鏃、S11は細身の有茎鏃である。S13は縦長の剥片の両側面を調整し刃部を作り出した搔器である。

石斧は4点出土しており、S3・S4は吉野川下流域産緑泥片岩を素材としたと考えられる。

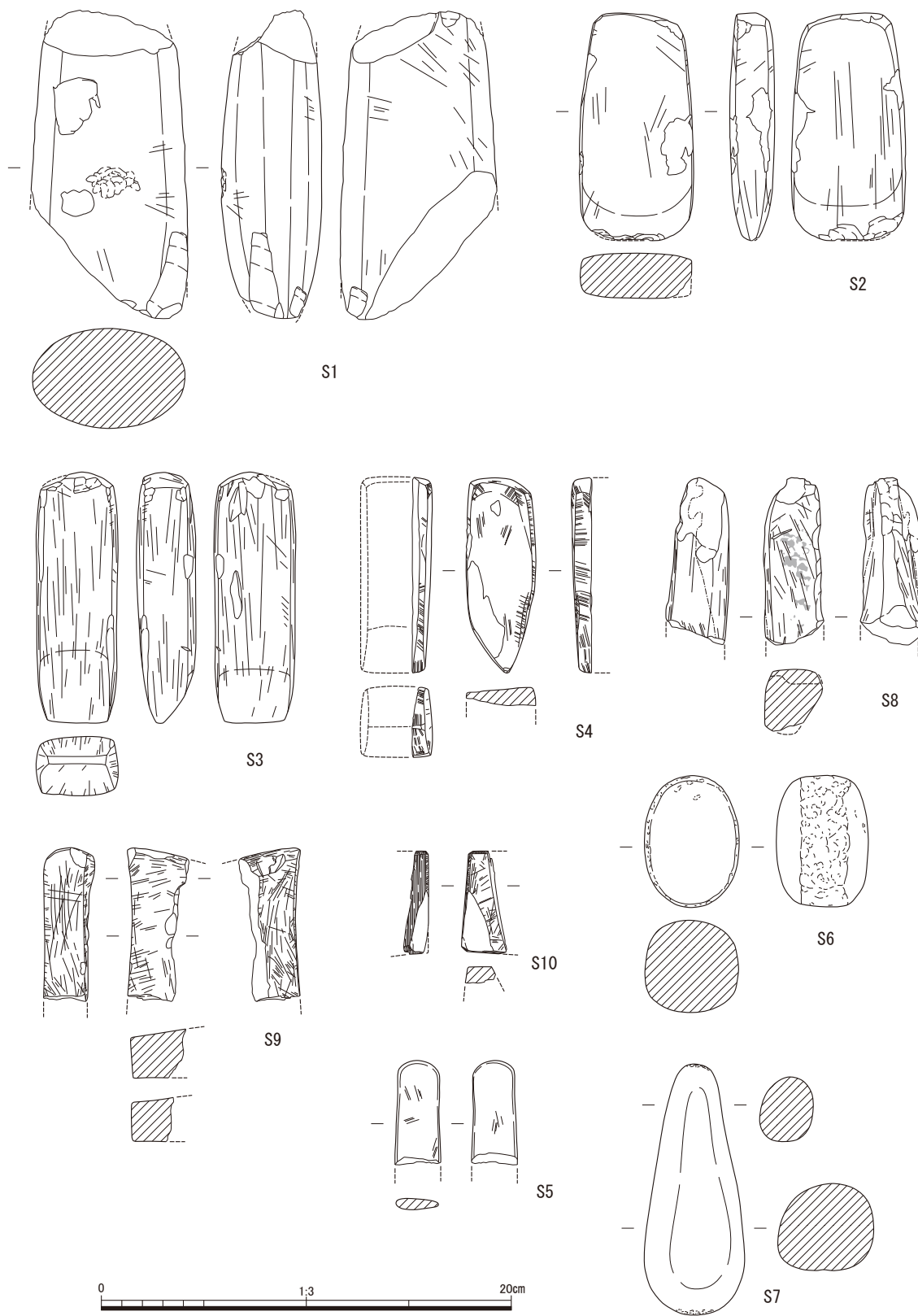
S8～10は小型の砥石で仕上げ砥の可能性が高い。鉄製品の存在を示唆するものといえよう。S8には被熱痕があり何らかの鋳型の転用の可能性が考えられる。破損した割れ面を除き、擦り痕が認められる。被熱痕と考えられる黒色の変色部は上面から5mmほどの範囲に及ぶ。鋳型とすれば下部を大きく失ったもので、当初の厚さや製作されたであろう製品の形状などを表す掘り込みは残っていない。詳細は不明である。S5はSX302の被熱部付近で出土したもので、薄いへら状の自然石を工具などに用いた可能性を考えた。



第58図 サヌカイト製石器（石鏃・搔器）実測図

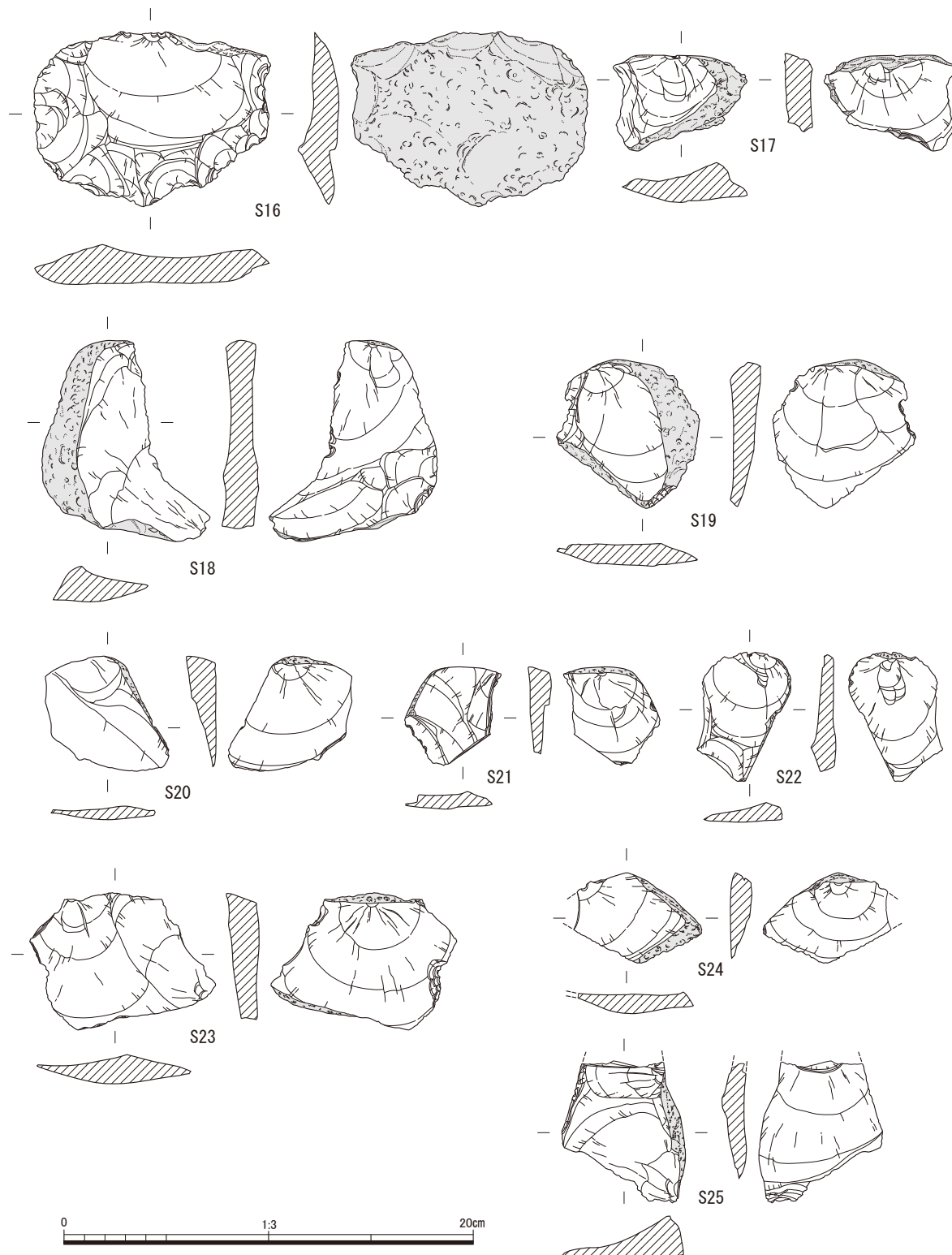
表3 出土石器一覧（長さのカッコ付き数字は残存長、幅・厚さは最大値）

遺物番号	遺物名	出土位置		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	空中重量 (g)	体積 (cm ³)	見かけの比重
S1	太形蛤刃石斧	4区	SB408	(15.1)	(7.1)	4.9	856.2	285.1	3.00
S2	扁平両刃石斧	3区	SD201 肩部	11.1	5.1	2.2	286.6	96.2	2.98
S3	柱状片刃石斧	2区	SB201 SP01	12.3	4.0	2.9	313.6	100.9	3.10
S4	柱状片刃石斧	4区	SB403 下方流土（遺物包含層）	9.1	(1.0)	3.4	51.5	16.8	3.06
S5	へら状石器	3区	SX302 土坑	(5.1)	2.3	0.6	11.4	4.4	2.59
S6	敲石	3区	谷部流土（遺物包含層）	6.4	4.6	1.5	219.3	78.0	2.81
S7	磨石（石杵？）	3区	SB305 上層流土	12.3	4.9	4.3	322.0	127.1	2.53
S8	砥石（鋳型転用？）	3区	東上段流土（SB306 北東部）	(8.2)	2.9	3.0	75.8	35.2	2.15
S9	砥石	4区	中央断面東側流土	(7.5)	(3.0)	2.4	67.0	28.1	2.38
S10	砥石	4区	南西尾根上流土	5.0	(2.2)	0.8	11.2	4.9	2.28
S11	石鏃	3区	SX302 土坑	(4.1)	1.1	0.6	3.4	1.3	2.61
S12	石鏃	4区	SB404	2.7	(1.5)	0.3	0.7	0.3	2.33
S13	搔器	3区	SD201（SD308 以東）	9.7	4.8	1.0	62.6	23.9	2.62
S14	台石	1区	SB102	24.5	22.4	13.7	13,440	4,900	2.74
S15	台石	4区	SB404 床面（上段）	(21.3)	(21.8)	13.4	9,640	3,700	2.60
S16	大型サヌカイト素材剥片	3区	SB306 盛土・床（地山）面	8.6	11.5	2.1	212.9	81.7	2.60
S17	〃		〃	4.7	6.5	1.9	50.2	19.1	2.63
S18	〃		〃	9.8	8.2	1.8	119.7	45.8	2.61
S19	〃		〃	7.3	7.0	1.5	67.9	25.8	2.63
S20	〃		〃	5.6	6.1	1.5	34.5	12.8	2.70
S21	〃		〃	4.8	4.7	1.1	24.5	9.5	2.59
S22	〃		〃	6.3	4.6	1.2	24.9	9.4	2.65
S23	〃		〃	6.7	9.1	1.6	82.1	31.2	2.63
S24	〃		〃	4.4	6.2	1.1	26.3	9.7	2.71
S25	〃		〃	6.9	6.1	2.1	59.5	22.9	2.60



第 59 図 出土石製品（石斧・砥石・磨石ほか）実測図

SB306の地山面から出土した大型素材剥片は自然面を残し、大きいものでS16・18は幅、または長さが10～12cmほどある。加工段階が明らかでないが、拳大程度の大きさの素材原石の搬入、または流通していた可能性が想定されるか。



第 60 図 大型サヌカイト素材剥片実測図

台石は2点図化したが、これ以外に同様の平たい石は大きさに大小あるもののSX301、SB305、SB404、SB407などから出土している（写真図版27-4）。

SB301の床面では4個の拳大の凝灰質砂岩が出土した。形状の類似性から元は1つの石塊であったと想定した（写真18）。30cm四方で厚さ10cmほどの台石に復元できる。破損した後も投棄されずに集積され、同様の石片はSB303の中央土坑からも出土している。

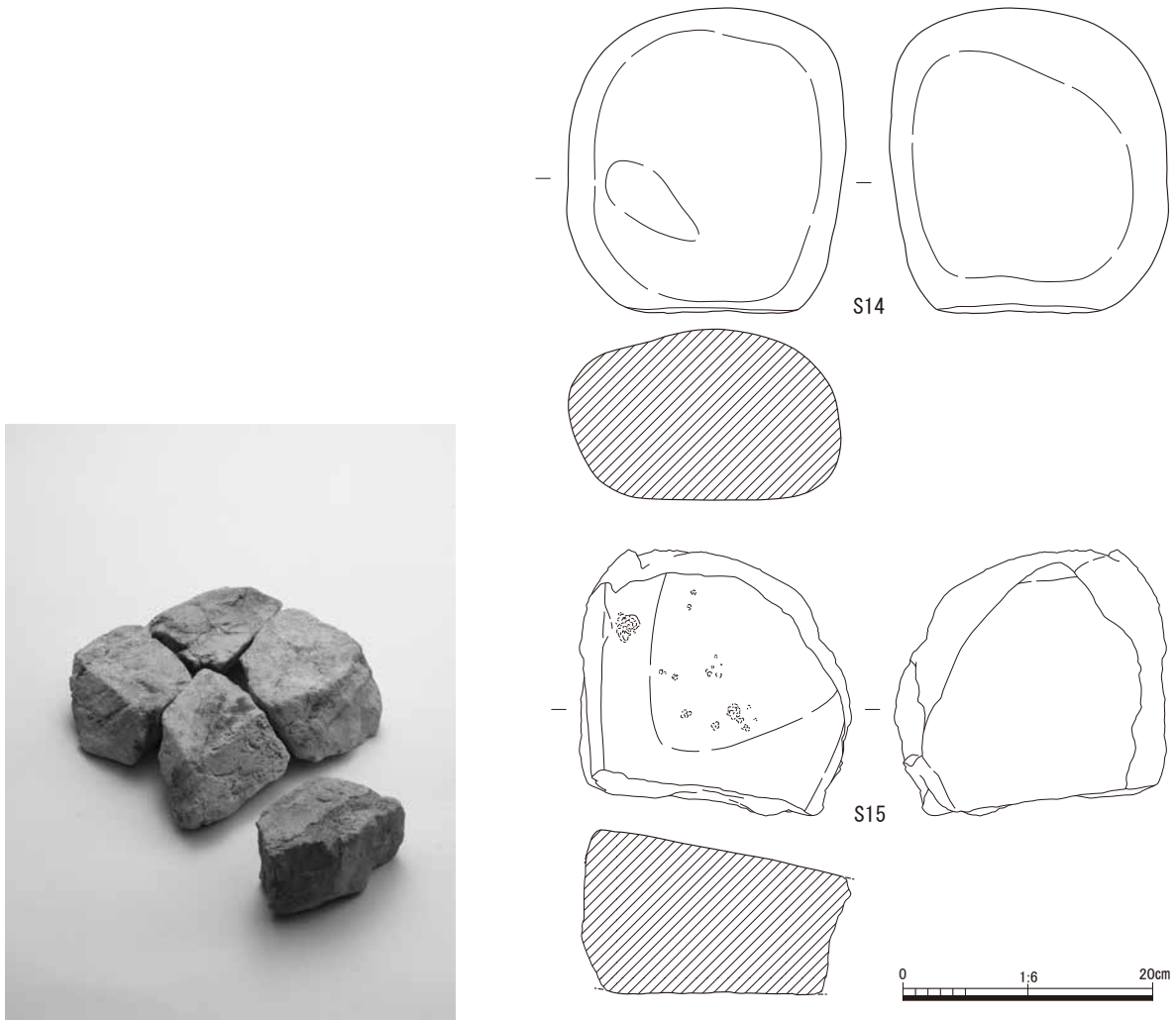


写真18 SB301・SB303出土破損台石片

第61図 出土石製品（台石）実測図

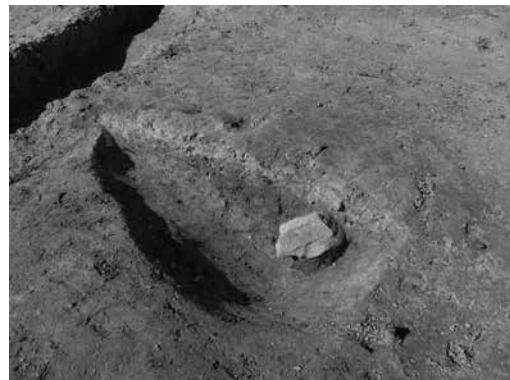
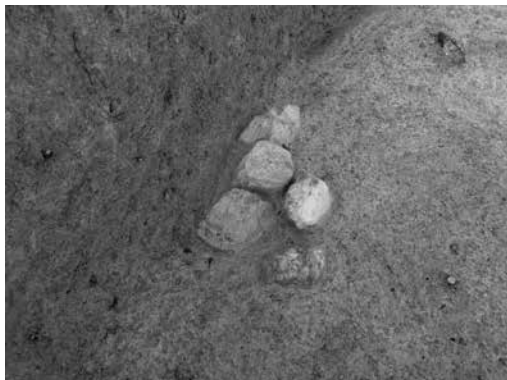
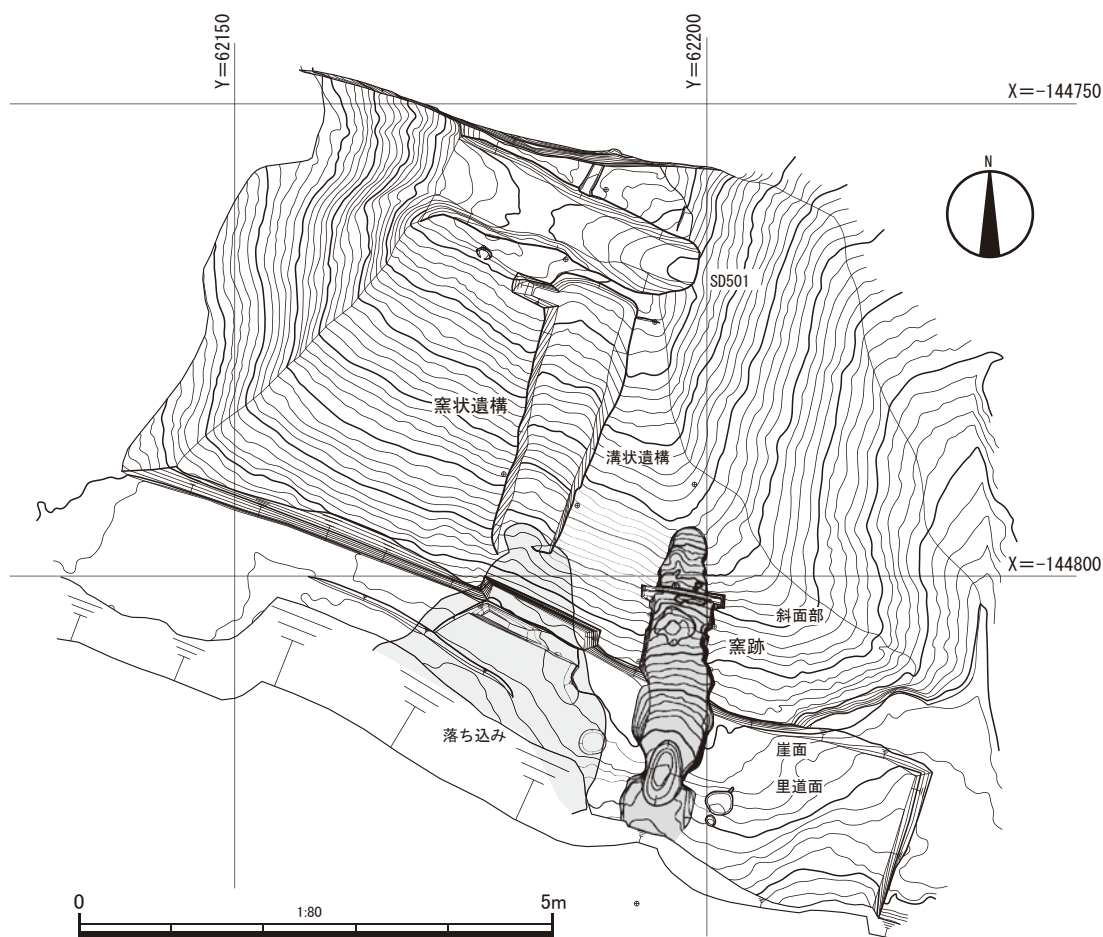


写真19 破損台石の出土状況【左：SB301床面 右：SB303中央土坑】

5. 5区窯跡の調査

調査地南東部の丘陵裾部で須恵器窯を1基検出した。里道により削られた斜面崖面で被熱痕を確認し、精査の結果、窯跡と判明した。



第 62 図 5 区窯跡及び窯状遺構平面図

窯体は現存長（水平距離）6.5 mを測る。里道面で燃焼部と焚口を検出し、北側斜面が焼成部である。検出範囲最高所の標高は80.0 m、里道面焚口付近の標高は76.8 mで、高低差は3.2 mである。

当初窯である地山面での各部位の規模は焼成部の幅1.4 m、残存高0.4 m、燃焼部は幅1.7 m、残存高0.7 m、焚口は幅1.4 m、残存高0.7 mを測る。煙道部に近い頂部付近は幅0.8 m、高さ0.2 mである。

地山面床面の傾斜はほとんどが30度で、燃焼部から焼成部口（境）にかけては40度で傾斜変換が大きい。里道を設けるに際して窯跡上部の斜面は削られているであろうが、焼成部口の状況から元より傾斜変換点に位置するであろう。

当初窯の地山面は程度の差はあるが全面が還元化している。とくに燃焼部から焼成部口にかけての範囲が顕著である。床面では断面②付近の床面で地山面の上層に1層の粘土の貼土を検出した。焼成部口付近でも同様の黄色粘質土～粘土の堆積が見られ、層序的に燃焼部から焼成部にかけて床面の角度がやや緩くなった段階がある。やや層厚で分層が可能である。

燃焼部～焚口付近では黄色粘質土や炭混じりの堆積層で整地を行った状況が確認でき、3面ほどに分層が可能である。

燃焼部や焚口、焼成部口の側壁では当初窯の地山層の側壁面内側に、部分的であるが1～3層の焼結層を検出した。焼成部下半で2層ほど、焼成部口、燃焼部の東側壁、焚口の両側壁で3層の焼結層が確認できる。当初窯以降3回ほどの改修・補修による窯の操業が想定される。

また焼成部の中ほどに窯体片や焼土、炭を多く含み赤褐色を呈する堆積層がある。崩落天井の堆積と考えられる。この層より上位の床面と下位の床面では床面の還元状況が異なり、焼成部口付近の床面の還元化が顕著であるが、焼成部上方はさほど還元化していない。

焼成部東側壁では径2cmほどの木材を芯にして、スサを混ぜた粘土を貼り付けた痕跡を確認しており、同様の芯材の痕跡を残す窯体片は燃焼部を埋め戻した堆積層からも出土している。東側壁の痕跡は前段階の側壁の上に継ぎ足したような状況である。床面、地山面ではピットを検出していない。操業当初の形態は明らかでないが、半地下式の窯で天井を架構した際の痕跡と考えられる。なお、窯跡内の土層堆積状況と窯体焼結層の状況について断面②・④・⑤部分で土層転写作業を行い、保存を図った。

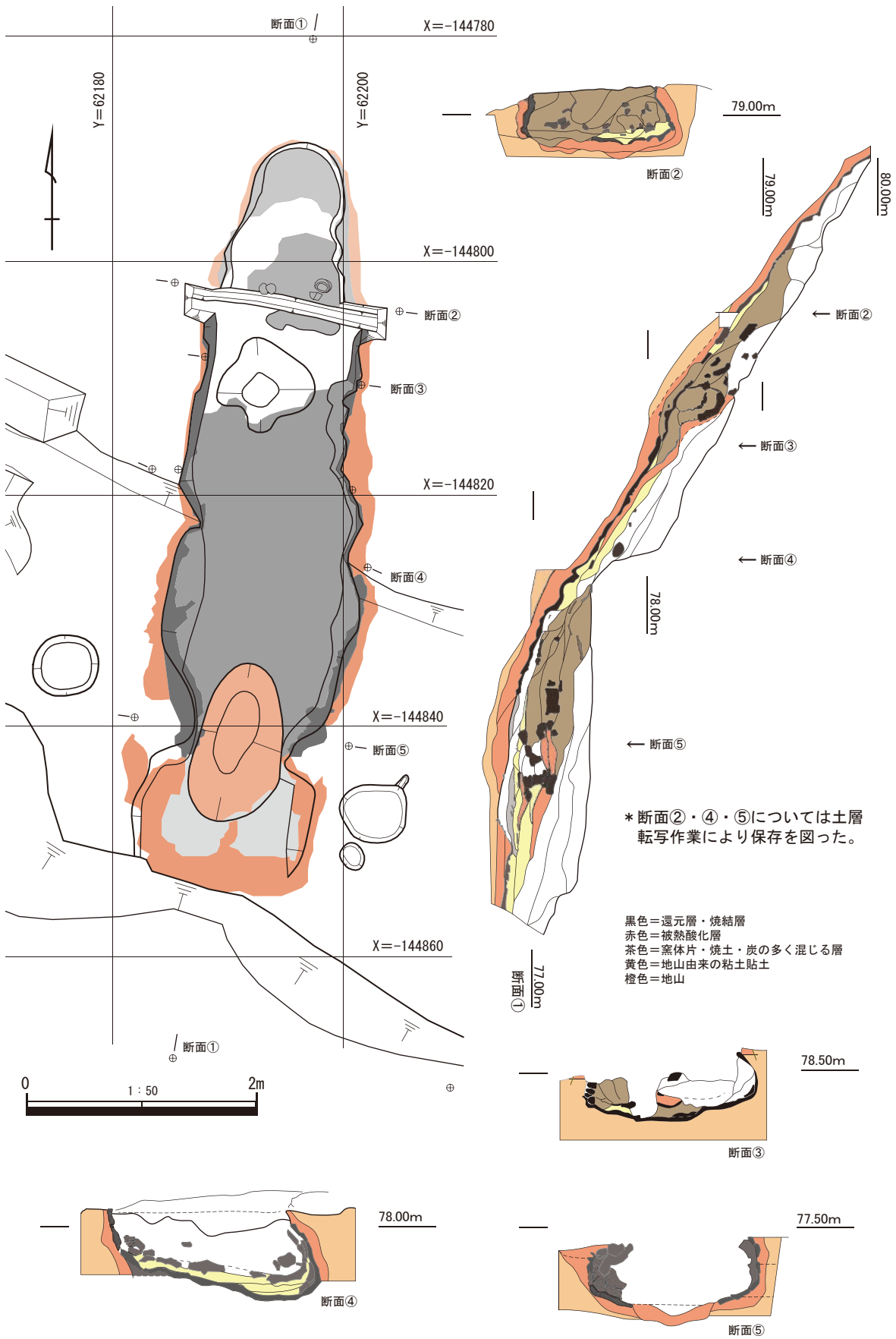
窯内からの出土須恵器は焼成部からの出土はわずかで、ほとんどが燃焼部と焚口付近からの出土である。焼成部上部の当初窯の床面と直上の粘土の貼土から古相の坏Aを含む坏Bが出土しており、燃焼部から焚口にかけての整地層（面）と考えられる堆積からは形態的には新しいと想定される坏Bを中心として、これに甕・壺・鉢などの器種が加わる。時期は奈良時代前半、8世紀前半でも中頃に近い時期を最終焼成とする窯と推測している。

さらに窯跡に隣接して西側で窯跡とほぼ同規模の溝状遺構を検出した。検出長6.0m、深さは0.3mで礫により埋没していた。遺物は出土していない。また里道面には地山土に似た土であるが、やや濁った土で埋め戻された落ち込みの痕跡を確認した。平面形は不明瞭であったが、埋め戻されたと考えられる土を除去すると、最終的に検出窯と同程度の規模の大きな落ち込みとなった。落ち込みの東側、窯の焚口に隣接する部分から須恵器片がまとまって出土しており、うち1点が窯の焚口整地層の須恵器片と接合した。落ち込みは東側での窯の操業時に掘削されたもので、使用されることなく埋め戻された痕跡と捉えている。

また焚口を挟んで東西で径0.2m、深さはわずかに0.1mが残るものであるが、ピットを1基ずつ検出した。焚口に覆いを設けていた可能性が考えられる。

第64図は窯跡出土の須恵器である。焼成部からはほとんど出土していないが、いずれも完形に近い形状は判明するものである。大半を占めるその他の須恵器は燃焼部と焚口付近で出土しており、ほとんどが破片の状態であった。

151～154は坏Aで、151・152はヘラケズリの痕跡があり底部は丸味を残す。154は口縁が内湾し、底部は平底を呈する。焼成は堅緻である。155～159は坏Bである。155の色調は暗青灰色を呈し、出土須恵器中、焼成部上位の断面②付近から2点のみ出土したものである。高台は幅がやや広く端部は丸みを帯びる。156～159も坏Bであるが、155に比べ高台は幅がやや狭く端部の作りはシャープである。器高はともに4cmで、口径は前者が15cm、後者が17cmである。161～163は蓋で、161は扁平なつまみが付く。162・163につまみがあったかは不明である。164は小型の高台付坏で器壁が薄く胎土は精良、焼成は良好である。166は壺の口縁部片、167は窯体片が融着した壺の胴部片である。器壁は薄い。165は蓋と考えられる破片、170は厚みのある底部で、壺を想定するが円盤状にはなっていない。



第 63 図 窯跡平・断面図



窯跡及び窯状遺構検出状況（南西から）



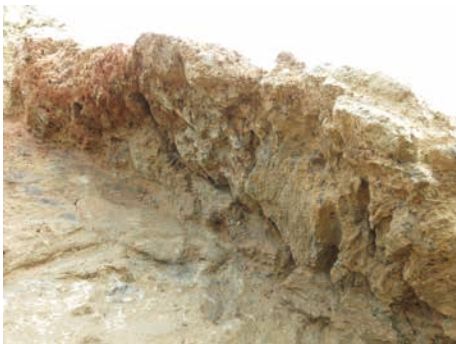
窯状遺構検出状況（南から）



最終窯西側壁 立ち上がりの状況



当初窯西側壁 礫での補修を想定



最終窯東側壁 木材芯痕跡



当初窯焼成部上部床面 断割り状況



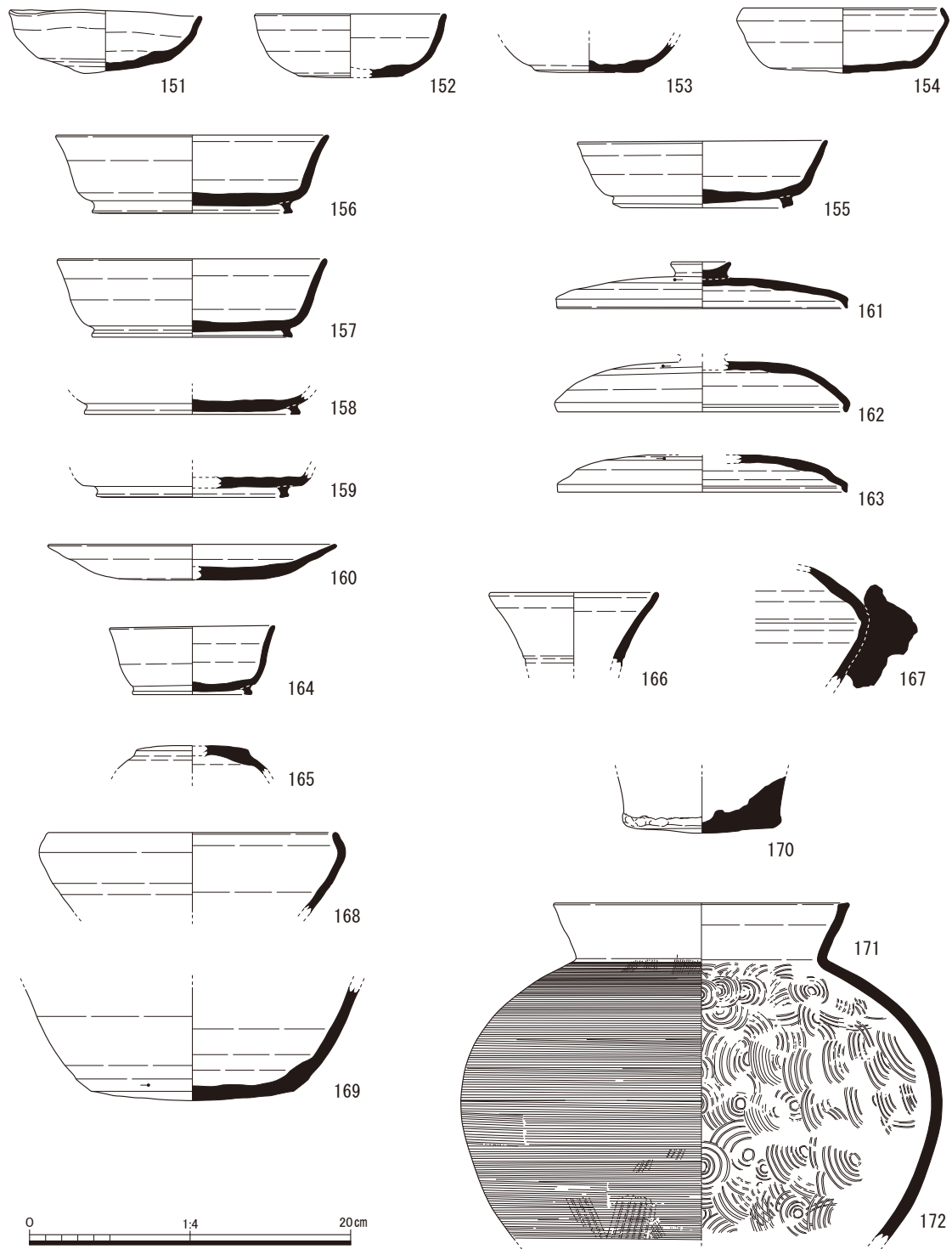
最終窯焚口東側壁 粘土貼り付け痕
(撫で付け?)



当初窯焚口床面 坏の融着状況

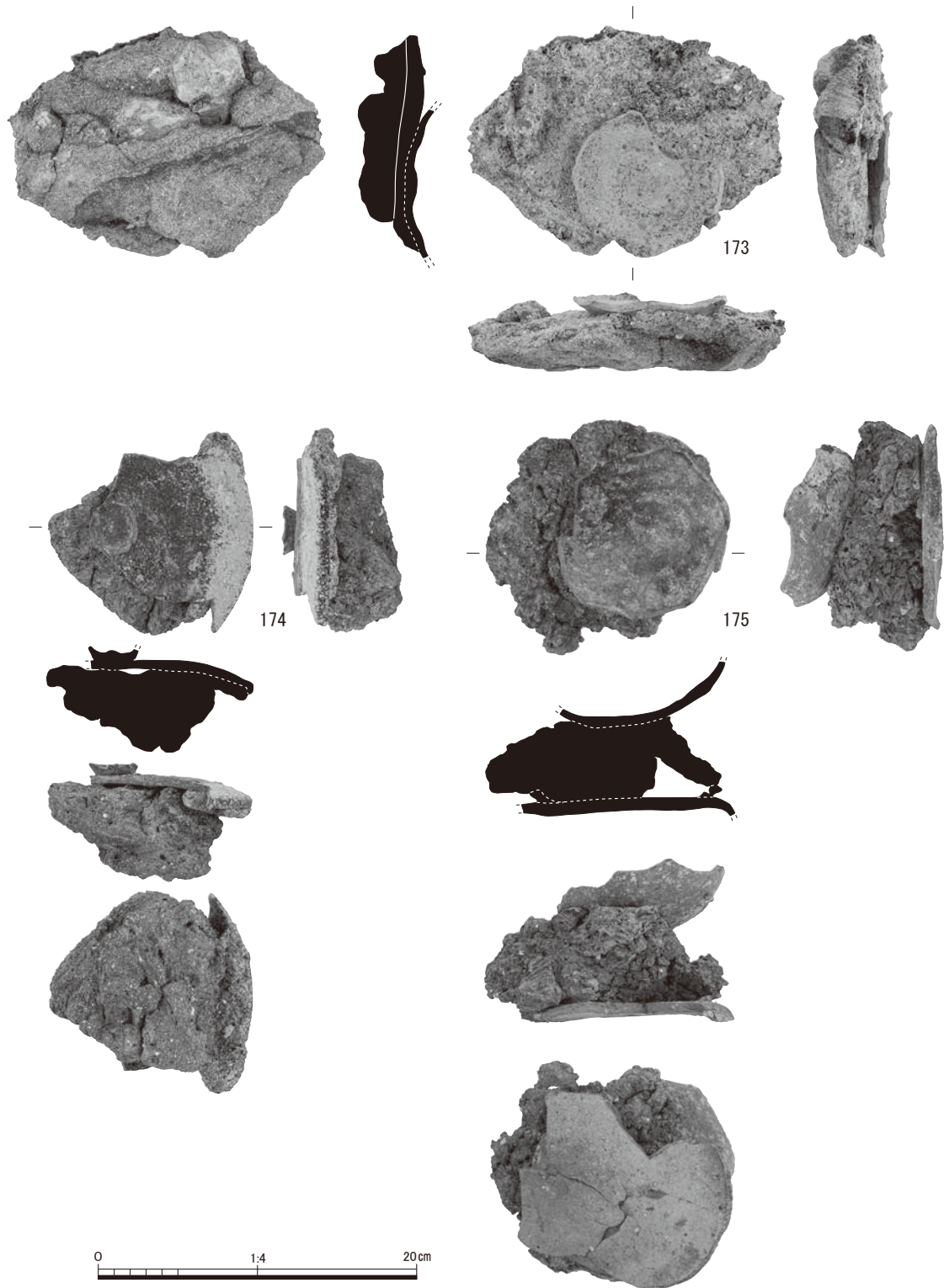
写真 20 窯跡諸相（窯の細部状況）

168 は鉢と考えられる口縁片、169 は大型の底部で壺または鉢であろう。甕は内面のあて具痕や外面のタタキ痕の様子から4個体以上残っているものと考えられる。焼け歪みの可能性があるが一部、横瓶を含むかもしれない。一様に歪みがひどく、同一個体と思われる171 口縁部と172 の胴部で復元を行ったが全体の形状のわかるものはほとんどない。



第64図 出土須恵器実測図

第 65 図は窯体に融着した須恵器片で、173 は地山還元層にヘラ削りが残る坏が融着する。そのほかの窯体片では古相の坏の対面、焼結層を挟んでやや形態的に新しいものと判断される坏類が融着する状況が窺える。



第 65 図 窯体片に融着した須恵器片実測図

第3章 分析・付論

1. 神戸市城ヶ谷遺跡窯跡出土須恵器の胎土分析

中園 聡・平川ひろみ・太郎良真妃・遠矢大士

はじめに

城ヶ谷遺跡（兵庫県神戸市西区櫛谷町菅野所在）で1基の窯跡が検出され、奈良時代の須恵器窯跡としては神戸市内で初めての発見となった。窯跡出土須恵器と遺跡内の関連資料を対象として蛍光X線分析による胎土分析を実施した。

これまでの蛍光X線分析で、全国の須恵器産地をカバーする規模での膨大なデータが蓄積されている（三辻 2013）。そのため、世界的にみて生産-流通システムの解明をはじめ考古学的諸課題への貢献に資する好条件を備えた極めて稀な状況にあるが、新発見あるいは未分析の窯の試料を分析しデータを整備していくことは、産地推定をするうえで最も基本的で重要なことである。そのような見地から、今回発見の窯跡試料について産地データとしての特性を明らかにすることと、それに付随して、遺跡内の蔵骨器・火葬墓に使用された須恵器の産地問題などを含む考古学的検討に資する知見を得ることを目指した。

試料

今回検出された窯跡は、出土須恵器の型式学的所見により奈良時代前半（8世紀前半）のもの判断されており、最終焼成は8世紀中頃と考えられている。分析試料は担当者によって出土資料中から選択されたもので、細部形態や焼きなどの観察がなされるとともに、以下の4つのグループに分類されて提供された（表4）。当初の試料数は総数70点であったが、グループⅢの16点中、地山土61は性質が異なる可能性が考えられる61a（地山土）、61b（焼結地山層）に分けて分析したため17点となり、総数71点を分析した。

グループⅠ：高台を持たない坏（坏A） 15点

グループⅡ：高台を持つ坏（坏B①＝高台端部甘い・坏B②＝端部シャープの2種） 30点

グループⅢ：Ⅱの坏B②と同時期と考えられるが器種などを含め詳細不明なもの（須恵器以外の窯体片、地山土試料を含む） 17点（うち須恵器10点）

グループⅣ：第2・3次調査の蔵骨器・火葬墓に用いられた須恵器と溝出土の須恵器 9点

以上のうちグループⅠ～Ⅲは、産地データを構成する本窯跡の須恵器である。ただし、グループⅢは、坏・蓋以外の器種、異質な特徴をもつ坏、窯体片、地山土である。グループⅣは、それらとの比較のために抽出されたものであり、蔵骨器・火葬墓、あるいは溝（壕状遺構）出土の須恵器は、同一遺跡内とはいえ厳密な意味で消費地データに該当する。

分析方法

土器類の産地推定法として実績がある三辻利一の産地推定法に準拠して分析した（三辻 1983、2013；三辻ほか 2013）。共同研究を通じて、三辻と筆者らのラボ間で分析値の一致を確認済みであり、これまでに蓄積されたデータと直接比較できる。

形態観察、写真撮影、肉眼と実体顕微鏡による簡単な胎土観察などの一般的な観察のうえ、適量をサンプリングした。分析は三辻の方法を基本とし、以下の手順で実施した。試料は定温乾燥器で105℃、2時間乾燥させた。試料表面を研削（自然釉等も除去）ののち、タングステ

ンカーバイド乳鉢で微粉碎し、リング法（内径 20mm、厚さ 5mm の PVC リング）で加圧成形（約 130kN）。鹿児島国際大学考古学実験室の波長分散型蛍光 X 線分析装置（リガク製 ZSX100e）を使用し、Rh 管球（管球出力 3.0kW）、分光結晶 RX25、LiF1、X 線出力 50kV、50mA、真空条件下で、Na、Mg、K、Ca、Ti、Fe、Rb、Sr の 8 元素を 1 元素あたり 60 秒間測定した。

ここで使用する値は、各元素の X 線強度（Net 強度）を、同時に測定した地球科学標準物質（岩石標準試料）JG-1 のそれで割った標準化値である。

分析結果と考察

本遺跡の全試料の分析データは表 4 に示している。須恵器試料の地域差を示すのに使用される K-Ca、Rb-Sr 分布図（第 66 図）を示す。その他、窯跡須恵器の各元素の平均、標準偏差、変動係数（表 5）と各元素の箱ヒゲ・Jitter 図（第 67 図）を示す。窯跡出土の窯体片や地山土など比較する消費地データは、第 66・67 図と一緒に示している。それらを含めて測定した 8 元素を総合的に検討し可視化するために、主成分分析（第 68 図）、クラスター分析（第 69 図）を実施した。なお、クラスター分析は、本試料群の分類をよく表現できると判断した標準化ユークリッド法とワード法によるが、距離の計算法、クラスター構成法の種類と組み合わせで結果が変化するため、分類結果は絶対的なものではないことに留意されたい。

この時期の須恵器は一般に、古墳時代のものより相対的にカロリーの低い焼成がなされることが多かったと思われるが、窯跡に残された資料の場合は変異が大きい。本窯跡にも砂礫の変質が進んでいない軟質のものから、一部の無色鉱物にも融変・発泡が及び胎土のガラス化が進んだ硬質のものまで幅がある。含まれる砂礫は白色・無色透明粒子が主体で、融変・発泡した少量の黒色粒もしばしば見られる。少量のチャートを含むものもあり、本地域の地質的背景と矛盾しない。なお、焼成温度・焼成雰囲気分析値にほとんど変化を与えないことは実験的に確かめられており（三辻 et al. 1978）、筆者らも確認している。

窯跡試料

本窯跡の試料について述べる（一部西側窯状遺構の試料を含む）。須恵器（グループ I～III）は第 66 図のように集塊をなす。かなり左に寄っており、Ca、Sr 値が全国の産地の中でも小さい部類に属す。K 値もやや小さい。分散の程度については、1 つの窯跡として概ねよくまとまっており（第 66 図の 95%等確率楕円、表 5）、固有の化学特性を示す。このような化学的特徴は、本遺跡のある播磨東南部の古墳時代の須恵器から中世の東播系須恵器の産地データに概ね共通する傾向といえる。筆者らの分析データでは、窯だけでなく本遺跡の南南西約 2km にある白水瓢塚古墳（前期前方後円墳）の野焼き焼成の埴輪にも比較的類似している。以上から、本窯跡の須恵器はこの地域に広がる地質的背景を反映していると推測される。

子細に見ると、第 66 図の窯跡出土須恵器については、集中部からやや右（Ca > 0.05、Sr > 0.2）に多少ずれて分布する試料があることがわかる（第 69 図の左端のサブクラスター 1a に該当）。そこに布置された試料はグループ II に属するものが目立つが、グループ II は試料数が多いことに加え、その大部分は左側の集塊部分に布置されグループ I の中心と大きく重なっていることを重視すべきであろう。もしグループ I より II が新しいとすれば、後者で Ca、Sr 値がわずかに大きい素材が使用されることもあったことになるが、軽微な差であり、むしろ素材の主体は変化しておらず本質的にグループ I と II は同質とみなすことができる。なお、グループ II に含まれ細部形態等の差で分類された、坏 B①（23・31・39）と坏 B②（それら以外のグルー

プⅡ)の間でも分析値に違いは見いだせず、両者で同質の胎土が共有されていると考えられる。

また、グループⅢに分類された試料については、集塊部分と大きく重なりながらもK、Rb値が僅かに大きく見える。ただし、グループⅠ・Ⅱ以外というカテゴリーであり、共通した特徴をもつ試料からなるカテゴリーではないことに注意が必要である。器種による砂礫の配合の差などに起因する可能性も考えられるが、本グループに一部含まれる坏のK、Rb値も同程度である。総合的にみて、やはりグループⅢもグループⅠとⅡとの同質性をもつと判断でき、本窯跡の産地データに統合して用いるのが適当である。

本窯跡に隣接する西側窯状遺構の須恵器(13・14、42～44、54・55)は、いずれも第66図の集中部に該当しており、他の元素を含め同質とみてよい。これは西側窯状遺構の須恵器が接合関係等から本窯跡に由来するという調査所見を支持しており、産地データとして本窯跡を扱うにあたってこれらの試料も含めて扱うことができる。

なお、グループⅠ～Ⅲはクラスター分析でも混在しており、以上の検討と矛盾しない(第69図のクラスター1)。本窯跡の須恵器試料中には、一度に調整された同一の素地土を用いたものが含まれている可能性がある。例えば、分析値がかなり類似している1～3(坏)はその候補となろう。

本窯跡では、調査時の層位学的所見から操業にある程度の時期幅の存在が推定されているが、以上の結果から須恵器の素材は操業期間中、基本的に同一の採取地が維持され続けた蓋然性が高いであろう。時期差や器種等による胎土の差は以上のように不明瞭であるほか、製作者間の差の可能性も考えられる細部形態等の差に対応する胎土上の差は、試料数の問題もあるが看取できなかった。同時期または操業期間中に複数の製作者が関わった蓋然性が高いと考えられるが、その場合、今回の分析からは同一の素材が製作者間で共有される状況にあり、時間的にも同一の採取地が引き継がれたと考えられよう。

窯体(窯壁)片と地山土については、窯体片56～59は須恵器に融着した試料であり、うち56のみ西側窯状遺構出土である。いずれも1.5mm以下の主に白色・無色透明粒子が目立ち、表面はガラス化や融変・発泡も観察されるが、内部はさほど硬質ではない。56を含むいずれも、本窯跡の須恵器と比較して、地域差を示す因子として知られる4元素のK、Ca、Rb、Sr値が高めという共通した化学的特徴をもち、須恵器とは差があった。スサ入りのため4元素の値には植物に濃縮された元素が上乘せされた可能性なども考えられるが、スサを含まない第1次地山焼結層試料60(基本的に砂礫が少なく粒度が微細、中空の褐鉄鉱「高師小僧」を微量含む)や、地山土試料61a・61bの分析値と傾向が類似している。したがって、影響があったとしてもさほど大きくないと考えられる。これら3点の地山土は相互に分析値が近く、4点の窯体片とも類似しているため、窯体片は地山土に由来しスサ等を加えて塗り付けた可能性も考えられよう。

蔵骨器・火葬墓等試料

第2・3次調査地点の「消費地データ」であるグループⅣの試料群(62～70)は、窯体片64を除き主に蔵骨器・火葬墓に用いられた須恵器であり、溝出土の須恵器を一部含む。試料のうち本窯跡との距離が最も近いのは北東約130mの62(甕)で、その他も本窯跡から北と東へ350～300m程度の範囲にあり、焼け歪みのある須恵器甕を蔵骨器とした例や、蔵骨器の埋納に窯体片を据えたものがあることなど、本窯跡との関係が考えられた。調査者の所見では、蔵骨器に使用された壺と十分な比較が可能な資料は本窯跡から出土しておらず、奈良時代前半でも本窯跡の須恵器よりやや古相を示すのではないかとされた。

62・63、65～70の8点の須恵器のうち、総合的にみて62（甕）、65～67（壺）、69（蓋）の5点は本窯跡試料と異なる化学特性を示し、異質である（第66～69図）。遺跡外から持ち込まれた可能性が高いと考えられる。これらのうち66・67（3次ST302）は、同一遺構に納められた2個体の壺で、分析値から判断して両者は同一産地としてよいが、同時に調整された素地土といえるほどの類似度を示さず、同時・連続製作品ではないことは明らかである。一方、63（蓋）、68（蓋）、70（坏）の3点は本窯跡試料と類似した化学特性を示した。これら3点は本窯跡で生産された可能性が考えられるが（第66・69図）、第66図ではいずれも試料分布のごく周辺部に布置され、95%等確率楕円からもやや外れるため本窯跡の製品であると即断できない。遺跡外からの持ち込みとも考えられるが、類似度から判断すると、まずは本遺跡内に未発見の窯が存在する可能性を想定する必要があるだろう。3点の試料の時期が本窯跡の操業期間とずれる可能性があるとするれば、なおさらである。

なお、グループIVの本窯跡資料と異なる化学特性を示す須恵器試料は、クラスター分析では第69図の右側に本窯跡の窯体片などとともにクラスターを構成しており（クラスター2）、上述の判断と調和する。また、同図のデンドログラム（樹状図）でそれらの須恵器試料は、本窯跡の試料が短い距離で結合するのに対し、長い枝で構成されていることから、個体相互で胎土の類似度が低いことがわかる。これは生産地を離れた個体では自然なありかたといえよう。

遺跡外から持ち込まれたとみられるそれらの試料の産地については、播磨南部は須恵器生産遺跡の稠密地帯であり、地質的条件と相まって、産地ごとの胎土の領域が重なりながら連続的に変化していることを考慮する必要がある。本窯跡試料はそうした全体的傾向に従いつつ、その中でもCa、Sr値がとりわけ小さいため、本窯跡の試料集団、とくに第66図の集塊部分は他の産地と比較的明瞭に区別できる。本窯跡以外とみられる試料の産地候補は、本遺跡に近く、かつ想定される時期に操業されたものが条件となる。そうした条件を備えた既知の産地に西北西約5.5kmの明石市高丘窯跡群がある。第66図に示した高丘窯跡群の領域と比べると5点ともほぼ高丘領域と重なっており、高丘窯跡群産として矛盾がない。別のより遠い産地との領域とも重複があるため5点が別々の産地であることも考えられるが、5点の分布をほぼカバーし最もシンプルに説明できるため、最有力候補といえよう。今後周辺の窯跡データとの精密な比較を行い、個体ごとの産地推定を実施する必要があるだろう。

窯体片64（2次ST1003）は、本窯跡から東へ300m余り離れた地点で土師器甕を容器とした蔵骨器の下に枕状に据えられていたもので、他の試料と同様、スサ入りである。本窯跡の窯体片（56～59）や地山土（60・61a・61b）に類似した化学特性を示すが、よりK、Ca値が高くSr値もやや高いなど同一とは言いがたい。しかし、この程度のずれは、遺跡内に本窯跡と地点が多少ずれた未発見の窯があるとすれば、それに由来することが十分考えられる。ただし、窯体片が地山土由来の場合、比較的均質になると想定されるが、地山の層ごとの元素の水平・垂直的変異のあり方によっては、現在のところ本窯跡のものである可能性も捨て去ることはできない。この窯体片を据えた蔵骨器に用いられた蓋63は、胎土からみて本窯跡の製品としてもさほど矛盾はないが、年代差がある場合は同様な素材を使用する別の窯が存在した可能性を想定すべきであることは前述のとおりである。このような問題は、別の窯の存在の有無や葬送行為実施者の行動などにも関係するため、蛍光X線分析だけでなく年代や本窯跡周辺の諸状況などから総合的に判断されるべきであろう。

おわりに

今回の分析で、本窯跡の須恵器が播磨東南部の化学特性をもちつつも、固有の特徴ある産地データを示すことが明らかになった。製品の流通範囲の解明などは今後の課題であるが、該期の消費地遺跡の資料の産地を検討する際に参照する対象が増え、より精度の高い議論をするための基礎が得られたことは成果といえよう。形態等のカテゴリー分け、時期差や製作者（工人）に対応するような胎土の微差は検出できず、カテゴリー間での胎土の同質性、すなわち製作者間での素材の共有と継承がなされた可能性が示唆されることとなった。また、本遺跡内の蔵骨器・火葬墓等の須恵器についても産地を検討するとともに、検討の過程で本遺跡内に未発見の窯がある可能性も考えられるに至った。さらに、従来問題になることが少なかった窯体（窯壁）や地山土についても、一定の所見を得ることができた。

以上の成果は、三辻によるこれまでのデータの蓄積と、本遺跡資料で系統的にサンプリングが行われたことによって可能になったものであり、このような例を今後も積み重ねていく必要がある。

謝辞

試料の分析・検討にあたり、神戸市文化スポーツ局文化財課、中村大介氏、藤井太郎氏のご高配を得た。深く感謝いたします。なお、本研究はMEXT 科研費 JP19H05733 により実施し、記録と技術的観点等においてはJSPS 科研費 JP21K13139 および JP20K01100 を応用した。

文献

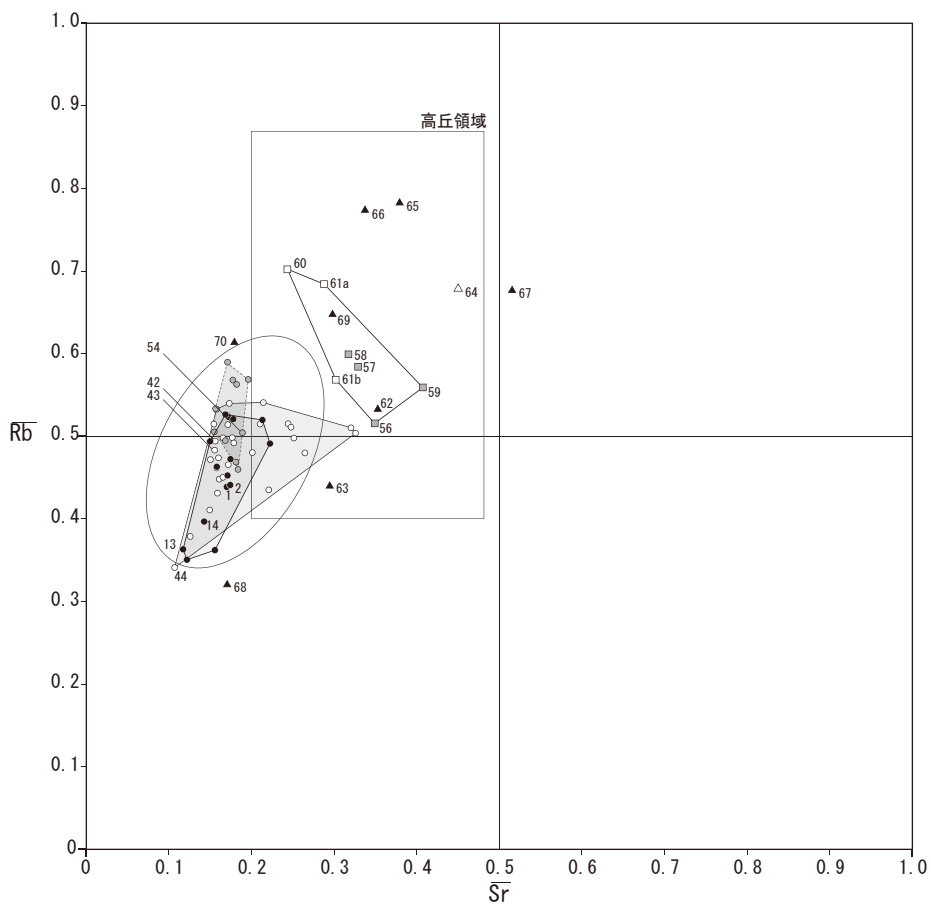
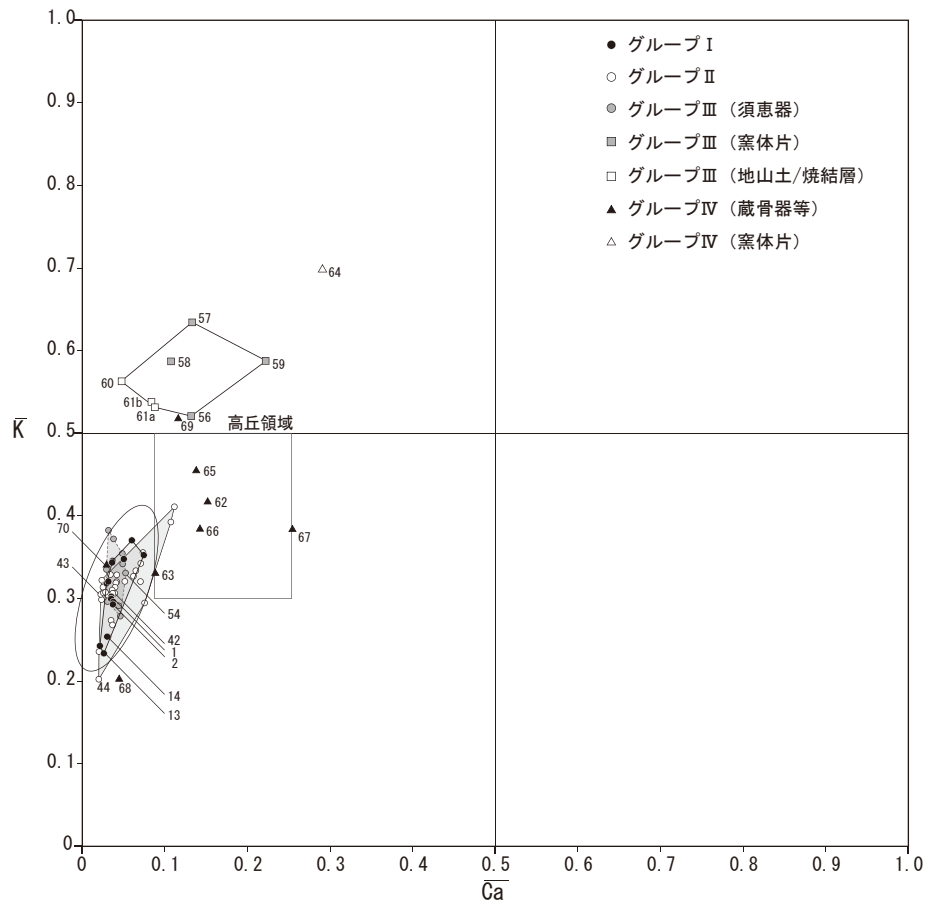
- 三辻利一 1983『古代土器の産地推定法』ニュー・サイエンス社。
三辻利一 2013『新しい土器の考古学』同成社。
三辻利一・中園 聡・平川ひろみ 2013「土器遺物の考古学的研究」『分析化学』62 (2) : 73-87。
三辻利一・脇田宗孝・円尾好宏・喜多孝行・新浜夕起子 1978「土器遺物の考古学的研究」『古文化財教育研究報告』7 : 51-59。

(中園：鹿児島国際大学教授、平川：奈良文化財研究所客員研究員 / 同大学非常勤講師、太郎良：同大学研究員、遠矢：同大学院博士前期課程)

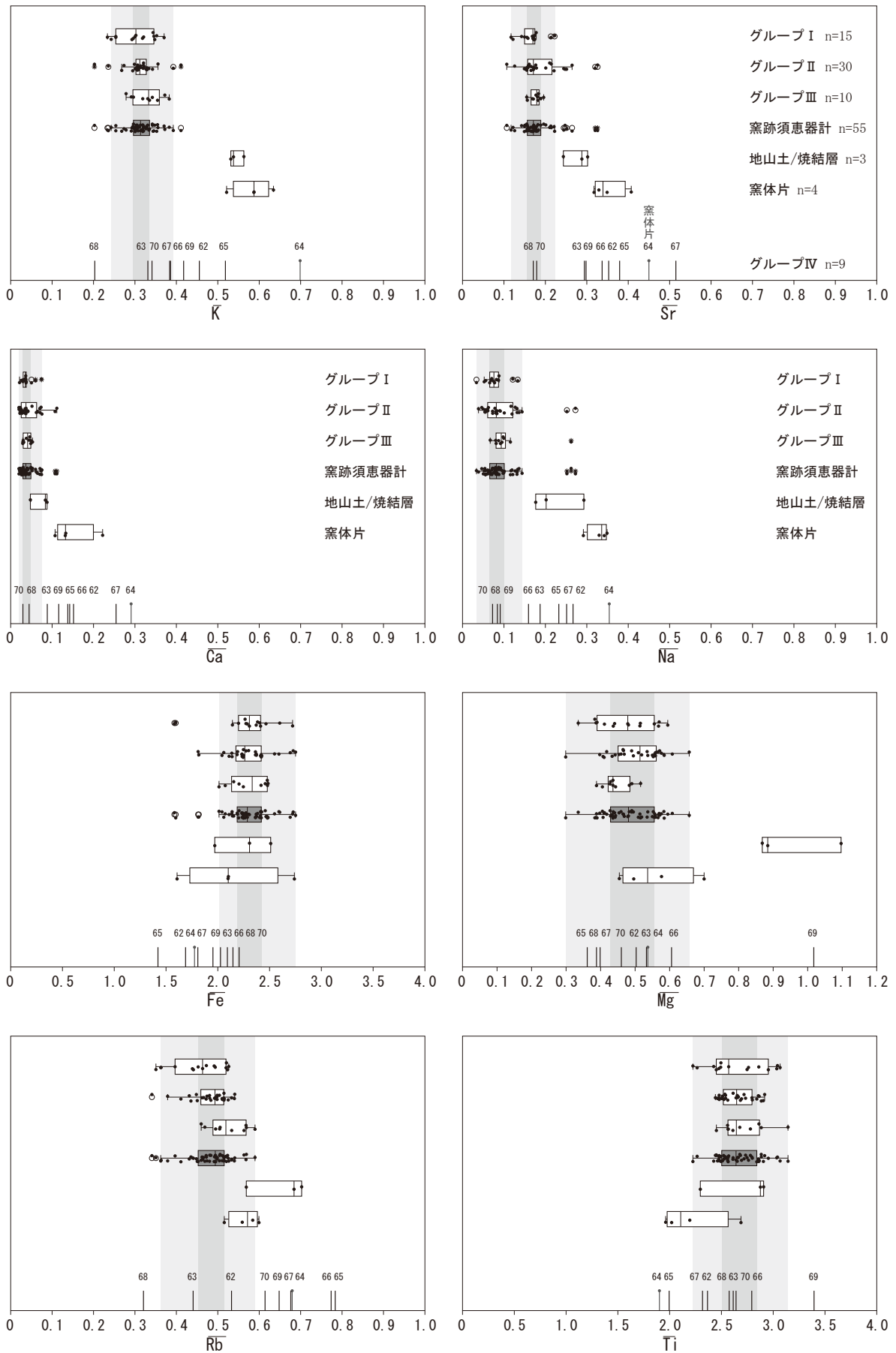
表4 胎土分析試料とデータ

No.	R 番号	グループ	種類	出土層位・位置 (第2・3次は遺構名)	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	Mg	Ti	備考
1	420	I	坏	燃烧部上層ガラ (西半)	0.296	0.038	2.37	0.439	0.170	0.052	0.595	3.03	
2	434	I	坏	燃烧部下層ガラ (東半)	0.293	0.037	2.31	0.441	0.174	0.066	0.568	2.95	
3	434	I	坏	同	0.302	0.035	2.38	0.472	0.174	0.071	0.570	3.04	
4	434	I	坏	同	0.318	0.030	2.14	0.463	0.158	0.076	0.481	2.48	
5	440	I	坏	焚口黄色砂 (断面)	0.370	0.060	1.58	0.520	0.213	0.133	0.411	2.27	
6	449	I	坏	焚口黄色砂面 No. 周辺閉塞内外	0.300	0.035	2.20	0.453	0.171	0.071	0.515	2.86	
7	449	I	坏	同	0.254	0.031	2.29	0.362	0.156	0.056	0.555	3.07	+R-419
8	449	I	坏	同	0.321	0.032	2.27	0.494	0.150	0.087	0.441	2.49	
9	438	I	坏	焚口炭層下層 (最下層)	0.348	0.050	2.41	0.524	0.172	0.077	0.437	2.45	
10	451	I	坏	焚口炭層下層 (最下層堅緻層)	0.243	0.021	2.72	0.351	0.122	0.034	0.514	2.75	
11	451	I	坏	同	0.346	0.037	2.40	0.526	0.168	0.082	0.387	2.43	
12	451	I	坏	同	0.344	0.036	2.26	0.521	0.178	0.088	0.383	2.50	
13	473	I	坏	西側窯状遺構	0.234	0.026	2.47	0.363	0.117	0.068	0.479	2.76	
14	473	I	坏	同	0.254	0.030	2.60	0.397	0.143	0.083	0.335	2.57	+窯体片 No. 56
15	432	I	坏	焼成部口上部 西壁際崩落土	0.352	0.074	1.59	0.491	0.222	0.121	0.390	2.22	+窯体片 No. 57
16	420	II	坏	燃烧部上層ガラ (西半)	0.356	0.073	2.30	0.541	0.214	0.127	0.466	2.53	+窯体片 No. 58
17	420	II	蓋	同	0.313	0.025	2.06	0.474	0.160	0.050	0.559	2.51	
18	433	II	蓋	燃烧部上層ガラ (東半)	0.411	0.111	1.81	0.504	0.326	0.273	0.535	2.48	
19	421	II	坏	燃烧部下層黄色砂 (西半)	0.321	0.051	2.25	0.515	0.210	0.117	0.465	2.61	
20	430	II	蓋	燃烧部下層黄色砂 (断面)	0.334	0.065	2.37	0.515	0.244	0.144	0.550	2.69	
21	434	II	蓋	燃烧部下層黄色砂 (東半)	0.307	0.039	2.19	0.492	0.178	0.082	0.397	2.54	
22	437	II	蓋	焚口黄色砂貼り土	0.393	0.107	1.82	0.510	0.320	0.252	0.519	2.50	+窯体片 No. 59
23	449	II	坏	焚口黄色砂面 No. 周辺閉塞内外	0.303	0.024	2.04	0.472	0.150	0.054	0.537	2.52	
24	449	II	坏	同	0.320	0.042	2.36	0.540	0.173	0.080	0.442	2.46	焼け歪み
25	449	II	蓋	同	0.310	0.036	2.55	0.466	0.172	0.061	0.557	2.66	
26	438	II	坏	焚口炭層下層	0.301	0.026	2.25	0.411	0.149	0.055	0.584	2.84	焼成不良
27	438	II	蓋	同	0.342	0.071	2.42	0.511	0.248	0.136	0.495	2.48	焼け歪み
28	451	II	蓋	焚口炭層下層 (最下層堅緻層)	0.308	0.028	2.24	0.515	0.155	0.081	0.407	2.56	焼成やや甘い 歪み?
29	451	II	蓋	同	0.320	0.070	2.36	0.480	0.264	0.131	0.567	2.65	
30	451	II	坏	同	0.327	0.062	2.41	0.498	0.251	0.132	0.559	2.52	
31	451	II	坏	同	0.319	0.041	2.42	0.481	0.201	0.073	0.583	2.73	焼成やや甘い
32	451	II	坏	同	0.322	0.024	2.14	0.498	0.166	0.055	0.576	2.66	
33	427	II	蓋	焚口外作業面2→1の間 (整地土)	0.236	0.020	2.70	0.379	0.126	0.060	0.509	2.86	かえりほぼなし
34	442	II	蓋	焚口外作業面2→3の間 (盛土)	0.305	0.030	2.37	0.533	0.158	0.083	0.469	2.64	重ね焼き痕
35	424	II	坏	焼成部上部西側堆積層	0.329	0.034	2.11	0.525	0.171	0.101	0.434	2.80	内側灰かぶり
36	435	II	坏	焼成部中央赤色崩落層	0.274	0.035	2.75	0.431	0.159	0.039	0.657	2.86	焼成不良

No.	R 番号	グループ	種類	出土層位・位置 (第2・3次は遺構名)	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	Mg	Ti	備考
37	441	II	坏	烧成部中央舟底状部堆積	0.307	0.026	2.23	0.462	0.158	0.061	0.608	2.79	烧成不良
38	441	II	蓋	同	0.307	0.037	2.19	0.499	0.177	0.078	0.418	2.54	烧成やや甘い
39	450	II	坏	烧成部1次床面(上段畦南)	0.295	0.075	2.25	0.435	0.221	0.119	0.410	2.89	完形+1/2の2点のみ出土
40	453	II	坏	烧成部崩落土・床直	0.299	0.023	2.27	0.448	0.161	0.063	0.571	2.72	烧成不良
41	452	II	坏	烧成部口黄色粘土(床面材除去中)	0.329	0.042	2.23	0.514	0.171	0.091	0.454	2.47	焼け歪み
42	473	II	蓋	西側窯状遺構	0.313	0.040	2.59	0.494	0.156	0.090	0.459	2.44	灰かぶり
43	473	II	坏	同	0.305	0.022	2.14	0.483	0.155	0.073	0.553	2.68	烧成やや甘い
44	423	II	坏	同	0.202	0.020	2.73	0.341	0.107	0.046	0.490	2.92	
45	419	II	蓋	里道面窯跡検出時	0.268	0.037	2.42	0.450	0.165	0.083	0.299	2.91	器壁うすい 精良・堅緻
46	421	III	坏	燃烧部下層黄色砂(西半)	0.342	0.049	2.21	0.569	0.196	0.087	0.428	2.88	坏I? 内湾 焼け歪み?
47	421	III	壺口縁	同	0.319	0.030	2.48	0.495	0.168	0.116	0.436	2.56	内釉
48	449	III	坏	焚口黄色砂面 No. 周辺閉塞内外	0.291	0.044	2.49	0.469	0.181	0.067	0.516	3.14	坏I? 器高低 高台?
49	449	III	壺胴部	同	0.372	0.038	2.15	0.568	0.177	0.100	0.429	2.56	精良・堅緻
50	449	III	壺胴部	同	0.335	0.029	2.25	0.534	0.156	0.081	0.443	2.61	
51	451	III	壺	焚口炭層下層(最下層堅緻層)	0.279	0.046	2.48	0.460	0.183	0.098	0.436	2.86	
52	451	III	壺口縁	同	0.383	0.032	2.07	0.590	0.171	0.095	0.388	2.56	焼け歪み
53	429	III	鉢	燃烧部断面(黒ガラ)	0.355	0.048	2.01	0.563	0.182	0.092	0.405	2.45	燃烧部上層
54	473	III	坏	西側窯状遺構	0.331	0.053	2.42	0.504	0.189	0.262	0.483	2.78	坏 ナデ?沈線?焼け歪み
55	473	III	壺?	同	0.296	0.030	2.46	0.506	0.155	0.080	0.490	2.68	精良・堅緻
56	473	III	窯体片	同	0.521	0.132	1.61	0.516	0.349	0.292	0.496	2.02	No. 14 試料に融着
57	432	III	窯体片	烧成部口上部西壁際崩落土	0.634	0.133	2.10	0.584	0.329	0.349	0.577	2.19	No. 15 試料に融着
58	420	III	窯体片	燃烧部上層ガラ(西半)	0.587	0.107	2.74	0.599	0.317	0.342	0.700	2.69	No. 16 試料に融着
59	437	III	窯体片	焚口黄色砂貼り土	0.588	0.222	2.10	0.559	0.407	0.330	0.454	1.96	No. 22 試料に融着
60	476	III	土壁	烧成部上段畦上 東側壁	0.563	0.048	2.31	0.702	0.243	0.202	0.868	2.91	第1次地山焼結層
61a	—	III	地山土	烧成部上段畦	0.531	0.088	1.97	0.684	0.288	0.177	0.884	2.30	剥ぎ取り断面土壌サンプル
61b	—	III	地山土	烧成部上段畦	0.538	0.084	2.51	0.569	0.302	0.293	1.097	2.88	61a 直近の焼結地山層
62	第2次	IV	壺底部	9区-4 ST02	0.418	0.152	1.69	0.533	0.353	0.267	0.503	2.37	実測図⑧ R-213
63	第2次	IV	蓋	10区-4 ST1003	0.331	0.088	2.03	0.440	0.294	0.187	0.534	2.61	実測図⑥ R-331
64	第2次	IV	窯体片	10区-4 ST1003	0.699	0.291	1.78	0.680	0.450	0.354	0.537	1.90	蔵骨器下位枕状出土 R-337
65	第3次	IV	壺	6区-5 ST301	0.455	0.138	1.42	0.783	0.379	0.232	0.361	2.00	実測図① R-231+R-324
66	第3次	IV	壺	5区-3 ST302	0.385	0.142	2.09	0.774	0.337	0.159	0.606	2.79	実測図⑥ R-432
67	第3次	IV	壺	5区-3 ST302	0.384	0.254	1.81	0.677	0.515	0.251	0.399	2.32	実測図⑦ R-430
68	第3次	IV	蓋	5区-3 SD303-3区S(2層)	0.203	0.045	2.15	0.321	0.171	0.084	0.388	2.57	実測図④ R-425
69	第3次	IV	蓋	5区-3 SD303-2区N(1層)	0.518	0.116	1.95	0.648	0.298	0.091	1.018	3.39	R4 整理 R-426
70	第2次	IV	坏	9区-3 乳色砂礫流土 R-162	0.341	0.029	2.21	0.614	0.179	0.073	0.460	2.64	実測図② No. 39 対比



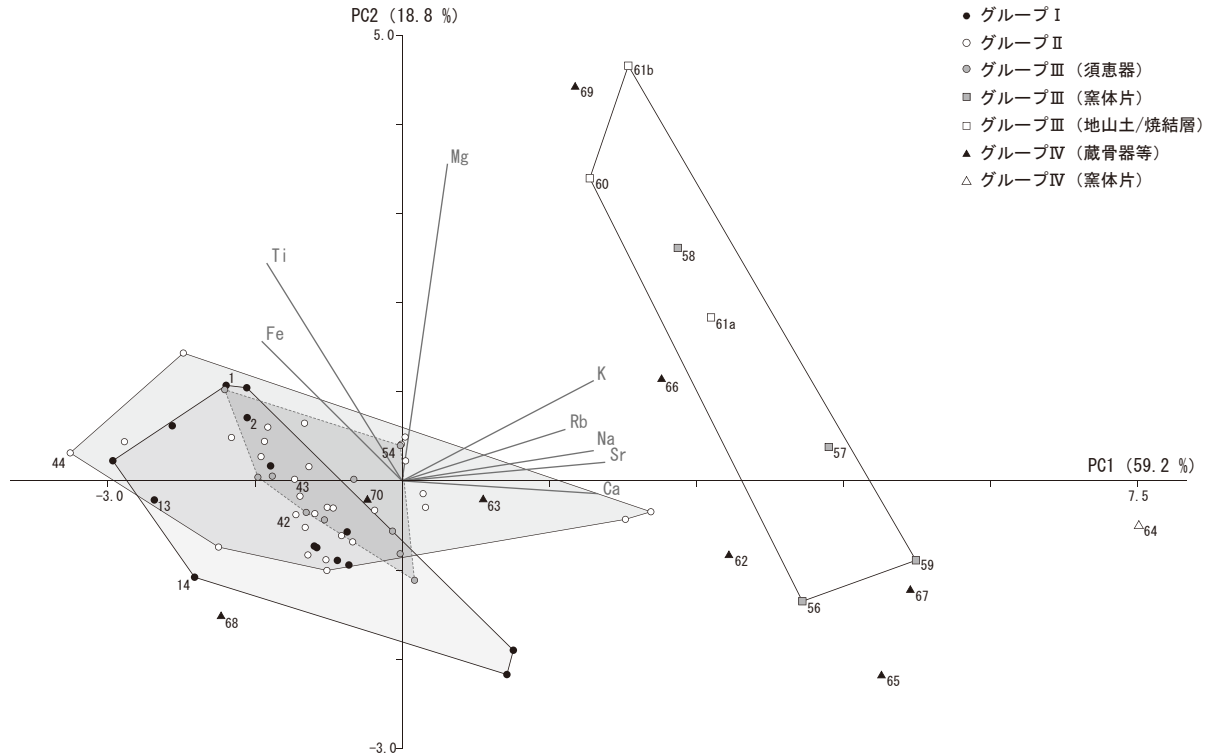
第 66 図 K-Ca、Rb-Sr 分布図



第 67 図 元素ごとの比較

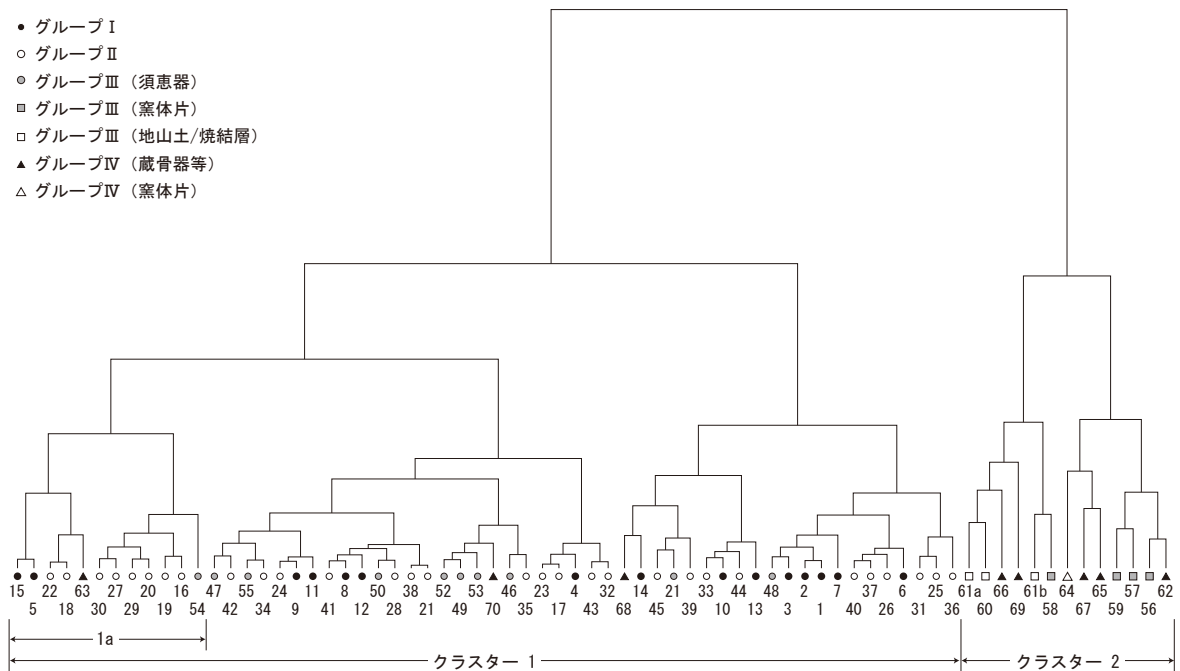
表 5 城ヶ谷遺跡窯跡出土須恵器データの要約

	Na	Mg	K	Ca	Ti	Fe	Rb	Sr
平均 n=55	0.093	0.484	0.314	0.042	2.66	2.29	0.482	0.180
標準偏差	0.048	0.076	0.039	0.020	0.20	0.24	0.055	0.042
変動係数 (%)	51.94	15.59	12.58	47.17	7.61	10.61	11.46	23.48



第 68 図 主成分分析

- グループ I
- グループ II
- ◎ グループ III (須恵器)
- ◻ グループ III (窯体片)
- グループ III (地山土/焼結層)
- ▲ グループ IV (蔵骨器等)
- △ グループ IV (窯体片)



第 69 図 クラスタ分析

2. 眺望分析、遺構・遺物の特質からみた『青谷・城ヶ谷集団』

森岡秀人（公益財団法人古代学協会）・宇佐美智之（京都芸術大学）

1. 「青谷・城ヶ谷遺跡」の呼称の提唱と意図

神戸市西区の丘陵上に所在する青谷遺跡（191）と城ヶ谷遺跡（277）は、従来個別に周知されている著名な高地性集落遺跡である（遺跡番号は、神戸市 2022 に拠る）。今般、第4次の発掘調査を実施した神戸市からの協力依頼により、城ヶ谷遺跡の立地要件として筆頭にのぼる良好な眺望、優れた可視領域と遺跡の持つ時期的消長や様相にみられる特質について、相互の絡み合いに意味を求めた二、三の考察を行い、高地性集落出現の地域的な意義を問う。幸いにも西神地区は多くの調査担当者の勧めもあって、過去かなりの数の遺跡・地点の発掘現場を随時実見しており、蓄積をみた現地所見や調査指導・助言事項を有効に活用し得る。

以下に示す基礎的考証に加え、宇佐美智之による眺望域の分析、眺望・立地傾向の評価（本稿2・3）を顧慮すれば、青谷遺跡と城ヶ谷遺跡を併せ、広域に捉え直してみることも一案と考え、付論である小稿では、仮称ながら「青谷・城ヶ谷遺跡」ないしは「青谷・城ヶ谷高地性遺跡群」と呼ぶことにした。また、高所立地の同一志向性と土器様相の一部共時性に鑑み、文脈の中では後述するように「青谷・城ヶ谷集団」と記すこともある。あくまで暫定的な認識とする。両遺跡は、明石川の支流である下手の伊川と上手の櫛谷川の間には挟まれた丘陵地形に存在することで共通し、広域に続く類似した地貌に展開し、伊川以東、櫛谷川以西の丘陵上の高地性集落とは立地の明確な区分が可能である。また、過去の発掘調査資料や表面採集資料に基づく遺跡の消長を微細に検討すると、両遺跡が中期最末～後期前葉という盛行期が捉えられる点で概ね一致し、伊川以東、櫛谷川以西の高地性集落が中期後半を盛期として、後期に存続しない点でも大きな違いの合致をみる¹⁾。この点を踏まえると、神戸市西区の表山遺跡は青谷・城ヶ谷集団の居住域からおよそ1.5km南東方向に離れており、同一グループ視することにより躊躇いを覚えるが、伊川西岸の丘陵尾根部を占地しており、伊川東岸の丘陵上に位置する頭高山遺跡、久留主谷遺跡が第IV様式の末までにおいて終焉を遂げるのに対し、第V様式前葉（第1・2小様式）に盛行期を置いており、青谷・城ヶ谷の集団の隆盛期ともオーバーラップする。つまり、遺跡の消長を重視すれば、その存在は伊川以西、櫛谷川以東の集団に埋没する同年代軸上の位置にあり、とくに終焉が軌を一にするといった親縁性が認められるのである。さらに城ヶ谷と表山は環壕や通路状塹壕を随伴させる点において、広い播磨では特筆される構造施設の類似性が指摘できる。それは性格や機能まで包摂する近縁的集団の存在を示唆する。表山遺跡には宇佐美が提示した眺望の優位性も周辺の高地性集落と一線を画して備わるので、この領域の集団関係の緊密性と連関原理の存否へ向けた検討を深化させる必要がある。加えて、遺物の面では青谷遺跡の近畿最古の弥生小形重圈文系擬銘帯仿製鏡、九州系磨製石戈、表山遺跡の九州産弥生小形内行花文系仿製鏡の突出した存在がある点にも注意を促したい。（森岡）

2. 眺望分析の概要と城ヶ谷遺跡・青谷遺跡の眺望域

高地性集落の眺望については従来様々な観点から検討されてきたが、具体化しにくい対象であるがゆえに、その良し悪しを記述するにとどまる場合も少なくなかった。遺跡ごとの眺望の差異や特徴をより客観的に評価することができれば、それらの性格理解を深める上で有益な情報が得られるはずである。

GIS（地理情報システム）の眺望分析（可視領域分析：Viewshed Analysis）は、この課題に対する有効な手法として挙げられるものである。この分析では、地表起伏の情報から観測位置（観測者）の高さと周囲の高さとの差を計算し、360度の可視・不可視を判定した上、眺望可能な範囲を図化する。眺望分析の詳細や考古学での研究事例に関しては、次の文献を適宜参照されたい（Wheatley and Gillings 2002, 宇野編 2006, 宇佐美 2021a・bほか）。

ここでは、地表起伏の情報として国土地理院の基盤地図情報（10mメッシュ）を使用することとし、人の目線の高さとして標高値+1.5mを設定した上、城ヶ谷遺跡および青谷遺跡（両遺跡ともに最高所）からの最大距離20kmの眺望域を示している（第70・72図）。

またこの眺望分析図をもとに、5つの距離帯（0-4km, 4-8km, 8-12km, 12-16km, 16-20km）と8方位を区分し、出現頻度値を再分類することで、距離帯・方位別に眺望の集中傾向を表現した（第71・73図）。凡例は、各方位・距離帯（観測地点からの同心円と8方位・45度間隔の線で囲まれた範囲）に占める眺望域の割合で、眺望の集中度が高いエリアほど濃色で示される。

なお紙幅の都合上補足的な説明にとどめるが、眺望分析の利用には技術的な問題や限界が伴うため注意も必要である（宇佐美 2021a・bほか）。ひとつは分析に使用した地表起伏の情報（基盤地図情報）が現地地形データであることである。本稿では利用可能な昭和30年代の1万分1地形図をジオリファレンスでGISに格納した後、眺望分析図と重ねあわせて結果の妥当性を確認したが、必ずしも十分な手続きではない。また、上記の最大距離20kmという設定基準に関しても、遠方の対象がどの程度視認しえたかは検証が難しく、あくまで暫定的なものである²⁾。このように現時点で解決しがたい問題点や仮定が含まれており、正確な眺望域の復元には至らない。しかし一方、現実にある場所が視認できたか否かについては判断が困難でも、第71・73図のようにこの分析を応用すれば、どのような場所への視認を指向したかについては定量的に把握し、遺跡間で比較できるであろう。この方法は一例に過ぎず、問題点や限界を考慮しつつこうした活用法をめぐる議論を発展させることが今後必要であると考えている。

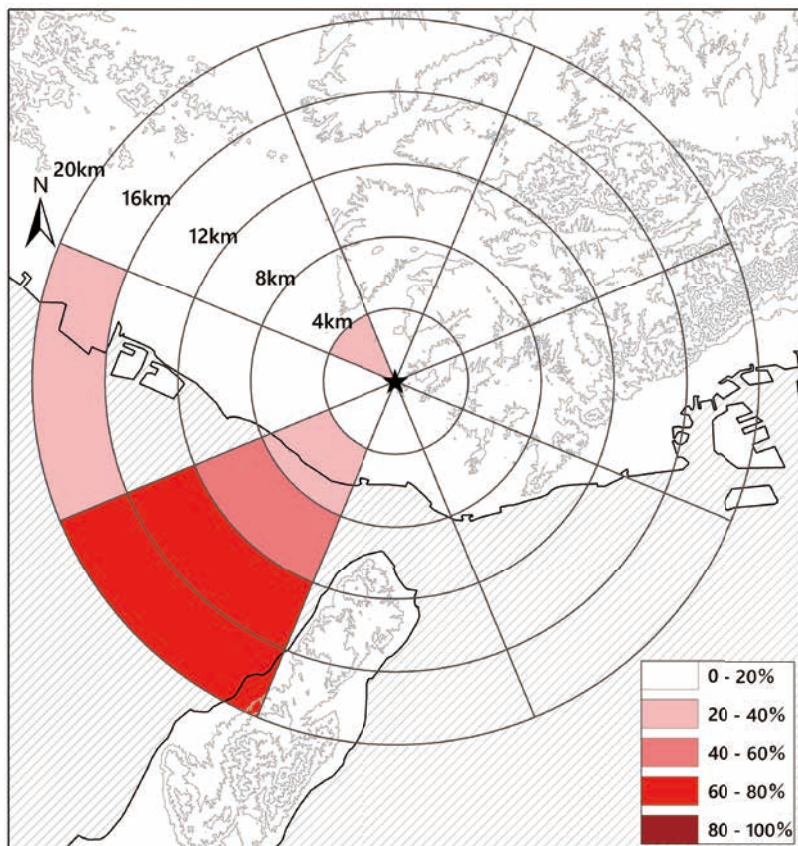
さて、城ヶ谷遺跡および青谷遺跡が同一の集落・集団と捉えられる可能性を考慮に入れつつも、それぞれの眺望域をやや詳しく確認してみたい。伊川・櫛谷川に挟まれた丘陵上に隣接して立地する2遺跡にあっても、眺望の広がり方が大きく異なることがわかるであろう。城ヶ谷遺跡では、南西方向4kmないし8km以上先の海上に一定の集中傾向がみられることが特徴的である（第70・71図）。この遺跡においては従来眺望の広さ自体はあまり期待できないものとみられており、確かに南西方向を除くと周囲への見通しは相当に限られている。南西方向にあっても眼下の平野部（0-4km帯）は視認しにくい。ただし、北西0-4km帯という櫛谷川流域の平地部を視認できることは、青谷遺跡との違いとして注意しておく必要がある（第71図）。

一方青谷遺跡は、眼前に広がる平野部（明石川下流域）や播磨灘に対し、より広角かつ全面的に眺望しえたことが把握できる（第72・73図）。眺望の傾向としては、南西方向を中心としつつ南・東方向にも一定以上の集中度が認められる（第73図）。他方、それ以外の北西～南東方向については、城ヶ谷遺跡と同様に見通しがほとんどきかない。丘陵地形が障壁となって眺望の広がり方が物理的に遮られるためである。

このように、青谷遺跡の眺望域は、城ヶ谷遺跡のそれをほぼカバーするとともに、重複する南西方向への眺望においてもより高い集中度を示している。そして、明石海峡（淡路島北端）からその西側一帯という、海上交通の重要部を非常に良好に見通しえたことは注目に値するで



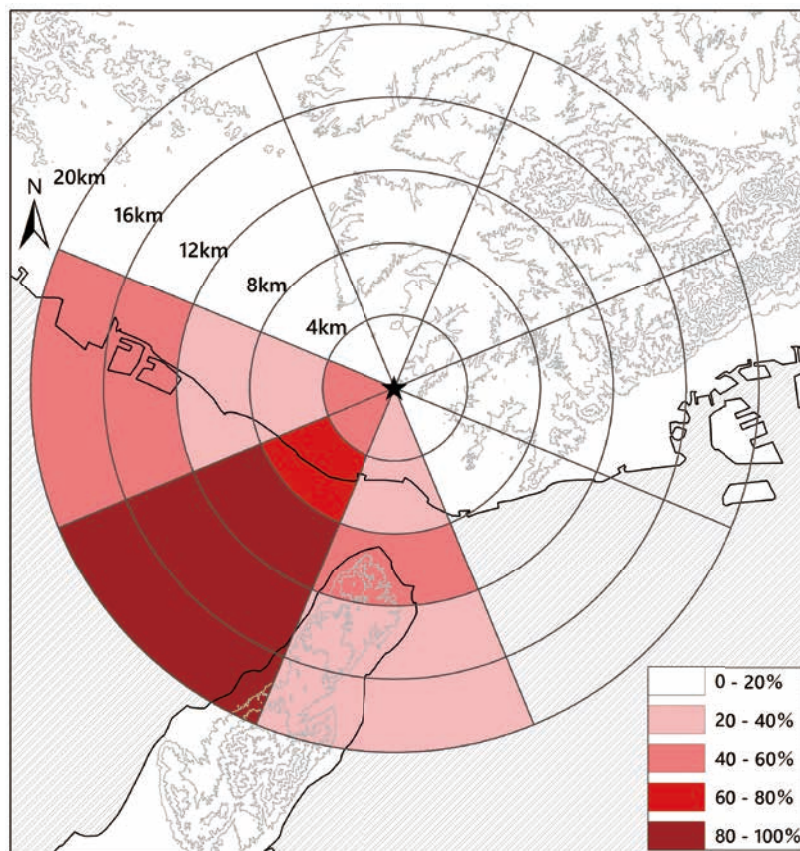
第 70 図 城ヶ谷遺跡（最高所）からの最大 20km の眺望域（南から）



第 71 図 城ヶ谷遺跡における距離帯・方向別の眺望傾向



第 72 図 青谷遺跡（最高所）からの最大 20km の眺望域（南から）



第 73 図 青谷遺跡における距離帯・方向別の眺望傾向

あろう。暫定的なものであるとはいえ「青谷・城ヶ谷集団」という有力なまとまりを考える上でも、こうした立地特性をもつことは大変示唆に富む。

他方、上で触れたように、櫛谷川流域という重要エリアのひとつに対しては城ヶ谷遺跡の方が眺望をより確保しやすかった可能性がある。この点については旧地形のより詳細な復元が必要であり今後の検証に委ねられるが、単に眺望の優劣があったというよりは、両者の眺望域を連鎖することで地域をより稠密にカバーしたことなどを想定するべきかもしれない。(宇佐美)

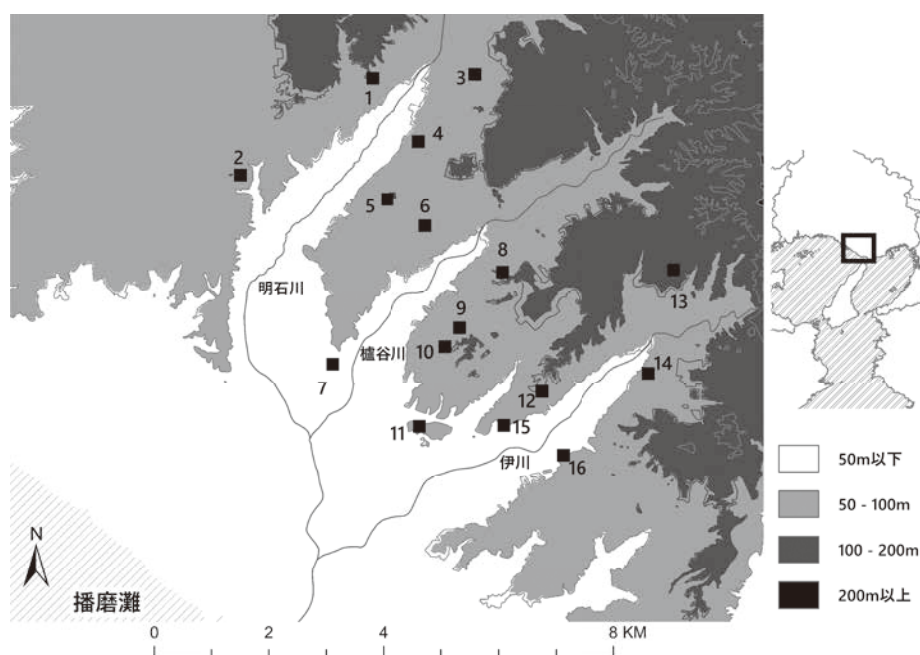
3. 明石川流域における眺望・立地傾向の評価

以上の作業をふまえ、次に地域的な視点から検討を加えることにしたい。ここでは、明石川流域の主要な高地性集落として、城ヶ谷遺跡・青谷遺跡を含む15遺跡を取り上げる³⁾(第74図)。

表6は、全対象遺跡において眺望分析を実施し、距離帯別(0-4km, 4-12km, 12-20km)の眺望域の広さを整理したものである⁴⁾。ここでいう眺望域の広さは平面上の面積で、表中では各距離帯に占める割合を示している。さらに、12km圏(0-12km)、20km圏(0-20km)における累積的な眺望面積(割合)もあわせて表示した。

この結果をもとに、12km圏の累積的な眺望面積(「12km累積」の列)を一例として、眺望域の広さと立地場所の標高の関係を分布図に表現したものが第75図である。なお12kmという距離設定については、やはり暫定的ではあるが、移動集団や他集落への視認を想定した場合にある程度の確実性が期待できる距離値として設定したものである(宇佐美2021bほか)。

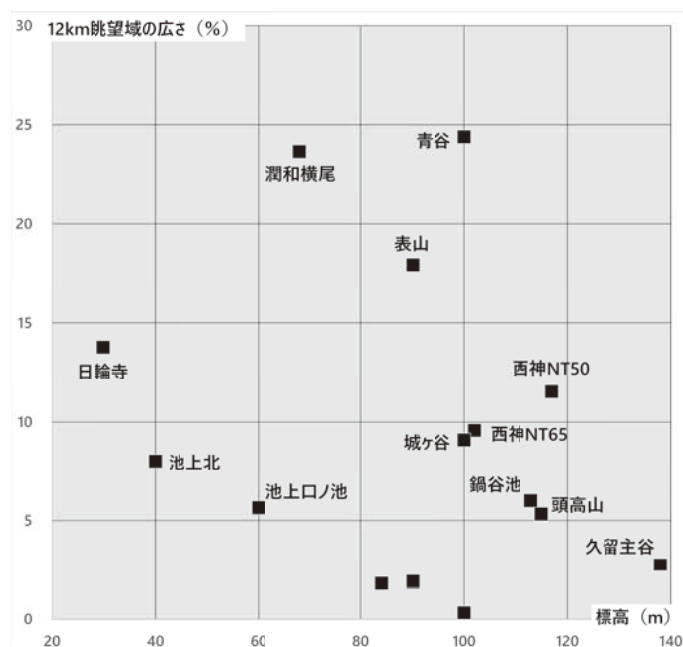
表6に明瞭に示されるように、一部を除く各距離帯において、青谷遺跡、潤和横尾遺跡、表山遺跡が上位3位を占める。0-4km帯(近距離圏)においてはこの限りでないが、4-12km帯(中距離圏)、12-20km帯(遠距離圏)では、城ヶ谷遺跡を含め眺望域10%未満にとどまるものが過半数におよぶ。そのような中、これら3遺跡は眺望域20%前後(以上)を確保している。そして青谷遺跡は中・遠距離圏で最上位に位置しており、先に確認した眺望性が当該地域の中で最高水準のものであったことがわかるのである。



第74図 明石川流域における主要高地性集落の位置

表 6 明石川流域における高地性集落の眺望域比較（濃色：各距離帯の上位 3 遺跡）

遺跡名	No	大別時期	標高 (m)	比高 (m)	0-4km (%)	4-12km (%)	12-20km (%)	12km 累積 (%)	20km 累積 (%)
鍋谷池	1	前期, 中期後葉	113	50	24.4	3.7	7.4	6.0	7.1
大谷	2	中期後葉	90	50	2.8	1.7	0.7	1.8	1.1
養田中の池	3	中期後葉, 庄内式期	90	40	11.8	0.7	0.5	1.9	1.0
西神 NT38	4	中期後葉	84	45	14.6	0.2	0.1	1.8	0.6
西神 NT50	5	中期後葉	117	70	22.2	10.2	15.7	11.5	14.7
西神 NT65	6	中期後葉	102	65	16.5	8.7	13.2	9.6	12.3
日輪寺	7	後期, 庄内式期	30	15	18.7	13.2	14.9	13.8	14.9
如意寺裏山	8	中期後葉	100	70	1.8	0.1	0.1	0.3	0.1
城ヶ谷	9	中期後葉, 後期	100	60	9.1	9.1	11.4	9.1	10.9
青谷	10	中期後葉, 後期	100	70	24.1	24.4	24.2	24.4	25.0
潤和横尾	11	後期	68	35	34.0	22.4	22.4	23.7	23.4
表山	12	中期後葉, 後期	90	50	17.0	18.1	20.0	17.9	19.8
久留主谷	13	中期後葉	138	70	12.1	1.6	4.6	2.8	4.1
頭高山	14	中期後葉	115	70	14.4	4.2	8.6	5.3	7.7
池上北	15	後期, 庄内式期	40	15	11.4	7.6	9.5	8.0	9.2
池上口ノ池	16	中期後葉, 庄内式期	60	30	12.6	4.8	9.3	5.6	8.3



第 75 図 明石川流域における高地性集落の眺望域比較
（縦軸：12km 眺望域の広さ（割合），横軸：標高（m））

12km 圏の眺望域の広さ（0-12km における累積的な眺望面積の割合）について分布を表した第 75 図からも、以上のことが確認できるであろう。上記した 3 遺跡、とりわけ青谷遺跡、潤和横尾遺跡は、域内で図抜けた位置をとることがみてとれる。一方城ヶ谷遺跡については、西神ニュータウン内の諸遺跡に次ぐ順位で、およそ地域内の「平均的」な数値を示す。

なお、近畿地方の高地性集落を広く対象とした同様の分析の結果（宇佐美 2021b）に照らした場合、青谷遺跡、潤和横尾遺跡は中位グループに相当する。近畿地方全体でみると眺望域 40%以上をとる卓越したものも複数存在するため、数値自体はあまり目立たない。ただし、学史上有名な大阪府高槻市古曾部・芝谷遺跡などとほぼ同等の水準であり、この意味では他地域の有力高地性集落とも遜色ない眺望性を備えたことが理解されるであろう。

このように、明石川流域における高地性集落の眺望においては、青谷遺跡、潤和横尾遺跡、表山遺跡が基本的には上位を独占すること、また特に前二者は地域的に際立った数値を示すことなどが明確化したといえる。

これら3遺跡は樫谷川と伊川に挟まれた丘陵地帯に立地するという点で共通している。従って上の結果は、明石川下流域や播磨灘への眺望を確保するにあたってそのエリアが最も有利な地理的条件を備えていたことをよく示している。上記のように、城ヶ谷遺跡単独では「平均的」な数値をもつにとどまるが、城ヶ谷遺跡周辺の丘陵一帯または「青谷・城ヶ谷集団」として大きく捉えるならば、そこは域内で有数のエリアであったと評価できるのである。（宇佐美）

4. 明石平野・海峡並びに淡路島北部への眺望・管制と青谷・城ヶ谷集団

そこで、この地域の高所土地利用集団全体の分析から、表山遺跡を営んだ集団も加えた伊川―樫谷川間の丘陵上を選んだ集団をあらためて「青谷・城ヶ谷集団」と総称して他集団といったん隔離し、その固有集団としての特性がいったいどこにあるかを近畿および周辺社会をも念頭に置いて考えてみよう。

本集団の保有する諸要素で最も関心を抱く点は大きくみて二つある。第一は遠望できる明石海峡を通過する船舶の監視、管掌であり、第二は明石平野に盤踞する農耕集団との日常的な連絡機能であろう。本稿2・3において、12 km眺望域の広さ、中距離圏の存在が重視されており、その射程は播磨灘や明石海峡、淡路島北部山塊を含み込む。このエリアの活動監視には連続性を有する視界の広さが必要であり、この二点を複合的に同時掌握できる眺望の良さを満足しなければならない。明石海峡へのアクセスを重視した場合は、往時の海岸線にも近い神戸市垂水区の舞子東石ヶ谷遺跡・大歳山遺跡・狩口台遺跡や最近確認された明石市東野町遺跡などが注目される。これらには後期の弥生土器や遺構が存在するが、青谷・城ヶ谷集団の活動開達期より新しい後期後半、第V様式第4～6小様式の内に比重を置くもので、中期後半から存続する舞子東石ヶ谷遺跡も存在するが、後期前葉は欠落している。これらは山田川水系を基調とする沿岸部集団で、明石海峡の直接的な管掌が目的の一つであり、対岸の淡路市塩壺西遺跡や塩壺遺跡など海峡を見下ろす淡路島北端の高地性集落と時期的に呼応する在り方に着目したい。現明石海峡は最短で6.5 km程であり、近畿中部、大阪湾岸に向けた物流はこの狭隘部を必ず通過する主幹線の海路が担っていた。播磨・讃岐・吉備と摂津・河内の近畿中枢を直接結び付ける海上交通の最大のパイプラインを眼下に収める絶好の場と言って過言ではない。本州から淡路島へ渡る、あるいはその逆の南北航路も当然管制下に置かれたものと思われる。後期後半以降の北近畿、丹波・丹後系土器の南下、淡路型器台・淡路型甕の北上が本州側、淡路島側で相互に確認されていることはその証左の一端である。

一方、定着型の初期農耕集団は、明石川西側の市域最西端の低台地や沖積低地を選び、吉田遺跡や片山遺跡の弥生前期初頭から前半～後半開始の新方遺跡、今津遺跡、出合遺跡、居住遺跡へと明石川を遡上する。前期環濠を構築した玉津田中遺跡は明石川中流域へと広がる過程で拠点化し、加古川水系、由良川水系の南北ルートの「弥生の道」の本来経路の役割は、実のところこの明石川流域が果たすことになる。ただし、養田中の池遺跡や大谷遺跡を除き、高台への選択を示す集落は明石川本流や西側丘陵では現状において未発達である。その切り換えには東西方向を流れる加古川支流の谷沿いの道などが重要と考えている。

播磨全域は、中・東部瀬戸内と並び第IV様式を中心に高地性集落が顕在化するが、その状況

の延長上にあるのが、明石川水系—樫谷川水系と広く絡む丘陵地一帯を選んだ高地性集落である。西神ニュータウンの大規模造成工事によってその多くが煙滅の憂き目に会って、現地の景観そのものは一変している。土器の中心は第IV様式第2・3小様式期にあり、竪穴建物を適数作って、墓域も散在している。西神NT. No. 38・48・50・65 地点などが主要なものであるが、いずれもこの丘陵上で紀元前1世紀に活発な動きを示す。共通して明石海峡への働きかけは遠方になるが、主に明石平野下流部の初期農耕母集落との関わり、連絡機能については見渡せたかどうかは問題となる⁵⁾。海岸から8～9kmの遠隔にある遺跡もあって、明石海峡や播磨灘などへのアプローチ、可視化にはやや消極的とみられる。これらに対し、同一エリアにして南西方前面1.5kmに位置する潤和横尾遺跡（後期）は、明石川微支流の天井川と永井谷川に面し、アクセス上の要衝地であり、標高68mまでの立地とはいえ、予想外の眺望を獲得できる発掘調査実見時の所見は重要と思われる。青谷・城ヶ谷集団の構成集落の一員として前衛的な段丘面に立地している（15棟の建物確認）。（森岡）

5. まとめ

弥生時代中期を経て後期に入る時点で、近畿は日常土器が有文有飾土器から無文粗製土器へと様変わりし、沖積地の農耕集落も構造変性をきたす。利器の石器から鉄器への変化も目立ってくるが、同時に青銅器生産体制も集中複合生産から弥生系小形青銅器（小形仿製鏡・小銅鐸・銅釦・筒状銅製品、東海東部以東の板状銅釧、銅鑲など、また広義には貸泉ほか中国製銭貨を包摂する。銅鐸・銅劍・銅戈・銅矛など大形青銅器に対峙する概念。森岡2010）を要となす分散個別生産への組み換えが認められ、後期前葉は社会の大きな流動期、変革期としての位置付けが可能である。その特徴をさらに加えれば、遺跡数の絶対的低下、減衰、低地環濠集落の衰滅ないしは縮小化、外来系土器の長距離移動、「聞く銅鐸」多段階埋納最終期の促進、中国鏡（漢鏡4・5期鏡）片・破鏡の東伝始発、九州産弥生小形仿製鏡の早期流入、近畿系弥生小形仿製鏡の成立、転用炉など低温鍛冶施設の普及をはじめ、枚挙に暇がない（森岡2021）。それらは従来、社会変動を主導する先進地と目された奈良盆地・大阪平野の枢要部で進行したのではなく、東部瀬戸内・播磨・淡路・摂津・山城や和泉、そして近江の近畿周辺部と低評価されがちな地域から始まることが多く、かつての大和川枢軸、畿内中心部優位論（田辺・佐原1966、佐原1970など、最近では岸本2014ほか）とは大きく乖離する。言わば播磨東部—六甲山地南斜面—淀川水系—琵琶湖沿岸の近畿北部軸が浮上する。ライアン・ジョセフが近時分析を深化させている舶載鉄器の東漸現象も既出資料からは同調する分布の研究動向を示唆しており、早晚、抜本的な見直しが不可欠の事態を生んでいる。この地域以西の明石川流域を含む諸遺跡に小形仿製鏡を持続的に受容する契機をなしたのが表山鏡や青谷鏡であることを散在する数面の集落出土後継鏡の集中現象がよく物語っている。

今回、宇佐美・森岡両名で行った眺望解析と東播、西神地区の高地性集落、眺望性に富んだ集落立地動向の性格比較分析は、上記した広範な弥生社会の地域情勢と相似た時期や現象として密接不離な関係性を持つといえ、中期後半期の瀬戸内海一帯からの高地性集落の隆盛域から離脱する動態と深く絡んでくる。すなわち徳島県鳴門市カネガ谷遺跡、神戸市伯母野山遺跡C地点、芦屋市会下山遺跡、大阪府高槻市古曾部・芝谷遺跡、和泉市観音寺山遺跡、同市惣ヶ池遺跡、和歌山市橘谷遺跡・滝ヶ峯遺跡、京都府木津城山遺跡などは、近畿周辺に位置してかなり酷似した動きを示す高地性集落の大型居住集団と言え、神戸市西区の青谷・城ヶ谷集団もよ

り踏み込んで共有する事項の追認と分析が必要である。当地域で抜きん出た眺望の良さは、明石海峡・播磨灘・明石平野沖積地に広く面的に及ぶものであり、弥生中期集団の歩調からは目的を持ってより選択立地の精度と触手が加わったものと言うことができる。弥生中期末や後期後半～末期を盛行のピークとする東播磨地域いくつかの集団と比較して、後期前葉に特化した丘陵上の営みの母集団がいても簡単に玉津田中遺跡の後期の衰亡とリンクしないことはその後期集団自体の持続と金属器生産状況から明らかであり、上に掲げた近畿各地の高地性集落が標高や比高以上に見渡す視界掌握の面で秀でた機能を有する点で同様に、母集団の選出にはそれ相応の根拠を必須としなければならない。向後の課題としたい。(森岡)

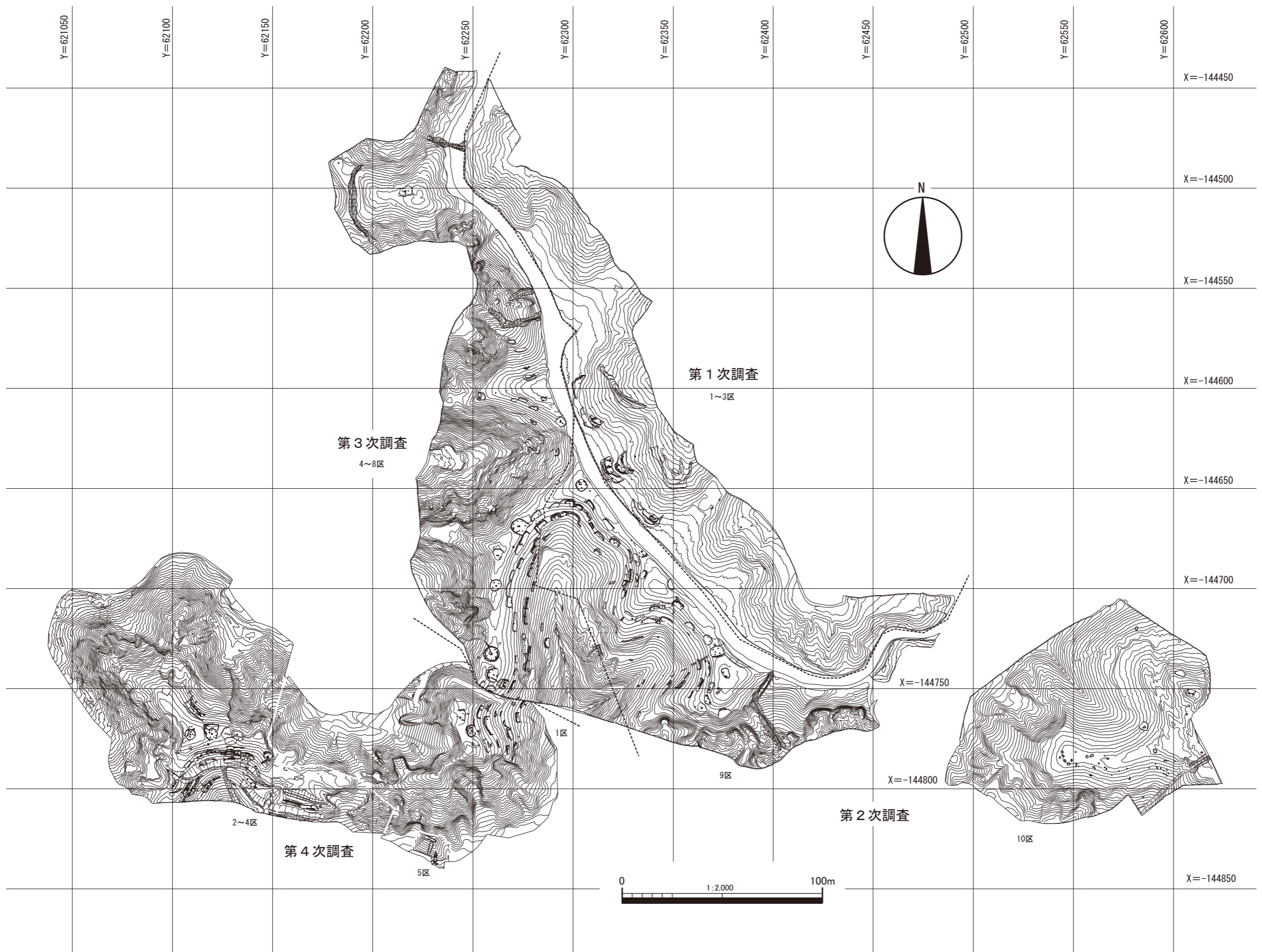
注

- 1) 中期・後期は弥生時代の時期区分原理に基づく期区分であるが、前半や後半は時期内の2小区分、前葉・中葉・後葉は時期内の3小区分に拠る細別期区分であり、弥生土器の細分様式編年（凹線文出現以前の弥生中期前半を第Ⅱ・Ⅲ様式、凹線文出現以降の弥生中期後半を第Ⅳ様式、弥生後期を第Ⅴ様式、弥生終末期を庄内様式あるいは第Ⅵ様式とし、第Ⅳ様式1～4小様式、第Ⅴ様式1～6小様式、第Ⅵ様式1～5小様式の大別様式内小様式区分）では、第Ⅳ様式第1・2小様式が第Ⅳ様式前半、第Ⅳ様式第3・4小様式が第Ⅳ様式後半、第Ⅴ様式第1～3小様式が第Ⅴ様式前半、第Ⅴ様式第4～6小様式が第Ⅴ様式後半、第Ⅴ様式前葉（第1・2小様式）・同中葉（第3・4小様式）・後葉（第5・6小様式）の対応関係となる。その存続期間を明示すれば、城ヶ谷遺跡部分で第Ⅳ様式第3・4小様式、第Ⅴ様式第1・2小様式（一部第Ⅴ様式第3小様式）、青谷遺跡部分も下限部分は同じ歩調をとるが、上限は第Ⅱ様式や第Ⅲ様式に比定できる弥生土器の採集が確認され、さらに遡る。伊川以南、櫛谷川以北の高地性集落はそのピークが第Ⅳ様式第3小様式期にあり、同様式第4小様式期には終息して、第Ⅴ様式前葉段階には継続しない点が重要である。
- 2) 眺望の広狭や遠方への視認の可否は、天候や時間帯、季節、人の視力といった様々な条件に左右され、どのような距離設定が妥当かは一意には定まらない。この設定値は先行研究（大久保2019）を参考とし、あくまで諸条件に恵まれた場合のポテンシャルを評価するという目的に対応したものである。
- 3) 対象遺跡において現地での眺望観察をこれまでに実施できたものは一部である。地形図・空中写真の判読を通して、旧地形および各遺跡の最高所からの眺望分析図の妥当性を確認し、必要に応じて補正を加えることとした。継続的な調査と検証が必要であることはいうまでもないが、今後の作業により本稿で述べる基本的傾向に大きな変更が生じることはないと推定する。
- 4) 煩雑になりすぎるため方位別の集計は行わず、大きく3つの距離帯（近・中・遠距離圏）ごとの分析結果を提示するにとどめる。
- 5) 最近、この地域の石器研究を基軸に高地性集落の問題に論究した園原悠斗は、伊川以東、櫛谷川以西の第Ⅳ様式期（中期後半）の高地性集落の石器全般にみえる組成の日常性と打製石鏃素材の二上山北麓系サヌカイト由来の同質性を説き、伊川以西、櫛谷川以東の丘陵上の高地性集落との質的差違、性格の違いについて考究している（園原2020）。丘陵単位の高位立地集落にグループ名を与え、近畿西辺の弥生社会解明に向けた優れた論点と考え方の基層において、筆者らの主張を石器の面から支持できる見解と言え、その関わりに改めて注目している。

引用・参考文献

- 宇佐美智之 2021a「高地性集落の眺望:GIS 眺望分析による弥生時代高地性集落の立地研究」『立命館文学』672, pp. 181-197。
- 宇佐美智之 2021b「眺望分析の手法と高位集落の視界情報」『季刊考古学』157号, 雄山閣, pp. 26-29。
- 宇野隆夫編 2006『実践 考古学 GIS』NTT 出版。
- 大久保徹也 2019「<遠見集落>紫雲出山遺跡 その機能と効力」『紫雲出山遺跡（三豊市埋蔵文化財発掘調査報告 11）』三豊市教育委員会, pp. 283-298。
- 岸本直文 2014「倭における国家形成と古墳時代開始のプロセス」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集, 国立歴史民俗博物館, pp. 369-403。
- 神戸市 2022『神戸市埋蔵文化財分布図 令和3年度版』
- 神戸市教育委員会文化財課 2016『神戸の弥生遺跡』〈神戸の遺跡シリーズVI〉
- 神戸市埋蔵文化財センター 2006『西神ニュータウン内の遺跡』
- 佐原真 1970「大和川と淀川」『古代の日本』5近畿, 角川書店, pp. 24-43。
- 園原悠斗 2020「弥生時代における低地集落と高地性集落—石鏃からみた小地域様相—」『考古学研究』第66巻第4号, 考古学研究会, pp. 70-89。
- 田辺昭三・佐原真 1966「弥生文化の発展と地域性 近畿」『日本の考古学』III, 河出書房, pp. 108-140。
- 村川行弘・森岡秀人 1976「弥生時代」『新修芦屋市史』資料篇1, 芦屋市
- 森岡秀人 2010「弥生系青銅器からみた古墳出現過程」『日本考古学協会 2010年度兵庫大会研究発表資料集』日本考古学協会 2010年度兵庫大会実行委員会, pp. 131-152。
- 森岡秀人 2015「倭国成立過程における『原倭国』の形成—近江の果たした役割とヤマトへの収斂—」『纏向学研究センター研究紀要』第3号, 桜井市纏向学研究センター, pp. 37-55。
- 森岡秀人 2021「弥生文化期の高地性集落数例をめぐる銅鏡の先取短期保有問題考」『星空の考古学』渡邊邦雄さん・尼子奈美枝さん還暦記念論文集, 刊行会, pp. 119-130。
- David Wheatley and Mark Gillings., 2002. *Spatial Technology and Archaeology: The Archaeological Applications of GIS*, Taylor & Francis.

※与えられた頁数の関係で、発掘調査報告書・調査概要・調査年報については、すべてを割愛した。ご寛恕を乞う次第である。



第76図 第1～4次調査地全体図

第4章 まとめ

今回の第4次調査の成果を記し、これまでの第1～3次調査の成果を加えつつ現状の城ヶ谷遺跡の様相についてまとめておきたい。

今回の調査では弥生時代の高地性集落に伴う遺構・遺物の検出と奈良時代前半の須恵器窯の検出、調査を行った。

1. 第4次調査の成果

(1) 高地性集落の調査

第1～3次調査に引き続き、弥生時代中期末～後期前半の遺構・遺物を確認した。調査地東端の1区は先の調査地から続く丘陵が西側へと折れ曲がる端部に位置する。後期前半の遺構を検出した。

1区と2区間の丘陵尾根筋は非常に細くなり、土砂の流出がひどかった。南側にわずかに緩斜面地があるものの遺構・遺物の検出はなかった。再び幅が広がった丘陵主尾根上から南向きの谷部斜面、北西に派生する支尾根上と北側斜面からなる西側の調査区2～4区において中期末～後期前半の遺構・遺物を検出した。この地区での検出遺構の中心は中期末のもので、これまでとは様相の異なる新たな居住域の検出とともに遺跡の広がりを確認した。南側の谷部斜面では後期に掘削されたと考えられる大規模な溝（壕状遺構）2条を検出した。

丘陵尾根上で検出した竪穴建物は平面形、規模が明らかであるが、斜面で検出した竪穴建物は下位に施されたであろう盛土が流出しており、全体規模、平面形などは不明な部分が多い。建物は遺構の切り合い、改築の痕跡など構築状況の解釈により棟数は変動するが、少なくともその場所に1棟とカウントしても今回の調査では31棟の竪穴建物と段状遺構2基を検出した。これまでの調査全体を通じての検討の必要性を前提とするが、95棟（年報等の集計一覧を基にすると）の建物が検出された。すべての年次を含めた建物の同時性なども検討が行えていないが、大規模な集落であったとの認識は可能であろう。

全体図（第76図）からは、第4次調査地1区の北側から青谷の最奥部近くで北に入る谷を取り囲み、丘陵部（第3次調査地から第2次調査地にかけて）の尾根上から斜面上位に多くの建物が構築された様子が分かり、この部分が現状で城ヶ谷遺跡の中心部といえよう。南東部の第2次調査10区とされた青谷最奥部の丘陵上では弥生時代の遺構は確認されていない。

第4次調査地2～4区は西側にわずかに離れた丘陵部の尾根上及び南側谷部斜面と、北側に派生する支尾根上に形成された居住域であることが判明した。

(2) 奈良時代の須恵器窯の調査

今回の調査地南東部の丘陵裾で須恵器窯を検出したことは大きな成果であった。出土した須恵器から奈良時代前半、8世紀前半に操業された窯と考えられる。神戸市域で奈良時代の須恵器窯の検出は初めてである。全国的に地方窯の築造が盛行する時期とされ、当地域でも同様に窯の構築が進んだ状況を示唆するものであろう。床面、側壁の貼土の状況から3回ほど改修された状況が窺える。出土須恵器は坏B・蓋を主体として坏Aのほか甕や壺、鉢や瓶などは大半が破片で出土している。坏Bの高台形態、坏Aの底部の形状、焼成具合を見た場合に出土須恵器は大きく2時期に分けられよう。

窯跡の西側の斜面で検出窯と同規模の溝状遺構を、里道面では大きな落ち込みを検出した。隣接して窯の構築を図りながら焼成を行うに至らなかった痕跡と考えられる。

第2・3次調査では奈良時代前半とされる蔵骨器や火葬墓、時期不詳の埋土に焼土や炭を含

む土坑が検出されていた。蔵骨器には焼け歪みのある須恵器甕の使用や窯体片を枕とした状況が報告されており、須恵器工人の存在や関わりが想定されていた。窯跡の検出はこれらの墓との関係を考える上で重要な発見であった。

(3) 既往の調査について

第1～3次調査は試掘調査により遺構・遺物が確認された広大な調査対象地を3ヶ年計画で10区画に分割して行われ、約61,000㎡の範囲の遺跡の状況が明らかになった。全体を通じての検討や正報告書が刊行されておらず、調査の概要は各年度の『神戸市埋蔵文化財調査年報』に記載された内容が現時点で判明し想定される状況である。これらを通観できればと思ったが膨大な量であり、すべてを把握する時間的な余裕はなかった。その中から今回の調査成果に関連する部分をわずかであるがピックアップして検討材料に加えたい。

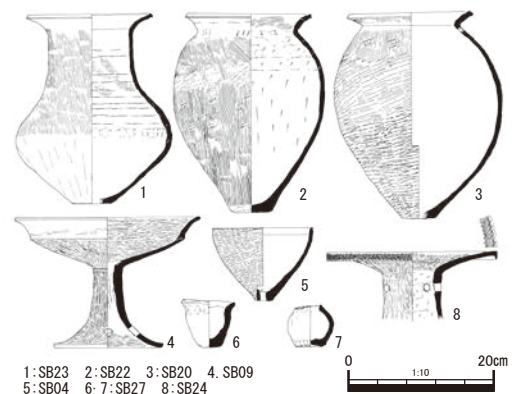
各年度の調査概要、所見、留意点を『年報』「まとめ項」より抜粋して一覧表とした。個別遺構の状況や調査時の所見などは年報に記載されている。参照いただきたい。

表7 年報記載調査概要一覧

	第1次調査(1～3区)	第2次調査(9・10区)	第3次調査(4～8区)
調査年次	平成7(1995)年度	平成8(1996)年度	平成9(1997)年度
調査面積	約22,300㎡	約21,000㎡	約18,000㎡
高地性集落に伴う遺構	竪穴建物5棟 段状遺構6基 土坑 溝(壕)2条	竪穴建物28棟 段状遺構あるいは溝状遺構27基 土坑17基・ビット6基 壕状遺構1条	竪穴建物27棟 段状遺構あるいは溝状遺構21基 土坑4基 壕状遺構2条
検出遺構の時期	弥生時代後期初頭	弥生時代中期末～後期前半	弥生時代中期末～後期前半
その他の時代の遺構	—	奈良時代前半：火葬墓・蔵骨器	奈良時代前半：蔵骨器・焼土坑
調査所見 特記事項	<ul style="list-style-type: none"> ・明石川流域での後期の高地性集落の検出は初めて。 ・段状遺構の構築場所は谷斜面のみ。尾根付近はなし。 ・溝(壕)は尾根を切断せず、谷斜面に。下位に掘削土で盛土を施し流出を防ぐ工夫が見られる。(溝の構築方法) 	<ul style="list-style-type: none"> ・標高95～100mの範囲で遺構検出。標高95mに湧水帯あり。 ・壕状遺構SD01は遺跡の南東限を画する。 ・建物(SB07)より鉄鏃出土。 ・眺望については平野部への眺望は閉鎖的。 ・壕が防御施設とした場合に集落の在り方を考える上で示唆に富むと指摘。 ・同年、表山遺跡の調査。環壕をもつ後期の高地性集落。 	<ul style="list-style-type: none"> ・調査地中央(6～7区)の谷底より大型自然木検出。集落形成期の痕跡か。焼土塊・炭化材・弥生土器が出土。 ・谷を囲む斜面に本来遺構が存在した可能性を示唆。本来100棟近くの建物が存在したと想定。 ・SD301・302は遺跡の北限を示す。 ・第2次調査SD01(南東限)と直線距離で約230m離れる。3次調査SD304と2次調査SD1001の検出から二重の壕の可能性を想定。



写真21 第1・2次調査出土土器



第77図 第2次調査出土土器実測図

表8 第1～3次調査検出竪穴建物一覧

検出建物数	遺構番号	平面形態	床面標高 (m)	規模 (m)	最大壁高 (cm)	主柱穴数	土坑	壁溝	台石	時期	備考
第1次調査											
1	竪穴住居1	隅丸方形	94.2	8.6	× 3.8	30	1	●	○	—	竪穴住居2に切られる
2	竪穴住居2	隅丸方形	94.3	4.2	× 4.0	25	2	○	○	—	
3	竪穴住居3	隅丸方形	94.3	5.6	× 3.5	2	2	○	○	—	
4	竪穴住居4	隅丸方形	92.0	7.2	× 2.4	40	2	×	○	—	
5	竪穴住居5	隅丸方形	93.0	3.8	× 2.2	35	?	○	○	—	
第2次調査											
6	SB01	隅丸方形	98.6	5.5	× 5.5	25	4		○	V	ベッド状遺構?
7	SB02	隅丸方形	96.8	7.1	× 3.8	76	2		○	V	
8	SB03	隅丸方形	95.0	5.4	× 2.9	55	1	○	○	V	焼失住居 鉄鏃
9	SB04	隅丸方形	96.6	4.8	× 2.2	40		○	○	V	
10	SB05	隅丸方形	96.4	4.8	× 1.8	25	?	○	○	V	
11	SB06	隅丸方形	96.2	3.5	× 1.3	36	?	○	○	V	
12	SB07	隅丸方形	95.0	6.8	× 4.3	56	2	○	○	V	
13	SB08	隅丸方形	98.3	6.7	× 2.7	37	?	○	○	V	
14	SB09	隅丸方形	96.1	6.3	× 2.2	38	?	○	○	V	
15	SB10	隅丸方形	94.8	10.1	× 2.6	36	2	○	○	V	
16	SB11	隅丸方形	98.6	6.9	× 2.7	25	?	○	○	V	
17	SB12	円形	99.2	復元径	6.6	40	1	●	○	—	
18	SB13	隅丸方形	96.7	5.5	× 3.6	106	2	●	○	V	
19	SB14	楕円形?	99.8	4.1	× 3.1	59	?	○	○	V	
20	SB15	隅丸方形	97.0	6.7	× 3.6	101	2	○	○	V	
21	SB16	楕円形?	96.6	4.0	× 2.6	70	?	○	○	V	
22	SB17	隅丸方形	97.2	4.5	× 2.2	31	2	○	○	V	
23	SB18	円形?	97.9	5.4	× 2.2	117	1	○	○	V	
24	SB19	隅丸方形	99.8	5.9	× 2.8	60	2	○	○	V	
25	SB20	楕円形	99.5	6.6	× 5.6	45	4		○	V	
26	SB21	隅丸方形	99.6	5.0	× 3.1	36	2	×	○	V	
27	SB22	隅丸方形	99.5	5.6	× 1.9	45	2	○	○	V	
28	SB23	隅丸方形	98.6	7.9	× 2.2	50	?	○	△	V	
29	SB24	隅丸方形	97.6	6.8	× 1.5	34	?	○	○	V	
30	SB25	隅丸方形	98.8	4.9	× 1.8	40	3	×	○	V	
31	SB26	円形	98.0	6.4	× 4.3	41	?	×	○	IV	
32	SB27	隅丸方形	94.6	6.3	× 1.8	40	?	×	○	V	
33	SB28	円形	98.1	4.6	× 3.3	22	2	×	○	—	
34	SB229	隅丸方形	95.7	4.8	× 4.1	75	?	○	×	V	
35	SB230	隅丸方形	97.9	3.0	× 1.8	17	?	○	×	?	
36	SX11	隅丸方形	99.9	5.5	× 2.8	78	?	○	×	V	
37	SX13	隅丸方形	96.8	5.3	× 1.8	25	?	○	○	V	
第3次調査											
38	SB301	隅丸方形	96.1	6.2	× 2.9	32	2		×	—	SB303に切られる SX301に切られる
39	SB302	楕円形	96.1	8.2	× 7.4	52	?	●	×	—	
40	SB303	隅丸方形	95.6	7.8	× 3.0	50	1	○	○	—	
41	SB304	隅丸方形	97.5	6.5	× 6.0	45	1	●	×	—	
42	SB306	円形	96.1	6.1	× 5.4	44	4	●	×	—	
43	SB307	隅丸方形	93.4	4.2	× 1.6	42	?	○	○	—	
44	SB308	隅丸方形	94.2	6.0	× 2.2	47	2	○	○	—	
45	SB309	隅丸方形	92.9	4.7	× 1.8	55	1	○	○	—	
46	SB310	隅丸方形	94.2	5.3	× 2.7	68	2	○	×	—	
47	SB311A	円形	95.8	7.5	× 7.5	20	7	●	○	—	
	SB311B	円形	95.8	7.3	× 7.3	30	6	●	○	—	
48	SB312	円形	95.8	6.3	× 7.7	72	3	●	○	IV?→	
49	SB313	隅丸方形	91.9	7.1	× 2.5	59	?	○	○	—	
50	SB314	隅丸方形	91.9	4.3	× 0.8	40	?	○	○	—	
51	SB315	隅丸方形	93.9	4.8	× 5.2	60	2	○	○	—	
52	SB316	隅丸方形	92.5	7.0	× 1.8	71	?	○	○	—	
53	SB317	隅丸方形	95.0	2.2	× 0.7	37	?	○	○	—	
54	SB318	隅丸方形	93.0	3.4	× 1.3	50	?	○	○	—	
55	SB319	隅丸方形	90.0	3.9	× 2.7	99	?	○	○	—	
56	SB320	隅丸方形	89.7	3.7	× 1.1	37	?	○	○	—	
57	SB321	隅丸方形	90.9	3.6	× 1.6	95	?	○	○	—	
58	SB322	隅丸方形	90.9	6.0	× 1.5	86	?	○	○	—	
59	SB323	隅丸方形	90.9	5.8	× 2.2	91	?	○	○	—	
60	SB324	隅丸方形	83.6	5.4	× 2.8	80	2	○	○	—	
61	SB325	円形	93.8	5.0	× 3.9	50	?	●	○	IV?→?	
62	SB326	隅丸方形	93.8	4.0	× 2.3	45	?	○	○	→IV	
63	SB327	隅丸方形	96.9	6.2	× 2.3	63	?	○	○	—	
64	SX330	隅丸方形	95.7	7.2	× 4.8	45	2	○	×	IV~IV~V	

* 年報記載の項目を転載、部分改変。今後検討が必要なものについては『-』で表記した。
 今回の調査に伴い検討を考えたが時間的制約もあり、また膨大な量のため一元的に検討が行えなかった。
 今回の調査に関連して概観した部分のみ一部加筆 (→表記部分)。



写真22 第2・3次調査出土土製品・鉄製品

2. 第4次調査の覚書

(1) 出土遺物—遺跡の年代観—

出土土器は第1～3次調査と比べて少なかったが、弥生土器は28Lコンテナにして約40箱が出土した。壺・甕・高坏・鉢・器台などの土器のほか、石鏃・石斧・砥石など石製品が出土した。土器は丘陵上の遺跡であることから器体表面の調整など不明なものが多い。遺構内出土の土器を優先して図化を行ったが、遺構周辺出土のものも多く、可能な土器に偏りがあつた。

調査では表9に示す6小様式の土器の出土が認められ、城ヶ谷遺跡の形成期は中期のIV-4様式期、盛行期は後期のV-1様式が想定される。地区別の傾向としてみた場合、1区ではV-1様式ないしV-2様式を中心にIV-4様式がわずかに出土している。2～4区ではIV-4様式、V-1様式の土器が中心で、IV-4様式の土器の出土の割合が高い。IV-2様式、V-3様式の土器の出土は極わずかである。西側の調査区ではこれまでの城ヶ谷遺跡での中期の土器の出土状況とは明らかに様相が異なり、地区としてのまとまりと捉えられる点が重要である。

表9 地区別 土器の出土傾向

出土土器様式	IV-2	IV-3	IV-4	V-1	V-2	V-3
出土状況	●	○	◎	◎	○	●
1区						
2～4区						

3区の尾根上で検出した中期の遺構SX302の土坑からは大型の器台や摂津系の有段口縁壺、播磨（県西部）系の鉢などが出土している。SX302を切り込むSB301は後期の建物で張り出し部をもつ。SX302とともに出土土器96・107などから播磨地方の影響が想定される。第1～3次調査では吉備系、瀬戸内系土器の出土が指摘されている。

一方でSD202の溝底からは接合、復元はできなかつたが、河内系の大型壺が破片の状態で出土している。また二上山系と考えられるSB306出土の大型サヌカイト素材剥片の出土や柱状片刃石斧の石材は四国の吉野川下流域産と想定されるなど諸地域との交流が窺われる。

高地性集落での大型サヌカイト素材剥片の出土については西神第50・65地点遺跡や頭高山遺跡が知られ、いずれも二上山系を主体とし、摂津地方の影響が想定される¹⁾。城ヶ谷遺跡においてまとまって出土したのは初めてであり、搬入時の形態や時期については明らかでないが、素材剥片の流通が確認された。またこれまでの調査で石鏃は10点ほど出土しており、うち1点は磨製である。石鏃の出土数は多くない。石斧についても同様で出土数はわずかである。2次調査で環状石斧（片）1点が出土し、3次調査では石包丁1点が出土している。これまでの調査を含め、出土石製品の中では砥石の占める割合が高い印象を受ける。今回出土の小型の仕上げ砥の大きさから、第2次調査SB01などでは長さ50cmほどの大型のものが出土している。砥石の出土は鉄製品の存在を示唆する可能性があるが、鉄製品の出土は鉄鏃・鉄鑿など極わずかである。利器の保有形態、使用状況については明らかでない。

出土遺物から2～4区については中期の遺構を主としており、城ヶ谷遺跡の形成期の地区と考えられる。谷部に形成された中期の遺構が埋没した後、後期の溝（壕状遺構）SD201を掘削して区画された丘陵尾根上にSB301・SB303などが構築され、斜面上位にはSB306などが構築される。溝で区画された後期の居住域の範囲はさして広くはない。東側の調査区1区についてはこれまでの調査地から続く後期前半の居住域であることが判明した。今回の調査では中期に属する明確な遺構の検出はなかつた。

集落域の中心となる第1～3次調査地ではこれまでに、数は少ないものの中期に属する遺構が確認されている。第2次調査SB26、第3次調査SB326、SX303などである。今回の2～4区検出の建物と同様、城ヶ谷遺跡の形成期、あるいは初期の丘陵開発期の遺構の可能性がある。第2次調査SB26が位置する尾根頂部付近の落ち込みから壺が出土しており、近接地では壺棺が採集されている。集落域の南東限を画する溝と想定される第2次調査検出のSD01に近く、現状で集落域とした範囲の南東縁辺部にあたる。

また第3次調査では調査地中央の西側に開く大池最奥部の谷底で伐採木の集積が確認され、丘陵開発に伴う痕跡と捉えられている。この谷を望む尾根の頂部には中期の建物と考えられるSB326が構築されている。谷に集積された伐採木が城ヶ谷遺跡開発期のものか、あるいは集落が盛行期に向かう際の新たな開発に伴うものか、現状で谷中の出土土器の検討が行えていないが、谷を見下ろす近接地に中期の建物の構築が指摘された調査時の所見は重要である。



写真 23 集落形成期の様相
 左：第2次調査SB20 東落ち込み出土土器 中：表採壺棺
 右：第3次調査谷部伐採木の出土状況

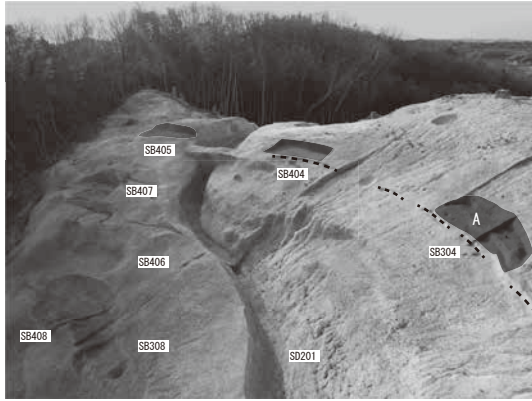
(1) 検出遺構—竪穴建物と段状遺構—

今回の調査でもこれまでの調査と同様、尾根上や斜面で竪穴建物を検出した。斜面の建物の下位の盛土はほとんどが流出しており、第1～3次調査でも建物の切り合いや重複する遺構が検出されていたが、今回の1区で検出したSB106とSX104、3区のSB304～306、4区のSB407、SB408などで遺構の重複や、反対に同一遺構の可能性が想定されるもの、建物個々でも壁溝が二重になるものや、1区のSB107、4区のSB402ではピットや焼土の検出状況から床面が2面存在する可能性など、拡張・縮小、補修が行われたと想定できる例が多く存在した。

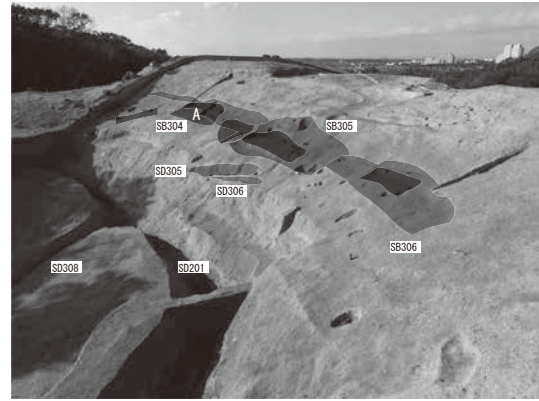
第1～3次調査と比べ、今回は遺構からの出土遺物が少なく、また地形に関係するのか、段状遺構の検出幅も小さく、斜面下位で床面を形成する盛土の認識も難しかった。

3・4区検出の段状遺構についても流土、盛土の区別が難しく、段状遺構の斜面下位の盛土の状況が不明瞭で、検討段階で課題は残った。検出状況を振り返り出土遺物を見ると、地山面直上や流土・盛土にIV様式の土器が含まれるが、地山面は傾斜し、明確な段状遺構の形態は確認できなかった。流土が堆積し、その後に盛土が施されたが、それらも流れ堆積の形となり、より上位で後期の段状遺構の一部を検出する状況であった。SB306出土の大型サヌカイト素材剥片なども傾斜する地山面上で、流土や盛土に含まれる形で出土したと考えられる。

4区で検出したSB404・405の形状や規模などから、改めてSB304～306のやや規模の大きな段状遺構としたものを俯瞰すると、SB404・405と同規模の建物や小区画が存在した状況が想定される。斜面地における流土、盛土の堆積状況、捉え方について反省と後悔が残った。



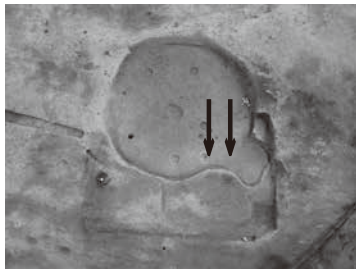
4区 南谷部西斜面段状遺構検出状況



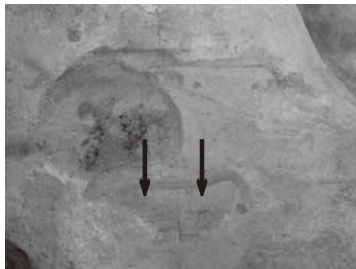
3区 南谷部北斜面上位段状遺構検出状況

4区上段で検出したSB404・405の状況から3区谷部上段の段状遺構も同規模の建物であった可能性が想定される。

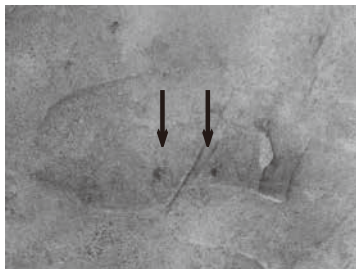
Aとした建物はSB304で検出した小段で、SB404などと同規模である。前面（下位）で段や溝を検出している。



SX302



SB407



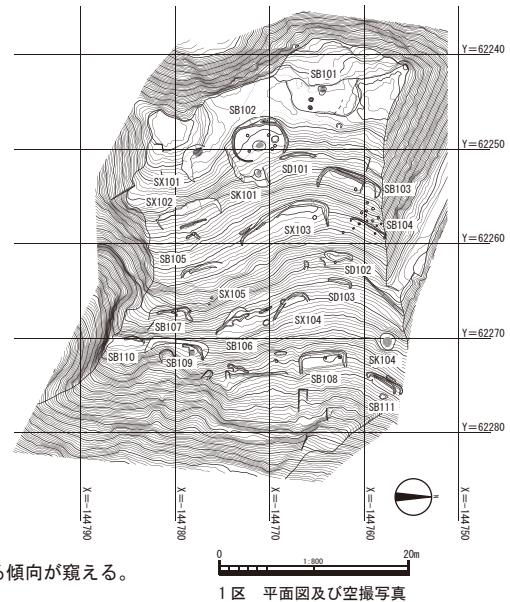
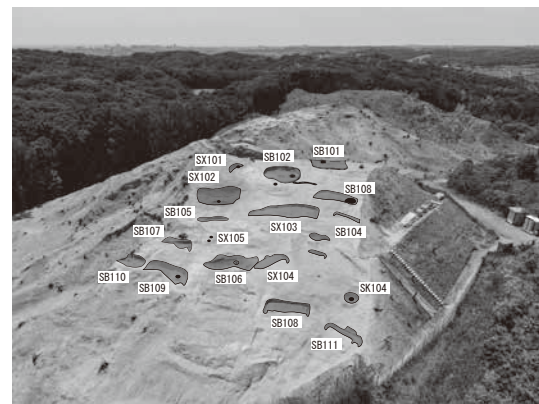
SB408

2箇所1対の被熱痕跡（↓の先の点状部分）

3・4区の上記遺構では2個1対の被熱痕跡を検出した。

1区においても被熱痕や炭・焼土を埋土とする遺構を検出した。

建物内で検出した被熱痕や炭を埋土とする遺構は床面北側に配置される傾向が窺える。



1区 平面図及び空撮写真

第78図 調査地諸相（3・4区検出遺構の被熱痕及び1区検出遺構の状況）

検出建物の平面形は基本的にこれまでの調査と同様に丘陵尾根上のもは円形を主体とし、斜面で検出の段状遺構は平面（隅丸）方形を呈すものである。その中で今回の調査地4区の支尾根北西端部で検出したSB402は単独で存在する建物で、床面に被熱痕と焼土の堆積を伴う。また第3次調査でも集落域の北端尾根上に単独で構築されたSX330が検出され、ともに小型

の平面方形の建物である。SX330はIV様式の土器の出土が報告されていたが、V-1様式の土器の出土も認められ、後期（に継続する）の建物と考えられる。比較的眺望の良い集落域の両端、丘陵端部で平面方形の小型の建物を検出した状況を留意点としておきたい。

4区のSB407は構築状況がやや不明瞭ながら、谷の斜面下位に構築された平面円形の建物である。埋没後に上部に平面方形の建物を構築し段状遺構が形成されるが、出土遺物はいずれも中期の土器で、仮に各段の遺構に同時性があるとすれば、段状平坦面に竪穴建物が構築された例は、第1次調査検出遺構が明瞭である。盛土の流出が少なければ同様の構造の遺構がさらに確認されたと考えられる。建物規模は残存長で長軸5～6mのものを主体として、8～10mのやや規模の大きいものが点在する。第1～3次調査検出の建物については年報記載の一覧表を再掲した。詳細については各年度の年報に譲る。

また今回の調査では床面に被熱痕を伴う遺構が多く見られた。通常の建物とは異なる工房や何らかの作業スペースなどの可能性を考えながら調査を行った。1区で特異な存在であったSX102などいくつかの遺構については土壌サンプルの水洗・選別作業を行ったが、微細で少量の土器片やサヌカイト片が出土したのみでそれ以外に、例えば金属片など特異な遺物の発見はなかった。ただ、通常の建物とは様相が異なる印象を受けた。特徴として挙げておく。

被熱痕を検出した遺構は1区のSB102・SB110・SX101・SX102・SX105・SK104、2区のSB202、3区のSX301・SX302・SB303・SX305と周辺地山面、4区のSB402・SB407・SB408、SD201内の被熱痕SX401である。そのうち3区SX302、4区SB407の4段目、SB408で検出した被熱痕は2基並列する共通点がある。どのような構造、また行為に伴う痕跡かは明らかでない。

（3）検出遺構－溝（壕状遺構）－

2～4区の谷部では等高線沿って斜面上下に並行する2条の溝（壕状遺構）を検出した。上方のSD201は2区～3区にかけて等高線に沿って掘削されたのち、4区の西端で尾根を切断する。第1次調査の溝1も谷斜面にはほぼ等高線に沿って掘削された溝である。調査時の所見では掘削土を斜面下位に盛って根固めしながら肩部を構築したとされるが、この状況は地山面で検出した場合には盛土に見えるが、流土堆積の上から掘り込まれた可能性があることを今回検出のSD201の3～4区境部分の土層断面の観察から推察しており、一考の必要があろう。

第2・3次調査検出の溝は基本的に尾根を切断し、下方は水みち状になるものが多いが、第3次調査SD303も等高線に沿って掘られた部分が多い。時期は古墳時代後期の須恵器の出土から同時期で報告されるが、今回の調査では、溝の掘削過程において埋土の下方で土坑状のプランを検出し、土層断面を設けて掘削を行った結果、溝の埋土とほぼ同質ながら、そこからのみ後世の遺物が極少量出土する状況を確認した。SD201、またSD202でも埋土の途中に窪地を形成していた時期があることが堆積層の観察より窺える。開口する時期に土坑を設けることや、炭層が水平堆積する箇所では、溝底で火を焚くなどの行為があったと想像する。

これまでの調査で検出された大規模な溝は検出状況から3種に分類できよう。

- ①環状区画溝（尾根切断＋等高線に平行）＝4次SD201・3次SD303・1次溝1
- ②尾根切断溝（尾根切断＋下方水みち）＝3次SD301・SD302・SD304・2次SD01・SD1001
- ③谷中緩傾斜溝（谷中平坦部・通路）（犬走り状）＝4次SD202・1次溝2

周辺での遺構の検出状況や溝の規模を考えると、基本的には弥生時代に掘削されたもので、後世の遺物の出土は上述の検出状況による可能性を想定する。検討が必要であるが選地、形状からもその可能性が高いものと推測する。

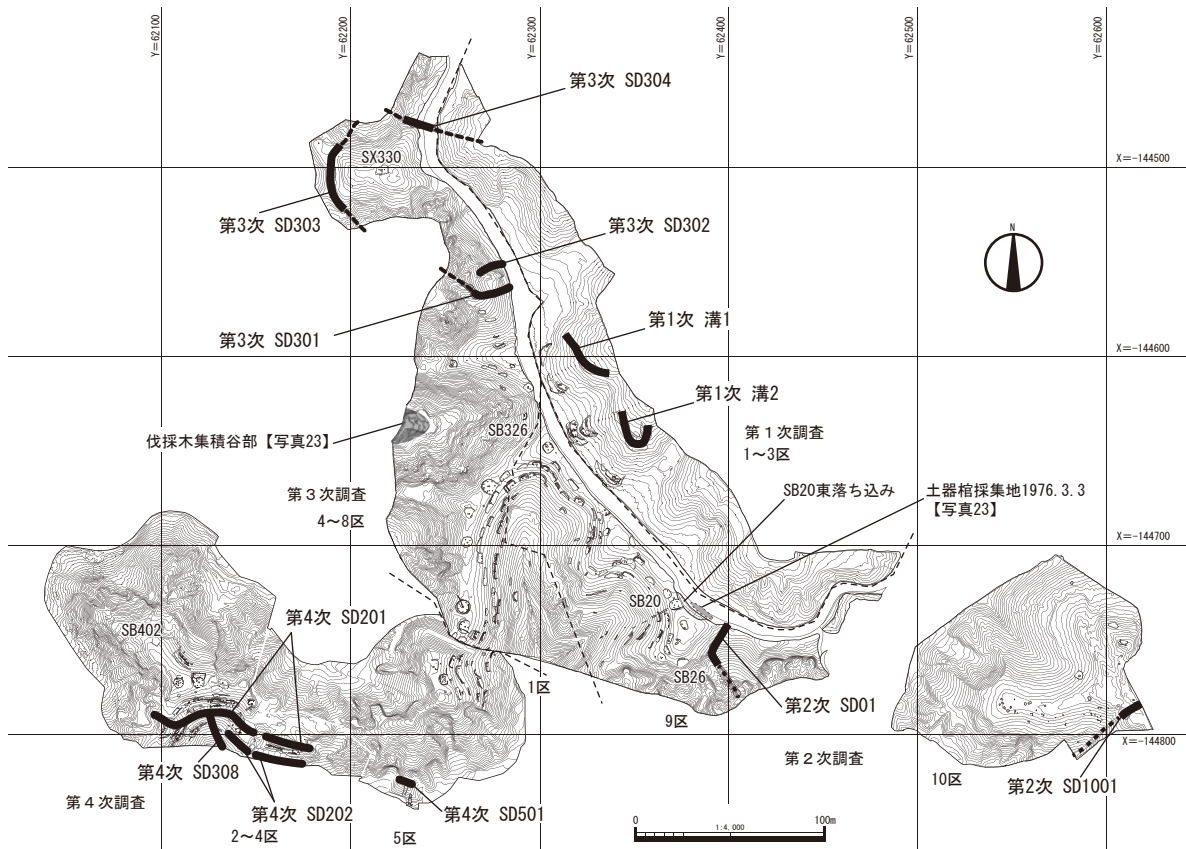


写真 24 第 1～3 次調査検出の溝（左：第 1 次調査溝 1 中：第 2 次調査 SD01 右：第 3 次調査 SD303

今回の調査検出の溝 SD201・202 は、断面形状や掘削範囲（長さ）が異なるが、後期の溝と考えられる。SD201 は城ヶ谷遺跡の後期段階の集落域西限を示す。等高線に沿って掘削された長さがこれまでに検出された同様の溝と比べて長いことが特異点といえる。

第 3 次調査終了時点では、第 3 次調査 SD302 と第 2 次調査 SD01 の間の南北 230 m が集落域とされており、今回の SD201 の検出により、集落域の東西がおよそ 300 m に及ぶ状況が明らかになった。後期とされる第 3 次調査 SD304 とともに、古墳時代後期と推察される第 3 次調査 SD303 が前述の理由で弥生時代の溝となるならば、南北は 350 m に及ぶ可能性も考えられる。

今回の調査では 4 区 SD308 が SD201 から派生して谷底に向かい直線的に掘削されていた。このほかに 3・4 区では竪穴建物や段状遺構から下方の谷に通じる通路状の溝を検出している。SX301 に伴う SD301、SB305 に伴う SD305 などである。谷へのアクセスを考える上で興味深い痕跡で、SB306 の上方の面上で後期の土器が出土した平坦面も通路であったかと、調査時の移動経験から想像する。1 区の斜面中位の緩傾斜部分も同様である。



第 79 図 第 1～4 次調査 成果関連遺構検出位置図

(4) 奈良時代須恵器窯の調査

今回の調査で調査地南東部の丘陵裾で須恵器窯を検出したことは大きな成果であった。奈良時代前半、8世紀前半に操業された窯と考えられる。神戸市域で初となる奈良時代の須恵器窯の検出とともに、須恵器生産が盛んな播磨東南部における新たな状況を提示した。

窯は検出状況より地山面に当初窯が構築された後、焼成部下方や燃焼部、焚口で3回ほどの改築、改修と考えられる痕跡を確認している。また焼成部口付近床面に残る焼結層の検出状況、窯内堆積層の層序から最終的に窯は規模を縮小して操業された可能性があり、この場合の窯長は4.5mほどとなる。崩落天井の被熱酸化層とも捉えられる赤化層の解釈と、地山面での操業形態は不明であるが、前段階の側壁の上に重ねられた焼結層に木材芯の痕跡を留める継ぎ足しの状況が見られたことから、天井構造に変化があった可能性が考えられる。出土須恵器にわずかな形態差が認められるが、これらが同調するのか、あるいは幅を持つかは検討を要する。

また西側で検出した窯状遺構は、隣接して窯の構築を図りながら焼成を行うに至らなかった痕跡の可能性があり、周辺で窯の構築が意図されていたことを示すと考えられる。

窯跡からの出土須恵器は高台付き坏B・蓋を主体とし、坏Bの高台形態は2形態ある。坏B①(胎土分析に際し付した分類番号。遺物番号155)は高台が幅広で端部が緩く張るものである。色調は暗青灰色を呈し、他のものと明らかに様相が異なる。焼成部の上方から2点のみ出土した。坏B②(胎土分析に際し付した番号。遺物番号157など。以下、坏Bについては①・②で表記)としたものは高台幅がやや狭く、端部は鋭角に仕上げられ、シャープな作りの印象を受けるものである。色調は灰色系で焼成は堅緻である。②やそれに類する焼成具合のものは焼成部下方、燃焼部や焚口を中心に窯の下位でのみ出土する。坏Aも底部にヘラケズリの痕跡を残し、丸みを帯びるものと平底化が進んだもの2形態に大別できる。古相のものは当初窯の床面などに融着した状況が見られた。焼成部の中ほどの、窯体片を多く含む崩落天井の堆積と考えられる赤化層の上・下位で異なる状況を示していた。

地山面の当初窯床面とその上面のわずかな貼土改修痕で出土する①と、焼成部下位や燃焼部、焚口付近で出土する②との形態変化、②としたものとそれに類する焼成具合を呈する他器種の須恵器との間に、焼成条件など何らかの変化(画期)が求められる可能性を想定していた。窯の構造上の変化も考えられることから、操業時期に少し幅があるとも予測していたが、窯の検出が周辺で1基のみであり、さほど幅を持たせる必要がないことも考えられよう。

焼成部の赤化層を境に様相が変わることには留意が必要であり、出土須恵器に形態差が認められ、また改築痕跡の有無についても状況が異なる。端的には上方は早い段階で使用していない可能性があり、それは床面の還元状況からも窺える。窯の廃絶や構造を変えて焼成を再開した可能性を考え、時期差を求めた背景である。

西側の窯状遺構から出土した須恵器片はいずれも②と同様の色調、焼成具合を呈しており(観察の結果では②に類するもののみと考えられる。小片で不明なものは①に類するものが混入した可能性は残る)、焚口整地層から出土した破片との接合が確認できたことから、東側の窯の操業時に構築が図られ、使用されることなく埋め戻されたと考えている。付帯施設や土取りの痕跡の可能性もあるが、それは東側の窯の当初窯操業時期以降であろう。

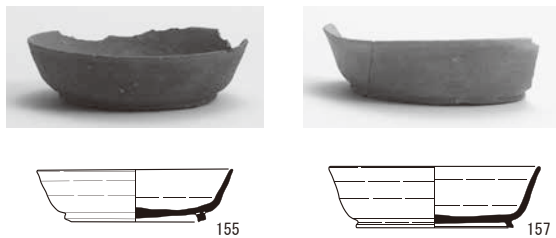
今回の窯跡出土の須恵器について産地データの特性を明らかにすることを目的に、合わせて調査地で検出されていた蔵骨器に使用された須恵器との関係などを検討するために蛍光X線分析による胎土分析を実施いただいた。分析結果の詳細については別項に譲る。

分析からは今回の窯跡出土の須恵器が当地域の地質的背景に由来する上で、固有の特徴ある産地データを示すことが明らかになった。今後の資料比較において重要な成果であり、基礎資料としての価値が見いだせる。

また今回の分析のサンプル化に際しては、坏Bにおける高台の形態差、坏Aも同様に器形や底部の成形方法、焼成状況による色調の違いなどから、窯の操業において何らかの画期が示される可能性を含めてサンプル選択をしたが、試料設定の坏Bの①と②の間に明瞭な差はなく、これは操業体制に変化がなかったことを表していると考えられる。窯体構造の変化や蔵骨器に伴う須恵器の年代観については現段階で推測部分が多いが、時期差が認められても検出窯の操業に関わる同一集団の系譜上にあつたと推測されるものである。

窯状遺構の検出や当初は蔵骨器に用いられた須恵器がやや古相を示すものと考え、周辺に別の窯が存在することが想定されたが、同様の見解が得られたことに加え、蔵骨器に用いられた須恵器の一部が、明石川西側で7世紀代より操業される高丘窯産である可能性が示されたことは、既存の操業地から工人が移動し、新たな窯の操業地の模索や開発、生産の伸張が図られたことを想起させる重要な成果と考えられる。胎土、成形方法、焼成状況が異なっていたが、分析により産地が推定されたことにより、関連性を改めて検討する必要がある。

これまでの調査では蔵骨器や火葬墓の周辺で遺構に伴わない須恵器も出土しており、他に蔵骨器があつたと推測されていたが、今回検出した窯で焼成された可能性が考えられる試料 68 は遺跡の北端に位置する SD303 から出土しており、丘陵周辺一帯での新たな窯の構築候補地を探す動きなどがあつたものかと想像を逞しくする。



第 80 図 坏①・②比較図



第 81 図 周辺の主な窯跡群



写真 25 第 2・3 次調査出土蔵骨器

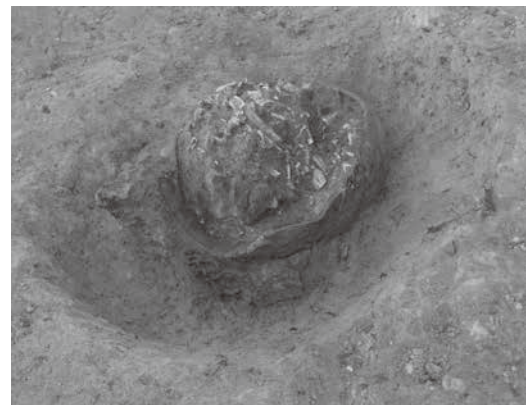


写真 26 第 2 次調査 ST1003 検出状況

今回の窯跡の検出状況、須恵器の出土状況より①（155）に類するものは2点のみの出土であるが、窯内では古相を示すことが明らかになり、また②（157など）に類するものは後出し、供伴する他の器種とともに一時期の焼成組成を表すものとして評価されよう。当地域における須恵器生産の様相を考える上で重要な成果であったと考えられる。



第 82 図 窯跡及び蔵骨器・火葬墓検出位置図

3. まとめ—城ヶ谷遺跡の現状を振り返る—

第1～4次調査の実施により城ヶ谷遺跡で100棟近い建物の存在が確認された。現状の遺跡の範囲では弥生時代中期末、IV—4様式期より西側を中心に居住域の形成がはじまり、V—1様式期ないしV—2様式期までを盛行期とするものと捉えられる。建物の同時性については明らかにできていないが、後期前半の盛行期を通じおよそ90棟の建物があり、大池のある大きな谷を挟むが、溝（壕状遺構）により区画されたおおよそ南北230m（最大で350mの可能性もある）、東西300mの範囲が集落域と想定される。溝（壕状遺構）は一部で二重となり、第3次調査地の北端に小さな区画が存在する可能性も考えられる。今回の調査で城ヶ谷遺跡における居住域の形成の様相と規模について一定の成果が得られたと考えられる。

第1～3次調査の成果について現状ですべて反映させることは難しいが、調査後（震災復興に伴う調査による繁忙期の真ただ中であつた）から年報作成時まで精力的に行われた当時の復元作業の一部を援用しながら現状の城ヶ谷遺跡の在り方を考えてみた。。これまで明石川流域で発掘調査が行われた高地性集落は多いが、集落規模がある程度判明した調査例として重要な成果と考えられる。

今回の調査地の西側の調査区2～4区において検出した竪穴建物、段状遺構は中期を中心とするもので、南側の谷部検出で、後期に掘削されたSD201よりも下位に位置するものは中期の遺構と考えられる。尾根上にはSX302など3棟ほど構築されている。谷部の遺構が埋没した後、SX302に重複して構築されたSB301などを中心に、後期にはSD201により区画された上位の範囲に数棟の建物が構築される。これまでの調査では検出がわずかであつた中期段階の遺構・遺物が、西側地区としてまとまりをもって検出できたことは大きく、また検出位置から南側の丘陵上、青谷遺跡との関係が想定されることが重要と考えられる。

青谷遺跡に近接する丘陵部の尾根上から南向き斜面にIV様式期の遺構が展開し、これまでの第2・3次調査地に点在する同時期と考えられる建物が、丘陵開発に伴い構築されたとすれば、その後谷奥へ漸次、集落域を拡張し、新たな居住域を形成したものと想定される。基本的に溝（壕状遺構）は尾根を切断する目的で構築されるが、地形や遺構分布の状況に応じて掘削されたと考えられる。今回検出のSD201は等高線に沿って掘られた部分が長く、これまで検出の溝と状況がやや異なるが、背景として地形はもちろんであるが、西側の調査区で青谷遺跡に近接することに一因があるかと推察する。

青谷遺跡との関連が見いだせる状況は、これまでの城ヶ谷遺跡における眺望に関する指摘に対する答えに繋がる。賜った付論に詳しいが、これまで明石川流域で調査が行われてきた高地性集落と比較して、眺望の狭さが説かれてきた城ヶ谷遺跡であるが、今回の西側の調査区の様相や眺望分析の結果から、南側の青谷遺跡との関連が強く認められるとすれば、必ずしも城ヶ谷遺跡単体での好眺望を必要としない状況が予測される。流域の高地性集落がいずれも好眺望の地に立地することに比して城ヶ谷遺跡に閉鎖的なイメージが伴い、集落選地の背景について検討を要するとされてきたが、青谷遺跡から派生する集落形成、丘陵奥部に居住域を求めた結果とすれば、城ヶ谷遺跡の立地は理解できよう。また別の角度から平野部を望む視点を持ち合わせた可能性も評価される。検討が必要とされるが、櫛谷川沿いの平野部への視界は広くはないものの、櫛谷川を挟んだ西側の段丘上に立地する弥生時代中期末～後期の同時期の遺跡である菅野遺跡、西神第62地点遺跡などが見下ろせる可能性が示された。青谷遺跡からは死角となる平野部の遺跡に対する眺望を補完するための選地、丘陵開発を想像する。

現地での調査時には1区南西端の最高所からは南西方向の海上が、4区SB401・402付近の最高所からは平野部を跨ぎ、北側の丘陵（西神第65地点遺跡などが立地する方向）が遠望できるなど視界が開けることを体感した。現状、確認されている集落域は平野部からは奥まった位置にあるが、今回の調査地の2～4区から続く丘陵の西側や、大池北側の丘陵に集落域が広がる可能性が、平成6（1994）年の当初の試掘調査の結果や地形観察から想像される。

流域での高地性集落の分布に関しては、大規模高地性集落と近接して単独で建物1棟のみが検出される高地性集落の立地が指摘されてきた²⁾。城ヶ谷遺跡では第2・3次調査において中期の建物が1棟（少数）確認されていたことから、位置的に西神第65地点遺跡との関係性が想定されていた。城ヶ谷遺跡の形成については周辺の高地性集落同士の関係とともに、眺望分析の結果を踏まえ、視認される平野部の遺跡との関わりについても検討が必要となろう。中期段階においては、櫛谷川中流域から、地域の拠点（母村）的集落を擁する明石川と伊川との合流地点付近にまで至る流域ネットワークや遺跡の展開についての検討も必要となろう。

明石川流域の集団形成は搬入土器の出土や、石器の素材産地などから東西両方向からの影響が想定されている。平地の遺跡と丘陵上の遺跡の造営集団の関係については摂津（以東）、播磨（以西）、明石海峡を挟み南方からの影響が考えられ、それらが交錯する要衝の地であり、明石海峡を見通せる城ヶ谷遺跡、青谷遺跡が立地する丘陵は様々な要素が混じり合う可能性がとくに高くなるであろう。城ヶ谷遺跡、青谷遺跡での集落の盛行期、存続時期以降に各河川中流域から下流域にかけて新たに集落形成が行われる遺跡が青谷丘陵南側を中心とすることや、その選地において眺望を備えた段丘上にやや規模の大きな集落が造営される傾向は興味深い。

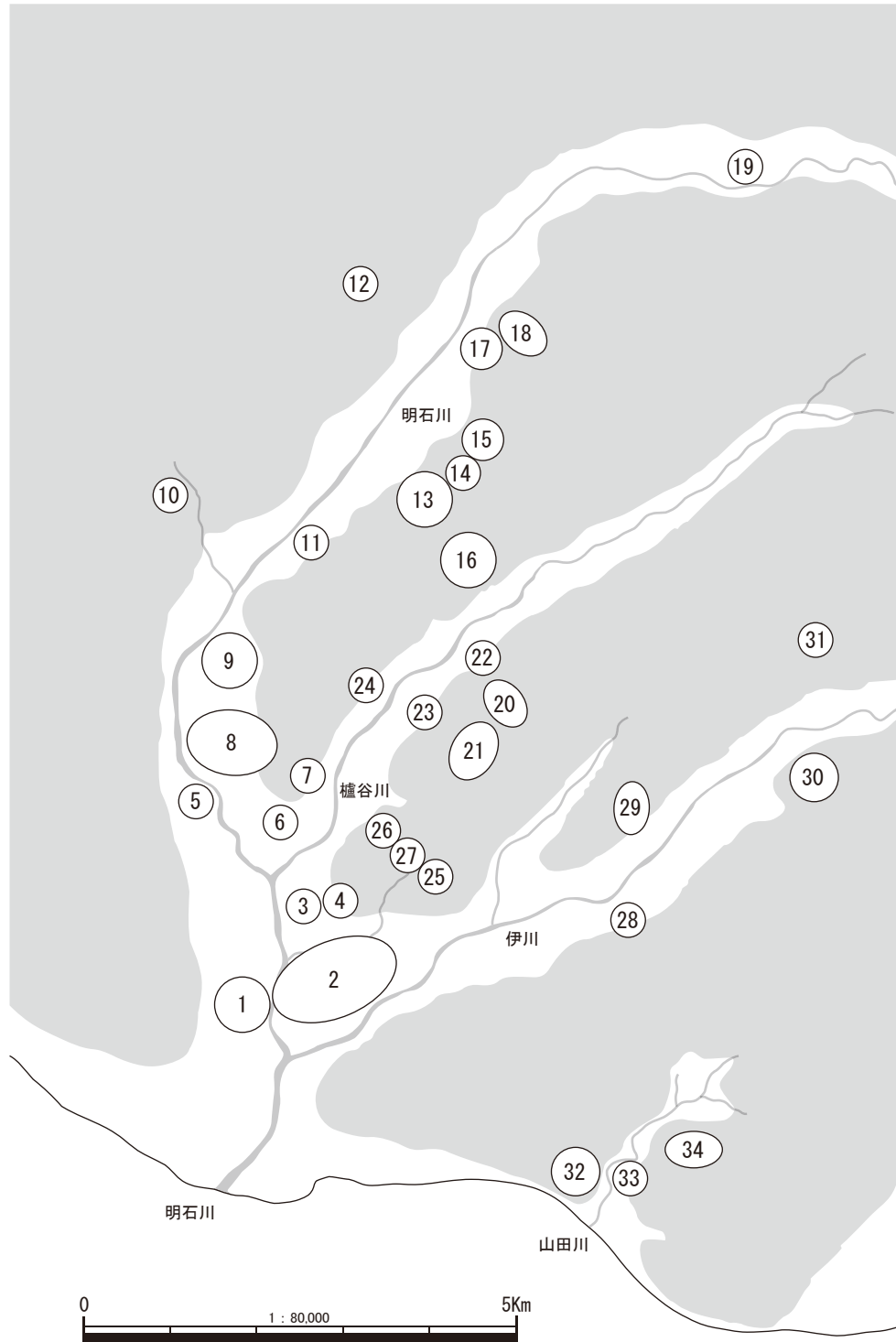
青谷遺跡ではこれまでに発掘調査が行われていない。詳細は明らかでないが、弥生時代中期～後期の土器が採集され、加えて小型仿製鏡、磨製石戈・石剣の出土が知られる。今回の眺望分析の結果や丘陵規模、出土遺物の内容からも青谷遺跡の優位性は容易に想像される。関連性がより高くなり、同一丘陵一体となった集落経営を考えることが重要であり、今回の調査成果はその一部となるものである。踏査記録に記された状況³⁾や今回の調査終了間際に青谷丘陵に上ってみての尾根上の状況は、今回の城ヶ谷遺跡での状況と同様にかなり土砂が流れ、地形改変の様子が窺え、従前、どれほどの遺構があり、また現在残っているのか、青谷遺跡の状況が不詳な中、隣接する城ヶ谷遺跡の状況が明らかになりつつあることは、青谷遺跡を考える上で重要な調査結果であったと思われる。

また城ヶ谷遺跡の特徴的な遺構である溝（壕状遺構）であるが、高地性集落に壕を巡らせる意味について様々な考察が加えられているが、個々の地域においてそれぞれに背景があるものと考えられる。神戸市域で壕が確認されている、もう一つの高地性集落である表山遺跡の壕は環壕の形態であり、推定で長径200mとされる。城ヶ谷遺跡と時を同じく発見、調査が行われ、後期前半を盛行期とする集落であり、環壕のほかに段状特殊遺構、橋状遺構など多彩な遺構の検出とともに北部九州系の小型仿製鏡が出土するなど、流域における重要な遺跡の一つに挙げられる。祭祀性の強い段状特殊遺構は環壕の内側に構築されており、出土土器の様相から環壕外側の建物群とは様相が異なるものと想定されている⁴⁾。城ヶ谷遺跡とは立地する丘陵形態、眺望域などは大きく異なり、壕は特異な遺構・空間を圍繞する存在かもしれない。形状・規模、ここでは詳細な対比は行えないが、壕であっても単純に比較できないのが現状であろう。

城ヶ谷遺跡の場合は基本的には集落を画する溝（壕状遺構）と想定するが、今回検出のSD201は立地から青谷遺跡との関係において掘削された可能性が高いもので、何らかの緊張状

態などを背景としながら、集落編成上の区画を明示したものと想像する。また谷部からの通路の役割なども兼ねていたかと合わせて想像する。今後の検討課題としたい。

後期段階の集落形成という同時性ととともに、城ヶ谷遺跡が立地する櫛谷川、伊川間の丘陵部にのみ塚を巡らせる集落が存在する事象は、付論に示されたようにその造営集団についての検討が重要となるであろう。



第 83 図 明石川流域の弥生時代集落遺跡

表 10 明石川流域の弥生時代中期～後期の遺跡の消長

No.	遺跡名	所在地	立地	遺跡の消長					備考
				Ⅲ期以前	Ⅳ期		Ⅴ期		
				前半	後半	前半	後半		
1	吉田南	西区森友	沖積地						破鏡
2	新方	西区伊川谷町潤和	沖積地						碧玉製玉造
3	今津	西区玉津町今津	沖積地						
4	高津橋・岡	西区玉津町高津橋	段丘上						比高 15 m
5	出合	西区中野	沖積地						
6	小山	西区小山	沖積地						
7	日輪寺	西区玉津町小山	段丘上						
8	玉津田中	西区宮下ほか	沖積地						
			段丘上						
9	玉津田中（平野）	西区平野町福中	沖積地						
10	大谷	西区平野町印路	丘陵上						比高 50 m
11	大畑	西区平野町大畑	段丘上						
12	鍋谷池	西区平野町黒田	丘陵上						比高 50m
13	西神第 50 号地点	西区春日台	丘陵上						比高 64 m
14	西神第 48 号地点	西区春日台	丘陵上						台状墓
15	西神第 38 号地点	西区美賀多台	丘陵上						有樋式磨製石剣 比高 45 m
16	西神第 65 号地点	西区樫野台	丘陵上						凝灰質砂岩製銅鐸鑄型未製品 比高 65 m
17	養田	西区押部谷町養田	段丘上						
18	養田中ノ池	西区高塚台	丘陵上						有樋式磨製石剣 比高 40 m
19	押部	西区押部谷町押部	段丘上						
20	城ヶ谷	西区櫛谷町菅野	丘陵上						壕 比高 65 m
21	青谷	西区玉津町水谷ほか	丘陵上						磨製石剣 石戈 小型仿製鏡 比高 70 m
22	谷口・栃木	西区櫛谷町谷口	沖積地						
23	松本	西区櫛谷町松本	沖積地						小型仿製鏡
24	菅野	西区櫛谷町菅野	沖積地						
25	潤和横尾	西区玉津町横尾	段丘上						比高 20 m
26	水谷	西区玉津町水谷	段丘上						比高 20 m
27	馬掛原	西区玉津町高津橋	段丘上						区画墓
28	池上口ノ池	西区伊川谷町上脇	段丘上						比高 30 m
29	表山	西区伊川谷町上脇	丘陵上						環壕 小型仿製鏡 比高 50 m
30	頭高山	西区学園西町	丘陵上						磨製石剣 比高 60 m
31	久留主谷	西区伊川谷町前開	丘陵上						比高 70 m
32	狩口台	垂水区狩口台	丘陵上						比高 35 m
33	大歳山	垂水区西舞子	丘陵上						比高 20m
34	舞子東石ヶ谷	垂水区舞子坂	丘陵上						比高 50 m

4. 最後に

高地性集落に伴う遺構・遺物の検出と須恵器窯の検出、調査を行うという膨大な情報を消化しなければならぬ困難な調査ではあった。

高地性集落に関しては、明石川流域では数少ない後期前半を盛行期とする高地性集落であり、その様相をある程度示せたことは重要な成果であろう。昨今、高地性集落の解明に向け様々な視点から盛んに議論が行われる中、資料の一つに加えていただければ幸いである。不十分な点は報告者として反省するところであるが、ひとまず検出状況と所見を報告する次第である。

城ヶ谷遺跡の集落域が広がる可能性が考えられるとともに、南に位置する青谷遺跡の様相の解明が付近の遺跡、集落動向を考える上で重要なことは大方の認めるところである。青谷遺跡では発掘調査の実施こそないが、古くから知られる表採遺物は目を見張るものであり、踏査の記録からも大規模拠点的高地性集落となりうる可能性をもつ重要な遺跡である。

今回の調査成果について青谷遺跡との関連性を想定することを前提とした。遺跡の立地条件はもちろん、今回の検出遺構・出土遺物から遺跡の同時期性が高くなったことで、今後、青谷遺跡を考える上で城ヶ谷遺跡の在り方が判明しつつある状況は重要であろう。さらに何らかの契機により、少しでも城ヶ谷遺跡の既往調査地の周辺や青谷遺跡での様子が判明していけば、それに応じて改めて今回の調査成果も含め検討する必要性が生じるであろう。報告とはいえ、多分に推測が多くなった点は反省すべきであるが予察と称しておきたい。

今回の調査に伴い、眺望分析により具体的なデータが提示され、それを踏まえ城ヶ谷・青谷両遺跡が立地する丘陵が眺望を重視した場合に非常に好立地であることが示され、さらに後に続く流域の弥生時代の集落形成において眺望を重視する遺跡の存在が多いことから、一連の流れ、関わる集団の存在を示されたことは当地域の集落形成を考える上で非常に重要なものと思われる。

また奈良時代の窯跡の調査は高地性集落の調査に手を取られて十分に行えたとは思えないが、窯業盛んな播磨東南部での新しい動きを少しでも示せたかと思われる。加えて胎土分析を通じて精緻な生産地データの抽出とともに、これまで検出されていた蔵骨器との関連から明石市所在の高丘窯との関係が想定されるなど須恵器生産、工人集団の動向について検討が必要になろう。改めまして両分析と所見・考察をお寄せいただきましたことに感謝申し上げます。

城ヶ谷遺跡の様相が徐々に明らかになりつつある。これまでの調査成果の通観と検討の必要性を追認する次第である。

出土土器については下記を参照した。

寺沢薫・森岡秀人編 1990『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社

大手前大学史学研究所 2007『弥生土器集成と編年－播磨編－』

篠宮正「東播磨地域の編年」

長友朋子・田中元浩「西播磨地域の編年」

山本雅和 2003「弥生時代後期の土器の検討」『今池尻遺跡 新方遺跡平松地点発掘調査報告書』神戸市教育委員会

深江英憲 2000「第4章 出土遺物」『表山遺跡 池ノ内群集墳』兵庫県教育委員会

また森岡秀人氏には調査期間中から整理期間中にわたり検出遺構、出土遺物に関して多くのご助言、ご教示をいただきました。記して深謝いたします。

【註】

- 1) サヌカイトの産地分析や土器の特色から明石川流域の丘陵上の遺跡については摂津地方からの影響が考えられる（藁科・丸山・東村 1989）（園原 2020）。
- 2) 大規模な高地性集落に近接して河川対岸の丘陵頂部で 1 棟のみ建物が検出される遺跡の組み合わせが指摘されており、西神第 50 地点遺跡と鍋谷池遺跡、頭高山遺跡と久留主谷遺跡、西神第 65 地点遺跡については中期末の建物が確認されていた城ヶ谷遺跡との関係が想定されていた。これらは大規模集落からの眺望死角を補うための見張り台的な役割を果たすと想定された（丸山 2010）。今回の調査成果より城ヶ谷遺跡では建物の同時性は不明であるが、単棟での構築でない可能性がある。集落規模が異なる点と合わせて丘陵間のネットワークについては検討の必要性がある。
なお、西神ニュータウン内の遺跡（西神ニュータウン内第〇地点遺跡）の表記については紙幅・図表の都合により「西神第〇地点遺跡」「西神 NT. No. 〇地点」などとして適宜表記した。
- 3) 遺物の表採状況や堆積層の観察からブルドーザーにより丘陵頂部から斜面に土砂が押された状況など丘陵部が一部開発された様子が記される（赤松 1973）。第 1 次調査地と第 2・3 次調査地の間で調査区境の尾根筋の道も開発に伴い重機などにより開かれた道であったと聞く。
- 4) 環壕区画内の段状特殊遺構出土土器は吉備系、環壕埋土及び環壕区画外からの出土土器は河内系の土器をそれぞれ主体とし、様相が異なると考えられる（深江編 2000）。

【引用・参考文献】

- 赤松啓介 1973 「神戸市垂水区青谷遺跡出土の石戈 (1) - 弥生社会流通経済の一試論 -」 『考古学雑誌』 59-3
- 稲原昭嘉 2013 「高丘古窯跡群」 『明石の古代』 発掘された明石の歴史展実行委員会・明石市
- 宇佐美智之 2021 「眺望分析の手法と高位集落の視界情報」 『季刊考古学』 第 157 号 雄山閣
- 大阪府立弥生博物館 2019 『弥生時代の高地性集落とは - 大阪における特徴と性質 -』 大阪府立弥生文化博物館図録 66
- 窯跡研究会 2010 『古代窯業の基礎研究 - 須恵器窯の技術と系譜 -』
- 北野博司 2007 「律令国家転換期の須恵器窯業」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 第 134 集 国立歴史民俗博物館
- 川部浩司 2021 「「高地性集落」をとりまく環壕の意義」 『季刊考古学』 第 175 号 雄山閣
- 神戸市教育委員会 1998 「城ヶ谷遺跡第 1 次調査」 『平成 7 年度神戸市埋蔵文化財年報』
- 神戸市教育委員会 1999 「城ヶ谷遺跡第 2 次調査」 『平成 8 年度神戸市埋蔵文化財年報』
- 神戸市教育委員会 2000 「城ヶ谷遺跡第 3 次調査」 『平成 9 年度神戸市埋蔵文化財年報』
- 近藤玲 2006 「武力への序曲 - 高地性集落の意義 -」 『古代文化』 58- II (財) 古代学協会
- 佐藤隆 2004 「8 世紀の須恵器編年と難波宮・平城宮の並行関係 - 陶器窯跡編年の再構築に向けて・その 2 -」 『大阪歴史博物館研究紀要』 第 3 号 大阪歴史博物館
- 柴田昌児 2004 「高地性集落と山住みの集落」 『考古資料大観 10 弥生・古墳時代 遺跡・遺構』 小学館
- 園原悠斗 2020 「弥生時代における低地集落と高地性集落 - 石鏃からみた明石川流域の小地域様相 -」 『考古学研究』 66-4 考古学研究会
- 龍野市教育委員会 1995 『尾崎遺跡 II - 市道北山長尾線新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』
- 禰亘田佳男 2020 「「弥生時代畿内地域の鉄器化、防御集落、武器所有」を考える」 『古代武器研究』 vol. 16 古代武器研究会・山口大学考古学研究室
- 禰亘田佳男 2020 「「近畿における鉄器製作遺跡の「再発掘」」 『新・日韓交渉の考古学 - 弥生時代 - (最終報告書 論考編)』 「新・日韓交渉の考古学 - 弥生時代 -」 研究会

- 発掘された明石の歴史展実行委員会・明石市教育委員会 2010『発掘された明石の歴史展 明石の弥生人』
- 兵庫県教育委員会 1996『神戸市西区 玉津田中遺跡 - 第 6 分冊 -(総括編) - 田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』(兵庫県文化財調査報告第 135-6 冊)
- 深江英憲編 2000『神戸西バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 1 表山遺跡・池ノ内群集墳』(兵庫県文化財調査報告第 202 冊) 兵庫県教育委員会
- 深江英憲 2003「山上の環壕集落 表山遺跡」『播磨の弥生社会を探る - 弥生時代中期から後期における集落動態 - 』第 4 回播磨考古学研究集会の記録 第 4 回播磨考古学研究集会実行委員会
- 前田佳久 2001「大阪湾北岸地域の弥生集落 - 神戸市域を中心にして -」『みづほ』第 35 号 大和弥生文化の会
- 丸山潔 2010「高地性集落の出現と終焉」『明石の弥生人』発掘された明石の歴史展実行委員会・明石市教育委員会
- 丸山潔 2022「弥生時代の墓と祭祀 城ヶ谷遺跡」『明石の墓と祭祀』発掘された明石の歴史展実行委員会・明石市
- 森内秀造 2019「明石地域の古代窯業」『明石の歴史第 2 号別冊 明石の瓦』明石市史編さん委員会
- 森岡秀人 1986「高地性集落性格論」『論争・学説 日本の考古学』4 弥生時代 雄山閣
- 森岡秀人 2002「高地性集落研究の現状と今後の展望」『古代文化』54-4 (財) 古代学協会
- 森岡秀人編 2021『季刊考古学』第 157 号 特集：高地性集落論の新しい動き 雄山閣
- 山本雅和 2003「明石川流域の弥生時代中期～後期の集落動態」『播磨の弥生社会を探る - 弥生時代中期から後期における集落動態 - 』第 4 回播磨考古学研究集会の記録 第 4 回播磨考古学研究集会実行委員会
- 藁科哲男・丸山潔・東村武信 1989「サヌカイトの流通から見た弥生時代摂播国境地域の交流関係」『昭和 61 年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 若林邦彦 2006「丘陵上弥生集落と複合社会の拡大 - 近畿地方の事例から -」『古代文化』58- II (財) 古代学協会
- 若林邦彦 2013『「倭国乱」と高地性集落論 観音寺山遺跡』(シリーズ「遺跡を学ぶ」091) 新泉社



青谷より明石海峡（南を望む）



青谷より城ヶ谷・西神ニュータウン（北を望む）

写真 27 青谷丘陵からの景色

現場撤収の間際、急ぎ冬枯れの青谷丘陵に分け入った。調査中には行けず、ドローンもロストの可能性があり、飛行するのが躊躇われた。

見事な眺望であった。南に明石海峡。じっくり観察する間もなかったが、北側には城ヶ谷遺跡の 3 区の東端が見え、背後に西神ニュータウンの丘陵が望まれる。

学校校舎の場所は第 3 次調査地の北端付近で標高 100 m 近く。視界は遮られていたであろうが、城ヶ谷がそれを補っていたであろうと、今回の眺望分析から想像する。



2～4区調査区を北から

写真図版



1. 調査地遠景（南東から）



2. 調査地遠景（南西から）

カラー写真 2



1.1 区全景（東から）



2.2 区全景（南東から）



1.2・3区全景（西から）



2.4区全景（南東から）

カラー写真 4



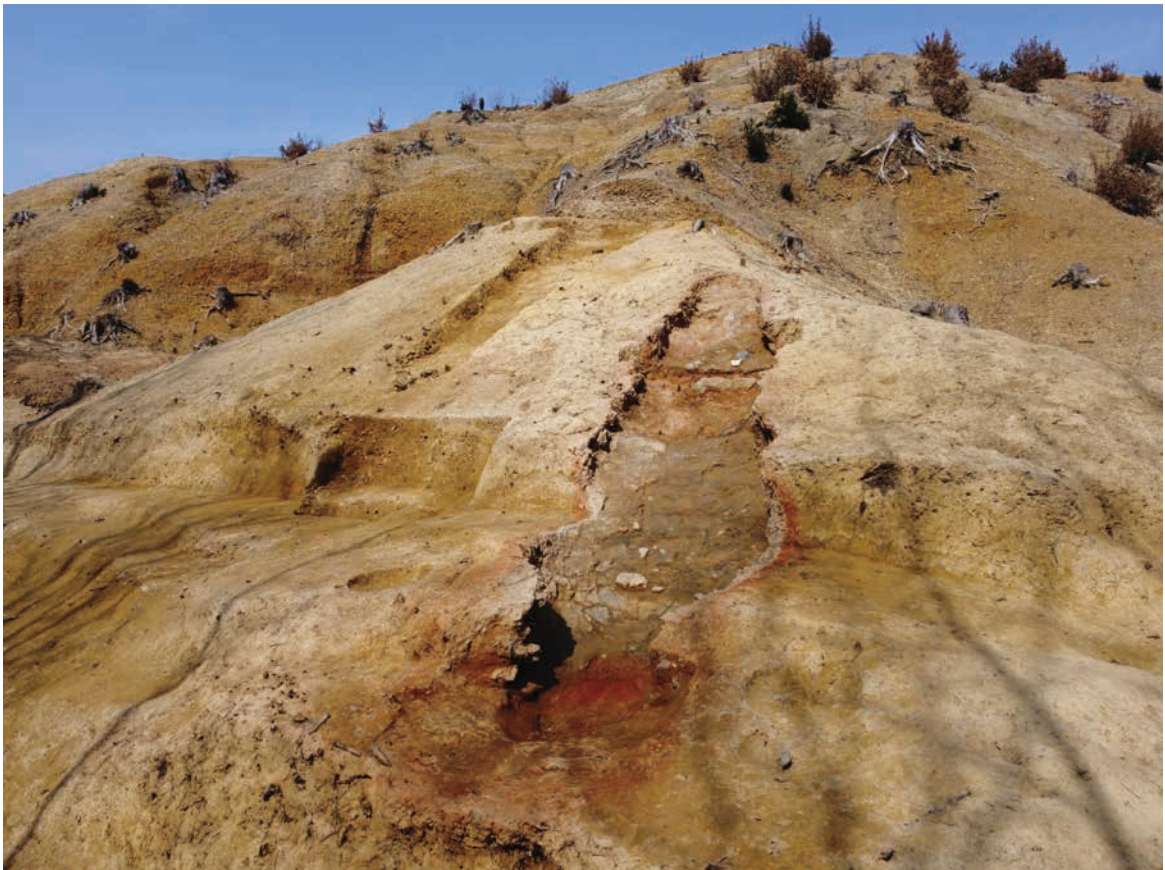
1.2～4区 溝（壕状遺構）全景（南から）



2.3・4区支尾根派生部全景（北東から）



1.5 区窯跡及び窯状遺構全景（南から）



2.5 区窯跡（当初窯）全景（南東から）

カラー写真 6



1. 第4次調査 出土土器



2. SX302 土坑 出土土器



3. 調査地から青谷丘陵・明石海峡を望む（北西から）



1. 1 区北半全景（南西から）



2. SB102 全景（北から）



3. 1 区南半全景（北から）

写真図版 2



1. 1 区中央部全景（北西から）



2. SX103 全景（北から）



3. SB109 全景（北から）

1. SB106 全景（北東から）



2. SB106 壺出土状況（東から）



3. SB108・SB111・SK104 全景（南東から）



写真図版 4



1. SB201・SB202 全景
(南東から)



2. 2区SD202 土層断面
及び遺物出土状況
(東から)



3. 2区 SD202 遺物出土状況
(南から)

1. SB301・SX302 全景
(北東から)



2. SX302 土坑
遺物出土状況及び床面被熱痕
(北東から)



3. SX302 土坑遺物出土状況
(北から)

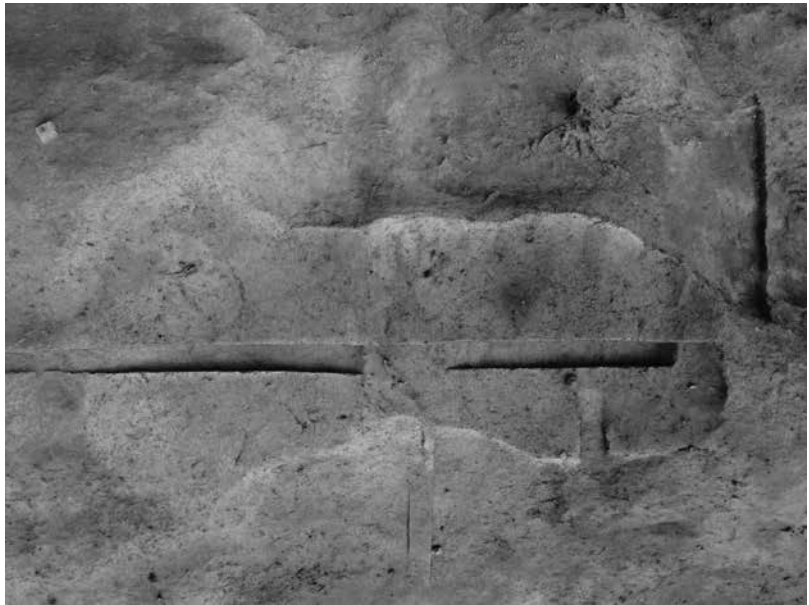


写真図版 6

1. SB301 からの眺望
(南東から)



2. SB302・SB303・SX303 全景
(南から)



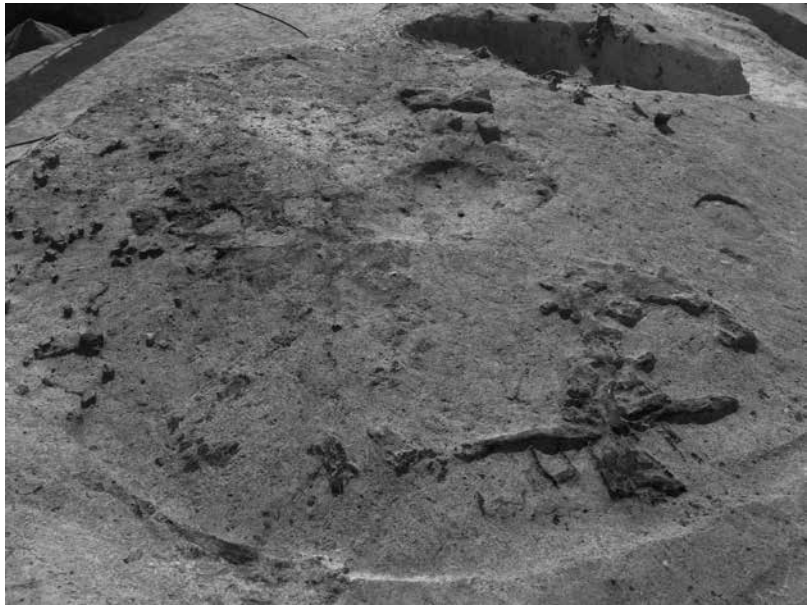
3. SB303 全景 (南西から)



1. SX301 全景（南から）



2. SX301 炭化材検出状況
（北西から）



3. SX301-SP01 土層断面
（西から）



写真図版 8

1. 3区谷部斜面上位
段状遺構全景（東から）



2. SB304 全景（南東から）



3. SB305 全景（南から）



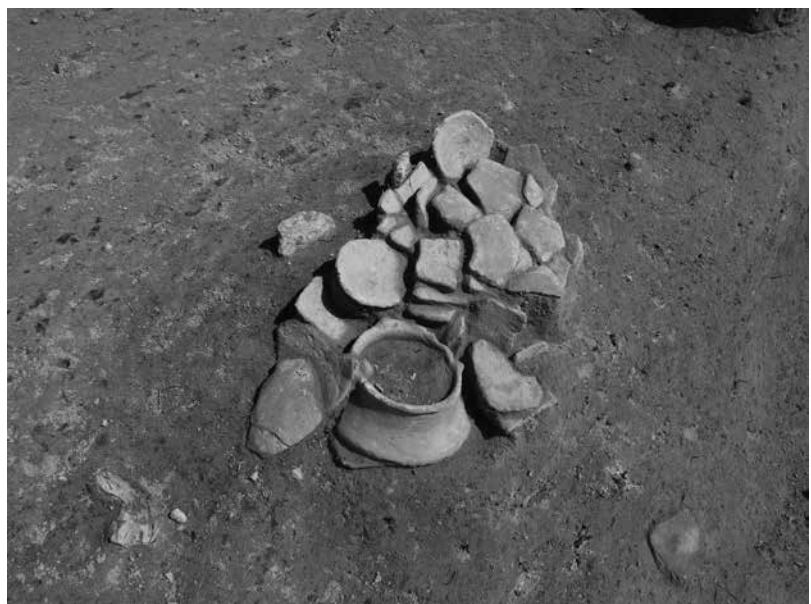
1. SB306 全景（南東から）



2. SB306 遺物出土状況
（南西から）



3. SB306 壺出土状況
（南西から）





1. 3-4 区境及び谷部土層断面
(北東から)



2. 3-4 区境土層断面
(南東から)



3. 3-4 区境 SD201 土層断面
(東から)

1. 4区主尾根部全景
(北東から)



2. SB401 全景 (北東から)



3. SB402・SB403 全景 (東から)



1. 4区谷部西斜面
段状遺構全景（東から）



2. SB404・SB405 全景
（南東から）



3. SB406・SB407 全景（東から）



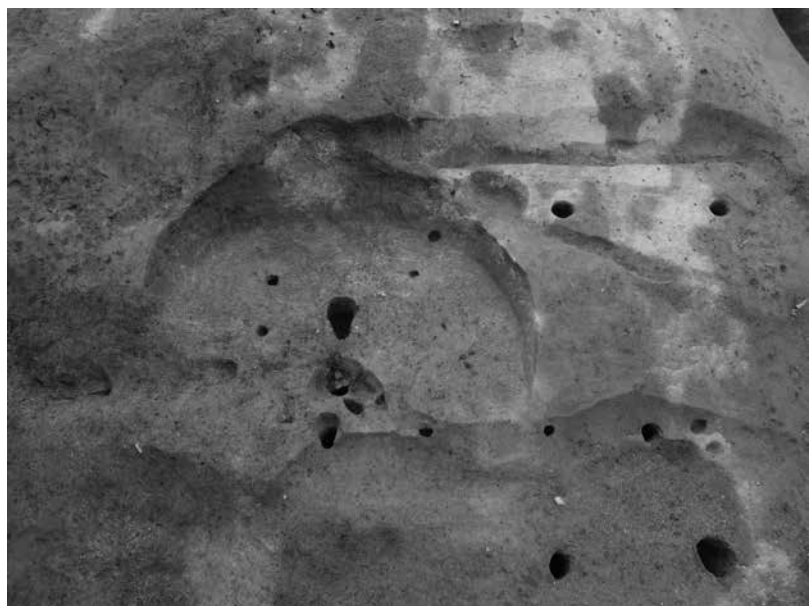
1. SB407 全景
(焼土・炭・柱穴検出状況)
(南東から)



2. SB407 4 段目
焼土断ち割り断面
(南東から)



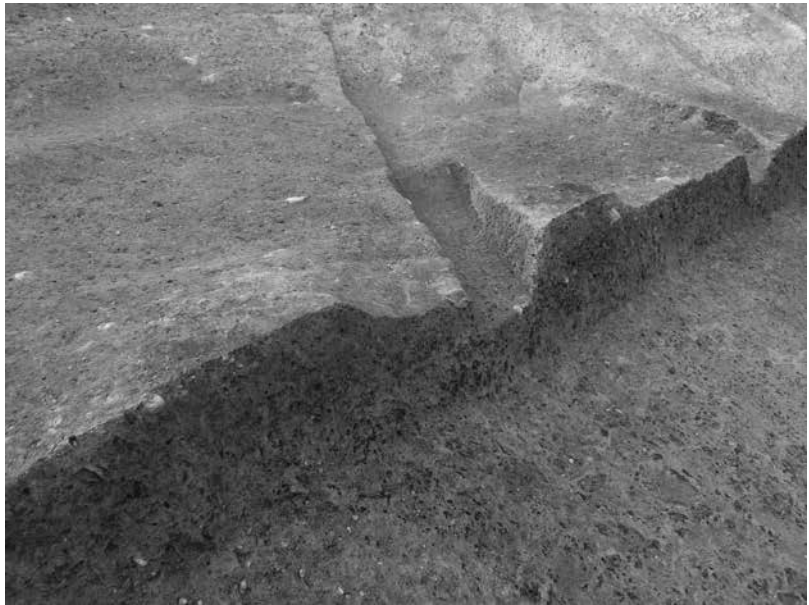
3. SB407 全景 (完掘状況)
(南東から)



1. SB408-SB308 全景
(盛土面) (北東から)



2. SB408 焼土断ち割り断面
(南東から)



3. SB408-SB308 地山面全景
(南東から)



1. 窯跡焼成部土層断面
(南西から)



2. 焼成部断面② (南から)



3. 焼成部断面②付近
遺物出土状況 (南東から)





1. 焼成部口焼結層検出状況
(南東から)



2. 天井崩落層検出状況
(南から)



3. 燃焼部土層断面
(北西から)

1. 焚口整地層遺物出土状況
(北西から)

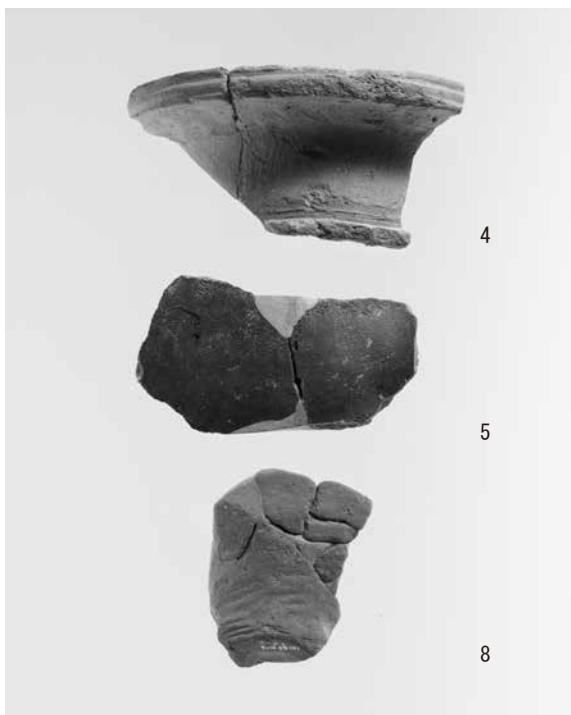


2. 当初窯全景
(断ち割り状況) (南から)



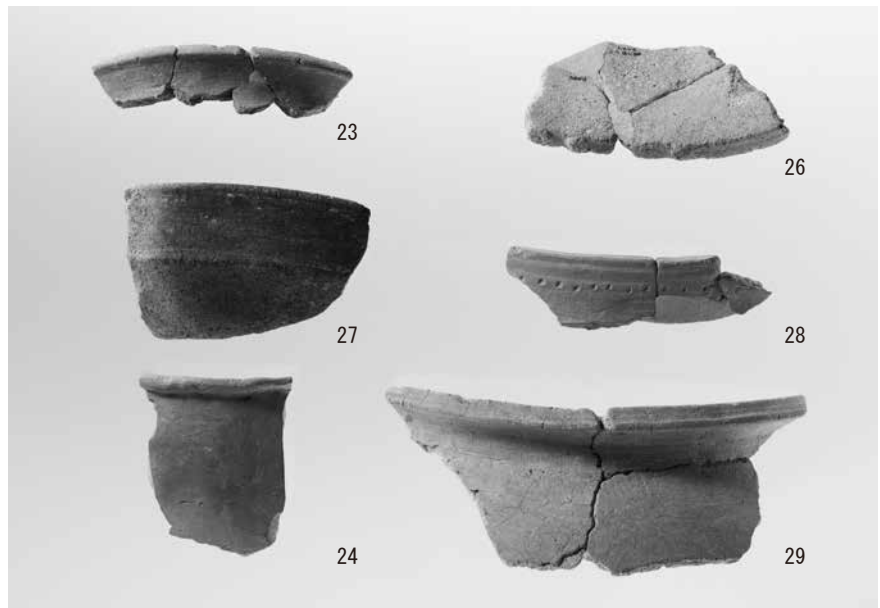
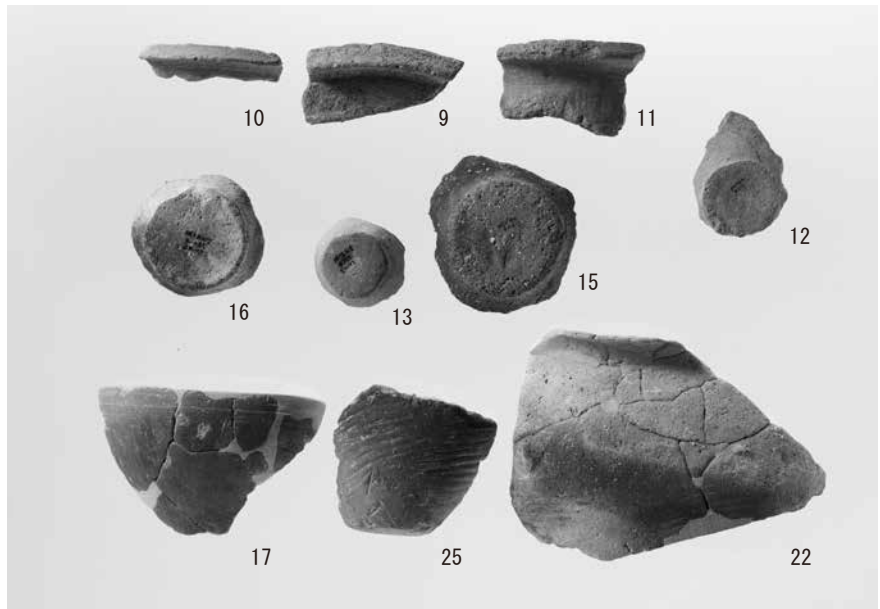
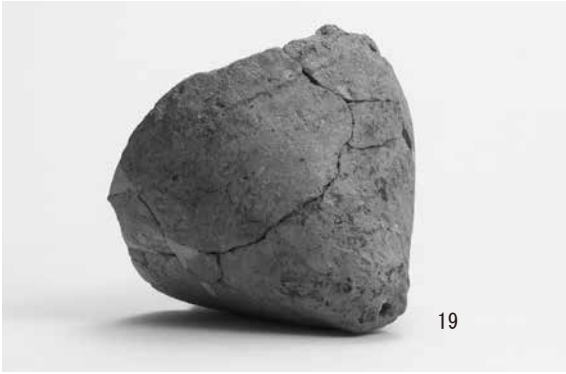
3. 窯状遺構 落ち込み全景
(南から)



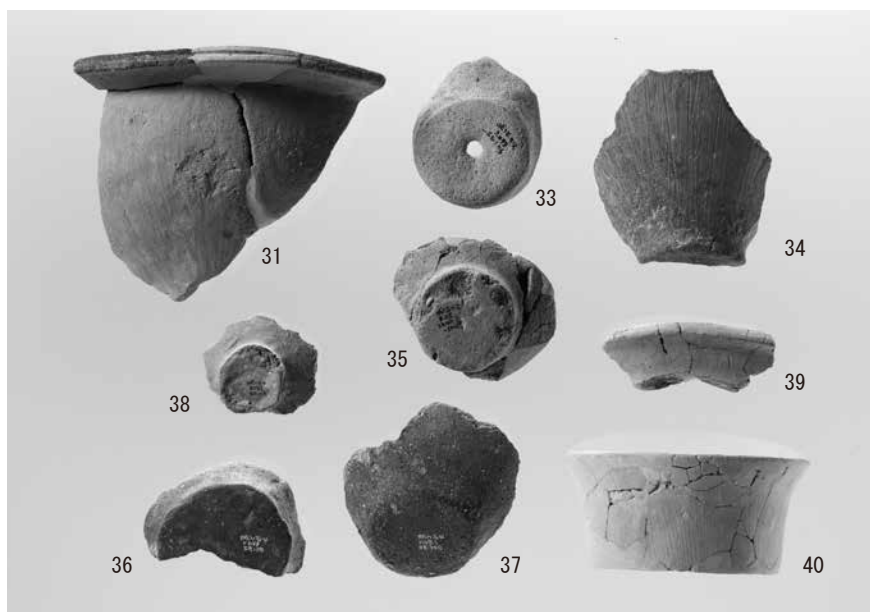


1. SB101・SB102 出土土器

2. SB103・SB104 周边出土土器



SB103・SB104
周边出土土器



1. 1 区竪穴建物出土土器



2. SB106 出土土器



3. 1 区北東部出土土器



4. SX103 及び周辺出土土器

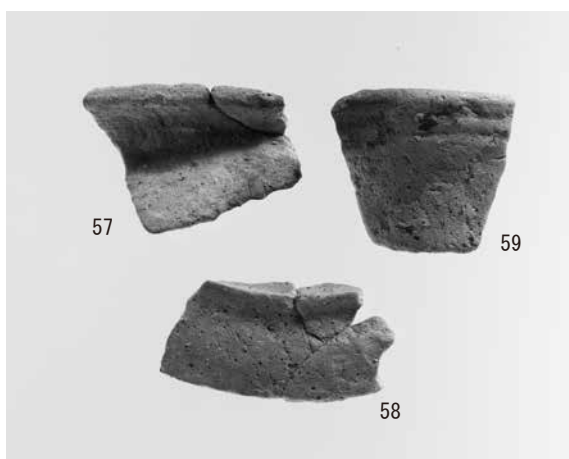




1. SX103 周边出土土器



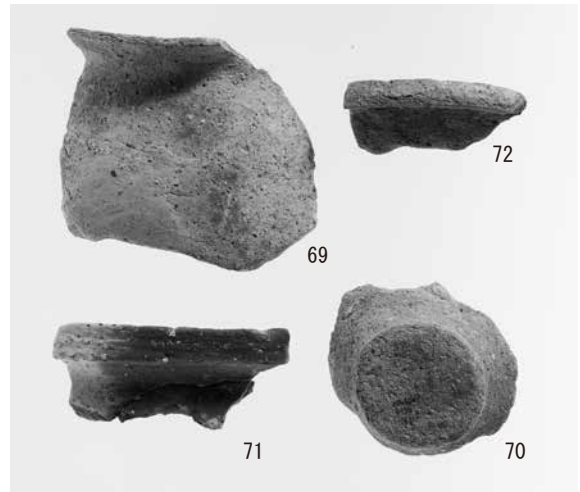
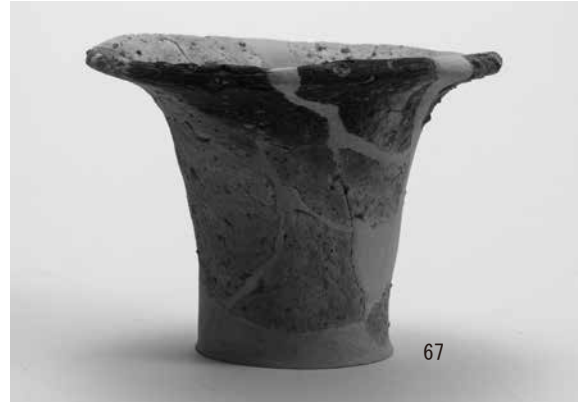
2. SX103 床面出土土器



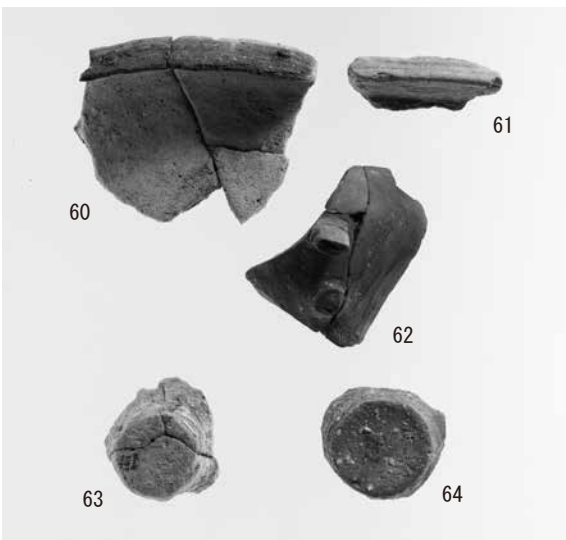
3. SB201 出土土器



4. SD501 出土土器



1. SD202 出土土器



2. SD201 出土土器



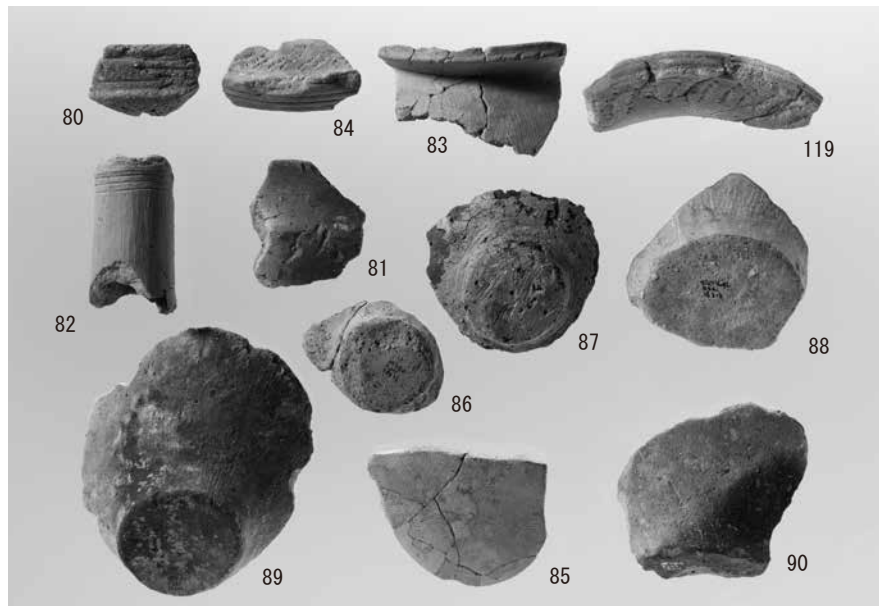
3. SX301 出土土器



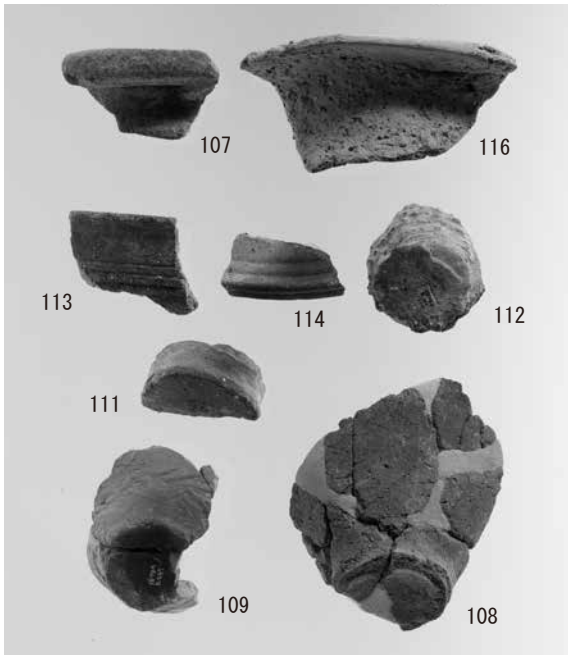
1. SB306 出土土器



2. SB303 出土土器



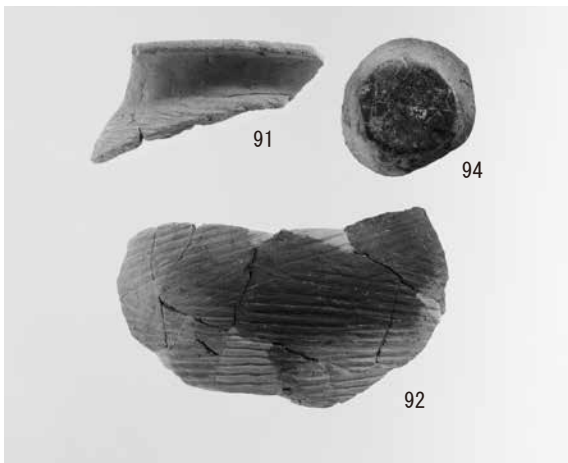
3. SB305 · SB306 · SX301
出土土器



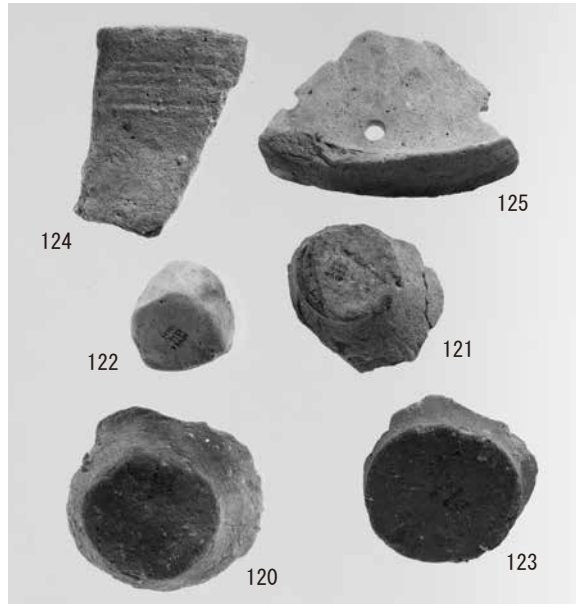
1. SB301 · SB302 · SB303 · SB304 出土土器



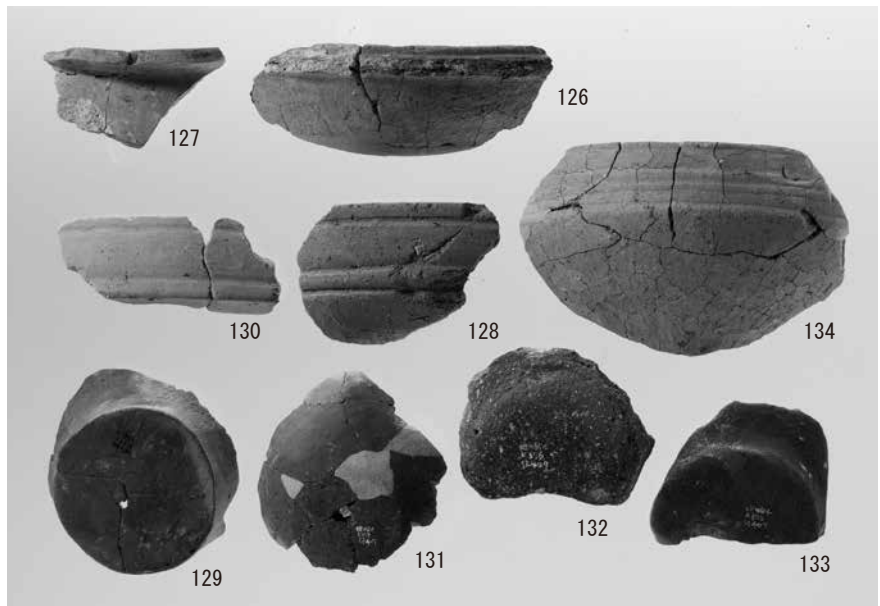
2. SB305 上部平坦面出土土器



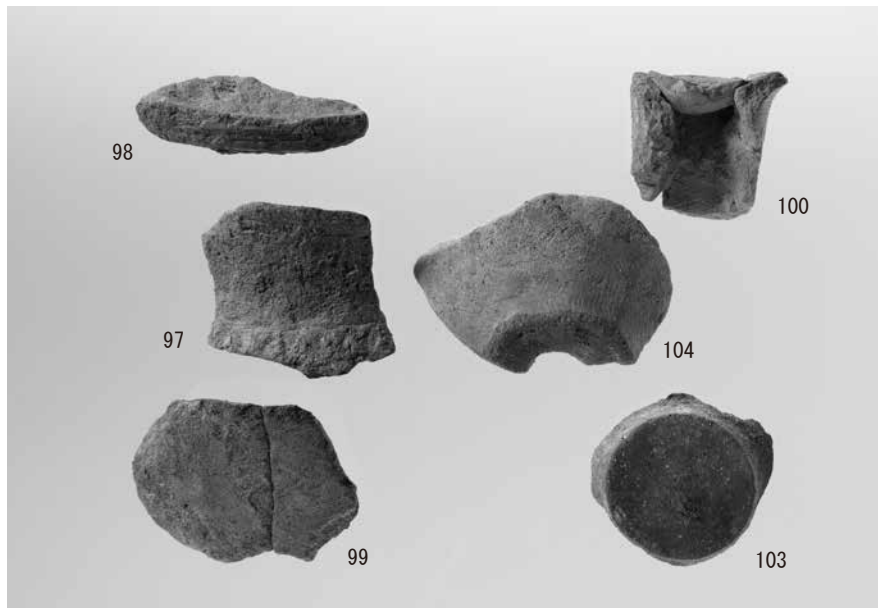
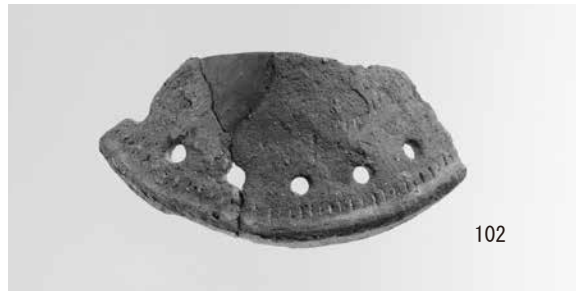
2. SB305 上部平坦面出土土器



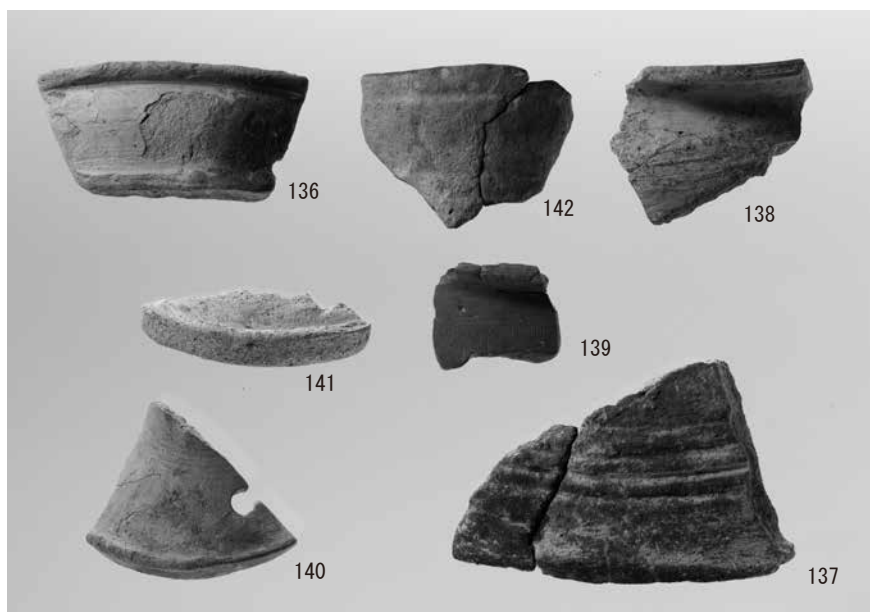
3. SB402 · SB403 出土土器



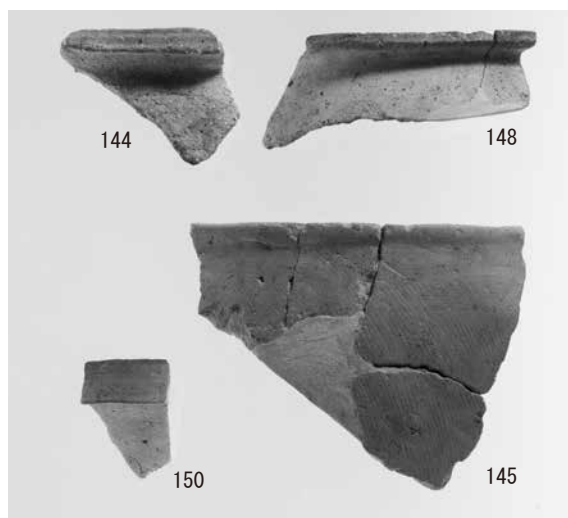
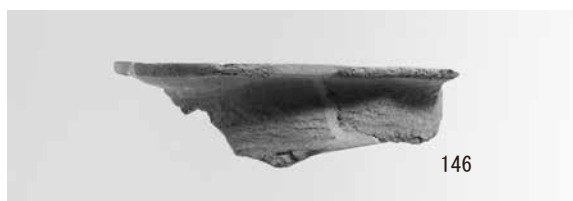
4. SB405 · SB406 · SB407 出土土器



SX302 出土土器



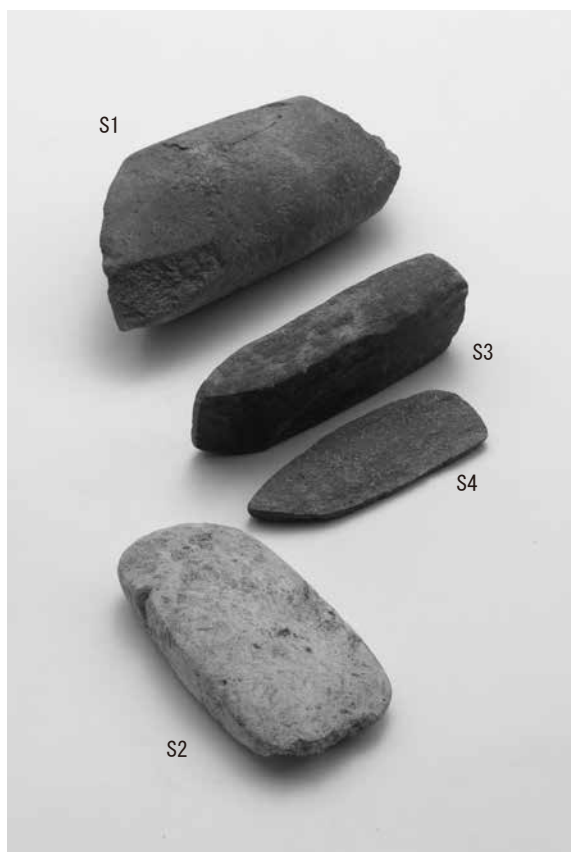
1. SB408 出土土器



2. SB403 下方流土出土土器



3. 3 区谷部出土土器



1. 出土石製品（石斧）



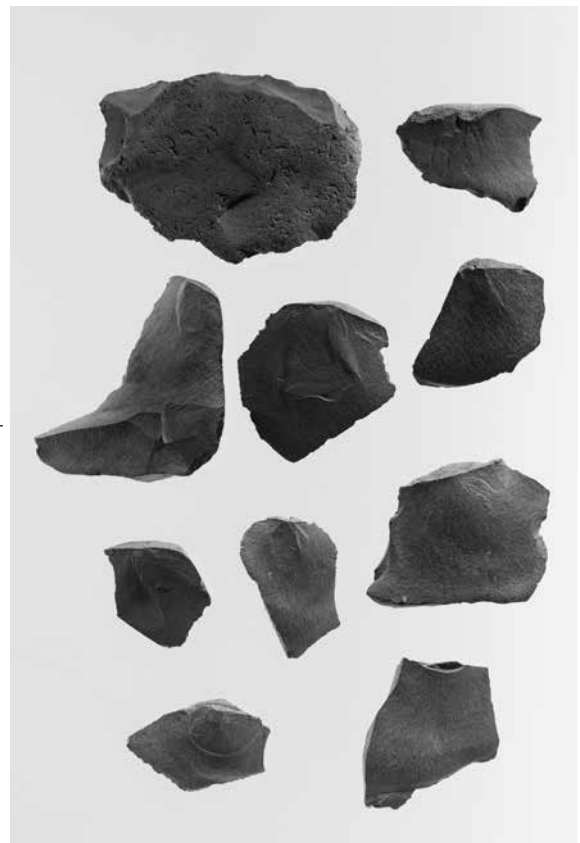
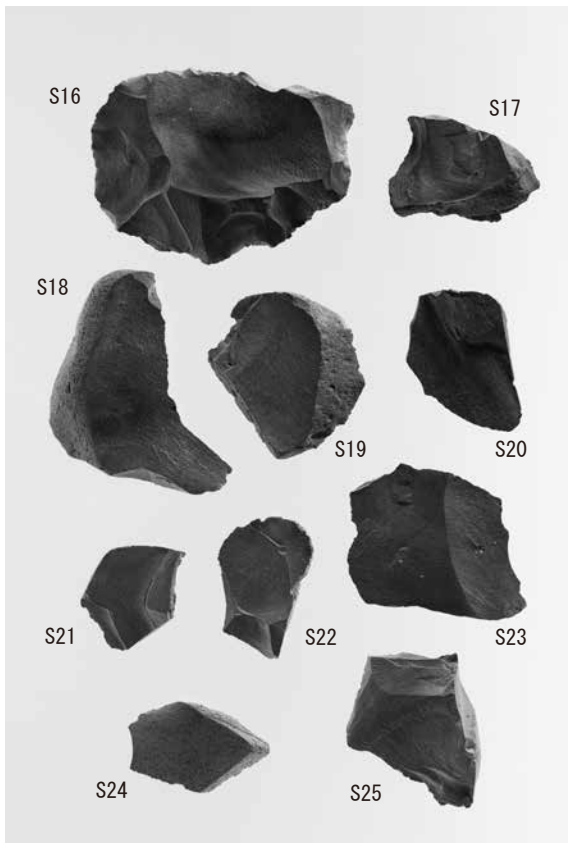
2. 出土石製品（砥石）



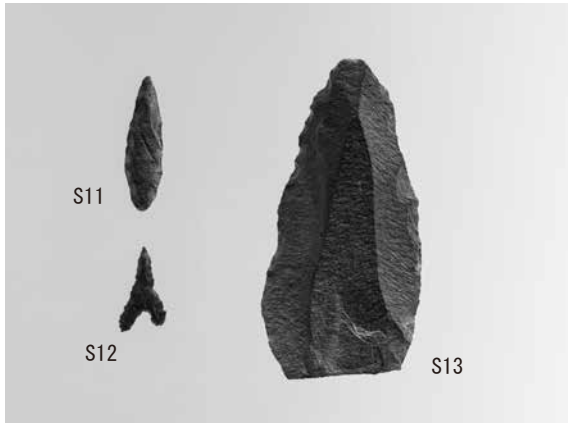
3. 出土石製品（敲石・磨石）



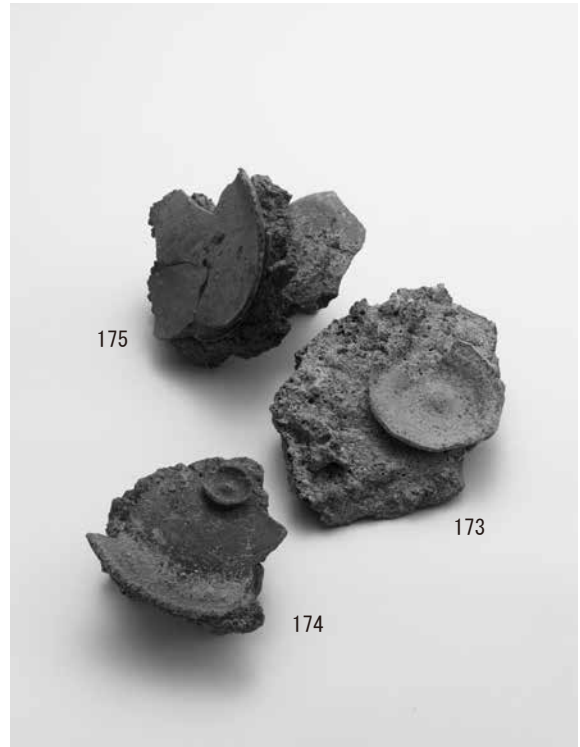
4. 出土石製品（台石）



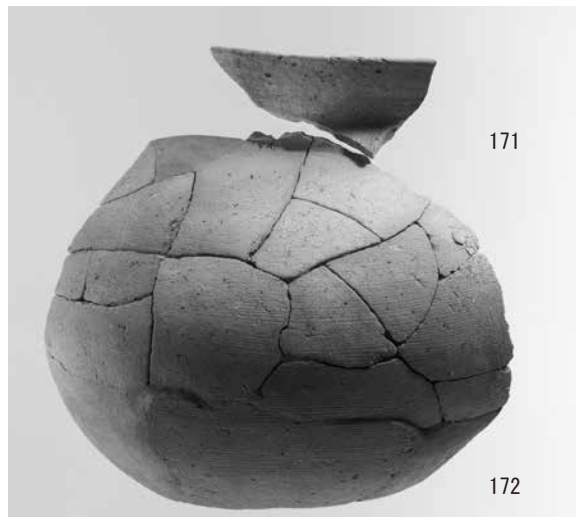
1. 大型サヌカイト素材剥片



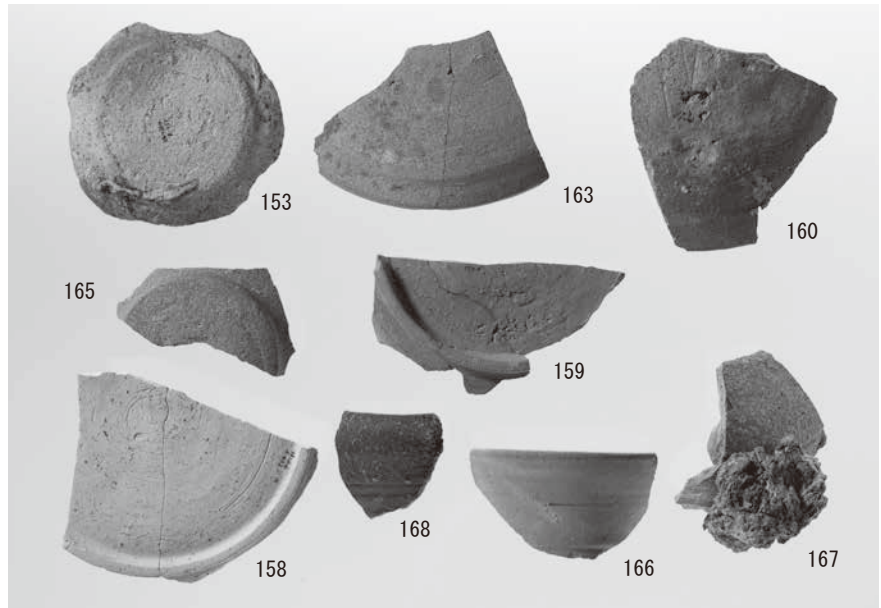
2. 出土石製品（石鏃・搔器）



3. 窯体片（実測図化）



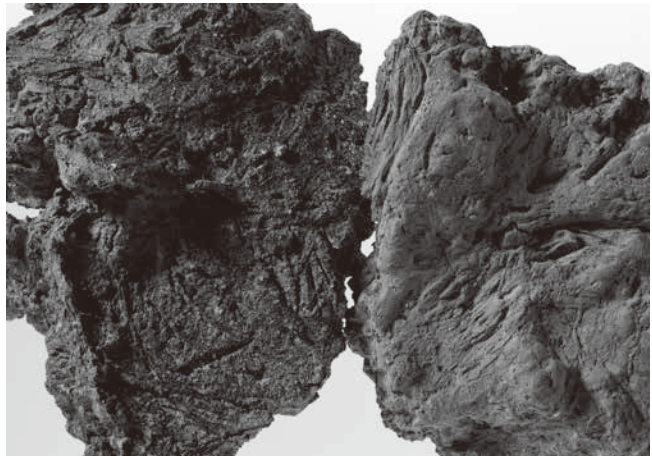
窯跡出土須恵器



1. 窯跡出土須恵器



2. 窯体片（木芯痕跡を残す窯体片）



3. 窯体片（スサ混じりの状況）



4. 出土窯体片

報告書抄録

ふりがな	じょうがたにいせき だい4じ はつくつちょうさほうこくしょ							
書名	城ヶ谷遺跡 第4次 発掘調査報告書							
副書名	神戸西バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	藤井太郎 (編)							
編集機関	神戸市文化スポーツ局							
発行機関	神戸市							
所在地	〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL 078-322-5799							
発行年	西暦2023年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じょうがたにいせき 城ヶ谷遺跡	ひょうごけん こうべし 兵庫県 神戸市 にしくはせたにちやうすがの 西区櫛谷町菅野 ほか	28109	277	34° 41' 34"	135° 00' 46"	20210210 ~ 20220330	13,000 ㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
城ヶ谷遺跡	集落跡	弥生時代 中期末～後期前半 奈良時代前半		竪穴建物・ 段状遺構 溝(壕状遺構)・ 土坑・柱穴 須恵器窯		弥生土器 石鏃・石斧 須恵器・窯体片		
要約	弥生時代中期末から後期前半の高地性集落の調査。竪穴建物・段状遺構約30基を検出。大規模な溝(壕状遺構)を検出し、既往調査成果を含めて弥生時代後期における集落域の広さがおおよそ判明した。 奈良時代前半(8世紀前半)の須恵器窯1基を検出した。神戸市域において奈良時代の窯の検出は初めてであり、窯業生産が盛んな播磨東南部における新たな動向として重要なものと考えられる。							

城ヶ谷遺跡第4次発掘調査報告書

2023. 3. 31

発行 神戸市文化スポーツ局文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL . 078-322-5799

印刷 株式会社旭成社
神戸市中央区琴ノ緒町1丁目5-9
TEL . 078-222-5800

